黑田禮二著

最後に笑ふ者

東京・千倉書房版

"Neu Regiment bringt neue Menschen auf,

Und früheres Verdienst veraltet schnell."

——Schiller——

644-68

小序

この小著には、序論も本篇も結論も何にもない。それでもこれは總て忠實なレポルタージュの積りなんだ。次々に亘つての事象の僞らざる報道なんだ。嘗て小生ドイツに在りて自分の勤先なる新聞社のために時々義務として筆を執つてゐたのと、今同じ氣持になつて、どんな題目に限らず、現に起つた事實を捉へては在りのまゝを報告することだけを職とした。埒を越えた論評やら獨斷的な豫言は――もう懲々して――なる可く差控えることゝした。

最近室伏高信君が「……ナチスの……理論檢討よりも、一體何故にナチスが斯くの如く……その何故が世人の等しく知らんと欲する……云々」といふ風なことをどこかで述べられてゐたやうに記憶するが、この小著のやくざな小石の中にその何故が――まさか

混つておりもしまいが、尠くともそれを示唆する臭ひ位でも——混つてゐるやうだつたら、寧ろ小生にとつて望外の儲け物であります。敬白

一九三三年七月五日

豊屋にて　禮二生

目次

第一の巻

シュラーゲタア！……一

十一月革命の死……三〇

國民的革命の眞諦……四四

ワイマア獨逸よりポツダム獨逸へ……五九

第二の巻

獨裁府と全權委任法……八八

ヒットラア治下に横たはる經濟の姿は……一〇二

獨墺伊ブロックへの經緯……一一九

第三の巻

倫理的勞働觀……一三六
宣傳行政の最高府……一四七
「突擊隊」のことゞも……一五八

第四の巻

焚書の夜……一七〇
ロッタア兄弟の末路……一八二
「ナチス」文藝界の陣容……二〇一
パウル・エルンストの死……二一二
何故にワルタア、ラインハルト、クレンペラアは放逐の憂目をみたか？……二一九
「生ける樂聖」フルトヴェングラアの抗議……二三五

第五の巻

宰相アドルフ・ヒットラア論……二四八
國民勞働祭に於けるヒットラアの演說……二七二
カイザアは歸國するか？……二九四
カイザアに就て今一つの觀方……三〇七

「シュラーゲタァ！」

一

シュラーゲタァとは？――英雄の名前であると謂ふ。

實の所それが何であるのか僕にも薩張り分らなかつたのである。時々耳にしたこともないではなかつた。例へばベルリンの途ある四角などで、明かにナチス所屬のS・Aの青年達が――その時分S・Aはまだ街頭で褐色の制服を着けて、三々伍々することが禁止されてはゐたけれど、その表情から又その態度から推して、彼等が間違う方なくナチスであること位は、群集の中からユダヤ人を區別することよりもなほ容易な業ではあつたが――何れも申合せたやうに左手で胴締めのバンドを握り、右手を肩から先へ悠揚と搖らつかせて舗道の眞中を濶歩してゐる。往來の人々はあとの祟りが怖いものだから、無意識にそつと道を除けるやうにする。然し向ふから苟くも婦

人がすた〳〵やつて來るやうな場合になると、横行濶歩の一團もまるで中學生が途中で體操教師にでも出逢つたやうに、そつと恭々しく横の方に避けるのだから面白くはある。それは例の『古代ゲルマンの道德』といふ奴なんだらう。

扨てこのナチス青年の一團が今言ふやうに鋪道を傲然と濶歩してゐると、向ふの方からもこれ又同じやうな四五人の若者がやつて來て……摩れ違ひざまに一同右手を擧げて、吃驚するやうな大聲を張上げた。

『シュラーゲタァ！』――一方の挨拶である。

『シュラーゲタァ！』――此方の答へである。

由來人間同志の挨拶といふものは毎日幾度となく飽きもしないで繰返さるゝにも拘らず、實は誠に平凡な語彙である。『やア今日や…』にしろ、Good Evening, Sir！にしろ、『吃飯完了麼』にしろ、天氣が良からうが惡からうが、もう無事にお腹を拵へ得たか怎うか、要するに、(始めは宗教的な若くは倫理的な特種の意義があつたのか知れないが)、今ではそれが餘りに、コンヴェンショナリズムに流れ過ぎて、極めて無意義な表現に墮してゐる。勿論道で出逢つた相手が癪に障

る同僚であつたり、崇拜する先輩であつたり、乃至は「彼女」との奇遇であつたりする場合にはそれに應じて『今日は……』の抑揚頓挫も又聲のかゝの出し所までもすつかり違つて來るのであるから、假令コンヴェンショナリズムとは言へ、實際の應用に當つては別に不便を感ずる譯ぢやないが、それは單に對手の如何に依つて此方の態度が樣子を單に加減するといふ丈けの話で、敢て挨拶の言葉そのものが客觀的に相手の肺腑を抉つたり、魂の歡喜を覺えさせたり、勇敢や恭順や反省や誓言に役立つたりするがためではない。

そこで斯樣の形式的表現を特に必要なりとする特種の團體には常に一種の『標語』なるものが交換される。斯樣な『標語』――卽ち英語のスローガン、獨逸語のローズング――は別に同志の者の間に挨拶として使用される許りが能ぢやないだらう。示威行列の旗の中に麗々しく染め拔かれる爲めのにも、『シュプレヒ・コーア』の最後を合唱させる爲めにも、宣傳演說の締め括りに熱中した聽衆の拍手喝采をあて込んで怒號するがためにも、乃至は大衆集會の心理を緊張させやうとしての式典的に使用するためにも利用されはする。『……これより何某君の健康を祝して盃を擧げます……何某君、萬ざーいッ！』『萬ざーいッ！』とやるが如き誠に平々凡々ではあるが、ある

意味に於ては矢張り廣義のローズングに屬する。それとも頃は元祿十四年に吉色の邸へ討入の面々が『山』と問へば『河』と答へた合言葉の如きも、蓋し實用的に使はれたローズングの適例なのかも知れぬ。

嘗てドイツに行はれた諸種の示威運動に在りて、特に共産黨は盛んにこのローズングの怒號に於て斷然手際のいゝトレーニングを經てゐたものである。然し彼等のローズングは主として『何々を打倒せよ！』『何々を高揚しろ！』と言ふやうなお極り文句が多く、然も今日ではナチスの彈壓以來この樣な共産黨式な大衆合唱でさへもベルリンの街頭ではもう耳にすることが出來なくなつた。それに引換えて有卦に入つたナチスの青年達は、褐色の制服は公許されるし、鈎十字の旗風を靡かせ步武堂々の行列をやることは寧ろお上から奬勵されるし、その際共産黨のお株を奪つて今度はナチス獨特のローズングを高唱させることが出來るのである。普通に耳にするナチスのローズングといへば音頭取の隊長が大聲で『ドイツ國よ！』と叫ぶと一同が『眼覺めよ！』との應答を合唱する。次に『ユダヤ！』と怒鳴ると、又一同が『――斃死れ！』と唱和する。この有名なローズングは彼等が最近に出鱈目を言つて流行らせたものではなくつて、昔帝政時代に頑固

な排猶太派の親方であつた牧師シュテッカァの常に口癖のやうに叫んでゐた――Deutschland erwache, Judas verrecke!――の文句をその儘に繼承したものである、といふ。

然しこのやうな『デモの標語』は今問題の外にしておいて、扨て黨員が道で出逢つた時に相互で交換する『挨拶の標語』をナチスでは『ヒットラア敬禮』と呼ぶ。その代表的なのは『ハイル・ヒットラア!』だ。黨員同志が道で出遭すと左手で革帶を握り右手を高く揚げ直立不動の姿勢で『ハイル・ヒットラア!』と叫ぶ。相手もこれに應じ同じく靴の踵をかちんと締め合せて『ハイル・ヒットラア!』と答へる。それは『やア失敬』とか『今日は』の代りである。

『ハイル・ヒットラア!』が所謂『ヒットラア敬禮』なるもので黨員間に挨拶として使用されてゐることは餘りにも有名であるから、僕と雖も既によく承知してゐた。否よく散歩の途上などでナチスの連中がよくそれを大聲になつて交換してゐる光景を見かけたものである。その時分は前にも述べた樣にナチスは隊伍を組んで歩くことも制服や徽章を身に着けることも嚴禁されてゐたのだから同志と同志とが逢つた時は特にこの『ハイル・ヒットラア!』の怒號に依て僅かに氣勢を昂げ得るのみであつた。政府も之れは默認せざるを得なかつた。人間が途で出逢つて『グーデ

ン・ターク』（今日は）と帽子を執り合ふのはいゝが他の言葉で挨拶しては不可いとこれを取締る方法は無かつたがためであらう。

然り、『ハイル・ヒツトラア！』はナチス青年の獨特の挨拶なることはよく分つてゐたが、今『シュラーゲタァ！』と叫び合ふのを聞くのはまるで初耳であつた。そのシュラーゲタァとは人間の名前だらうか……それとも一體何の意味であるか？

二

シュラーゲタァはナチス青年の眼には仰ぐだに輝かしき『英雄』の姿と映じてゐる。その名を單に口にしただけでもう懦夫をすら敢然として立たしむる效能があるといふ。換言すればドイツの魂をじつと戊る人々に對する唯一の ecce homo だといふ。

その次第は斯うなつてゐる——

× × ×

一九一九年五月！——

場所は嘗てロシアの諸政客の口々から「げにも歐洲に於ける最高政策問題の雌雄はこの地の大きな戰場に於てのみ決せられる」と適切な言葉で以て警戒されてゐたあのバルト海沿岸地方だ。そこには實際西洋文明の未來が辛じて息を吹き返へすか、それともその儘死んで了ふかといふ眞個の意味での存在戰爭が將にその最高潮に達してゐたとも見られやう。

既に雲霞の如きボリシェヴィキの殺到に任せて一月の始めにはライヒスドイツの軍隊もその地方土着の國防軍も切齒しながら一先づリガの主都を捨てゝ退却してゐた。大戰の勝利に醉つたイギリスの軍艦は『戰勝國の協同精神』のためだとあつてその地方の住民の安寧秩序を保護すべく派遣されてゐた筈ではあつたが、狂信的な赤色軍の勢猖獗を極めて到底抗爭の出來ないことを見てとるや彼等はイギリス人獨特の常識的な氣安さで以てさつさと錨を上げて本國へ引上げて了つた。從つてその後慘憺たる日と月の續いたことは想像に難くない。ボリシェヴィキは殆ど何の邪魔立てをも感ずることなくその殺戮の刑罰軍に血刀を揮はせて自由に全土を暴れ廻させたのだ。嘗てはドイツ市民の誇りが支配したリガの町全體がいつの間にかもう一個の尨大な監獄に貌變した——『軒並の家々は獄房で街路は悉くその廊下の如き姿で、從つて毎日繰返へされる桎梏と拷問

と人質の虐殺とに依つて慟哭と哀號とを天に屆かせてゐた市民も後には蒼白い絶望の沈默のみに一切を任せるより他に途がなかつた。』

假令戰敗に疲れ切つてゐても遺がに歸還のドイツ軍隊はこの慘憺たる有樣を見るに見兼ねたものらしい。彼等は戰勝の聯合國に向つて是非今一度丈ボリシェヰキ掃蕩のためにその地方へ軍を動かすことを許して貰ひたいと願ひ出た。當時の聯合國政府は何れも自國の經濟的益權や植民地の分前など主張し合つて外交戰の取引に夢中となつてゐる際とてそんなバルトの田舍などで人間の血の洪水が出來てゐやうがなからうが――その實それこそ實際西洋文明の沒落に直接の大關係があつたにも拘らず、そこまで將來を視透す程の眼が眩んでゐたものだから――自分達で責任の衝に當らうといふ國は一としてなかつたのだ。そして疲れ果てた戰敗のドイツ軍が哀願するままにその申出を許可したのである。そこでドイツのバルト地方の自由解放軍は駑馬に拍車をかけてリガの奪還に行進した。バルト地方の土民が組織する國防兵團やそれに合同したラトヴィア同盟の武裝團等も喜んでこれに參加した。するとこの有樣を見て嘶怒した赤色の專制者連は是等の解放軍が深く侵入すればする程それに應じてリガ地方の大衆虐殺や放火や掠奪を恣にした。要

するにそれは『一切の反革命を根本的に清掃』せんとする復讐と威嚇なのだ。

それでも生殘つた市民を解放しやうとの鬪志に燃えた侵入軍は極めて緩慢ではあつたが兎も角も戰ふ毎に勝利を收めた。コルヂンゲンを拔き、ウィンダウを陷入れツクームを屠り、遂にミタウまで赤奴を驅逐してそこで暫く乏しい兵糧や彈藥の補給を計つた。何しろ五年に亘る大戰に力の限り根限り鬪ひ盡した疲勞困憊の軍兵を督して攻擊を續行するのだから中々骨の折れた話ではある。然し其處でぐず〳〵停滯してゐたのでは獰猛慓悍なる新手の赤軍に不意の逆襲を受けて千仞の功を一擧に失ふ悔を殘してはならぬ……といふのでドイツ軍は聊か阻喪しかゝつた志氣を再び鼓舞しつゝ、五月十九日といふにリガまで一直線の强行進軍を敢行することゝした。

その報を得て、ドイツ人部落の各地から襤褸〳〵の軍服に使ひ古した銃器を提げて數多の青年が何處からともなく參集し、何れも義勇兵としてこの誰れからも褒めてくれない緣の下の行軍に加はらんことを請願したのである。侵入軍指揮官フォン・メデムは感激し、この新たなる救援隊を喜び迎へて愈々ミタウから一氣にリガまで突擊することゝした。その際軍を二つに分ち、本軍は堂々とリガの正面に迫り、ピショッフ少佐の率ゆる『鋼鐵師團』は急速度の轉廻によつて右翼

から攻撃を加へることになつた。然るに『鋼鐵師團』が夜に日に繼いでの進軍の後五月二十二日の朝未明ヂューナ河の鐵橋まで來た時に本軍との聯絡は完全に絶たれた。それでもそこいらにぐず〳〵待つてゐたのでは眼の前に架つた鐵橋が敵軍に破壞される惧れがある……さうなれば全軍は又しても立往生の荏苒たる數日を送らねばならぬ……ビショツフ少佐は本軍の到着を待つまでもなく孤軍奮闘の最後の臍を極めて――、『その儘鐵橋を越えて前進ッ！』

するとボリシェヰキの歩兵の大群がこの有樣を見てヂューナ河の右岸に突擊し來り、渡河のビショツフ軍の密集した側面へ一齊射擊と機關銃の十字射擊とを浴せかけた。遺がのビショツフ軍も鐵橋に差しかゝつたまゝ殆ど前進も後退も出來ぬ絶對絶命の危機に遭遇したのだ。然るに何時の間に姿を現はしたか更に敵の側面へメデム軍の輕山砲隊が掩護の陣地に就いて不意にボリシェヰキの抵抗軍を擊つて擊つて擊ちまくつたものだから、敵は渡河軍阻止の目的を達することが出來ないで數多の死屍を遺棄しつゝ總崩れとなつて退却した。ドイツ軍はそれに勢を得て喊聲を擊げつゝリガの町に躍り込んだのである。斯くしてリガは完全に解放された。然も百數名のドイツ市民の人質は將に銃殺に處せられんとする瞬間に一人殘らず救濟され得たのである。

それは外觀上大戰後の一挿話に過ぎぬ地方的な小競合であつたかも知れぬ。然しこの小競合に對し一身を賭して勇敢に鬪つた戰士は何れも光榮ある歐洲文明の騎士であつたと言はねばならぬ。何となれば、このリガの解放に依つてヂューナ川に架つた鐵の橋は最早やロシアとヨーロッパを聯絡する宣傳の橋渡しの役目をなすものでは無くなつたのだ。換言すればこの小さな鐵橋がそれから後は中央ヨーロッパ及西ヨーロッパの西洋思想に對し、ボリシェヰズムの侵出を喰止める鋼鐵の扉となつて了つたのだ。この勇敢な騎士達の功績は全ヨーロッパ人にとつて十三世紀の昔雲霞の如き蒙古軍の侵入に對し、ドイツ騎士團が寡軍を以て雄々しく戰つた勳し以上に、稱揚され感謝さるべき値打のあるものであるかも知れない。そしてこの危機一髪の場合鬼神の如く立現はれてボリシェヰキを擊ちまくり、鋼鐵の扉を完全に擁護した名譽ある砲兵隊の指導官は一體誰れであつたか？　その名をアルバート・レオ・シュラーゲタァと呼ぶ。この時以來シュラーゲタァといふ英雄の名が始めて歷史の表面へ浮び出た譯である。

三

一九二一年五月！――

斯くしてドイツは緣の下の役割だけを演じたのだ。

ラトヴィア國の出來たのは、ドイツ人が勇敢にボリシェヰキを驅逐したためであるとか、それに依つて沒落に瀕した日沒國の文明は起死回生の如く救はれたと威張つてみた所で、それはドイツ人の自畫自讃であり、聯合國のどの國だつてドイツ人の行動を感謝してくれたものはない。何故か？　曰くドイツは戰敗國だからである。

否聯合國はドイツに感謝するどころの騷ぎぢやない。寧ろその周圍の小さな民族國家を焚き付けて、少しでも隙があつたら防禦力のないドイツの手足や胴體を切り取り勝手たるべきことを許したものだ。從つて虎の威を借るポーランドなどが威丈高になつてドイツの國境を侵略し、ドイツ人を放逐したり、投獄したり、思ふ存分の亂暴を働いた。それに對してドイツ人は苦情を言はふにも抗議を申込まうにも全然對手になつてくれるものがない。『自助』だけが僅かに取殘された唯一の手段であつたのだ。

されば上シュレジエンに對するポーランドの不法侵入と抗爭するためには怎うしてもドイツ

人は自分で義勇兵を募るより外に仕方がなかつた。すると例のリガ解放の勇者シュラーゲタァがぼろ〳〵の砲車を引摺つて又もや第一番に馳せ參じた。彼は上シュレジェン特別警察軍司令官ハインツ・ハウエンシュタインの配下となり、寡兵を率ゐて不意にポーランド侵入軍をコーゼルに撃破し、その地の監獄に不法監禁されてゐた無辜のドイツ人を悉く解放した。ハウエンシュタインはシュラーゲタァの勇氣と智謀とを愛で一足飛びに彼を『突撃大隊』の隊長に拔擢した。すると僅かにこの決死の一大隊を率ゐたシェラーゲタァは一九二一年五月廿一日にアンナベルグに突撃し、衆を恃んで油斷してゐた約五倍のポーランド軍を殲滅してドイツ國境から一切の敵影を逐拂つて了つたのである。聯合國はそれを見て何にも言はなかつた。言ふ口實がなかつたのである。然乍らこの時シュラーゲタァがこの一戰にポーランドの强盜軍を徹底的に撃滅して置かなかつたとしたならば、ポーランド軍はその後當然上シュレジェン全部を割據せしめ、あはよくば下シュレジェンをさへ合併するやうな提案を聯合國に願出てゐたかも知れない。

だがポーランド軍の侵入は祖國の解放者シェラーゲタァの鐵の一撃を喰つて見事に失敗に終つた。ポーランドの目論見てゐた武力に依れるドイツ領の略奪は全然的が外れて了つた。そこでポ

ーランド政府は聯合國に泣き付き、聯合國卽ち戰勝國の權威に依つて無理やりに上シュレジュンの一部分を自國に併合させて貰つたのである。

それから一九二三年一月恰もフランスとベルギーの聯合軍が自分で作つたヴェルサイユ平和條約を破つてルーア地方を占領し始めた時、ドイツには再び新たな愛國運動の旋風が起つた。隱れた武裝の英雄シュラーゲタァが當然そこへ勇姿を現はさぬ筈はなかつた。彼は當時ミュンヘンに開かれてゐた國民社會黨の大會に出席し、痛く亢奮したものと見えて祖國のために眞個に生命を捨て得る數名の同志と共に大會が決議した民族解放運動の實行の擔任を申出たのである。斯くして今迄の國境守護解放の鬪士は更に『第三國』の創設に戰士となつて現はれたのだ。その際シュラーゲタァは戰友を鼓舞するために作つた詩がある。內容は幼稚で拙ないが——卽ち「お互ひに皆な合しても始めは人數も多いし行くべき道は遠いけれど目的は判然してゐて、一歩づつ前進するといふ事だ……勇氣があるなら一緒に從いて來い……始めは少人數でも必ず戰ひ獲つてみせるぞ」といふやうな意味に過ぎないが——言葉に生一本な彼の眞情が何の修飾もなく吐露されており、同時にこれはシュラーゲタァの悲想な「辭世の詩」ともなつたものであり、そして今日シ

ュラーゲタァ崇拜の青年達が競つて口誦んでゐる有様に鑑みて参考のためにその全文を掲げて置かう。

"Wenn wir zunächst auch nur wennige sind,
Ihr vielleicht, wir, noch ein paar,
der Weg ist weit—das Ziel ist klar:
Vorwärts geht es, Schritt für Schritt!
Habt Ihr Mut, kommt mit!
Wenn wir zunächst auch nur wennige sind,
aber wir werden es schaffen!"

四

一九二三年五月!——

佛白のルーア侵入軍に對しドイツの上下は震撼した。慷慨もした。悲憤もした。だが何しろ戰

敗の結果手足を縛られたやうな抵抗不可能の事情にあつたものだから、ライヒも聯邦も國會も勞働組合も一致して、たゞもう『消極的抵抗』――換言すればボイコット――を實行するより他に手段がなかつた。

然るに上シュレジエンで國境の防備に決死の一戰を交へた少數の一群だけはシュラーゲタァを隊長として政府の勸告も威嚇も聽かばこそ、今までどこかに隱してゐた拳銃や手榴彈や機關銃で完全に武裝し『積極的抵抗』に當ることになつた。非痛な檄が國內を飛び散つた。

世人は笑つた。或はその無暴に呆れ返つた。それでもシュラーゲタァは大眞目であつた……笑ふなら笑へ、呆れた奴は口でもあんぐり空けてゐろ……俺達はたゞドイツが大戰には少しも敗けてゐないぞといふ證據を見せるために蹶起するのだ……佛白軍が如何に多からうが、聊合軍が又もや束になつて來やうが、どうせ死ぬる生命だもの、多けりや多い程却つていゝだらう……俺達が死んだつて後から從いて來る眞個のドイツの青年はいくらでもいくらでもある筈だ……今でこそ俺達は數に於て少ないが、それでもドイツの魂だけは可笑しくない程既に大きい……

口ではさういふものゝ、扨て佛白のタンクが地響と砂煙を擧げてルーア河畔に驀進して來た有

様を見たシュラーゲタァは本來が實地の戰術に勝れた才智を拜つた男だけに、この一戰が蟷螂の斧にも値しない位のことは百も承知してゐたであらう。然しそれにも拘らず彼は怎うしてもその際干戈を執らないではゐられなかつたのだ。『シュラーゲタァ』の戲曲を書いて、一躍ナチス文藝界の大御所となつた詩人ハンス・ヨーストも、その當時の主人公の心持を眞直ぐに模寫してそれをこの悲劇のクライマツキスにしてゐる。則ち世人が頻りにその無暴を止めるのを見て靜かに考へ込んでゐた主人公は悲痛な顏を上げ……『だつてドイツの心臟を抉出し、それを樹てかけて射的の的にしてゐるんだぜ……皆な面白半分に、いつまでもいつまでもその的を目蒐けて擊ち放題に擊つてるんだぜ……そんな情ない仕打はするもんぢやないと、皆なを訓してやつたつて宜いぢやないか……それだけの義務は果さなきやなア！』と返事させてゐる。因にハンス・ヨーストのこの戲曲は今迄どの本屋へ持つて行つても、殆ど誰れにも相手にしてくれなかつたものである。例のラインハルトなどは「そんな幼稚なものは上場しやうにも一體芝居の部類に這入るべきものぢやない」と冷笑したといふ。然るに今ナチスの世の中となつて昨日まで尾羽打ち枯らしてゐた詩人ハンス・ヨーストは一躍文藝翰林院の會員に推薦せられ、ドイツ國民藝術の第一人者とし

て引張凧の流行作家に祭り上つてゐる。

扨てシュラーゲタァの干戈に訴ふる消極的抵抗は、案の定失敗であつた。暴動の一味はまだ事を起さない以前にフランス軍の發覺する所となり、殆ど一網打盡に逮捕されて軍法會議に廻された。フランスのライン駐屯司令官ドグット將軍は、是等の猪口才な然も憎むべき無賴の徒を一人殘らず縊り殺すやうにと一度は嚇となつて短氣な命令を與へたけれど、よく考へてみれば矢張り武士は相見互ひであり、被告の態度には寸分の私心なくたゞ祖國を想ふ赤誠の發露なることを認めて裁決を躊躇した。それでも軍刑の手前もあることではあり、結局、他の者は生命を救けてやるが、その代り只責任者たるシュラーゲタアだけを死刑に處して萬事の鳧をつけることにした。

この報道がパリに傳はると、それは議會に於ける八釜敷い問題となつたのである。一體さういふやうな不逞の徒を軍人並に扱つて一人でも死刑にするのは宜敷くない、フランスの監獄へでも連れて來て一生馬の糞掃除の苦役でもやらせた方がいゝ……今日ドイツでは一種の狂信的な國民運動が起りかゝつてゐるのだから、今そんな人間を死刑にすれば、彼等は必ずその男を『殉教者』に祭り上げるだらうから……といふ一派があつた。すると當時の有力な下院代議士であつたアン

ドレ・タルヂュは反對してライン駐屯軍の態度は左顧右眄、いろんな方面に向つて氣兼ね許りしてゐるのは怪からぬ……宜敷く斷乎たる態度と權威を示して無暴の徒などはどし〳〵血祭りに上げて行く方がいゝと敦圍いた。レーモン・ポアンカレも亦タルヂュの說に贊成した。

斯くして一九二三年五月二十六日といふに『ナチスの英雄』アルバート・レオ・シュラーゲタァは結局フランスの議會政治の蹴鞠となつて、遂に銃殺の刑に處せられた！

五

と丈けの經過を述べたのでは話は誠に單純に聞えるかも知れぬ。

然るに、この單純な狂信者の生涯が、ヒツトラアの焰のやうな雄辯にかゝると、ナチスの前進運動が不思議な形に活きて來る。

ヒツトラアといふ人間には理論がない。そこがまたヒツトラアの今日の成功した所以だとも言へやう。由來理論好きのドイツ國民の中にヒツトラアのやうな理論のない素樸な感情一方の人間が生れたのは珍しい現象と言はねばならぬが、それ丈けまた斯樣な人物がドイツならばこそ稀少

價値を持つのだ。それは恰もフランス大革命の進行に伴ふロベスピエールの人氣に酷似する。ロベスピエールといふ人間は、北フランスの田舍から陣笠代議士としてパリにやつて來た殆と二流どこ以下の辯護士であつた。同じ辯護士上りの代議士なら王黨にだつてジロンド黨にだつて錚々たる一流の人物はいくらでもゐた筈だ。そして雄辯の點では彼はきい〳〵聲の嫌な方言混りて退屈な長談議をする丈けの辯士であり、風采の點では別に缺點はなかつたとしても『賤民のミラボー』ダントンの如き容貌魁偉で以て民衆を引けつける程の魅力もなく、デムランの如く一擧手一投足が悉くパリ流のエスプリに叶つて會ふ人毎を宇頂天にさせるといふ程の餘裕も持ち合はせてゐなかつた。その上にコンドリセーの如き學問があるぢやなし、カルノーの如き快刀亂麻の政治才能を持つてるぢやなし、又サン・ジュストの如き權謀を策する術さへ分らなかつた、謂はゞ平々凡々な人間であつた。然るにあの當時には、理屈を言ふ奴や賢こい奴や賤民にやんやと喝采を博し得る程度の人間は、いくらでも掃き捨てる程ゐて別に珍らしくはなかつた。又單に平々凡々なだけの常人ならこれまた別に珍しくもなんでもありはしない。然るにこの平凡極まる、從つて普通なら過激なことなどは、決して言行に現はしさうにも見えないロベスピエールといふ田舍

者が、不思議なことには過激の尖端を進みつゝありと自信するパリジアンでさへ、想像のつかないやうな頑固さで以て少しでも過激な法律案が提出されると、是が非でも眞先に贊成の手を擧げるといふ態度を續けてゐだものたから、總ての對照から推して——則ち彼が平凡ならば平凡なる程——ロベスピエールと言ふ男が眼に立つて來たのである。彼にこの奇想天外な變人型を發揮させたのは狂氣の如く自分で自分に惚込むことができた性格に基くものであり、そしてロベスピエールの存在に客觀的な稀少價値があつたものだから、何時の間にか時代に押されて身動きもならぬ民衆の指導者に祭り上て了つたのである。

ロベスピエールとの比較はまづそれ丈けにしておいて、要するに理屈の多いドイツに於ては單に眞直ぐな、そして至粹な感情を何の耻かしげもなく打ちまけ得るヒツトラアの如き人間は今迄一人もゐなかつたと言つてもいゝ。想へ！ ドイツの政界は世界觀を基調とする多數政黨が甲論乙駁の議論を闘はせるだけで、從つてその妥協に依りて辛じて成立した聯合内閣は、右と左に氣兼許りしなければならぬ貧弱なものではなかつたか？ ドイツの政黨は分裂してゐたとはいふものゝその一つ〳〵を採つて見れば何れも黨大會の方法と謂ひ、その統制及規律と謂ひ、又機

關紙の設備及政綱の權威と謂ひ、世界のどこのどんな大きな政黨に較べても遜色あるものではなかつた。それだのに、政黨が單に理論的にきちんと運用されてゐるといふことは、强大な政府を構成するといふことゝは何等の關係もなく、ドイツは今迄世界各國中の一番基礎の脆弱な內閣の持主であつたではないか？

ドイツの資本家にも亦理屈は多い。その企業家の團體や組合がトラストやカルテルの申合せをしたり、勞資調停及仲裁に口を出したり、科學的經營や合理化の運動を徹底的に研究をしてみたり、要するに彼等に智惠がないぢやない。理論的には一分も隙がない筈であるのに肝腎の利潤が擧らないし不景氣の克服が出來ないのだ。勞働者側だつて又さうである。イデオロギーに依る理論爭鬪は一九一九年の革命以降、今迄十四ケ年も共產黨と社民黨との間にやり續けて來た。『ヂアレクチーグ』だの、『ポレミーク』だのと、もう耳に胼胝が出來る程聞き飽きたし、組合の組織と規模とは世界の模範となり得る程度に完美させてみたが、彼等の腹は減る一方で、その生活は少しもよくなりはしない。

さう想ふと結局ドイツ人は上下を擧げて議論疲れがしてゐたのだ。フランスのマタンの主筆キ

ウアーワインが『今日のドイツ人に向つて「君等は世界一の理論的な國民だ」と言つたら、それが本氣で、彼等を稱讃する積りであつても、又皮肉をいふ積りであつても、何れにしても今日のドイツ人は腹を立てゝ怒ることだらう！』と適切な批評をしたやうに、ドイツ人はもう鳥渡やそこらの理窟で以ては慰められない事情の下に在つた。換言すれば脂濃い物許り喰ひ過ぎた後で、嘔吐が出さうな氣持でゐたのだ。もう食物のことなんか一切考へないが、それでも單純な水の一杯でも要求してゐた狀態なのだ。

そこへヒツトラアといふ男が飛出した。これは單純なセンチメントの水一杯より他に、何一つ持合せのない男なのである！

六

例へば彼はコーブルグ市に於てドイツの若い青年男女を集めた時、ヒツトラアは次のやうな話をする……

――諸君は歐洲の大戰に於てドイツが負けたと思ふか？　成程一國の元首は和蘭に蒙塵し、軍

司令部の責任者は休戦を申込み、政府はヴェルサイユ條約に頭を下げて署名を完了し、軍隊は銃器を捨てゝ故郷に歸つた。總崩れだ！　想へば恥かしい話である。然し永遠に生くべき一國民の「戰ひ」が勝つたか、負けたかは一體誰れが決めることだ？　諸君は拳闘を知つてるだらう。一人が對手を打倒し……一二三四と數を十まで數へるうちに對手が起上らなかつたら、勝負は決定したことゝなる。それは一方が勝ち一方が負けたと單に「拳闘の規則」が決めたことなんだ。それが「眞個の戰ひ」に於ては十の數が濟んだつて、對手に尙元氣がある限り、或は猛然と立上り今度は反對に向ふを打倒すかも分らない。國と國とが戰爭といふ最後の手段に訴へてゐる場合、勝負は一體誰れが決めるのだ。平和條約に唯署名したといふ規定だけでドイツが永遠に失はれ、永遠に外國の屈辱を得なければならぬといふ約束を守らないとしたなら怎うなるか？——

——それだのにヴェルサイユ條約と言ふ一枚の紙の上ではドイツが負けたといふやうになつてゐる。それを對手の敵が主張するなら兎も角も、味方のドイツ人までがそれを信じ切つてゐると言ふのは、少くとも諸君は不合理なことゝ思はないか？　然しドイツ人の中にも戰爭はまだ濟んでゐないと主張し、飽く迄も武器を執つて戰つて戰つて戰ひ拔いた英雄がゐるぞ。その英雄はた

つた一人しかなかつたといふのは情けないぢやないか……いや一人だつていゝ……斯ういふ偉大なる、そして全世界に誇り得る純粋なドイツの魂がたゞの一人でも我國に存在してゐたといふことは寧ろ我々の未來に眼を射るやうな光明を與ふるものである。一體それは誰れであつたが？曰くアルバート・レオ・シュラーゲタァと名乘る南獨生れの一百姓の息子であつた。彼は諸君と同じまだ廿歳にも足りないうちに一砲兵志願者として歐洲大戰に參加し、祖國のために幾度となく重傷を蒙り乍ら、少しも屈することなく、疵が癒ると同時に、誰れよりも眞先にいつでも前線に立つて花々しい奮戰を續けた。軈て五年の間硝煙彈雨の戰線生活を續けて遂に砲兵中尉にまで陞進した時、ドイツは戰爭に負けたといふので軍隊は銃器を捨てゝ故郷に歸り、敵は凱歌を擧げてパリにロンドンに又ニューヨークに引揚げたのである——

——然し乍ら、この男だけは怎うしてもドイツが敗けたといふことを信ずることが出來なかつた。ドイツにたつた一人でも人間の生き殘つてゐる間は負けたといふ筈はあり得ない……といふのがこの男の巖の如き信念であつた。然し戰爭はもう濟んでゐるといふので、一人だけ奮起してみた所で、もう戰ふべき具體的の對手がゐないのだ。そこで彼はドイツ文明の擁護のために赤衞

軍のバルト海沿岸の侵入を阻止する決心を立てゝラトヴィアに赴き、實際寡兵を率ひて雲霞なすボリシエヰキをヅーナ河の彼岸に掃討して了つた。それから上シュレジエンに於けるポーランド兵の掠奪に憤慨し、これ又アンナベルグに於て仇なす敵を國境外へ驅逐して了つた。斯樣な工合に、凡そ國難の來る場合には、必ずシュラーゲタァ青年の武裝した姿が何所かに現はれてゐたものである。だから勿論一九二三年に佛白聯合軍が無暴にもルーア地方を占領して、魂の腐つた非國民達に不淨な黃白をばら撒き、セパラチズベの運動を焚き付けた際、我がシュラーゲタァが憤然として起たぬ筈はなかつた。然し乍らその度は武運拙くして遂に佛軍の捕ふる所となり、一九二三年五月廿六日といふ日、このドイツ魂の唯一の精華とも言ふべき英雄は、デュッセルドルフの郊外ゴルツハイムの牧場に於て慘酷な死刑を受けたのである——

——斯くして國民の犧牲を一身に引受けて我がシュラーゲタァは死んだ。彼こそは實に『世界大戰の最後の兵士』(der letzte Soldat des Weltkrieges)だつたのだ！　シュラーゲタァは眞個に死んだか？　そんな馬鹿なことはない。その時以來シュラーゲタァの血潮は我々のの脈搏中に躍動してゐるぞ！　それは我々の血管を傳つて何處へ流れると思ふか？　曰く『第三國』へ！

歳若い聽衆は石の如く固くなつて頂低てゐる……默つて膝の上に涙を落してゐる。

七

こんな光景はついぞ今迄になかつた所だ。

ドイツの青年といへばもう歐洲大戰のことなんか知つてゐる者はない。戰爭前のことは觀念にないから親達の貧乏なことも、給料や賃銀の上らないことも、昔から自分の國のドイツは本來がこんなものだと思つてゐる。學校へ行つても智識や理論に關する教育は受ける。スポーツに携つて身體を鍊えることもやる。從つて彼等の日常行爲は智識慾を充たすこと、體育に關すること許りである。そこには然し單純なセンチメントを眞直ぐに育てゝくれる教育がない。要するに學校には國有の意味に於ける修身も論理もないのだ。

又若い勞働者が工場に通つても、矢張り組合を通じて階級鬪爭に關する煩雜な理屈は數限りなく聽かされる機會はある。そして隊伍を組んで示威に出るのは何となく愉快だ。然しそれは何一つ彼等の至純な魂に觸れたものではなかつた。

されば ヒツトラアの演說を聽いて殆と不思議に感ぜられたのだ。十四ケ年間そんな簡單な直截な論理のない魂への訴へは誰れ一人する者がなかつたのだ。學校の先生にしろ、組合の指導者にしろ、又一般の新聞雜誌にしろ、今迄彼等の見聞に觸れたものはもつと複雜な——然しいくら繰返してみても汁氣も涙も出ないやうな——『道理』許りであつたのだ。一同は肅然とてし咳一つしない——靜かに顏を上げて壇上に眼を移すと、そこには『ナチスの指導者』ヒツトラアが至誠その者の如き拳を前に突き出してゐる。

——諸君は今一人殘らずその英雄シュラーゲタァであり得るし、又あらねばならぬ。その血潮が諸君の心臟中に漲つてゐることのよく分つた者、祖國の爲めに偉大をなすべく奮ひ立たうと思ふ者、ドイツ人を世界に冠たる最優秀民族であると自覺する者は一齊に起立しろ！　そして會堂も崩れる許りの心からの大聲で「シュラーゲタァ」と叫んでみろ！

『シュラーゲタァ！』

——よし、その元氣でシュラーゲタァの魂を各人の胸に抱きながら、そのまゝこれから街頭に出て勇敢なる示威運動に移れ！——

『ハイル……ハイル……シュラーゲタァ！』

一同は亢奮して街頭に出る。

そこにヒツトレリズムのコツがある。

×　×　×

追記。今年五月二十六日ゴルツハイマア・ハイデとジーベンゲビルゲにシュラーゲタァ記念像の除幕式があつた。それから今後五月二十六日は『國民的英雄シュラーゲタァの日』と稱し、全國學校の公休日にきめた由。

十一月革命の死

一

ヒツトラアニバーベンニフーゲンベルクニゼルテの寄合世帯に基く、政府の確立した一九三三年一月三十日！　この日を目して右の政府を擁立する、國民社會黨及獨逸國民黨の、家の子郎黨は上下を擧げて傲語する。曰く『我等のなし遂げた「國民的革命」の日だ』と——。

凡そ革命には常に『進行』があり、『高潮點』がある。果して一月三十日が國民的革命行進の始期でありとするならば、然らばそのクライマツキスは何時であつたか？　ヒツトラア一派が政權を掌握して新政府を樹立すると共に息をもつかせず『國家及び國民の窮乏を艾除すべき法律』換言すれば俗に『全權委任法』と呼ばるゝ獨裁權を……然も向後一九三七年四月一日に到るまで滿四ケ年間……人民の代表府たる國會と約束することに成功した日、則ち三月二十三日が明かに

それであらねばならぬ。

この約束（若くは強要）は一九一九年に成立したワイマア共和國憲法の內包的な一大變革を意味する、この日以降今日の國民的政府は、今迄の如く國會の立法權に支配さるゝ必要もなく、又大統領の署名に拘泥せずして自分に都合のいゝ法律をどし〳〵製造し得ることゝはなつた。戰後のドイツ政治史を構成した議會制度（一九一九——三一年）は姿を晦し、その次は鳥渡顏を出した大統領制度（一九三一——三三年）も舞臺の背後に退いて、玆に立法と執行との兩權力を全收する獨裁制度の幕が始まる。この日を以て一九一八年十一月九日に生れた所謂戰後の『ドイツ革命』はまだ十五の歲月をも閱しないうちに哀れ完全に幽冥境を異にして呼べども歸らぬ黃泉の客となつて了つた！

二

言葉は古いが——歷史は繰返す。

今は昔のあのフランス革命が、今度死に絕えたドイツ革命と瓜二つの相好を示してゐるではな

いか？　フランス革命は一七八九年七月十四日をその始期とし、然も自由平等のインタアナシオナリズムに發足して、それがラヂカルに進行すると共に不思議な一種のパトリオチズムの專制に支配され、恐嚇政治の出現を見た。それからテルミドール變革の一大轉機を經て『ブルメーアの十九日』（則ち一七九九年十一月十日）に革命が終熄するまで先づ、さつと十年何がしの歳月が流れてゐる。その終熄の當時に於ける公の權力は、專ら數多の純ナシオナリストにして同時に軍隊の力を左右し得るもの丶掌中に握られてゐた。一七九七年十一月十日以來直後のフランスは、形式こそ假政府で臨時的ではあつたが、事實上の國權は誰れしも知る通り、將軍ナポレオン・ボナパルトのしやくる頤一つに依つて動いたものである。それかと言つて當時ナポレオン一人だけが第一執政の名前を出してゐたと考へては不可い。その後第二執政たりしカンバセレと、第三執政たりしルブランとに依りて助けられる所の矢張り一種の寄合世帶の政府を構成した譯であるから。然し如何なる歴史家の眼にも、その際、カンバセレやルブランの徒輩がナポレオンと對等の地位に立つて、采配を振つてゐたとは映り得まい。恰も今日のゼルテやフーゲンベルクに依りてヒツトラアが著しい制肘を受けてゐると斷言する批評家の無いのと同じ程度に——。

倩々考ふれば、考ふる程、實にもフランス革命の發展史はその全貌に亘つてドイツ革命のそれとよく似てゐる。勿論その進行の途上に於て前者には人間の生首が到る所に跳ね飛んだ……足の蹈場もない程血潮の泥沼ができた。然るに、ドイツ革命には――政黨政爭の衝突に基く多少の殺戮沙汰は例外として――それがない。その點ではドイツ革命の『政黨司法』は寧ろポリシエヰキのC・KやG・P・Uよりも、その勞作に於て、死の天使に充分な滿足の笑を洩らさせ得なかつたことだらう。然しそれは第一時代が異ふ……事情が異ふ……又ドイツ人と、フランス人の、テンペラメントも考量に入れなければならぬ。それに屍山血河の凄いとこなら、事改めて、革命中に實行してみなくつても、ドイツ人は既に、革命直前のソンマや、ヴエルダンや、ランゲマルクの曠野でもう胸糞が惡い程經驗してゐるのだ……

それよりも革命が、一定の方向指して進展した態樣と、殊に、それを終熄させた深い原因の精しい事情とに於ては、實際ドイツ革命はフランス革命の能くも〳〵似寄つた繰返しだと嗟嘆せざるを得ない。その點では戰爭のどさくさ紛れに勃發して、然も、想像以上に羸弱なりし反對的政權と、權謀術數に基く裏の搔き合ひをする必要のなかつたポリシエヰキの革命の如きは、獨自の

途を辿つてゐるものであつて、（假令黨内分裂の現象方面には、トロツキーの廣言したやうなテルミドール的傾向の小挿話は經驗したにしても）大局から判斷するとロシア革命は、怎うしても、フランス革命の繰返しであるとは言ひ難い。又結果だけ執つて、それを形式の上から觀るとイタリアに於けるムツソリーニの擡頭は、鳥渡ボナパルトの出現に似てゐるやうでもある。然しこれも能く考へてみると、ボナパルトは慘澹たるフランス革命が、前後十ケ年間の苦惱を經て始めて生み出した一個の創造物なのだ。從つて、革命の『卵』から反動の『雛』の如く生れたボナパルトの胸中には、フランス革命十ケ年の經緯が繼承されてゐたし、換言すれば、ナポレオン自身に物心がついて自分ではそれを厭に思つたか否かは別問題として、到底彼はフランス革命の家督を相續したのだ。丁度ヒツトラアが一九三三年に過去十五ケ年に亘る永い陣痛の苦しみを經て、ドイツ革命（ワイマア共和國）の癖だらけな、疵だらけな、血統をそのまゝに相傳したのと、大體その軌を一にする。この點で、ムツソリーニはまるで木の股からひよつこり生れたやうな存在である。相續しやうにも繼承しやうにも彼の前には、言ふに足りるやうな『イタリア革命』なるものが無かつた。勞働者の工場占領？……あれは鼻糞の如く小さく、莫の煙の如く呆氣ない……謂

はゞ、歴史の中のコンマみたいなものであつた！

三

だからナポレオンが現はれたためのみに依つて、フランス革命は初めて掌を裏返す如く消えて了つたと考へては不可い。革命の中に既にそれが消えるやうな原因を孕んでおり、醗酵させてゐたのだ。從つて丁度好い時期に現はれたナポレオンは、その結果を收めて、流るべきものを自分のつけた運河の道筋に流してやつたと言ふに過ぎない。

それを事實に徵して考へてみやう。既に恐嚇時代の末期に於て、革命の進行を引止めやうとの意圖を抱いてゐた指導者は、『恐嚇人』の主なる者の中にさへ澤山あつたのである。ダントンがそれだ。ダントン逝きし後は、奔馬の如き革命進行の手綱を採る人物がゐなくなつた。誰れしもこれを阻止し度いのは山々だけれど、迂濶に手を出せば、却つて自分が跳ね飛ばされて一命を殞す心配があるので、たゞ眼を閉つて、流血の惨事を成行に任せるより他に途がなかつた。一番それを阻止する資格のあるロベスピエールの如きは——そして實際ロベスピエールは內心では革命

を終熄させたくつて仕様がなかつたのであるが――仕様が無いから、一種の宗教に逃避して一切を胡麻化さうとする。ぐず〳〵するうちには、彼も自分で作つたギヨチーヌに依つて、我と我身を亡ぼして了ふ。一方ロベスピエールの敵たりしテルミドールの臆病な小人輩は、革命の進行には大反對なのに拘らず、ロベスピエールに、流血の慘事の責任を一切引受けさせやうとの算段から、心ならずもギヨチーヌ政策を益々焚き付けてゐた觀がある。從つて、こんな策略の必要がなくなつたテルミドールの事變の後には、革命自身が急速度に右轉し始めたのも無理はない。

扨て、それに引續いて總裁制の時代が來た。五人の總裁中の筆頭は、名にしおふ『フランス革命の長老』と呼ばれたアベ・シエイエスである。この人は、ジヤコバンの恐嚇政治を苦々しく思つてゐたけれど、態と沈默を守つてゐたために命を生き延ばせてゐた人物だけあつて、既に久しい以前から革命の終熄を希つてゐたのだ。然し、それを實現するのは一筋縄では往かぬ……怎うしても軍隊の力を持つて、實力ある人間を賴つて一度政黨政派の抗爭に沒頭し、饒舌のみを事とする人民代表の政體を叩き毀して貰ふより他に途のないことを覺つてゐた。そこで彼は總裁の筆頭となつたのを幸ひ、一七九九年十一月十日よりも數ケ月以前に、換言すればナポレオンがま

だエジプトに轉戰しており、そして世人は、まだ十一月九日にそのナポレオンが南佛フレジュス灣に、飄然として突然歸つて來たことに氣のつなかつたよりも、ずつと前に、誰れか豪い將軍はゐないかと、鵜の目鷹の目で人選中だつたのである。彼はたゞ軍隊を背景に持つた將軍の誰れかゞ、クーデダーを敢行する以外に、局面打開の途のないことを確信してゐた。否、彼許りではない。總裁府に籍を置く如何なる政治家と雖も、結局議論は、アベ・シエイエスの秘密の計畫に贊同を表せざるを得なかつた。この邊の消息も亦ドイツ加特力教政黨の首領ブリユンニングが——偶然かも知れぬが、ブリユンニング宰相はその顏付までもシエイエス長老によく似てゐる——ヒンデンブルク元帥の蛟龍の袖に匿れて緊急令制度を採用し、それから以後の政局はグロエーナアやシユライヘア等の軍人連に依つて左右さるゝやうな有樣となつた趣と似通つた點があると思ふ。そして結局ヒツトラアが現はれたのだ。ヒツトラアは將軍ぢやないが準軍隊としてのS・A・の大衆を驅使してゐるし、彼の主張は軍國主義であり强兵主義なのだ！

四

扨て、話は又あとへ戻つて……總裁シエイエスは一七九九年の夏、全フランスの獨裁官の役割を、將軍ジューベールにやつて貰ふ積りでゐた。所が不幸にもジューベール將軍は、イタリアのノーヴィの戰に一敗地に塗れた許りか本人も戰死して了つた。そこでシュイエスは一方の將軍マクドナールに眼をつけて、そつと自分の計畫を相談してみたのであるが、この將軍は蒼くなつて辭退した。何……クーデター？……そんな危險極まる御用命は眞平御免を蒙る……何しろ拙者は一介の武辨ではあり、政治のことなど全然分り兼ねるからと。

その後一七九九年の十月に、モロー將軍が赫々の偉勳を建てゝ上ラインの戰線から多數の軍隊を率ひてパリーに凱旋して來た。シエイエスはその機を逸せず、早速この凱旋將軍を捉へて、例のクーデター委囑の相談を持ちかけてゐたのである。恰も宜しその瞬間に、何思つてかエジプトの陣營を見捨てたナポレオン・ボナパルトが不意に、フレジュスの地に上陸したとの報道が傳はつた。そこでシエイエスは、モロー將軍の友人達に物語る——『モロー將軍に獨裁官の相談はしてみたが、そいつはもう遲すぎたな……il est trop tard——ボナパルトはもう大急ぎで上京中だといふから！』

運命は不思議なものだ。若しもナポレオンが思ひ切つて、エジプトを見捨てゝ歸國を斷行しなかつたとしたなら、或は武勳赫々たりし、上ライン軍司令官モロー將軍が、全フランスの獨裁官に――否往々はそれ以上のものに――任命されてゐたかも知れない。さうすれば、この豪膽で沈著で、政治的手腕もあり、且つ節度を超えない性格の持主たりし名將軍モローは今日の、フランスを遙かに大きなものにしてゐたかも知れない。無茶なモスクワ攻伐の軍なんか起さないで濟んでゐたかも知れない。

要するに、一七八九年より一十九九年に亘る十ケ年間の辛き經驗に於て、フランス人は到底實施に値する憲法と政府を構成し得る代議政體とを作り出す可能性のないことを、自覺したのだ。從つて實際政治の世界がよく見える政治家や代議士達は、窮餘の策として誰れか一人の有力な將軍が現はれてクーデターをやつて貰ふこと以外に途がないといふ認識に達してゐたものである。凡そクーデターは、天から降つて湧いたやうに、神秘的に立ち現はれるものでない。歴史的に有名なクーデターは、孰れもそれが出現を妥當とする力強い精神的の準備が有力な支配層の腦漿裡に、醗酵し、瀰漫し、若くは、瀾熟してゐるものである。ナポレオンは勿論豪らかつたからクー

デターを敢行した。然し、事情が全然クーデターの實現を不可能とするやうになつてる場合だつたら、ナポレオンが如何に豪くつても、それは單なる失敗の横紙破りに了つたでもあらう。一九二三年十一月の末に於けるヒツトラア・ルーデンドルフのミュンヘンに於ける『一揆』の如きはこの邊の消息を示すに、最も都合よき學問を『大アドルフ』の頭に植え込んだ。

斯くして、一七九九年十一月十日の夕ぐれといふに、將軍ボナパルトは、屈强の擲彈兵四名を左右に扈從させ、サン・クルーに限りなき饒舌を闘はしつゝあつた五百人會の議事堂に乘り込んだ。やをら身を挺して演壇に飛び上り、咳一咳して議會制度に對する彼の所信を述べやうとする。この豫告なき不躾な闖入者に對し『饒舌の技師連』眞嚇になつて、腹を立てたのも無理はない、……君は一體何だ？……この神聖な人民代表の議政壇上を何と心得てゐるかッ！……そんな洋刀をガチヤつかせた人間の這入つて來べき所ぢやない……退れ々々！……不可ん、演說は罷りならん！　哀れ將軍ボナパルトは演壇の周圍に聚つた代議士連に取圍まれ、罵詈讒謗を浴せかけられ、散々こづき廻された上に會場外へ突き出さるゝの憂目に遭ひしこそうたてなき……

と、言つてゐる僅か數分間の後、果然轟轟として轟き渡る軍鼓の音、瀏亮として晩秋の空に冴

え返る角笛の調べ。それを合圖に、今迄場外の到る處に身を匿してゐた軍兵どもは、待つてましたと計り、喊聲を擧げて會議堂に躍り入る。五百の頭顱を數ふる『饒舌の技師連』は蒼くなつて我がちに地下室に潛込んだ。そこに明いてゐた硝子窓は、げに彼等五百名の命の恩人となつたのである。

それから、五週間を經た一七九九年十二月十五日――時に來らんとする新世紀を迎ふるに當りて、政權を一手に收攬したナポレオンは次の言葉を持てる有名な宣言を發表した。曰く

『市民よ！　在來の革命は今より赴かんとする基礎の上へ据えられた。從つて革命は玆に終熄す！』

五

ナポレオンの遺口は、怎うみても一四五八年終身のロード・プロテクタアを宣言して、イギリスのクロムウエルのそれに髣髴するものがある。

要は十五世紀の中頃は、イギリス人が實行した歴史的事實を十八世紀の末に、フランス人が再

現し、更に二十世紀の今日ドイツ人がこれを繰返してゐることゝなる。イギリスは祖父さんでフランスは息子でドイツは孫なのだ。それだけこの三國には集中國家組成の劃期に於て古さが違ふ……若さが違ふ！　何れにしてもヨーロッパのヒットラアの言葉を藉りて謂ふならば――『優秀諸國民』は時代を前後して經過すべき所だけは例外なく經過してゐるやうである。その意味に於てヒットラア獨裁の出現には、善かれ惡かれの無限の意義を持つてゐる。ドイツ内務省の舊高官にして今ナチスの中で錚々の論客を以て目せられてゐるルドルフ・マルチンが、

『然し十五年間のドイツ革命期はイギリスやフランスやロシアの革命のやうな醜い最後に較べて流血の慘事を伴はなかつたこと丈けでも我等ドイツ人の歴史的な誇りとしてもいゝだらう。この際集中國家出現期が古いか新しいかといふことなどは價値判斷の標準となるものぢやない――』

と放語してゐるなどは併せて考ふるだけの味はある。斯くしてドイツは行く所までいつた。懐ふに十一月革命は生れ乍らにして虚弱な兒であつた。その夭死は免れぬ運命であつた。そして獨裁制度に依つてその生命が斷たれるだらうとの想像も萬人の常識が歸結する所ではなかつたか？たゞ問題は、その獨裁制の態様に關するものであり、換言すればドイツの獨裁制は『共産主義に

基くものか、それともファシズムに基くものか？』の Entweder-Oder に集中してゐたのだ。今 Entweder の方は一敗地に塗れ、Oder の方がワイマア共和國を絞殺する役割を引受た譯である。

歴史は繰返す。然し時と所とを擇ばず矢鱈に反覆するものではない……たゞ思はざる時、意外な場合に、嘗て何處かに經驗されたそのまゝの史實が、妙な條件によつてひよつくり再現して來るのもある。それは不思議でもあり、不思議でもない。

國民的革命の眞諦

一

本年二月の末から三月の始めにかけて、ドイツの政界に捲起つて、今に尙ほ續いてゐる異常なる轉變はその運動の指導者連によつて、卽ち政府の公認的な名稱に依つて、ドイツの『國民的革命』(die nationale Revolution) と呼び慣はされてゐる。

何でもかでも革命々々と、名前をつけるのは語彙の濫用のやうにも見える。だから、この度の現象に國民的革命の名辭を與ふることは考へやうに依つては、決して正鵠を失してゐないと思はれる。

由來この運動の深い意義は、ドイツ民族に堪へ難き負擔を迫る二重の敵に對し、明示的な國民的離背・抗爭及反逆の意思を現した點にある。一はドイツ國民のみを縛りつけることに依りて

國際的秩序を樂しまうとする、ぐるぐる捲きの鐵鎖を斷たうとする表示。二は民族の純潔性を穢しその將來の精神的獨立を絶望ならしめる非獨逸的の混淆を徹底的に清掃しやうとする表示。從つてそれはまがう方なき『國民的』な性質を持つており、同時に革命の名を付けるなら、それは明かに『文化的革命』であり得る。新國民政府もまたこれは明言してゐるのだ。從つてイデオロギーの啓蒙と改變と鞠養とを目的とする國民宣傳省が、現に新政府の存在に最重要の基礎的役割を演じてゐる所以である。

然しながら狹義に於ける文化の問題は玆に說かない。もつと正確に言へば、國家の『憲法』制度の問題と雖もそれが國民の精神生活の發露である限り、矢張りその言葉自身の中にその文化を反映させてゐるものではあるとするならば、玆ではさういふ廣い意味に於ける文化運動中の僅かな一方面だけを切り取つて、そこから所謂『國民的革命』なるものゝ觀念を判然させてみたい。勿論一方面だけ切り取ると言つた所で單にそれは外觀的だけの、そして單に便利なための概念の分離に過ぎないかも知れない。といふのは一個の憲法を生みだした精神なるものは、同時に經濟なり、教育なり、藝術なり、文學なり、要するに文化生活一般の領域に於ける國民的運動を構

成させるやうに仕向けさせる力である。この力が他の領域に於て、尙ほ滲濶蟠居せるラヂカリズムを國民政府の考へでは斯かるラヂカリズムは本質的には非獨逸的であり、從つて國民的運動がその中樞で胡麻化されるものだといふ――次第に消散させ得る程度に應じて、ドイツ國の未來に於ける憲法の構造も亦、ドイツの土地のみで獨自的に榮え得るやうな姿に變つて來ることだらう……だがそれは未來の話だ。現在はたゞ現在にあるがまゝの憲法的な一方面を、靜的に觀察して多少の卑見を述べるより外に經驗的な材料が存在してゐないのだ。

二

所謂國民的革命の最も大きな使命は、何よりも先づドイツ國の憲法に對する總攻擊の火蓋を切つたことであつた。但しそれは眼に見えない世界での爭鬪であつたために、現にドイツの政治家の中にさへその邊の消息を判然意識させてゐない者があるやうだ。だから『革命』と言へばバリカード戰なり、街頭の流血なり、何か眼に見える一揆の暴動の形式を要求するやうに見える。

然るに、ドイツ新政府が國民的革命と自稱するその『革命』には、何等の血腥い喧嘩沙汰が伴

つてゐない。勿論個々の不法行爲若くは不法なりと思惟せられる事件は、センセーショナルな外國新聞などで、針小棒大の取扱を受けてはゐる。だが、政治經濟其他の基礎的な部分に於ては、徹頭徹尾在來の憲法的な規定に準據して手際よくすら〳〵片着けられて往く……そして總ての現象がおや〳〵と思ふ程その面目を變へて往くのだ。要するに一九三三年に行はれた奇異なる變革は一個の『合法的革命』であつた！

合法的革命。それは逆說に基く言葉の弄びではない。法律の規定に準據する形式を履んだ點では合法的で、その法律の根本內容を轉覆した點では革命的なのだ。だからその言葉は事實の說明であつて決して空虛な皮肉ではない……

然るに一九一八年の十一月革命は、一種の『非合法的革命』であつたと言へる。この革命はその內容からいふと泰山鳴動式で、結果は龍頭蛇尾に了つた。所謂見かけ倒しだつたのだ。だから形式は帝國が共和國に變る程の大きな移動があつたに拘らず、以前のドイツの遺產はそのまゝ次のドイツに相傳繼承されたのである。それに拘らず斯樣な見かけ倒ほしの形式の變化は、合法的に成立せる政權の中樞を强制して、退位若くは壞滅の狀態にして了つた。然りその强制は、皇

帝及地方聯邦の諸侯の冠を沒收し、國會及地方議會を解消し、帝國憲法、及聯邦各憲法を埋葬したのだ。その點では明かに非合法的革命に違ひない。

所が一九三三年の革命は、前者と萬事が正反對になつてゐる。合法的であり乍ら內容には空前の大變化を來させたのだ。卽ち革命力の主體たるヒツトラア內閣自身が合法的に成立！、成立後もワイマア憲法の形式的存在を否定することなく、又國會及國評議院をも破壞せず、更に——後に中央集權の實を擧げる樣な統監制度を布告したにも拘らず——聯邦の境界は別に徹回しやうともせず、最後に大統領にも別に退位を迫らうとはしなかつた。そして國會が憲法七十六條の形式に則つて、自ら國法の改變を自由ならしめる全權委任法を可決し、國評議院はそれに協贊を與へ、大統領はそれに署名したのだ。これ程合法的な遣方は殆ど類がない。たゞその全權委任法の目論んでゐる內容に至つては、それは明かにワイマア憲法の根本精神と正面的に背馳反撥してゐるといふことは出來る。從つて、憲法變更を目的とする法律が、その憲法起草々案に規定されたやうな立憲生活の全制度をヒツトラアの目論見てゐる通り、今後四年間魔藥を嗅がせて睡らせたやうな狀態に放つて置く限り——そしてこの制度は今睡つたばかりで四年後に起してみた所で、そ

の時はもう冷たくなつてゐて、永遠に眼を醒すことはないやうな氣がする！――斯樣な行爲を計畫し、實施した態度は何といつても革命的だ。それだのに前にも言ふ通り、この革命行爲は堂々として合法性の本道を濶歩してゐる。假令、その堂々濶歩のために振りくる肱先で以て、不法革命や内亂に導かるゝ惧れある少許の政黨が跳ね飛ばされたやうな挿話はあつたにしろ、それで以て、その進み行く道筋が合法性なる所以を否定するには足りない。

三

所が斯樣な『合法的革命』なるものは、今日ヒツトラアに依りて始めて創設された譯ではない。歴史上その例は幾らでもある。ドイツ史に於ては特にさうだ。ドイツ民族は僅か十九世紀だけの間に於てさへ――成功のもの、失敗のもの取混ぜると――合法的革命を幾回となく繰返してゐるのである。

例へば一八〇三年に獨逸國代議員（Reichsdeputation）が作つた有名な『主要決議』（Hauptschluss）及彼等に依つて承諾された『國法』（Reichsgesetz）の如きは殆ど前後に顧慮なき革命的な

方法で、舊ドイツ國の構成を非常に簡單なるものに建直ほしたのであるが、然しそれは徹頭徹尾合法手段に據つたものである。

又一八四八年に新ドイツ國の建設の試みがあつたけれども、結局それは失敗した。失敗はしたがその試みの如きは、ウエストフアリア平和條約以來ドイツの上下を震撼した、異狀なる革命の波に刺戟された結果であり、然も是等の熱烈な革命家連のパウルス敎會に集つて議決した事業は、何れも合法的に準據したものではなかつたか？

それからビスマルクの業蹟だつてさうだ。世には往々にしてビスマルクを革命家なりと呼ぶ者がある。實際それに違ひないと思ふ。然し彼の偉大なりし所以は、その明かに革命的なりし北獨同盟及、七一年の獨逸帝國の建設が、何れも暴力に基くに非ずして、一から十まで聯邦間の條約と法律に據つた點――卽ち全然『合法的』なりし點――に在つて存する。

斯の如くドイツ人がその國權上の大變革を起す場合には、いつでも合法的であるといふ如上の經驗に依つても、『ゲルマン族には先天的に法的感覺（Rechtssinn）が發達してゐる』といふ世評が實證され得ると思ふ。

だから一九一八年の十一月革命の如きでさへ、假令それは周圍の事情の强制で『非合法的』狀態の革命が出現したにも拘らず――因に、あの革命は誰れしも起しはしなかつた。自然にふわりと出來上つたのだ……そして其處に落ちてゐる政權を社會民主黨と獨立社會黨とが拾ひ上げたのだつた――これに携はる關係者はどうかしてそれを合法の形式に建直ほさうとして一生懸命になつたことは、今から思へば可笑しいやうな事實である。既に十月二十八日に、もう一指でも觸れたら、ぐわら〳〵と壞倒しさうになつてゐた帝國政府は、一方に騷いでゐる非合法的革命の分子へ、合法的革命をやらせる懸橋若くは媒酌をしてゐたのだ。卽ち『帝國宰相に與ふるカイザアの詔勅』を中心とした二個の國法で以て、怎うかしてドイツは、議會制度の政府を作らせるやうな努力をしたのである。どうせ壞倒するのは分つてゐるのだから、その死際に瀕して、そんな餘計なお節介はしなくてもよささうに思はれるのであるが、そこが又ドイツ人のドイツ人たる所以であらう。當時の皮肉な批評家はそれを見て、『一體皇帝直屬の內閣が命令を出して革命を指導するなんか、世界廣しと雖もドイツ人だけに出來る藝當だらうぜ！』と笑つたものだ。例の怪公使ヒンツェなどはこれに『上からの革命』(Revolution von oben) といふ言葉を捻出して世間

へ流行らせた。

勿論是は人を馬鹿にした冗談には違ひない。然し是等の言葉の中には又半面に偶然にも、眞面目な眞理が含まれてゐるから面白い。實際あのお上から出した法律は、取りも直ほさずビスマルク式な憲法精神の完全なる破壞、即ち一個の立派な革命を意味してゐたのだ。斯樣にどんな革命でも何等かの合法の形に直さうと努力することは、慥かに純ドイツ式だと評しても差支ない。だから今日一九三三年の國民革命を批評する皮肉家が前と同じやうな『一體國會の投票數や憲法第七十六條の規定に準據して革命を指導するなんか、世界廣しと雖もドイツ人だけに出來る藝當だらうぜ！』と笑つたとしても、その諧謔は又同時に怖しく眞面目な眞理が横はつてゐる。

四

以上の如く、ドイツ人の政權獲得若くは變更行爲には常に意識的無意識的に合法的の感覺——則ち世人の謂ふ所の germanischer Rechtssinn ——が閃いて働きかけるといふ事實から推して、ドイツの近い將來に於ける憲法政策上の成行を觀察してみやう……それが遣繰りをする主腦者は

横紙破りと思ひきや、寧ろ反對にドイツ、的法律精神を些細な點まで遵守しやうと思つてゐるらしいので、そこにはいろんな複雜な困難も伴ふだらうけれど、根が非合法的でないだけに彼等の勝算には確實な論理上の根據があると思ふ。そこにヒツトラアは無茶をやるやうに見えて、その實極めて着實な成果を收めて往きつゝある消息が物語られる。

ヒツトラアが宰相の印綬を帶びて、始めての國會に現はれた時、彼は反對黨たる社會民主黨の面々を眼の前に据えて斯ふ言つた——『若しも我々が法に對する感覺を持つてゐなかつたとしたなら、我々はこんな所へは來なかつた筈だ……そして諸君もこんな所に坐つてゐられる筈はない。』

威嚇の言葉ではある。然しそこに『革命の合法性』の意義が躍如として現はれて居る。更に曰く、『眞個のことを言へば我々選擧なんか特に必要ではなかつた……又今日この國會へ出張つて來て、この法案（則ち全權委任法のこと）を無理に通過させないでも別に困ることはなかつたのだ……』

換言すれば暴力で押し通さうと思へばなんでも出來た譯だけれど、敢て法律に忠實たるべき方法を選んだといふのである。是等の威嚇は、蓋し、合法的感覺に則れる威嚇である峻烈なる檢事の求刑の如きものである。

斯くして、ヒツトラアは全權委任法を憲法線の範圍内でまんまと掌中に收め得た。その點は確かに豪い。彼は單に理論なき生一本の狂言者たり、青年を蠱惑せしめ得る演說使ひであると共に、同時にビスマルクにも匹儔すべき堂々たる政廟界のタチチカアなる資格のあることが、この一例でよく分つた！

遮莫れ、ヒツトラアの態度に依つて、ワイマア憲法は近いうちに自殺するか、それとも衰弱の果、いつの間にか息を引取るやうな間際になつてゐるのは事實である。然らばこの憲法が死んだ後にはどんな精神の新憲法が生れ得るであらうか？　由來ワイマア憲法の據つて立つ人民の基本權利及基本義務には、ドイツの古法觀念に基く獨自性を缺いでゐた。自然法的な自由解放の法理に、マルキシズムのソリダリティを搗き混ぜたやうな鵺の觀念であつた。然しながら是等の『ゲルマンの古法精神には緣もないラテン人やヘブライ人のデカダニズムを控除した後にも依然として殘る法源的要素は「自由權」(Freiheisrecht) であらねばならぬ』と見るものもある。（ナチス法學者ベルリン大學教授トリーペル）なる程この意味に於ける「自由權」はワイマア憲法で『ドイツ人民の基本權利及基本義務』として採用したリベラリズムの基調とは單に言葉が似てゐるだ

けで、その實何の關係もないものである。それは國際恒久の平和や國際的階級の圓滿なソリダリティを觀念的に豫想する理想ではなくつて、單にドイツ人や昔のアングロサクソン又はオランダ人等の血管を流れた、教會及世俗のデスポチズムに敢然として反抗する『爭鬪の精神』のみを指すものである。斯樣な意味に於ける自由權が次に來るべき憲法の骨子となるだらう。その用意のためか、あらぬか現にドイツの法曹界では、現行の法規中最古のローマ法的精神を除く以外の、その後に附加せられたラテン系統の法的觀念はなるべく清掃し、その代りゲルマンの古法——「自由權」——の基礎に依つて補充して行かうといふ法典改正の運動が熾烈を極めてゐる。

斯樣なゲルマン古法の自由權に基く憲法が完成した曉には、明かにドイツは『政黨國家』でなくなり得るし、『民主的議會主義制度』はそこで見たくも見られなくなるだらう。そこにヒツトラーの所謂『國民的革命』の意義がある。單にヒツトラーが刄に斃らさずして政權を掌握した……そしてその政綱は反動的である……といふだけでは、ヒツトラーでなくとも其他のプロイセン貴族の將軍がやつたつて同じことであつたらう、別に『國民的革命』など〻大きく出て革命呼ばりをする必要はない。彼等が大聲で革命呼ばりをする所以のものは、要するにゲルマンの古法精

神に基く時は、現代國家を、唯一無二の如く支配する民主的議會的な政黨國家の姿を無くして了ふことが出來るとの希望を發見したものだから、斷然そいつをやつて見やうと決心した點にある。だからそれが成功すれば『國民革命』の成功であるし、失敗すれば『國民革命』の失敗なのだ！

五

ゲルマン古法主義の憲法が出來ると假定したら、それは普通の原子化した個人主義とは著しく違つたものでなければならぬ。

世に西洋人の思想を言へば、すぐ個人主義の基調を持つものと早合點する。それは飛んでもない間違ひである。個人主義は十八世以降、殊にパーリアメンタリズムの發達と並行して完成したもので、若しも西洋人の衆團社會生活、殊に政治生活に於て、パーリアメンタリズムの排除せられた別の規矩が支配される場合は、今迄の意味に於ける個人主義觀念は想像することが出來ない。中世以前のヨーロッパ人の文明は、案外、我々が現在考へてゐるやうな個人主義的な基調を持つたものではない。だから若しも、ドイツにゲルマン古法の自由權に基く憲法が、獨裁の形で

出來るとすれば、それは必ずやドイツ人の血管を流れてゐる今一つ別の古い觀念卽ち、Körperschaftliche Selbstverwaltung（團體的自治）の精神に訴へたものでなければならぬ。これはドイツ人には特に傳統として强く保持されてゐる精神である。ラテン人にはそれが非常に弱い。だからイタリアでは、ムツソリニが全然無いものから、人工的に Stato Corperativo を揑ち上げて新しく養成しなければならなかつたやうな困難は、次のドイツに於ては、案外容易に解決せらるべき筈である。

この傳統の集團的自治精神を、何時までも持續した民族ならばこそ、ドイツに於ては今迄でも勞働組合に於て、産業組合に於てその他の企業家團體や、社會救濟團體等に於て、又學生や青年の團體に於て、他の國では見られぬ程の異狀な、且尨大な發達を遂げてゐたのである。たゞ是等の自由的な集團運動化の運用が旨く往かなかつた所以はビスマルク時代にしろ、又大戰後の共和時代にしろ、それを指導する形式が『非ドイツ的な模倣物』だつたから旨く調和しなかつたのだ。ヒツトラーの國民革命政府は明かにそこへ眼をつけた。彼等のアンチマルキシズムの根據はそこにある。換言すれば純ゲルマン式の精神に依る時は、是等のドイツ人の大衆團體化の現象を滅ぼ

すどころぢやない、もつと旨く活かして、もつと大きなものにしてみせるとの確信から來てゐる……否、勞働組合も青年運動も社會經濟團體も、他の外國では、端倪すべからざる程のもつと力强い意味ある存在に作り直ほしてみせるとの抱負から生れてゐる。要するにユダヤ人とマルキシストの排擊も、一般强制勞働の義務の制度も、全國的な統監組織の實施もそこから導き出された行政上の片鱗に過ぎない。

全權委任法――ゲルマン式團體化と固有の自由權。それが西歐の自由主義に基くワイマア憲法の臨終を見屆けた時、始めてドイツの古法に基く新しい憲法が生れることだらう。

その際ビスマルクの手品で――プロイセン丈けのミリタリズムで――傀儡の如く擁立されてゐたカイザアが、復歸するかしないかなど……そんなことはもう大した問題でもなんでも無くなつた！

ワイマア獨逸よりポツダム獨逸へ

一

ヒツトラア、思つたよりも、中々味をやりおる——

理論家としては、始めから期待する者は無かつたのだから、要は實際政治家として、どれ丈け襤褸を出さないで辻褄を合はせて往くかに、觀衆の興味はあつた。然るに襤褸も出さずに、辻褄も相當に合ひながら、しかも奇想天外な實政策を、どしどし强行して行く。

尤も奇想天外と謂つた所で、その背後にテオリーも何にも無いものを、横紙破りに押出して行く譯でもない。近頃世人をアツと言はせた、排ユダヤ的掃清運動やボイコットにしろ、又焚書坑儒のデモにしろ、靜かに考へて見れば、相當に社會的經濟的な理由もある……否、理論さへ在り得るのだが、戰後を通じての今日の社會科學的な思索方法は、リベラリズム乃至マルキシズムに

依つて、悉く若くは、多少なりとも浸潤されてゐるものだから、それ以外の考へ方は何となし馬鹿々々しくつて、幼稚腐くつて全然『理論』でも何でもないやうにしか映らないのだ。だから、世人はナチスの實際行動に對しては、誠に仕方のない事實だとして沈默を守つてゐるけれど、ヒツトラア乃至ゴエベルス等の大小理論家(?)が、口を酸ぱくして『我等の行動の背後に横はる理論は「國民革命の原理」(Prinzip der nationalen Revolution)である。抑々、この原理たるや……』と說明し始めてみた所で、個人主義リベラリストは顏を顰めるし、國際的マルキシストは腹を抱えて笑ふ許りである。然るに皮肉にも、事實のみは『國民革命の原理』に從つて、急速度にずん〳〵進轉を繼續する……

懷ふに今は昔、十八世紀末から十九世紀の始めにかけて、ドイツにはアダム・スミスの正統派的自由主義の經濟的(乃至政治的)思想が、一世を風靡してゐた。スミスの敎理が堂々の征鼓を鳴して、大陸に押寄せて來た時、中世紀からの因襲に基くカメラル學の宮廷學究輩は、屍を竝べて、君の馬前に討死したものだ。スミス學派は、是等の死屍を踏超え〳〵、翩翻の旗幟を擁しつゝドイツの政治家の頭に、拔くべからざるリベラリズムの種を蒔きつけて了つた。假令ドイツの國

策にとりて、それが有利であらうが不利であらうが、理論は理論だから仕方がなく……曰くスミシズム——laissez faire！　其時に當つてたゞ一人フリードリヒ・リストといふ男のみが、敢然立つて『國民的體系の政治經濟學』なる蟷螂の斧を揮り廻したものだから、世人はどつと笑ひだした。然もこの向ふ見ずな理論家(?)は、國を追はれてアメリカに移住したが、鄉國を想ふの念熄み難く折角稼ぎ貯めた財を拋つて、後にドイツへ歸つて來たのである。それでもこの不幸な祖國を思ふ愛國者は、終世世間の容るゝ所とならずして、遂に淋しい雪の曠野に敢かない自殺を遂げて了つた。祖國の感謝が拳銃の引金を引いたのだ。所がリストの理論は時代の方が勝手に着々として、實際的の證明を與へるやうな成果を見せ……關稅同盟はそれがために生れた……宰相ビスマルクはそれを蹈臺として、ドイツ帝國を建設した！　リストの生きたモニユメントが出來上つたのだ！

勿論一九一八年革命以降のドイツに於ては斯樣なリストの思想などは、帝國の覆沒と共に、マルキシズムの理論の光輝に色褪せて、まるでその姿を沒した感がありはした。さりながら不思議なことにはこの死んだ筈の思想が兩三年前から——詳しく言へば在らゆる思想を鎧袖一觸の如く

屠つた苦の、唯物經濟史觀的思想が事實の問題に逢着し政策上の矛盾を曝露し、從つて左顧右眄の理論闘爭に疲れ始めた頃から――悠然として昔の姿を現はし始めた。曰く『リストに皈れ！』の叫びが急に隨所に起つた。學者も政論家も眉を顰めて『今頃何のリストぞ……』と訝かつてゐるうちに、リスト・アルヒーヴは擴張せられ、リスト學界は設立され、リスト全集は今迄の不完全を改竄して新に上梓されたのである。世には再びリスト大流行の秋が來た。そこへナチスの運動が、ニュツと現はれたのである！　世界は擧げていふ――ナチスには理論がないと。所が今日ゴェベルスの謂ふ所の『國民革命の原理』を翫味し、ヒツトラアの『百二箇條』を檢討し、又フェーダアのナチス經濟政策綱領を熟讀してゐると、不思議も不思議、リストの『國民的體系』の理論がその在るがまゝの姿で再現してゐる。從つて、ナチスそのものには理論が無くつてもいゝ……彼等はたゞ實際上の力であればいゝ……强てナチスの理論を探り出したい穿鑿癖のある批評家は、英米の急拵へな新聞雜誌の論評に赤筋を引くに止まらず、溯つてフリードリヒ・リストの、思想體系の研究からやり直ほさなければならぬ。だつてそこには、ヒツトラア一派の横紙破りな實際政治を理論づける、一切のものが――良かれ惡かれ――ちやあんと記述されてあるんだ

から！

二

扨てヒツトラア政策に『理論』が在るか無いかの問題は先づ以上の程度で割愛して置かう。こんな問題を持出した所以はヒツトラアの政策の現在に、世人の謂ふ如く理論も根據も何にもないものなら一時は線香花火の如くぱつと光つても、そして或程度まで旨く往つたやうに見えても、そんな基礎の薄弱なものは將來まで永續し得らるゝ譯がないと考へられる惧があるからである。私自身も豫言者ぢやないし、又それを氣取る意思もないから明白のことはどうなることやら薩張り暗い。だから意表外の反對力が現はれて明日にもヒツトラアは轉覆するかも知れぬ。然しながら『ヒツトラア一派の思想は子供騙しみたいに幼稚だから、そんなものが永續きする筈がない』と放言するものがあつたら（例マンチエスター・ガーヂアン紙の×氏など）、それはその方が寧ろ幼稚であつて、ナチスの思想の背景にはマンチエスター主義の勁敵たる『フリードリヒ・リストの理論』が澁面を作つて控えてるといふことを先以て表明して置きたかつたので、こんな問題を

持出した譯である。

扨て今日のドイツに於ける國民主義者の獨裁は、形の上では『ヒツトラア＝パーペン＝フーゲンベルグ＝ゼルテ內閣』といふ寄合世帶に基礎を置いたものであるが、實質上から類推すると、フランス革命恐嚇時代（則ち國民公會時代）の公安委員會の獨裁によく似てゐる。あの時の委員會の中にも、ロベスピエール以外になほカルノーやロベール・ランデーやヴィヨー・ヴァレンヌコロー・デルボア等の數多の異分子がゐた。それが單に愛國者の共通の線で手を握り合つてゐたものである。然し眞個の政治上の實權はあの場合ロベスピエール＝クートン＝サン・ジュストより成る三頭執政に依つて左右された譯だが、それと同じく今日のヒツトラアの『國民革命政府』に於てもその操りの絲はヒツトラア＝ゴエリング＝ゴエベルスの三頭執政に依つて自在に引かれてゐるのである。

公安委員會の場合は是等の委員の提出する法律案（主として三頭執政の發案）は、委員三四名の署名を以て國民公會の決議を强要し、若し反對者あらば斷頭臺の刄音を以て威嚇しつゝ一瀉千里、法令にして了つた。從つて公案委員會の席上に山と積まれた凡百の懸案は、何の澁滯もなく恐嚇

者の署名だけですら〳〵解決し、値打のない人間の首などは毎日五十も六十も瓜や唐茄子のやうに街頭に跳ね飛んだのである。ナチスに於ける國民革命政府の遣口も人間の首こそ跳ね飛びはしないが、その態樣に至つては略々同一であると觀なければならぬ。ナチスの要望する凡百の懸案はヒツトラアの机の前に文字通り山と積まれてある。若しそれがライヒスタークの協贊を經なければならぬやうな場合はその懸案の十分の一も通過の的のないもの許りだ。否ライヒスタークが在來の如く、多數政黨の制弊に喘ぎつゝ無理にも過半數の投票を必要とする如き政爭の機關であり、然もそれが唯一の國權の把持者であつたとしたら、ヒツトラアの卓子の前に積まれた法律原案等は、そのどれ一つを執つてみても內閣倒壞の種とならぬものとてはないだらう。從つてヒツトラアが內閣の廟堂に立つて先づ第一に實行した一大急務は國會の權能を麻痺させる事、卽ちその立法權の行使を事實上不可能とさせることであつた。爾來ヒツトラアのヒンデンブルグ大統領と約束した登閣條件はクーデターに基く流血沙汰を避けるのは勿論、ワイマア共和憲法の破棄をさへ敢行しないことであつた。この制限付の範圍に於て彼の政治意思を有效に實現しやうと思へば、假令國會の制度は存置するもその立法權の發動を假睡狀態にして了ふ事である。これには明

かに權謀術數が要る。その際ヒツトラア政治に對する敵陣如何にと見渡せば、そこに中央黨がをり、社會民主黨があり、共產黨が控えてゐた。右のうち中央黨（カトリツク教黨）は、ヒツトラア自身及副宰相のパーペンが元來カトリツク教ではあるし、將來ナチスの政策運用の如何に依つては與黨若くは準與黨に變化させ得る見込が歷史上から言つても（例文化鬪爭直後のビスマークと中央黨との提携）充分存在するのだから、今すぐ周章てゝ對策を講じなくつてもいゝ。然るに共產黨は何時まで經つても勢力が減らないのみか、最近には全獨中の第三位を擁する大政黨となつてゐた。だから先以てこの政黨だけに難癖をつけて叩潰しておけば、假令その殘滓丈が社會民主黨と提携した所でナチスに對する一大敵國の觀を呈しやう筈がない。要は社會民主黨を孤立無援の地位に墜す第一の手段として、早速共產黨に對する大手入れを始めたのである。勿論共產黨とナチスとはイデオロギーの上からも社會的利益の上からも相反の關係に在るのだから孰れは大衝突を來すには違ひなかつたが、今迄の歷史から判斷されるタクチークの上でグロテスクにもこの兩者は提携若くは共同戰線に似たやうな事情を作つたことさへあるのだ。だからナチスが先づ共產黨に手入れを始めたといふ經緯は單にイデオロギーの相違云々よりも寧ろ政黨戰術的

な理由から觀察され說明されなければならぬ。

斯くしてヒツトラアは恰も昔ビスマルクがドイツ皇帝襲擊の不敬事件をきつかけに、その事件の關係者が社會主義であつたかなかつたかの原因は別問題として社會民主黨に對し『ソチアリステン・ゲセツツ』の大鐵鎚を下したと同樣に、一體誰れが仕組んだ狂言だか分らぬ國會放火事件を好機會として疾風迅雷の如く多數の共產黨代議士を逮捕し、黨の策源地たるリーブタネヒト館を閉鎖し、形式上今迄合法的に榮えた共產黨の存在を不可能なるものとして了つた。

三

共產黨代議士の登院を不可能とした以上あとはヒツトラアの思ふ壺に嵌つた譯だ。社會民主黨の孤立したヒツトラア信任反對の投票など數の上から言つても問題にさへならなかつた。そしてヒツトラアはその施政方針として例の『十二ケ條文』を朗讀し『四年計畫』を發表し、向後四ケ年間內閣を辭職することなく、その間一切の獨裁的權力を委任せしむる法律の可決を要求した。絕對過半數を占むる與黨は聲を呑んで一齊にアーメンを唱へた！

斯うなると今迄ヒツトラアの眼の上の瘤であつた一番厄介な『ライヒスターク』が今度は反對にヒツトラアの鴻業を頌德し得る堂々たる公の施設に變化したから皮肉である。『在りし良き昔の日』を想ふ情緒が油然として庶民の胸を搏つたものとみえる。今迄戰敗後十四年間の我々は一體何の爲に營々として勞苦し、饑渴し、貧窮してゐたものであるか？……榮譽のため？……神のため？……そんなものは戲畫の材料にもならなかつた……懷へ今日の共和ドイツには神もなければ王もないのか、ドイツ人の好きな爵位も表彰も勳章もないのだ……ノーベル賞金のため？……あれはユダヤ人の宣傳と廣告とに役立つ施設にすぎない……我々がこんな將來に光明のない前途を擁して子供を育てゝみた所でその將來を導いてやる理想も訓育も倫理も存在してゐないではないか……低劣な失業保險金を貰ふ悅びが現在のドイツ人の生きる目標の一切ではないか……金より外に共和ドイツ人の生甲斐ある生活の目標は暗澹として失はれた……その金だつて現在のドイツ人には獲得の途が閉されてゐるだらう……ぢや何のため……何のため!!

そこへ新たに宰相の印綬を帶びた意氣揚々のヒツトラアの行列が通る。光榮あるポツダムの開院式を了へてオペラ劇場に於ける聲明式に向ふのだといふ。譯もなく悅しがつてゐる警護の青年

團S・Aの褐色正服は波を漂はして翩翻の鉤十字旗は搖れる『ハイルヒツトラア……!!』老ひも若きもこれに唱和せざるを得ない――『ハイル……ハイル!!』世界に冠絶する優秀選良の民族たるの誇衿が失はれて以來こゝに十四年。今日始めて鉛を呑んだやうに重苦しく沈默したドイツ人の額に時ならぬ希望の輝きがさんざめく。『ハイル・ヒツトラア!』

斯くて國會の內外に於ける民心を完全に收攬し得た、第三國宰相アドルフ・ヒツトラアは嘗てホーエンツオレルン家のやんごとなき元首カイザアでさへ享受し得なかつた程の畏懼と崇敬の念を全身に沐浴しつゝウイルヘルム街の宰相館に歸つて來た。卓上にはもうナチスの要望する『改革』『斷行』『施設』『敎化』の法案が山のやうに積まれてある。それに對して以前ロベスピエールが驚ベンを揮つたと同じやうに、萬年筆で順々に自署して行けばいゝ。それが法律だ! その發布は? 單にマイクの前に立つて『……右の法律はこのラヂオの放送の瞬間より速時效果を發生する!!』それで萬事が濟むのである。

ヒツトラアがナチスの政策實施のために署名する法律案には隨分細かなものも多い。在來の國會制の時代には各多數政黨の議論が多くつて一々細かな議案の通過が難かしかつたものだが、ヒ

ツトラア内閣に獨裁的權限が委任されて以來假令、それはどんな小さな問題でもこと全獨の安寧幸福に關すると見られる限り、何でもどし〳〵取上げて署名して行き得るのである。由來ナチスの經濟政策の原則は自給自足に基き、國内需要の剩餘をのみ輸出し、國内必需品にして自國に生産不可能なる商品を一定の統制のもとに輸入し、從つてそこから物價政策も關税問題も失業者救濟も割出して行かうといふ建前であつて、この原則に準じた法令なら大小を問はず現下に採擇してゐるのである。細かい例が税制の整理として今迄一般の小賣商人に苛重にして百貨商店に輕るかつた營業税を逆にして百貨店に重税を課したり（尤もそれには一面ユダヤ商人排斥の意味も大分含まれてゐるやうではあるが）、又農民保護を目的として豚脂の輸入關税を課し、國内品のみを消費せしめるやうな政策を執つたり、又國民保健の目的に基いて全國一般の料理店より人工牛革を驅逐するために（因に戰後のドイツ人は南洋の椰子や滿洲の豆から作つたバタの代用品マルガリンを多量に消費してゐたのであるから保健問題から許りでなく、そんなもので料理した所謂ドイツ料理なるものは第一誰れの口にも極めて不味かつたが）そのマルガリンに重税をかけたりなどした。是等は一見詰らない國内政策上の小問題のやうではあるが、勝手口を守る女房連の人氣

を收攫するのには持つて來いの好題目の一つだ。

四

それから今迄なら國內が饑ゑやうが苦しまうが、矢鱈に輸出貿易の好調を示すやうな無理なマ！カンヂクスチツクな政策に許り腐心してゐたのに反し、ナチスの經濟政策に移つてからは先づ國內市場の需要關係を調節さるゝのを第一の主眼とする方針に變へて了つた。尤も今迄の諸政府の無理算段な輸出貿易第一主義の如きも本來好んでやつたのではなく賠償充行の途が他になかつたため已むを得ざる結果であつて、その點でナチスが在來の諸政府の遺口を罵倒するのは多少酷な話ではあるが、兎も角も賠償問題に惱む必要のなくなつたヒツトラア政府は、今を轉機に眼を正しく內地需要の方面に向けたのは相當に賢明な所置であると云つてもいゝ。內地需要の問題といふのは要するに國內の消費力を向上させることである。然るに勞働階級の大衆に三年前から引續き六百萬の失業者が減らないやうでは消費力の向上も糞もあつたものでない。だから失業者の數を漸次に減らして彼等に職業を與へる事は、ナチスの大衆に對する人氣とりの芝居である以外

に尙、ナチス經濟政策の遂行に必須の條件でゞもあり得る。その點に於て在來の政權の牛耳を握つてゐた社會民主黨の遺口は明かに誤謬であり失敗であつた。彼等はドイツの經濟界が世界の不況に見舞はれ、それが爲に輸出貿易中心主義の商工業が大打擊を受けて、工場主は勞働者を街頭に放り出し始めた時、先以て國內產業の基礎に對して一定の原則に基く統制對策を施すべかりし筈であつた。然るに我等は資本家が勞働者を街頭に放り出す現象そのものは已むを得ざる事として眼をつぶり口を緘し、たゞその放り出された失業者に對する保護救濟だけを狂氣のやうに擴張していつたのである。勿論失業者にどし〳〵保險金を與へて飯の喰へるやうにしておいてやることは、國家に大切な勞働力をそれが又必要になるまで健全に保存して置くことであるから、資本家的社會政策の立場から言つても決して惡いことではない。然しそれにも限度がある。ドイツ現下の財政及經濟狀態からして、六百萬の失業者に無駄飯を喰はせておくだけの實力は怎う考へてもありやうがないのだ。それも國內にそんな實力があらうが無からうがそんなことには頓着しないで、ただ階級鬪爭の原理に立つて資本家制度の沒落を期するために、則ち共產黨の主張する如き社會革命の理想に基く目的の爲に對策として決行するのだといふなら、それは又全然別問

題だ。然るに社會民主黨はプリンシプルの上に於て既に久しい以前から階級爭鬪の理論を放棄してゐる。彼等は恰も農民黨が農民の利益を擁護し、商工黨が商工業者の利益を主張すると同じカテゴリーに立つて勞働階級の利益を强調してゐたに過ぎないのであつて、自らは當然資本家階級と協調妥協の政策を執つてゐたものである。從つて無い袖を振つてまで六百萬の徒食の大衆をロへで養ふためには(一)資本家階級との協調妥協の根本策を斷念し——換言すれば共産黨と同樣の立場に歸つて——資本家階級の利潤を無理やりに奪還するか(二)さうでなければたゞ現に就職の勞働者の喰扶持を減させて失業者の方へ廻してやるかの外途がないのであつた。そして彼等はその後者を選んだ。然るに失業者の數は益々殖える一方ではあるし——何しろ遊んでゐて飯が食へるといふので益々殖えざるを得ない——就職者の生計狀態だつて或る一定の限度以下は引下げやうたつて引下げられるものでないから、遂にそれを國家の財政で賄ふとする。それがためには無暗に租稅許りかけて(それで又鼬ごつこのやうに產業の繁榮を益々毀して)二進とも動かなくなつて了つた。要するに斯樣なチレンマは社會民主黨がその存立の基礎たるイデオロギーの中心點を失つて沒落に瀕し始めたものだから自ら空怖しくなつて、たゞ名前の上だけで大衆の人氣をつ

なぐために、『無意味な社會政策』を狂人のやうに實行していつた酬ひであつた。

其缺點を今迄横から虎視耽々として見詰めてゐたナチスの方には、遙かにそれ以上の智惠が廻り得る。彼等は先以て經濟政策の根本問題として內地市場の充足方針を確定し、是迄はどうせ內地では消費力がないのだからダンピングでも何でもやつて外國貿易にのみ腐心するやうな愚を捨て、寧ろ先以て內地消費力の向上を計り、換言すれば失業者の數をなるべく減少するために新しい公共事業をどし〳〵起し始めたのである。そして又一方今迄のやうな失業救濟の制度は極端にこれを制限したものだから、資本家も現に就職中の勞働者も政府側も負擔が非常に輕減せられたし、又他の一方に於て失業者群は新しい仕事を得て先月始めには約三十萬の失業者が減つたし、今月に於ては約五十萬程減る豫定になつてゐるといふ。この『新しい仕事』といふ中には公共の土木事業もある。建築事業もある。もつと極端な——寧ろ滑稽な——例を據げると今迄戸毎に揭揚してゐた白赤金の共和國旗を黑白赤の三色旗に塗り換へたり縫ひ直ほしたりする仕事だとか、裁縫工業でナチス正服の締革や飾紐を拵へる仕事だとか（要するにナチスの突擊隊は警察、衞生其の他社會の安寧秩序に對する一切の事業に携はる筈であつて、國內に軍備の大擴張をやつた

と同じやうに種々の動員工業が勃興する筈だから成程正服を綴くる仕事だつてさう馬鹿には出來ないだらう！）その他種々雜多の機會を作つてやるのである。

斯くしてこれに關聯して勞働强制の法令が實施された譯だ。

五

その外にいろんな政策がある。殆ど枚擧に遑がない。その多くは既に方々の新聞や雜誌にも發表されたので世人に知悉されてゐる所だらうし、又發表されてゐないにしても、どこの國だつてそれ〴〵その國の教育や文化や衞生に關し、財政や交通や產業に關し凡百の法令はある譯であつて別に一々取立てゝ論らふ程の必要はあるまい。何れも世界的の眼から見れば所謂一國のロカールな問題である。尤もドイツ丈けに限られたロカールな問題であつても、それがドイツの歷史に劃期的な變化を與へるやうな意義を有するならば矢張り我々日本人にも面白いと思ふから、さういふものを玆に一つ二つ拾ひ出して觀察することゝしやう——

四月の八日にヒツトラアの決定した全國統監制及同時指令制法の如きは確かにその一つでなけ

ればならぬ。原名は Reichsstatthalters-und Gleichschaltungs Geetz となつてゐる。Statthalter といふのは知事と譯していゝのか、それとも統監若くは總督といつていゝのか、要するに中央政府が地方との聯絡をとるために各地方へ行政長官を派遣するのである。そして地方と中央とがばらゝの行動を執らないために例へばドイツ全體の國會の總選擧のある場合には、地方の議會も同時に選擧を開始すといふ風に統一を執つて所謂 Gleichschaltung（同時又は同一指令）の法則に從はふといふのである。

これは別に奇もない不可思議もないやうに見える。中央から地方へ知事を派遣するのは當然の話であるし、例ば日本だつてフランスだつて何處の國でもやつてることだ。又中央の議會と地方議會の開期は國に依つて多少の違ひはあるにしても、成程同時にやれば多少便利だらうと考へられるだけのことであつて別に驚天動地の大改革でもなさ相である。

然るにドイツにとつてはこれは實に驚天動地の大事件であり得る。由來ドイツは典型的な地方分權制度の國柄なのである。大昔のオツト大帝やスタウフエン家の聖時はいざ知らず、他の歐洲列强が着々近代國家を建設し中央集權の實を據げてゐたのに引換へ、ドイツだけは分裂も分裂久

しく五十有餘の獨立國の互に嫉視反目するコンプレツキスであつた。既にフランスが十七世紀の賢相リシユリユーの時代に完全な、コンパクトな集中國家に纒つてゐたに拘らず、ずつと後れて十九世紀中葉以後に統一されてゐた筈のビスマルクの獨逸帝國でさへ決して中央集權の形態を蔽へた國家ではなかつた。勿論その分子國家の數は歳と共に減りはした。それでも歐洲大戰後に共和國の出來た當時に於てさへなほ十八の分子國を數へたのである。(最近はそれが更に十五となつてゐた)ビスマルクの統一が聯邦の形の上に出來上つた所以はプロイセンの覇權と統制とのために却つて便利であり必要でもあるから、分權制度も仕方はなかつたらうけれど、さういふ意味の特種強大國の特權閥支配の意味が無くなつた所の一九一八年の革命後の共和國に於てさへ、各分子國は何れも自我を主張し合つて聯邦制度を極端に固執し、ワイマア憲法の起草者プロイス博士の集中國家案の如きは暗から暗へ一蹴されて了つたのである。

だからドイツは昔も今も依然として北米合衆國と同じやうな一種の『ブンデスシユタート』若くは『ユナイテド・ステーツ』であつたのだ。然も後者と異る所は合衆國を組成する各分子たる州は權力の上から、經濟の上から又地理的分布の上から極めて合理的に分布されてゐるのに拘

らず、ドイツの方ではハンブルグやブレーメンみたいにたゞ一個の都市だけの獨立國があるかと思へば、リツペだとかアンハルト、ワルデタク（尤もこの二つに後にプロイセンに合併された）の如く豆粒みたいな田舍大名の封建國が威張つてをり、更に他の一方にはドイツ全體の五分の三を占めた程のプロイセンといふ老大な國がそれに對峙してゐるといふ有樣で不合理な不便極まる分布となつてゐた。それ許りではない、オルデンブルグはプロイセンの國の眞中へ碁石をふり撒いたやうな小さな飛地を所領に持つてゐるし、ブラウンシユワイクは瓢簞の眞中の部分がもつとくびれたやうな形で他國の國境の迷惑には知らぬ顏で兩方へ二つの瘤を据えてゐるといつた有樣であつた。まるでドイツといふ國は方々に繼綴したり孔のあいたりした乞食の襤褸着物みたいな姿なのだ。それもたゞ恰好や體裁が惡いといふ丈けならいゝけれど、各國が同じ樣なショヴイニズムの對面を保つて保儒的政府や倭小の外交團乃至議會などを持つものだから、國家財政の上から見てもその負擔は大したものである。それをヒツトラアが斷乎たる態度を採つて各國のショヴイニストにぐうの音も出さゝず、遂にドイツを中央集權國にして了つたのだ。換言すれば十七世紀の中葉にフランス宰相リシユリユーが敢行した政策を、一九三三年の四月に於て宰相ヒツトラ

アが始めて實現し得たのだ。劃期的の意義はそこにあり得る！

尤もそれが良いか惡いか筆者には分らない。成程財政的には有利であらう。然しドイツ文化の强味は一方フエデラチヴな方面に存してゐた筈だ。既にドイツ人自身が笑つてるやうな墺太利からウイーンを引去つたら、あとはお玉杓子の尻尾だけが殘るやうな極端な例は別としても、フランスでさへ集中國家の度が過ぎてパリを除いた地方の片田舎はお話にならぬ程文明の後れた貧弱な姿を呈してゐるのは周知の事實ではないか？　それに較べると學問藝術の文化方面は言ふに及ばず、商工業でもその他の產業技術でも全國到る所に中樞を分布させてゐた筈の在來のドイツの强味は今からだん〳〵薄らいで、或はフランスの（或は日本の！）惡い方面の鞭をふむやうになりはせぬか？　老婆心ながら敢て宰相ヒツトラア閣下に質疑を呈する……

六

扨てその次は愈々ナチスの書入れとするエダヤ人排斥の政策に移る。此奴は言はないで放つて置く譯に往かぬ——

ヒツトラアの國策遂行に就てユダヤ人排斥の綱目ほど必要なものはない。外交及行政の政策からいつても、經濟政策からいつても、又文化政策からいつても、これは今日の實際ドイツ國民の死活問題であり得る！　私は別にヒツトレリズムに對して感情的には大した好意の持てない人間の一人ではあるが、ナチスの排ユダヤ政策に對してだけは寧ろ異狀の痛快味を感ずる。一體政治はあれ位徹底的にやらなければ駄目だ。

世にはナチスの排ユダヤ的行動を野蠻視し憤慨し若くは冷笑する者も多い。ユダヤ人が國内で禍ひをなしてゐない國（例へば日本など）の人道的な立場からみると成程これは餘計な狂言のやうにも見える。事實ドイツから生れた世界的文化の擔任者たる物理學界のアインシュタインや、化學界のフランク又はハーバアや、文學界のマン兄弟や、音樂界のクレンベラアや、劇界のラインハルトや文術界のリーバアマンなどがその榮譽ある地位から放逐されたり、辭職を强要されたりする有樣を見ると、實に身の程を知らぬ馬鹿なドイツ人は自分で自分の『文化を壞つもの』の痴行を演じてゐるやうにも映り、又性科學の泰斗ヒルシフェルドの書物など芝居掛りで燒拂つたりする光景に接するとその血迷ひ加減に呆れざるを得ない感じもする。だから英米の新聞雜誌の

評論家は擧つてこれに對し眉を顰めた觀察をしてゐる（從つて何等の關係を持たぬ日本の文筆業者までその尻馬に乘つて『焚書坑儒の愚』だとか『秦始時代の再現』だとかいふ風な憤慨の口吻を洩らす！）併しそいつはドイツをよく知らない徒輩のいふことだ。例へば日本の對滿問題に就て何等の關係もない歐洲の諸小邦が人道的立場から擧つて『弱少國支那』に味方をする場合、日本人の眼には寧ろ彼等の認識不足が齒痒く思はれたのはつい昨日のことではないか？　支那の問題で西洋人の認識不足の愚に腹の立つた苦い經驗のある日本人などは、今日ドイツ人が世界の批難を眞正面から受ける犧牲を敢てしてまでユダヤ人排斥に焦慮した彼等獨特の國內的な惱みに對して相當な理解と同情を持つてやるべきでこそあれ、關係もない人間が人道面をして兎や角批難がましいことを言ふのは餘計な差出口である。ドイツたる者よ、構ふことはないからもつと大にやれ！

一體國內の問題に對して外國人の惡辣な批評や差出口ほど當該國民の癪に障るものはない。ドイツには自國政策の確立上己むを得ざる必要からユダヤ人排斥をやつてゐる。その事情などにお構ひなしに米國のユダヤ人や牧師などが結束して反ヒツトラアの大騷ぎをやるものだから、却つ

てナチスの若い面々を極端に抗奮させ、四月初めのユダヤ人に對する『ボイコットの日』が生れ、ドイツ國内のユダヤ人の立場は更に一層慘めなものにさせられて了つた。この神經質な現象は例へば加州に於て日本人が排斥された樣な問題などとは同一視することが出來ない。程度はもつと深刻だ。假想的に言へば加州十萬の日本人がニューヨーク、シカゴ、ロスアンジエルス等で商工業上の實權を握るは愚か、米國の高政治界にも文化一般の世界に拔くべからざる獨占的勢力を占め、若くは占めかゝつたと考へてみるがいい。それは日本人には痛快かも知れぬが嘸かし米國人は默つちやゐまい。國を擧げて憤慨することだらう。加州十萬の日本人が些細な百姓仕事に精が出たといふ丈けの貧弱な事情で以て嫉妬心を起してこれは由々しき經濟問題だなどと大騒ぎする程の米國人だもの！

實際その假想通りの實例としてドイツに於ては、僅かに全人口の一パーセントしかない六十萬のユダヤ人が尠くとも革命後は、ドイツの政界官界に於て牢として拔くべからざる勢力を張つてゐたのは確かな事實である。金融界は？　卸小賣の商業や通運や保險の世界は？　法曹界は？　醫者は？　劇場及シネマの社會は？　文士は、詩人は、美術家と音樂家とは？　鳥渡誇張して

いへば Juden, Juden, über alles……！――ユダヤ人の乳滴り蜜流るゝ現世のパラダイスは、パレスチナに非ずして文字通りドイツのベルリンであつたのだ。

七

なる程ハーバアは豪い、アインシュタインは世界の至寶であるかも知れぬ。然し、ハーバア退き、アインシュタインが居なくなつたら、ドイツには學問も文化もなくなつて了ふと見るのも速斷である。さういふユダヤ人がゐなくなつたら、それ以上の學者をドイツ人の間から輩出させやうといふ努力と希望とが今のナチス連中の意氣込なのだ。今迄革命後十三年間はドイツ人の間から豪い奴が出やうにもユダヤ人の跋扈とその閥の引き合ひに依つてドイツ人は全然椽の下の力持以上に世に出る機會が閉されてゐたのだ。ユダヤ人の方は結束して廣告を旨くやつて、鳥渡研究したものでも十倍位のかけ値をして世に發表するものだから、ノーベル賞金のやうな推薦や廣告の利く制度の下では僅かの期間に實に八人のユダヤ人の受賞者を出す奇觀をさへ呈したのである。

それぢやドイツ人の頭が先天的にユダヤ人のそれに劣つてゐるかといふに、それは決してさう

ちやない。昔の美術家のヂーラアやホールバインは立派なドイツ人ではなかつたか？　音樂界でもバツハやベートヴンやブラームスやワグナアはドイツ人として世界的音樂を作つたではないか？　それだのに先天的には優秀な國民たるドイツ人も革命後十三年間は社會の組織が惡かつたために國民的詩人も國民的學徒も國民的文豪も國民的音樂家も生れる餘地がなかつたのだ。

宣傳相ゴエベルスの口吻を藉りていふならば——

『アインシュタインやハーバアの如き人物は——彼等がユダヤ人式に宣傳が上手で商賣が巧みであるために名前が擧がつたといふ事實を考へに入れても、成程豪いには違ひなからう。彼等は世界の文化に貢獻する人々だらう。然しドイツはそんな人々のためにドイツの長所が沒却され弱點のみが曝露されてゐる現狀を默視することは出來ない。そんな人々が居なくつてもドイツ人は孜々として眞個の研究をやつて、彼等に負けない樣な人物をいくらでも輩出させてみせる！　我々はその道筋を淸くする仕事としてユダヤ人掃淸の仕事にかゝつてゐるのだ！　アインシュタインにしろ、クレンプラアにしろ、それ程世界的に豪い人なら別にドイツにゐなくつたつていゝだらう。ドイツ國民精神を汚辱し、冷笑し、曝露しなくつてもスペインへでも、支那へでも、モナコ

へでも行つて勝手に世界文化を擔いでゐた方がいゝだらう。』

成程さういふ見方からすればヒルシフェルドの性科學等は、慥かにインチキの部に屬する。日本にも可成ヒルシフェルドのファンはあるやうだが、あの研究所に陳列された劣情撥發の性的珍品の數々などは『生めよ殖えよ』のムツソリニ式道德的人口增殖政策を採用するナチスの眼には不要なるものなるのみならず、文明の腐敗と墮落を意味する以外の何者でもないだらう。だから彼等の政策遂行にとりて verderblich と思はれる書物など山と積んで燒いて了つた所でさう大して惜いものではあるまい。ナチスが多少の書物を焚いたとて『焚書坑儒』の愚などと憤慨しなくつてもドイツは世界第一の出版國だ。その外にいい本ならいくらでもある。それに書物を焚くのは秦始以來ナチスが始めての現象ぢやない。慥かに左翼內閣の場合にも數度此現象はあつた筈だ。日本の內務省でも發禁の書は山と積んで火をつけてゐるではないか？　それはアメリカが『ドライ』の御代に密輸の酒類を沒收して河に流してゐた行爲と精神に於て別に變つた事もない！

八

ヒツトラア政策の遂行は最初の組閣當時には多少の危惧の念をさへ抱かせたものだが、あれから四ケ月を閲した今日その遺口が豫期以上に果斷で、且巧妙なものだからそんな心配は次第に薄れゆくのみである。由來一個の政治的權力團體が存續するか否かは一にその反對勢力の强さと內訌分裂の程度にかゝる。

ポリシェ ヰキがもう明日にも潰れさうに危ぶまれながら、益々その地歩を鞏固にして行き得るのも、要するにこれに反抗するメンシェ ヰキと其他の反動力の意外に脆弱なりしと、黨の結束と掃清行動が完全に行はれたがために他ならぬ。

ナチスの場合に在りても今日の所反對勢力としての共產黨と社民黨とはもう手も足も出やしない。その暴力的要素たる赤色前線鬪士團に再建の可能がないのみならず、共和國擁護の『ライヒスバンナア團』さへ完全に解散を命ぜられた。ジエネラルストライキ敢行の唯一の能力ある勞働總同盟は屏息し、幹部連の逮捕をたゞじつと默視するのみである。それではユダヤ人が反抗するかといふに、この民族は歷史的暴力的爭鬪を一度もやつた例しのない哀號のみの集團だ。最後にカトリツクの中央黨は今ではプリユーニングに率ゐられてカノツサ城への雪中裸足の途を辿り

つゝある……

内訌の心配も先づ今の所は大體なさ相だ。バーペンには大工業財閥の背景があるといふ丈けで分裂しても反抗分子としての政黨的獨立性を持つてゐないし、ゼルテは反抗どころか自分の率る鐵兜團を解散してナチスのS・Aに合併させた程だし、最後にフーゲンベルグも亦ヒツトラアと分れて異を樹てる程の氣慨も馬鹿正直さもなさ相である。

さればにや、ナチスの誇號する四年計畫の獨裁制は大體動きなく着々として實行され得るだらう。從つて危機は既に内政上には横つてゐなくなつた。殘るはたゞ外交の問題のみである。それもフランスやロシアが斷乎たる横槍を入れて干渉しない限り、ナチス政權の存續はもう確定の事實と見ても宜い。從つてその萬般に亘るリシュリュー式集中國家の政策はもう今明年内に今迄のワイマア・ドイツの相貌を完全なるポツダム・ドイツに變へることだらう。

獨裁府と全權委任法

一

一九三三年三月二十三日。

共和國ドイツの運命を決すべき、劃期的國會が――本來のライヒスタークは共產黨員の隱謀とかで烏有に歸して使用に堪えぬものから――春の日を浴びた正二時といふにクロル・オペラの殿堂に開かれた。

劈頭に新宰相ヒツトラアが施政方針に得意の雄辯を揮ふ事約一時間。それより三時間休憩。午後の太陽が新綠にそよぎ、チーヤガルテンの栗の並樹を長い影に倒ほした、六時十五分となつて議長の振鈴がまた響く。再開だ。議題は政府の提案にかゝる、憲法の變更を目的とする『全權委任法』(Ermächtigungsgesetz) の可否である。素より大きな反對のあらう筈はなく、veni vidi

vigi の勢で以て、一氣呵成に可決となる。

一體その可決には出席議員三分の二の贊成を要し、(共產黨八十一名は登院禁止となつてゐたから勘定外であつたが) いくら意久地がないと云つても社會民主黨がこれに投票する筈がなかつたから、要は在來のワイマア憲法の擁護者たる中央黨の向背のみが問題となつてたのであるが、愈々投票の場合となると、同黨はたゞ誠意ある國政の運用を新政府に希望した丈で、あつさり、之れに贊同の意を表した。斯くしてヒツトラア政府の獨裁を認容する全權委任法は右の社會民主黨九十四票の反對があつた丈けで國民社會黨、獨逸國民黨、中央黨、バワリア人民黨、國家黨など合計四百四十一票の壓倒的支持の下に國會を通過し了つたのである。耳を聾する如き國民社會黨の黨歌の合唱『ハイル・ヒツトラア』の消魂しき叫びと共に議長は國會の無期延期を宣する。これで一九一九年十一月の革命に依つて、樹立せられたワイマア的ドイツ共和制は、成立後滿十四年にして實質的に扼殺致死の運命をみた。

と言つた丈けでは能く分らぬから今少しその全權委任法の本質に就て多少の政治的、法理的の說明を試ることゝしやう——

二

全權委任法といふのは要するにドイツ國の立法權の主體たる國會がこの自分に授けられ、そして憲法に依つて保證された大きな權能を執行府たる政府に依賴して代行せしめる法律である。從つて立憲國の精華たる三權分立の制度は玆に否定せられ、立法と執行とが全然同一人の手の中に――例ばフランス革命の場合は立法府だけの手に、そして今度のドイツ國民革命の場合は執行府だけの手に――掌握されて了ふことである。

然乍ら、斯かる近代國家の進展に逐行する如く見える所の專制政治許容の法律、則ち全權委任法なるものは、ドイツ人にとつてはまるで寢耳に水の感ある新現象ではない。帝政時代のことは措て言はないとするも既にドイツの共和國に於ても、換言すれば人民の意思に據つて成る國會を唯一の國權の發動體と誇り、世界の中で一番自由主義の徹底した制度たる國家であると自他共に許してゐた筈の、ワイマア式ドイツに於ても今迄に二度も此全權委任法を實施した經驗があるのだ。その一つは一九二三年十月十三日のものであり、次は一九二三年十二月八日のそれであつた。そ

の兩會とも國會は自分の立法權を放棄して政府に一切を委任したのであつて、名目の上からは今回の全權委任法と殆ど異る所がない。

一九二三年十二月八日の全權委任法は政府が『財政經濟、社會問題の領域に亘り緊急已むを得ずと思惟する場合』は憲法に認められた『基本權を變更する』ことが出來る……但しこれに依りて勞働時間の延長及賃銀年金の遞下に利用することだけは、許されないとの除外例をつけたものであつた。又一九二三年十二月八日の全權委任法は、前者よりも更に力の弱いものであつて、政府は『國家及國民にとりて緊急已むを得ずと思惟する場合は一切の應急行爲をなし得』るけれどそれは憲法に依りて保障せられた權利を變更することが出來ないし、且つ斯かる應急の法律を發布せんと欲せば尠くとも事前に國會及國評議院の各委員會に通知しなければならぬと規定するものであつた。

扨て、右の兩委任法に於ては、共に委任法に基きて發布せられた命令は遲滯なく國會及國評議院に提示し、然も國會の要求ある時は再びその效力を失ふことになつてゐた。更にこの兩法は共に憲法變更所要の多數に依りて通過はしたが、其際法律的成文としての一般的明示が缺けてゐた。

然し憲法變更の法律に對する特別な布告の形式も亦、やつと一九二四年五月一日になつて、始めて內閣諸省の共同規定で慣習となり、そして何れにしても、この特別な布告形式の缺けてゐたことは別に法律上の意味をなさなかつたのである。それからこの兩法ともに有效期間が限られてゐた。前者は一九二四年三月三日迄、後者は一九二四年二月十五日迄。なほその上に前者はその終期以前でも政府が交迭したら效力を失ふことにさへなつてゐた。

第一の全權委任法に基いて實際に發布された法令は『レンテン銀行の設立、外國爲替支拂の商業、爲替法の變更等、要するに新しくレンテンマルクを採用するに就ての諸法と、それから失業救濟、爭議調停、社會保險の簡易化等に關する諸法並びに一九二三年十月二十七日の官公吏行政整理法等がある。又第二の全權委任法に基くものには第二回及第三回の稅制緊急令がある。第一回稅制緊急令も元來は大統領緊急令の形で出たものではあつたが、その强制的な基礎を頑固にするために、後には矢張りこの第二の全權委任法で補遺的な確認の條項を加へた。

三

由來立法者の任務は要するに法規を作ることである。換言すれば國權で以て國民の權利義務の發生變更消滅に關する一般的適用の法令を拵へることである。

獨逸國に於ては從つて國會がそれを擔當する。ワイマア憲法にはその他に國評議院が抗告權を持ち、又大統領が人民投票に訴へる權利を擁してゐる規定をも掲げてはあるが、嚴格に考へればこの際そんなものは大した意味をなさぬ。

だがその立法者（die Legislativa）は執行者（die Exekutive）に自己の權利を委任して代行させることは出來る。斯樣な代理行爲はドイツの數ある諸法律の中には澤山發見される。それはドイツ國の政府は法律の執行、又は實施に必要な命令を發布し得る權能が、委任されてゐるからである。然乍ら斯樣な意味に於ける權能には一定の制限があり、從つて法律それ自身を實施する範圍に限られてゐるのであつて、本來ならば實施のための法律で以てその實施の目的となれる前提的法律を改變することは出來ない譯である。

然るに、そのうち時代の移推と共に、立法權力が政府に委任されるといふことは、もつと違つた意味に解釋が出來ると主張する學者も多くなつた。則ち、それが全權委任である場合は勿論自

分で法規を作り、既成法律を改廢しても差支へがないといふのだ。

斯樣な代表行爲はたゞ（一）全權委任を一定の制限ある任務に限るか、（一）從つて立法者が如何なる對象物を正當なるものと認め得るか、に依つてのみ發生し得る。憲法學者トリーペルは最近にこれに關して斯う云つてゐる――『法律はたゞ一定の生活關係のための服務に限られた目的に於てのみ全權委任を許し得』（第三一二回ドイツ法學者會議にて）この意味をドイツの國情に照して分るやうに說明してみやう。

例へば、ドイツ國の最近の失業者救濟金、及恐慌時稅の課徵に關する規則は、一九三二年會計年度末迄で效力を喪失し、又諸種の所得稅附加稅も同じやうに終期となつた。プロイセンでも地租及營業稅の課徵の規則は、一九三三年三月三十一日で期間が來た譯である。然るに國政府もプロイセン政府も歲入增加の見込なく、殊に一九三三年には、所得及法人稅の收入が非常に減少する見込だから、當然以上の自然廢止となる筈の租稅を拋棄することが出來なかつた。然しその際國會も地方議會も、それを法律の形で更新する暇も機會もなかつたので、政府は規定の規則の效果を命令で延期し得るといふ權力を、單なる法律で以て許容して貰つたのである。

然し政府が、前に述べたやうな一九二三年十一月十三日の全權委任法に於けるが如き『廣範な領域』に亘り、若くは一九二三年十二月八日の全權委任法に於けるが如き『一般的』に亘る委任で以て立法行爲をなし得るやうな政府へ許容してある場合は、それを多少趣きが異つて來る。さういふ場合には立法者が憲法に據りて賦與された固有權を放棄し、憲法では規定された權力制度への正道を自分から避けることになる。だからその際特に憲法變更の『法律』は要らない。然もそれは、立法者が政府に對し、憲法上の個々の規定を變更することを默認する場合——則ち一九二三年十月十三日法——若くは立法者が憲法違反を許さずと明かな意思表示をする場合——即ち一九二三年十二月八日法——の何れたるを問はず不必要である。何となれば、それ等の場合の憲法變更の形式は、政府が憲法破壞の權能を委任されてゐることに依りて始めて完成するのではなくつて、寧ろ憲法に豫定された權力分立が既に餘儀なく變化してゐることを明示してゐるからである。換言すれば、一九二三年の兩委任法が憲法變更に必要なる多數に依りて認められたことが既に動かすことの出來ぬその明示だ。たゞ一九二三年十月十三日法は、勞働時間及社會年金の件に限り社會民主黨が頑張つて投票に加はつてくれなかつたので、その範圍に於ける例外的制限が

ついてはゐるが、原則としては矢張り十二月八日法と立場を同じくしてゐる。

四

そこで今回の政府が、一九二三年の兩法と同樣な全權委任法を可決させやうと思ふには、怎うしても中央黨の向背を勘定に入れなければならなかつた。

何となれば假令共產黨は決議に參加しない（或は參加させない）としても、政府の與黨は國會の議席五百六十六名中の三百四十名であつた。それでは『獨裁を合法化する』に必要なる三分の二の多數卽ち三百七十八名の數にまでは距離であつた。それでは共產黨への手入れをもつと擴張して、五十六名の社會民主黨代議士を國會へ來させないやうな何等かの手段を講じたら怎うかといふにそれでも安心は出來なかつた。中央黨その他の憲法變更に反對の態度を執る政黨が投票を棄權したら如何とも仕樣がないのだ。何故かといふに憲法變更のためには、單に投票數の三分の二を必要とするのみならず、更に登院資格を有する議員總數の三分の二の出席を必要とするの規定が存在したからである。然しその心配な中央黨の屈從に依つて一掃された譯だ。

これで、ヒツトラア政府は國會より立法上の全權委任を受けた譯だが、その際、全權の內容に就て多少の考量が要る。

といふのは、立法權中の特種の基礎に立つ所の法的措置は單なる國議員を以てしては、到底委任され得ないのである。トーマはさういふ場合が『法の束縛された留保』に於てあるといふ。彼は特に『豫算權』を指してゐる。毎年の豫算は憲法に從ふと、たゞ法律に依りてのみ確定され得ることゝなつてゐる。そこで政府は緊急豫算法を——實際的には今後三ケ月間前年度豫算の踏襲を原則とした立案——を猶豫なく國會にて可決せしめ、そして七月一日前に新豫算法を國會に計ることになつてゐるのは、蓋し以上の法的根據より來たものである。素より、これは單に法理上の意義があるだけの話であつて政治上には大した問題でない。何故なら、ヒツトラア政府は、既に國會で過半數の勢力を握つてゐるのだから、別にこれに對する通過の困難は絕對にと言つてもいゝ程、あり得ないからである。

それから豫算法と關聯してゐる所の例へば俸給遞下の法律なども形式とは言へ、一應は國會に計ることになるだらう。この法律も亦本年會計年度末（一九三四年一月三十一日）に消滅するの

だから、それを繼續する積りなら矢張り國會を必要とする譯だ。

更にヒツトラア政府が新しい財源にクレヂツトを必要とする場合にも尙ほ國會の存在を無視し得ないだらう。そのことは屹度起るに違ひない。ヒツトラアも――今迄の政府が困つたと同じやうに――財源の不足には弱り拔いてゐる筈だ。具體的にいふと今日の狀態では租稅收入は減る一方である、殊に所得稅、法人稅、及營利稅、は一九三二年の慘澹たる赤字決算のあとを受けて、尙ほ增收の見込が立つてゐないのだ。從つて、今のまゝでは收入の辻褄を合はせることの不可能なるは火を睹るよりも明かな始末だが、それかとてこれ以上の歲出を制限するやうな緊縮政策は『四年計畫』の手前にも出來ぬし、又同時に益々金融界を逼迫させて不景氣風はいつまでも退散する筈がない。然るに、一九三二年の春に於て既にパーペン內閣は大統領の緊急令で以て公債を募らうとした時に、國會の特別國債委員會は擧つてこれに反對した。然るに、政府が一切のクレヂツトを獲得する行爲は、憲法第八十七條に依りて、怎うしても國會に基くものと規定されてゐる以上、パーペン內閣はそれに對して獨斷では奈何ともすることが出來ず、結局、國會へ提出してみた所が、擦つた摩んだの大議論が起つて酷く苦しんだものである。だから――そんなことは

今度は萬が一有りはしまいが――若しも特別國債委員會が、あの當時と同じ態度を固持するやうな場合には、假令ヒツトラア政府が今日全權委任法を振翳してゐるといふ丈ではまだ足りない。クレヂツト獲得を計畫する限りは形式的にしろ、國會の協贊が今に尙ほ必要である筈だ。

五

最後に然し最少でなく、否寧ろ一番重大な問題が玆になほ取殘されてゐる――

一體ヒツトラア政府が享受する全權委任法の活用に依つて『固有の憲法變更』は可能なりや？今迄述べて來たのは、要するに憲法自體を變更するに非ずして、個々の場合に於ける憲法よりの迴避であつた。謂ふ所の Verfassungs-durchbrechungen の問題であつた。然し、それよりも更に一層進んで、長期に亘るを豫定した憲法自體の固有な變更が出來得るであらうか？ 嘗て一度――昨年の夏のこと――パーペンとガイルとが計畫したやうな、ワイマア憲法法改正が法理的に可能であるだらうか？

議論は極めて多い。純然たる法律論を以てするならば、これに對する消極論も可成り有力なや

うである。例へば前プロイセン財務大臣で、同時に憲法學にも造詣の深いホエプカァ－ショッフ博士の如きは斯う述べてゐる。

『私は斯かる意味での憲法變更は、ライヒの政府が全權委任法の基礎に依りてだけでは遂行し得ざるものと解釋する……それは國會に於て憲法變更所要の多數を占むる場合と雖も駄目である。何となれば憲法の立法者は憲法の回避を許し、又規定の手段を遵守して變更し得るものなるも、立法者自身を、憲法の停止から解き放つことは出來ないからである。だから、この樣な意味に於て政府が主になつてやる直接な憲法變更の方法は、全然存在しない。換言すれば、憲法變更はたゞ國會及國評議院が三分の二の多數を以て憲法變更を決議し、且つその際國會の方では同時に出席議員の三分の二にも該當するやうな場合は、人民投票に依り有權者の多數（今日の所では約二千二百百四十萬人）が憲法變更に讃成する場合に於てのみ可能である。今日は政權が異常な一點に集中してゐるやうであるから、憲法の固有の變更は譯もなく出來るやうであるが、矢張りそれにはそれ相當の順序を踏んで行はれなければならぬと思ふ。』

然り、法理的には問題が難かしい。ヒットラアが全權委任法を『ハイル・ヒットラア！』の歡

呼の聲と共に收得したといふ丈けの根據では、すぐワイマア憲法を葬式に出す譯には往かぬ。然し、ヒツトラアが今日の如き破竹の勢を以てワイマア憲法を死ねよがしに虐待してゐたのでは——もう實質的（政治的）には命がなくなつてゐるのだから、たゞ形式的（法理的）に微かな息してゐるやうとも——今に、或は今後四ケ年以内に……

Macht ist Recht ではある！

ヒツトラア治下に横たはる經濟の姿は

一

ヒトラーは益々有卦に入つた。三月五日の總選擧の結果は、反對黨總數の三〇〇に對する與黨總數三四八。換言すれば、眼の上の瘤たる社會民主黨を現狀維持にとゞめしめ、傳統的にキヤスチング・ヴォートの把握者たりし中央黨の在來の役割演出を解消せしめ、當面の政敵共產黨を八一名に叩き落し、さうして與黨たるハルツブルグ聯合（ナチス二八八、國權黨五二人民黨七）をして議席總數の五割二分を勝ち得せしめた。華やかなことである。斯くして國會機能は長期間停止せられることだらう。全權委任法は文字道りの獨裁を揮ふことだらう。假令、組閣當時の施政方針の宣言が妥協的消極的であつたとはいへ、今から先の道筋にはコンミュニズムの大彈壓、ワイマア憲法の顚覆、第三國（帝制國民國家）の齎來其他センセーショナルな復古反動運動に向

つての舗裝が完成した。うつかりすると、ドンキホーテの尻馬に乗るべき運命に終りはしないかと我れながら多少憂鬱だつたヒツトラアの地位も、今度の選擧に依つて明かにケシ飛んだ。彼は戰後のメツテルニヒと成り了せたのである。

だが、こゝにはそのセンセーショナルな方面や、兎や角あげつらふことを避けやう。それよりも宇頂天になつてゐる筈のヒツトラア內閣の脚元は、大地のどの邊を踏んでゐるかをもつと地味に調べてみやう。曰くヒツトラア治下に横はる經濟の姿は？

二

ヒツトラアは經濟學者でありやうがない。

凡そ御大のヒツトラーのみならず、見渡した所今日の大「ナチス」小「ナチス」の中にこれぞといふ經濟通はゐないやうである。フエーダアは？　電氣技師が暇々に反社會主義の文獻を多讀したといふだけの男に過ぎぬ。ゴエーリングはこれまた大戰中はリヒトホーフエンと一緒になつて、フランスの飛行機を一把一束に射落すことに於て敵味方の喝采を博した、航空士官上り

で、戰後に後ればせながら大學の講義を聽いて『經濟通』になつたといふ丈けの人物に過ぎない。

彼等ナチスの徒は何れも揃つて一粒選りの狂信者であり煽動者であり、演說屋であり、服從と規律の機械人間である。然し經濟の實務？――これは彼等の嫌ひなユダヤ人のやることだ。

然し、彼等が政權を掌握した以上は、假令厭でも經濟の方面を捨てゝおく譯には往かぬ。現代國家に於て經濟政策を第一主眼にしないで、組織のできる內閣がありとするなら、そは恰も『乾いた水』の如く、語彙のみ存在して實體のない概念だ。今ナチスたるもの、經濟復興の途上に在るドイツの政權をその双肩に擔つた以上、黨內に經濟の途の明るき人物のゐるゐないに拘らず、曲りなりにも何等かの形に於て固有の經濟政策の政綱を發表しその實現に誠意を示す――尠くとも誠意の態度を示す――必要がある。然らばヒットラア內閣の經濟政策は一體何であるか？

この問題を考へる前に一應の注意が要る。要するにヒットラア內閣はハルツブルグ『聯合』の內閣である。純然たるナチスの獨裁內閣ではない。數黨の聯合である以上、參加政黨の最大公約數式な最小限度に於ける共通妥協點（ヒットラア內閣の場合に在りては全獨的「ナショナル」な

精神）に於て一致してゐるといふだけで、それ以外の各黨固有な特種の主眼は、聯合の範圍に於て消極的に歪められ合つてゐるのである。お互ひの角が一先づ匿され合つてゐるのである。だからヒツトラアが、嘗て在野時代に宣傳用としてミュンヘンの嵩色館やベルリンのカイザーホーフで發表してゐたり、機關紙「フォエルキツシヤア・ベオバハタア」が大膽な筆を揮つて書き撲つてゐたあんな經濟政綱（私有財產制そのまゝでの工業公有、國家全收其他）を探し出して、その材料で、ドイツの近い將來の經濟の姿を想ひ浮べるのは、飛んでもない早まり方だ。それよりもこゝでは『ハイル・ヒツトラア！』の神がゝりなお筆先の經濟政綱を離れ、彼が責任ある實際政治家となつて以來、政府の施政方針として發表した經濟政見を洞察することにする。

三

ヒツトラアが新內閣の首班に立つて、新聞記者と會見したり、內相フリツクに意見を發表させたり、機關紙を通じて新政府の意嚮を斷片的に洩らしたりしたことは別として、彼がその政治方針を正式に吐露したのは、二月十日に於ける『スポーツ・パラスト』の演說であつた。普通の新

宰相の政見發表は、常に國會の議政壇上から反對黨を眼前に控えて行はれるのを常とするに拘らず、ヒツトラアは拳闘やアイスホツケーに民衆の謂集する屋内スポーツ館を選び、ラヂオを通じて全ドイツ人民に呼びかける形をとつたのも、彼獨特のデマゴーグらしさを現はしてゐる。

扨て彼はその演說に於て、一時間餘の長廣舌を揮ひ所謂新内閣の實行政綱なるものを發表した。その前半は全然マルキシズムに對する攻擊である。一八一八年以來ドイツが如何にマルキシズムに依り毒せられたか、そして自分は是等のマルキシズムを奉戴する『ユダヤ人及び劣等人種』に依り凌辱され醜弄され、殆ど『荒凉たる廢墟の姿に變り果てた痛々しい祖國をそのまゝに讓り渡され』るまでに、どれ丈け苦しんだかの經路を長々と述べた。

それから第二段に入つてこの廢墟を建て直ほすため、自分の決心は左の十二政綱に盡きると述べた。然らばその十二政綱とは如何なる具體案なりや?——と聽衆は片唾を呑んで耳を聳てる……『……と我々は決して嘘を吐かない、斷然ごまかしをやらない決心だ！　これが政綱の第一……『……次にドイツの復興は自然に生れはしないので、我々が先に立つて献身指導する。その際我々は國民に共助をお願ひする……

『然し乍ら、我々は自國民の共働以外には、斷じて異民族や外邦の助けを藉りないとの信念に基いてのみ努力し勞作する……

『……殊に異鄕人の腦味噌に湧いたやくさな、理論を排擊し、我が國民の歷史と經驗とが我々に示敎する生きた法則にのみ準據することを誓ふものである……

『……第五に斯樣な基礎の上に立つ我々の生活は、我々自身の他、外來の力で褫奪掠略さるべきものでない……

『……第六にこの國民と國土の維持は我々全部の永遠に亘る生命目的である……

『……階級分裂に基く黨派に宣戰し、これを屠滅するは、我々の生きてゐる限り神より許された義務であり光榮であること……

『……第八に國民の復興は、その根柢がドイツ農民の双肩にかゝれる認識……

『……第九及第十としてこれまた國民力の要素たるドイツの傳統を維持する民衆性、及び勞働者の生活を保護すること……、外部勞働者を斥け國民勞働者をして、ドイツ共同團體生活の重要なる共働參加者たらしむること……

『……第十一及第十二として怠惰無能なる議會的民主的制度に反抗する爭鬪……及びドイツ人生活の廓清、換言すれば行政、公生活、文化の廓清……

そして彼は滿堂の喝采を浴びて、かの有名な、ドイツ國民よ！　我々に藉するに四ケ年を以てせよ！　然る後我々を裁き我々を判斷せよ！　ドイツ國民よ、四ケ年の日子を許すなら、自分は敢て誓ふ……自分がこれを爲したのは（內閣を組織したのは）報酬のためではない、諸君自身のためなのだ。その決心をするのは自分の生涯中の一番辛いことだつた。(Deutsches Volk, gib uns vier Jahre, und vier Jahre Zeit! Dann richte und urteile über uns! Deutsches Volk, gib uns vier Jahre Zeit! Dann richte und urteile über uns! Es ist ich schwöre dir……ich tat es nicht um Gehalt……ich tat es um deiner selbst willen. Es ist der schwerste Entschluss meines eigenen Lebens gewesen.) との言葉で結びをつけてゐる。

四

折角片唾を呑んでヒットラアの施政方針の中から具體的な經濟政綱を聽かうとしたのにこれではだめだとも云へる。ヒットラアは常にマルキシズムを目して口ぐせのやうに『理論と稱する無

意義なタルムード經文の討議』だといつてゐるが、彼の所謂實行政綱なるものは、タルムード以上に『モーゼの十誡』同然だと失望するものもあらう。

然し、又そこにヒットレリズムの面目が躍如の姿を示してゐるので却つて面白いと觀察する事もできる。或はヒットラアは——彼が經濟的な專門的な知識のないことは別としても——これ以上のことは言へないのかも知れない。言へるにしても一黨の首領內閣の主班に立つ責任ある身として具體的な經濟技術的細目に亘つて說明を避けた方が賢こいのかも知れない。疎辭が紋切型で內容が空漠で單に反對黨に尻尾を摑へられないことを主眼とするやうな普通の總理大臣の就任演說も困りものだが、假令內容には具體性がなくともヒットラアの政綱發表演說は尠くとも在來の型を破つた堂々たる『信仰の告白』である。從つてこの信仰が眞摯で嘘がない（かの如き）態度を人民に訴へておきさへすれば、その他の外交政策、教化政策、軍事政策、經濟政策等の細かい點は悉くその演說のどこかから總てに一貫した示唆を得ることができる。その點に於てヒットラアの經濟技術的な施設を聽かんと期待した連中は失望し冷笑したかも知れぬが、ヒットラアの演說そのものは首相としての貫祿を示す上に決して失敗であつたといふことは出來ないだらう。

それに彼が急遽の間に政權を受取つた場合は、萬事が混沌としてナチス流の政策を企畫し得る事情に置かれてなかつた。資本家の放慢な態度に依つて、今迄多數の政府が國民的救濟を取行しても資本の硬塞と破産の現象は續出するし、社會民主黨の遺した政策としての、失業救濟保險の制度は、現今の財政機構の存續を不可能としてゐるし、六百萬の失業者は、依然としてその數が減らぬし、高い關税で民衆の利益を犠牲にして農業を保護しても、後から後から追ひかける負債に依つて救濟の實が擧らぬし、輸出入額は一昨年に比し、更に三割五分以上の激減を示すし、要するにドイツの不況は一昨年の如き崩壞に對する恐慌狀態を免れてゐるといふだけで、殆ど將來の見定めもつかない鈍重な沈鬱な永續性を見せてゐるのである。ヒツトラアが『自分は廢墟の如き祖國を受取つた』といつたのは――假令修辭的誇張の嫌ひはあり、又その原因を悉くマルキシズムの罪になすりつける可否は別としても――そは大體に於て事實を穿つてゐる。

五

然らば、これに對して一刀兩斷的な外科的手術を施さんとしても、今日では兎も角、ヒツトラー

が組閣の印綬を帶びた當時は、まだハルツブルグ聯合の全體を以てしても、法案の通過を阻止し得る三分の一の議席數は、既に社會民主黨と共產黨とだけの提携に依りて成立し、且つ中央黨のキヤスチングヴオートの地位は依然として、彼の專權を抑へるに足りたのである。だから彼が內閣を組織してからの第一の任務は、經濟政策の細かい點どころの騷ぎでなくつて、遮二無二に議會を解散し、議席の過半數を獲得することだけであつた。この、のるかそるかの投賽に成功すれば始めて彼の政綱に具體的な眼鼻がつくし、失敗すれば政權獲得そのもの〻意義が九十六日內閣のシユライヘルの運命に墮して了ふ所であつた。さうして僥倖にも投げられた賽の目はヒツトラアのものであつた。これからやつと『具體的な經濟政綱』が生れ得る段取りである！

さり乍らヒツトラーが一旦內閣を組織した以上は、總選擧の時期まで眼鼻がつかないからといつて萬事を混沌のま〻に放置しておく譯に往かなかつた。政權は新たに創造したものではなくなつて在るが儘を前內閣から繼承したものである。それをヒトツラーの政治意思に依つて將來如何樣にも變へて往くことは、事情の許す限り彼の勝手であるが課稅の問題にしろ、貿易の問題にしろ、食糧の問題にしろ、又失業者の問題にしろ、在來の繼承に對する當面の施設を續けなけれ

ばならぬ。さういふ意味に於て特はハルツブルグ聯合内閣の執つた經濟問題に對する態度は、どんなものであつたか？　特にといふのは、さういふ具體的な應急施設に於て、別に新内閣の創意によりて出現したものでない經濟現象が澤山あるからである。例へば新内閣が成立して後の二月十五日にドイツの獸肉及ヘツドの關税が恐しく高くなつた。（獸肉は二倍、ヘツドは十「マーク」より五十「マーク」に引上）それは新内閣が農民保護（ヒットラア政綱の第八）に基いてさういふ結果になつたかといふと別にさうではない。この問題は、既にパーペン内閣の時に起つて次のシユライヘル内閣が殆ど緊急令の形で發表しやうとした場合に、同内閣が潰れたもので、法案そのものは食糧省にそのまゝ殘つてゐたものである。ヒットラア内閣は單にそれを踏襲し發表したに過ぎない。それから同じ頃、オルデンブルグでは地方町村でやつてゐる貯蓄金庫を、國の會計に移すことになつたし、バイエルンでは、私立の諸銀行を中央の管理に移さうとする議案が地方議會に上提された。それを見た評者は、須破こそナチスが、銀行國有の實を擧げ始めたと大騒ぎし始めたが、是等の現象も亦、ナチスの特異性を誤るものでなくつて、既にシユライヘル内閣の當時から完成するものゝ如く豫想されてゐたものである。

六

從つて、ヒトラアの治下に於ける一々の細かい施設現象を、悉くヒットレリズムに結びつけて考へるのは間違つてゐた。そこからハルツブルグ聯合内閣の具體的な『新方針』を歸結することは出來ない。

それよりも、玆に一番便利な基準は、二月十日に經濟省國務祕書（日本でいふなら次官）のバング博士（經濟學者）が宰相ヒットラーの代理として、ドイツ國權工業委員會の席上で發表した演說は、大體に於て新内閣經濟政策の全貌を窺ふに足りるものと信ずるから、それを一通り述べて置かう。

バング博士は、先つ内閣購買力の向上促進によりて、外國貿易萎靡の窮狀を救濟する可能ありとなし、これに依りて目下通商條約の改訂期に近づきつゝあるオランダ、スエーデン、ユーゴスラヴィアの三國に處する對策を述べ、最後に新内閣の確信として左の七ケ條を朗讀した。

一、今は經濟現象の如何なる領域にも試驗的な秋ではない。我々は、もう十三年間苦しい試驗を

やり通した。その結果は悉く我々の胸中に解つてゐる。改革の必要な所はたゞ有機的發展(organicshe Entwicklung)の完成のみ。

二、一切の經濟には固有の基礎を再現しておかねばならぬ。それは忠實と信念(Treu und Glauben)とそれから特に國家的道德(Staatlicho Moral)である。國家自身に道德がない以上、國民のみに道德をせまるも空しい。だから例へば、我々は債權者にも債務者にも依估の政策をとらない積りだ。强制的な債務棒引で、誰れしも富み得るものなく、又强制的利子引下では、信用が破壞されるだけである。國家は公債利子で衣食してゐる者を搾取してゐても生存し得ない。信用(Kredit)は信賴(Glauben)である。信賴が失くなれば結局經濟が失くなる。債務多く又利子高き弊害はたゞ資本の構成の建直しに依りてのみ除かれると思ふ。故に新政府が利息及利子を褫奪するだらうなどゝ言ふ徒輩は僞りの流言を放つものだ。

三、同じく新政府にはインフレーションを目的で金本位を破棄する意思がない。坊間かゝる流布をなすものあるも、そはデマゴーク精神耗弱者の考へ方のみ。

四、經濟を國家化すれば國家は經濟化する。さうなればことを後に戻すことができない。戻さ

うとすれば又國家は國家に、經濟は經濟に、歸るのみだ。逆にこの發展を進めて行けば結局コレクチヴィズムに墮るだらう。さうなれば最高の價値、否最高の經濟價値が失はれて了ふ。換言すれば人格が消滅する。……政治的に物價及賃銀を設定するは、「經濟の神聖な精神」に對する冒瀆であり全國民の破產を刑罰として受取るだらう。標語——給付價格と給付賃銀！

五、社會問題は、たゞ階級爭鬪觀念の根本的否定と今日分離せる雇主勞働者の再提携によりてのみ解決され得る。見よ、青白く疲れた今日の雇主と、飢饉に絕望する今日の勞働者の露出しの顏を。斯かる双互の困憊は兩者がたゞ同志となるに依り除かる。社會經濟はプロレタリアー化でなく排プロレタリアー化の上に定められる。

六、經濟政策問題一切の解決は、先づ農業問題の上に有機的に建設せざるべからず。健全なる輸出も亦健全なる內國經濟の脊髓なしには不可能である。

七、故に、勞働組合政策も、商工業者團體政策も農民同盟政策もない、必要なるはたゞドイツ國民經濟政策あるのみ。我々はただ共同團體のためにのみ働からうと思ふ。國內の善良且正直な人々は新政府を補助せよ。若しも工業と農業との間の調和、勞働者と雇主との間の平和が決定

さるゝ限りに於てのみ、我が國民と我國の經濟との救濟は可能である……』

七

そこにも矢張り霧がかゝつてゐる。然し筆者は、前述のヒットラアの演說は言ふも更なり新勞働大臣のゼルテ、又は新食糧兼經濟大臣のフーゲンベルグの所說など詳しく調べてみたが、尠くともこのバング博士の發表が、ヒットラア政府の最初の具體的（？）な經濟政策の表白なることが分つた。

そしてこの表白に於て、最も面白く感じたは、このハルツブルク聯合內閣の經濟政策がヒットラアといふよりも、寧ろ明かにフーゲンベルグの思想を代表してゐることだ。

則ち一讀して、それがパーペン內閣當時の『私的經濟主義』その儘なることが會得せられる。そのパーペンの『私的經濟主義』に對しては、つい昨日までヒットラア一派のナチスが不俱戴天の敵の如く喧嘩を吹きかけてゐた所ではなかつたか？　成程その政綱の中には、ヒットラーの主張する『ナショナル』な點はヒットラア自身の滿足が往くだらう程度に於て誇張されてはゐる。

然しヒットラアの『ソシアリスチック』な方面は、全然沒却されて了つた！　從つて、負債及利子棒引の否定、金本位制の維持等、要するに、ヒットラア式プロデクシオナリズムは、經濟政策の範圍に於てはその姿を晦して了つた！

これを要するに、ヒットラアの聯合內閣には到底調和の出來ない二つの傾向が、恰も調和のできるもの丶如く假りに同じ傘下に集つてゐる。一つはヒットラア一派の國家資本主義（彼等はそれをnationalsozialistisch)と呼ぶ）であり、他はフーゲンベルグ・パーペンの全然私有財產的大地主及び製鐵工業資本團の私經營主義である。ヒットラーは彼等と聯合內閣を作る場合、經濟政策の方面は悉くこれを後者に讓り、自分は專ら純然たる敎化政策（その主要なる任務は共產黨撲滅）と對外政策（その主要なるは反フランス的煽動）とを引受けた譯だ。それは恰もビスマルクの最盛時代のドイツ帝國の姿に髣髴たるものがある。あの當時ドイツの自由主義は、ドイツの經濟的發展の一面を引受け、プロイセンの反動主義者は、外戰と社會民主黨の撲滅に、全力を注ぐ共働のモザイクであつた。

斯樣な聯合がいつ迄續き得るか？　共產黨並に、社會民主黨に對する彈壓は、今回の選擧の

結果更にその政綱を進め得るであらう。然しそれに依つて、ワイマア憲法が改正され『ナショナル』に統一したドイツが出來上つた所で、その經濟政策上の分裂がハルツブルグの聯合の内部に醸成されるのは左程遠い將來のことではあるまい。

獨墺伊ブロックへの經緯

一

今の所問題の總てが墺太利の一擧手一投足にかゝつてゐる——

ドイツがナチスの天下になつて以來ヒットラアの政府は躍起となつて獨墺『合併』問題に集中宣傳を開始したのは隱れもない事實だ。それには何を措いてもドイツは墺太利の國民を根柢から『ナチス化』する必要がある。

そこでドイツ・ナチスの幹部は堂々たる大名行列使節を仕立てゝ大規模宣傳のために五月の始め國都ウイーンに乗込ませた。曰く——バイエルン文相シエンム、バイエルン法相兼ドイツ司法顧問フランク、プロイセン內相兼プロイセン議會議長ケアル、國務評議院長ロベルト・ライ博士、ベルリン＝ブランデブンルグ州長クーベ、內閣總監フライステア博士、プロイセン政府委員

シャウブ、ドイツ法曹聯盟幹事長ホイベアート何れも口も八丁手も八丁其一粒選りの大立物である。是等のナチス代表選手が本國でのお役所の仕事を放つて置いて『國際司法會議參列』の名の下に長期間ウイーンに滯在し、墺太利政界の輿論を攪拌して『合併』の目的を達しやうといふのだ。

結果から先にいふと、これは一先づ失敗したと觀てもいゝ。なぜなら墺太利基督教社會黨機關紙『ライヒスポスト』は是等の『歡迎されざる客人』の『非友情的行動』を痛く攻擊し、又ドルフスを首班とするウイーン政府が急に全國に緊急令を發して政治團體の制服着用を禁止し、ナチスに入黨する墺國官吏は馘首さるべきを布告したと報じてゐるからである。ライヒスナチス連この仕打を見て怒らないことか——ドルフス政府がそんな生意氣な態度を執るなら、よし、此方にも覺悟がある！——と早速報復として墺國人のドイツに入國する者には一千マークの入國稅を課する手段を講じたのである。之で獨墺の仲は犬と猿との喧嘩みたいに永遠に分れて、例の『合併』の問題などはどつかへふつ飛んで了つたのであらうか？　否決してさうでない。その消息の機微を窺ふためにはもつとよく今日の墺太利の混沌たる政情を凝視し直ほす必要があると信ずる。

二

五月の始めにザルツブルグで今日墺太利の政權を把握する基督教社會黨の『黨大會』が開催された。

『これは實に歴史的に記憶すべき黨の大會だ』――と例の機關紙ライヒスポストは一九〇五年エツゲンブルグに開かれた該黨大會を評したと同じ言葉を用ひて批評を續ける――『あの時と同じくこの度も亦我が基督教社會黨は特に墺太利だけの本質と、墺太利的な目的の最上級な主張を前提とし、そしてこの前提が一切のドイツ民族の運命を最も良く決定するものなることを決議した』と。(因にこゝにドイツ民族とは「ライヒスドイツ」人と「ドイツ墺國」人の總稱である。)

してみると基督教社會黨、從つて今日の墺國政府は如何にも斷乎たる具體的意見の一致を見たやうな形式になつてゐる。果してドルフス政府の人々は何の分裂もなく眞の『墺太利』の獨立を固く主張して動かない積りであらうか？　否この眞の『墺太利』といふ觀念そのものが彼等の間に支離滅裂の觀を呈してゐるのだ。事情を客觀的に判斷する識者の眼には今日三重の『墺太利』

が相重つて存在することが映るであらう。或る人々の墺太利は將來『ライヒへの合併』は不可避であり又必要であるがたゞ現今はまだその準備時代であると考へてゐる。次の人々は墺太利を獨立せしめ置くのは必要だが、それでももつと『第二のドイツ國』たる色彩に染めなければならぬと解釋してゐる。第三の人々はたゞ純然たる『古墺太利』の絶對的存在のみを胸に描いてゐる。

その際黨の有力な幹部の一人で現今の陸軍大臣ヴォーゴインは斯う白狀してゐる——

『……我が基督教社會黨は都市でも田舍でも怖しく蠶食された。その最も慘憺たりし一九三二年の選擧の進行はまだ停止され相にもない。殊にヒットラアが三月五日に多數を制するやうになつて以來我國内に於ける國民社會黨の活躍の波は制し切ることが出來なくなつた。この狀態に依つて我黨は今最一の境遇に置かれてゐないのである』

ヴォーゴインは特に黨が分裂してゐるとは言はなかつた。然し口でこそ發表しないが、陸相ヴォーゴインは首相ドルフスを表面に立てゝ一種の幹部『獨裁』斷行の肚をきめ、從つて該ザルツブルグの大會では幹部の態度に慊らぬ反對派には殆ど滿足な演說をさせないで所謂純然たる『墺太利的』な主張を强制的に決議させて了つたのである。所が陸相ヴォーゴインは決して『古墺太

利』派ではない。この人は寧ろ第二の範疇に屬する。換言すれば墺太利を『第二のドイツ』とは觀るけれど然し獨立だけは依然として續けさせて置きたいと希望する側の代表者なのだ。從つて彼の演說に依ると『カトリック敎徒たる墺太利人は常に最良のドイツ人であつた』といふ。そしてこの最良のドイツ人は矢張り「ライヒ」の國境外に存在する方が得策だと見てゐる。

一方彼の傀儡たる首相ドルフスは本來ならば寧ろ『合併』派に屬すべき人である。然るにザルツブルグの大會では獨裁者(?)ヴォーゴインに引摺られたものが口では『我々ドイツ人……』を盛んに連發させながら結局はライヒス・ドイツより斷然分離して獨立の國柄を續けようといふ意見であつた。その論據は遙かにローザンヌ議定書から導き出してくるのだ——

『我々はあのローザンヌ議定書の中で我々の確信及方針に當嵌らぬやうなものは技術的にも政治的にも決して承諾してはゐない積りである。その政治的な部分では勿論我々は墺太利が獨立の國家であり、又將來もこれを續け、從つて獨立を拋棄する樣な計畫は決してやらないといふことを繰返し保證しておいた。それでも國內及外國殊にドイツ及び私の近親の人々などの間に妙な見當違ひの誤解が起る惧れがあるのでこのことは常に繰返してゐる次第である。一體どれ丈けの條

件を守れば我々はローザンヌ外債を借入れることが出來るかは議定書の中に判然と規定してある筈だ。だからこの借入金を行ふに必要な條件を守る以上に出で更に斯ういふことも致しますと國內政策上の方針まで立入つて白狀しろといつても、我々は獨立國たればこそ、そんなことは斷然お斷りする積りである……』

これは明かに近頃フランスのポール・ボンクールが墺太利政府の社會民主黨壓迫の事情に不滿を感じて約束の貸金を延期するといふ宣言をしたのに對する反抗の聲であるが、半面から判斷すれば墺太利の獨立は持續するけれどもドイツとの特別な親善關係は決して放棄しないといふ意味の暗示にもとれる。從つて彼は斯ういふ言葉でその意味を補足してゐる——

『假令我國は小なりと雖も獨立國である以上は外國とどんな條約でも勝手に結ぶ事が出來る！』

さういふどつちともつかぬ態度だから未だにローザンヌで約束した貸金は國內へ這入つて來ないのだ！

三

それから聯邦首相は陸相の意を迎へるやうな意味で以て黨自身に向き直り我々には基督教社會黨の崩壞を防止する義務があるといふことを述べてその論を斯う進める――

『我々は目下農村が矢鱈に新しい徒黨を組み嘗て社會民主黨が試みて失敗したあの「農村の占領をさへ」着々として實現しつゝある事情を默視許容することが出來ない！』

これは近頃農民の間に墺太利ナチスの頭目フラウエンフェルドの運動が破竹の勢を以て擴がりつゝあることに對する暗示である。――『……勿論國家の官公吏が個人として自己の信ずる政黨に趨るのは制止することが出來ないけれど、若しもそんな場合は彼等は官公吏としての地位を棄てるものと覺悟してゐて貰はなければならぬ……斯樣に熱病的なデマゴギーと新聞雜誌の輕薄なプロパガンダに浮かされ易い時代の弊に鑑み、我々は來るべき地方代表の新選擧は今後なほ五ケ月間延期することに決定した……この半ケ年の間に國内經濟の充實を計り、政治の安定を期することは我々當面の責務である……Hinein in dieösterreichische Front！……』

これがドルフス首相のザルツブルグに於ける有名な大演說である。語調が極めて荒いやうに見えてその實フランスに向つても又ドイツに向つても何となくうねりくねりしてゐる。純然たるウ

インナ外交式『グツタ・ペルカ』性の發揮だと見てもいゝ！

首相よりも一見更に鼻息の荒いのは法相シュシュニツグの雄辯であつた。所謂第一の範疇を代表してゐる筈の彼に言はせると、ドイツは今日『第三國』を渇望してゐるやうであるが、自分の憧憬は依然としてドイツ人の『第一國』であり『……この際墺太利主義をどうでも宜いと考へるのは實に持ての外のことだ……植民地なんかになるの眞平である！……否眞のドイツ人はドイツ人の故國たる墺太利を中心に立て「帝都」ウイーンを擁護するの使命がある！』と。その心は合併してもいゝがそれなら墺太利主義中心の合併にして貰ひたいといふのだ。鳥渡これは今日出來さうな相談ではない。然らばドイツの植民地に成るのは眞平だから兎も角も今迄の獨立を續けやうといふ譯である。こんな『古墺太利』式な威張り方をしたのでは、假令その內容が解釋の仕樣に依つては『合併』の理論にでも落着し得るとしても、血氣盛んなそして裏の裏が分らぬ。然も目下氣焰の當るべからざるヒツトレリアンを眞向ふから嘯怒させるには充分である。

四

それからザルツブルグの基督教社會黨大會の席上でゝは、ほんの形式的な餘興に過ぎない式辭があつた。所がそれは考へやうによると、一面極めて意味深長な示唆を與ふるものでもあり得る。それはザルツブルグ市の副長老フイルツア博士が、カトリックの僧服を纏ふて莊嚴に大管長の祝辭を代讀したことである。その中に曰く——

『ドイツ民族の國には美しい都が多い……然もその總てに冠絶せる第一の美都は聖なる我がザルツブルグ市に如くはない……我等は今日このドイツのローマに於て滿場の諸子に御挨拶を申上げる！……ローマ文明とドイツ文明とが斯樣に美しく調和した都會が果して世界のどこに在りましやうや？……』それから政治的方面に論を進めてこの副長老はいふ——『全ドイツのカトリック人民は、今混沌の中より墺太利を引離すことに努力され、且つ眞のドイツ精神を擁護する避難所を建設されんとしつゝある首相ドルフス氏に滿腔の感謝を獻げるであらう。我等は國境の彼方に同じドイツ人の血を分けた同胞の動きを靜かに見やり、たゞ彼等がその中庸の途を踏み外すことなく、その始めての經驗が有終の結果を收め得るやうにたゞ聖父に祈禱する許りである。然し我が墺太利にはそのやうな冒險的な經驗は不必要だ。また我々は本來そんなものを欲しない！』

然り墺太利の右の眼は今ベルリンに秋波を送つてゐるのだ。然し乍らその左の眼は明かにローマを凝視してゐる。二つの瞳が左右の眦に分れて――その藪睨みの美人は孰れをお婿様に選ぶであらうか？　具體的に言へば墺太利の在野黨たる國民社會主義者はナチスのヒツトラアを想ひ、與黨たる基督教社會黨はファッシズムのムッソリーニに義理立てをしてゐるのだ。然もこの兩者は今日では精神的に血を啜り合つた義兄弟である。そして墺太利がナチスのものとなつても、又ファッシズムの意に從つても嫉妬に堪へぬフランスは、墺太利の財政救濟といふ金の力で彼女の貞操を買取らうといふ魂膽なのである。

五

してみると墺太利の他力的な政治傾向は次の三つに總括することが出來やう。

(一)親フランス傾向。それは社會民主黨が中心となつてポール・ボンクール、從つて國際聯盟の盟主たるケイ・ドルセーの鼻息を窺ふことである。

(二)親イタリア傾向。現墺太利の政權の中心にある基督教社會黨がそれである。然り基督教社

會黨は全體としては親伊的ではあるが、それはヴアチカンを崇敬する宗教的な傳統主義から來てゐるものであつて、民族心理的には勿論ライヒス・ドイツに水よりも濃き血の親しみを感ずる。そしてドイツに對する態度の種類には三つあることも既に前に述べた通りだ。

(三)親ドイツ傾向。フラウエンフエルドの率ゆるオーストリア・ナチスはヒツトラアのライヒス・ナチスと無條件に合同し、墺太利をして大ドイツ主義第三國の有力な分子に盛立てやうといふ理想を持つてゐる。基督教社會黨内にも、是等國民社會黨運動の理想に共鳴する一派もないではない。然し今日の基督教社會黨政府はドルフス・ヴォゴイン獨裁制に基いて黨の分裂を抑止してゐるものだから、ドイツとの合併を希望するものでも表面はヒツトラア派の對墺太利宣傳に表面上反對の氣勢を擧げてゐるに過ぎない。

所で第一の對佛親善の態度は餘り根本的なものではない。從つてその徹底を期し難い。勿論フランスも墺太利も共に舊教國民ではある。然し舊教國民だから常に提携するといふ理由のないことは、今日のフランスとイタリアとの仲がよくないことに依つても明かだ。それから歴史的に見て、昔墺太利もフランスも共にビスマルクのプロイセン軍國主義に粉碎された共通の恨みを持つ

てゐる。だがそんなことは歐洲大戰に依つて一切解消されてゐる筈だ。要するに歐洲大戰では肝腎の墺太利とフランスとが不倶戴天の敵味方であつたし、又歴史的に兩者から怨まれてゐたプロイセンの軍國主義は、尠くともドイツ革命に依つてその姿を晦して了つたからである。最後に墺太利人とフランス人とはそのテンペラメントが能く似てゐることは事實だ。昔からハプスブルグ家のウイーンは、ブルボン朝のパリと併稱せられて歐洲文化の中心であつた丈けに、墺太利人は今でもその擧措態度が優雅高尚であり、從つてウイーンは今日も尙ほ眞の歐羅巴的なエチケットとかモードとかの一方の權威である。換言すれば、ウイーナアはドイツ民族中での一番パリジヤンに近い要素がある。然しながらさういふことを擧げるならライヒスドイツ人の中にだつて――假令田舍者のプロイセン人はその態度から氣持から根本的にフランス人と異つてゐるのは仕樣がないとしても――西南ドイツ人や南獨人はそのテンペラメントに於て寧ろ北獨人よりもフランス人に近いと見なければならぬ。だから單に住民の氣持やテンペラメントが偶然似てゐるといふだけの理由で、二つの異つた國民國家が親善關係を持續し得るとは斷言が出來ない。

況んや今日のフランスはサン・ジエルマン條約の桎梏に呻吟せる墺太利を金の力で漸く獨立さ

せてあるに過ぎない。金の力が無くなればナチスの大獨逸運動の如きものが無くつても、既にクルチウスの提案に依る獨墺關稅同盟が殆ど成立しかゝつてゐたのではなかつたか？　あの際國際司法裁判所を使嗾して同盟條約の無效を決議させる前に、遂にドイツ側をしてその提案を撤回せしめ得たものは要するにたゞフランスの金の力であつた（その見せびらかしの金も實はまた墺太利には這入つてゐない！）然しフランスの金力だつていつまでも續かないとするなら、今度は武力の干渉に依つてこれが邪魔立をするより他に途はあるまい。武力の干渉とはチェツコスロヴアキア以下小『アンタント』の附屬國に武器を執らせること則ち少し西に寄つたバルカン戰を焚付けることである。然しさういふ最後の手段はたゞさへ小『アンタント』から孤立して寄邊なき身をかこちつゝある墺太利をして、寧ろ直接にドイツへの合併を決行させるに役立つのみだらう。換言すればドイツを孤立さす目的で、墺太利の獨立を策するフランスの計畫も下手に武力の手段を用ふる限り、結局直接に獨佛間の干戈に訴へて雌雄を決する問題のみが取殘されることゝなる。果してフランスにその決心ありや？

六

さう考へてみると墺太利にさへ水心あらば――或はその水心が今少し程度を增して來さへすれば――結局ドイツへの合併は最早や避け難い狀勢と見なければならぬ。それは單に時期の問題である。

然らばその時期とは一體どういふ政情の狀態を指した時かと言へば、その答へは極めて簡單である。曰く、今日の基督教社會黨の政權の代りに墺太利ナチスが議會に多數を占め得た時……全墺太利がヒツトラア主義化（大ドイツ主義化）された時！

この假定は架空なりや、それとも實現化の程度高きや？　これも答へが極めて簡單であつて、明かにその後者が眞理に近い。今度選擧があつたら屹度墺太利ナチスは壓倒的勢力を占めるだらう。今のドルフス內閣はよくその事情を知つてゐるものだから選擧を人工的に延期させてゐるのだ。恰もブリューニング內閣がドイツに於てナチスの議會進出の大勢を惧れたがために議會の運用を停止し久しく緊急令政治を布いてゐたのと好一對である。由來墺太利はドイツの縮圖であつ

て、その社會的政治的行程が悉くドイツの進んだ路通りを進んでゐる。たゞ戰後の貨幣價値暴落——寧ろ崩壞——の現象に於て墺太利はドイツよりも一足古い經驗を持ちはしたが、それは唯一の例外であつて、其他の行程に於ては墺太利は常にドイツより三四年後れつゝドイツの辿つて行くと同じ路を眞似してついて行きつゝある。だからドイツが完全にナチス化したやうに墺太利も必ずや近いうちに先輩の後を慕つて完全にナチス化するだらう。その時こそは獨墺合併の爛熟期である。

然るに今日の有樣では未だに基督教社會黨に命脈が殘つてゐて、一方ドイツに秋波を送りながらも尙ほ獨立の體面の問題に謬着しつゝ、然もヴアチカンを通じてムツソリーニの鼻息を窺ふといふやうなまるで鵺の如き情勢の下にあるのだ。

その又ムツソリーニのイタリアとヒツトラアのドイツとは今日精神的には義兄弟のやうな關係に立つてゐるから面白い。其場合フアツシズムの國は先輩としてナチスの國の兄哥である。否單に精神的許りぢやない。國家の自衞と歐洲大陸へゲモニーの均衡を保つ政治的必要よりして、ドイツとイタリアとは餘りに當然すぎる程隣りに境するフランスを共同の敵としてゐる。さればこ

そドイツにナチス中心の内閣が成立すると間もなく獨伊の交驩現象が起つた。四月中旬ヒットラアは、その片腕であり目下無任所大臣兼プロイセン首相の現職にあるゴエーリングをローマに派し、獨伊兩國の修好狀態に更に一層堅實な楔を打込ませることにした。(因にこのドイツ修好使節を歡待するムツソリーニの片腕たるファッシズムの空相バルボが、嘗て歐洲大戰當時の有名な飛行將校であつたと同じやうに、ヒットラアの片腕たるゴエーリングも大戰當時には『空を翔る三惡魔』――リヒトホーフェンとウデーとゴエーリング――の一人としてその勇敢な敵機射落しの離れ業に依り聯合軍の心膽を寒からしめた同じその當人であるのも面白い。だがそれは餘計なことだ)それに續いて副宰相のフォン・パーペンも、敬虔な舊教徒としてヴアチカンに敬意を拂ふといふ口實の下に夫人同伴でヴアチカンのみならずクイリナルまでも訪問して、ファッシズムの兄哥分たるイタリアへ萬事宜しくお賴みして來たのである。これでヴエルサイユ條約に萬腔の不平を抱ける獨伊兩國は、益々露骨な反『フランス』の精神的ブロックを形成したことゝなる！

然るにこのイタリアは、今の所一方ドイツと墺太利との完全な『合併』を心から歡迎し得ない事情にもあるから面白い。といふのは歐洲大戰の結果、イタリアはその北境に於て墺太利からボ

ーツエン・トリエントの地を割讓させてゐる。そしてファッシズムの國民主義に基きその地方を彈壓的にイタリア化させてゐるのだ。故に小弱國たる墺太利が何等かの形で獨立してゐる限りそこに困難な問題は起らないが、墺太利が强大なドイツと合併する場合はそこにナチスの大ドイツ主義と正面衝突を起す心配もあり得る。だから今日のイタリアとしてはナチスドイツとの對佛的親善を希望し、從つてドイツの希望するヴエルサイユ條約の破壞には寧ろ聲援を與へる地位にゐるに拘らず、ポーツエン・トリエントの問題に關する限りドイツと國境を壞接することを嫌つて、墺太利といふ緩衝の獨立地帶を作つておきたいのだ。こんな鹽梅に多少の機微に觸れる特種問題はあるにしても、獨墺伊の三國が歐洲の眞中に一個の政治的なブロックを作りつゝある情勢は、時の推移と共に決してその程度が尠くなりつゝありはしない。昔の三國同盟の再現は或は案外早く出來るかも知れない。然も昔の同盟の如く(一)墺國に反スラヴ的なバルカンの盟主たる地位が今イタリアに移されてゐること(二)ビスマルクの軍國主義がイタリアをして消極的に獨墺同盟に引ずり込んでゐたやうな特種事情が消えてゐること、に依つて新に考へらるゝ三國の中歐ブロックは以前の三國同盟と多少その形式及內容を異にするだらうことは當然想像され得る。

倫理的勞働觀

一

基督教が十字架と劍を提げて異教の北歐を征服した時の偉大なプロパガンダの技術は他でもなかつた――彼等は北方諸民族の中に大古より堅く根ざしてゐた自然崇拜を積極的に採用し、それに新しく聖化し得るやうな基督教の意義を與へたことだつた。

だから征服の過程に於ては寧ろ邪宗怨敵なりとして鬪つたその對蹠物を、今度は征服の完成と共に神聖至上なものに轉換し、換言すれば森羅萬象の畏敬憧憬を中心とする感情的宗教に理智的な說明を與へて、結局古い信仰と新しい信仰との間に殆ど無理のない契機を作り調和を策したものである。

ヒツトラアの政策が恰度それなのだ。世に新たなるものあることなし。萬事は繰返す。ヒツト

レリズムが中世紀の傳統思想なりと机の上丈で議論してみれば、怖しく黴臭くもとれやうが、意想外にも二十世紀も三十年代も過ぎた歐洲大戰後の今日、電光石火の如くそれを振翳した形には如何にも新味がある。反對にカフエーのマルクスボーイあたりの眼には最新最流行の尖端を行くものゝ如く見えるにしても、既に國際的プロレタリアーのソリダリティの思想は——古い十九世紀中葉からの起源にまで溯る必要はなく、大戰後十四ケ年間支配され飽きたドイツ人の頭には、もう鼻につく程古臭くつて新味の刺戟を缺いてゐたのだ。その意味に於ける最近十數年來千遍一律の如く繰返してゐたメイデー行列の『傳統的祭日』のやうな行事には何と怖しく活氣のなかつたことか！

この五月一日のだれ切つたトラゲシオナルなお祭りの日を國民社會黨が『國民勞働祭』に横取りして、數百萬の大衆に眞個の緊張した祝祭日らしい氣持を與へたことは、ヒツトラアに政治理論が有るか無いかに依つてその功罪を論ずる前に、如何に彼が政治的タクチークに人並以上の天才を有するかを如實に物語るものであり、敵も味方もこの點にだけは驚嘆の眼を瞠らざるを得ないのである。そは確かに十字架と劍に依つて異教の北歐人を征服した新東の基督教徒が自然崇拜

の感情を助長して『神の子』の理智的な教儀に丸めかへた故智にも比較すべきであらう。元來『ナチス』は宣傳に巧妙な政治團體ではあるが、然し乍らメイデーに新しい魂を吹込んで『國民的大祭日』の形に變へた宣傳の如きは、今迄ナチスが瀕發續行したプロパガンダ中の壓卷秀逸のものでなければならぬ。何故ならそれは單なる感情上の成功に非ずして精神的倫理的な大効果を擧げたものであるから！　換言すればウォータンの崇拜者をその儘に基督の名で洗禮したのと同じ好成績を得た譯であるから！

斯くして一九三三年五年一日、ドイツに於て鉤十字の旗の下に熱狂的に行はれた『國民的大勞働祭』には二つの歴史的に特筆すべき象徴があつた。(一)それに依つて勞働の國際的崇拜がいつの間にか國民的に乘り替つたこと、(二)勞働の神聖化が『國民の爲めにする』倫理的意義を持つて來たこと。從つてこの二つに依つて次に來るべき『國民皆勞働』の徴集令の發布に實際的なイデオロギーの準備が出來た形であり得る。

二

ドイツ人は、元來からして勤勉比類なき勞働の民である。勞働を人生の本質的な內容と、無意識的に感じ得る人間である。そこに人生行旅の意義と幸福とを見、從つてそこに數へ切れぬ程の道德的格言を生み、そのために寧ろ英佛等の西歐の諸國民に、兼々嘲笑されてゐた程である。從づて今迄にも斯樣なドイツの中には國民的勞働に關して眞面目に論議する者多く、英佛人の輕蔑する Made in Germany を頂門の一針として量より質への勞働に精進し、民族的名聲の恢復に努める傾向は決して尠くなかつた。然るにヒツトラアは更に一歩進んで斯樣に勤勉な民族の勞働に對し、新しい心理を醱酵させたのだ。勞働を國家の爲めにする『エトス』を高め、團體に對する個人の國民的並に社會的義務に祭り上げて了つたのだ。そこに得も言へぬ巧妙な新味が橫はる。

その邊の消息を理解するためには先づ以てナチスの主張する『共同體』と『社會』との區別からして判然決めてかゝらねばならぬ。『社會』とは、その上に啓蒙哲學の國家理論を載せてゐる基礎觀念であり、從つて斯樣な意味に於ける社會としての國家は單に、反目し合ふ個人間の利益を調和融合させるに必要な法的施設に過ぎないものだといふ。だから、資本主義從つて自由主義の發達の爲めに、又その發達に因りて、啓蒙哲學の特に固守する『私益の自然的調和』なる信條は

遂に社會的國家をたゞの警察機關に做らへ得らるるやうにさへなつたので、それに反して『共同體』を國家的な表現の形にする觀念に在りては、それは一つの『國民性』の全部を指すものである。言換へると個人利益の和解に非ずして共同體國家の目的は ad majorem gloriam nationis に從つて個々人格の完成を期するにあると。（ゲルハルカ・チム）

三

斯かる見地より『共同體』と『社會』を區別することは、取りも直ほさず『ドイツ理想主義』（カント、フイヒテ、ヘーゲル等）と英米流の『功利主義』（ルツソオ、ホツブス、アダム・スミス等）との間に著しい差等を設け、同時に今日の『マルキシズム』と『國民社會主義』との二個の觀念の間にも判斷りした線を引かせることゝなる。

それは、かの唯物史觀と階級爭鬪的イデオロギーの哲學的な培養の苗床が、何れも『功利主義』であつたこと、又『國民社會主義』なる觀念はドイツ社會哲學（古プロイセン的說明に基くカントの範疇的示命）なくしては想ひ浮べられない』（ゲルハルト・チム）といふ事情を合せ考へるとき

益々明瞭になつて來る。さればドイツに於てはマルキシズムが現に自國生れのユダヤ人に據りて創始され、且つ相當の勢を以て國内を風靡する如き觀を呈したにも拘らず、何故永期に亘る政治的支配となり得なかつたかの理由は、要する社會主義が資本主義（從つて自由主義）と同一の哲學的根底に培はれてゐる――即ち『功利主義』を共同の立脚地としてゐる――といふ事實を物語るものでなければならぬ。『功利主義』は要するに恐しく非科學的の獨斷である。從つてマルクスの『科學的』社會主義――何故なら『自然的發展』の法則に依り條件づけられた學問だから『科學的』だといふ――の認識の出發的からして階級的イデオロギーといふ實踐的歸結に到達し、詳しく言へば勞働階級に依る『搾取者の搾取』が全會社の利益なりといふ結論に到達するものとすれば、明かに憧憬の社會學者たりしルツソオ若くは共他『科學的社會主義』の前驅たりしユートピアの人々の空中に描かれし樓閣の姿がふわりとそこに浮んでゐる。といふ言ひ方が少し拙いならもつと具體的に、例へべマルクスの言葉に忠ならんと欲して一切の努力を集中して見はしたが結局この『理想』に恥をかゝせて了つたあのソヴイエート聯邦のことを考へてみるがいゝ。ソヴイエート聯邦は敢て不眞面目ぢやなかつた。彼女の遺口には罪がない。マルクスの正統な遺髮を傳

へて、その唯物史觀の說明に應はしき又必要なる『利益』との結合（ロシアの場合では勞働者階級の獨裁）を一生懸命氣を注けて實行してみたのだ……しつゝあるのだ……さうして何時までそれを續けることであらう。それだのに——

要するにマルキシズムを試驗的に植え付けてみる苗床としてのロシアは餘りに土地が磽确過ぎた。その意味に於てドイツも亦社會主義の『理想』の花を咲かせ得るに適當な沃地ではない。それは矢張り英佛の室に育てらるべからざる人生觀である。然るにそれが不思議にも英佛の溫室に現れ旨く育つてゐないと言ふ事實だけで以て、英佛が獨露よりも、社會主義に不適當な土地であるとの證明とはならぬ。

四

マルキシズムの根が英佛流の啓蒙哲學思想の中に伸びてゐることからして、それは必然的に經濟上のリベラリズムとアナロギーを有することが想像され得る……

だからリベラリズムが利益の調和を信ずるものとすれば、マルキシズムは勞働收益の比較を可

能ならしむべき勞働力の『同形體化』に依りてその具體的な實現に努力するものである。力點の置方が少し異ふとは言へ、落ちれば同じ豁川の水だ。さればこそマルキシズムが存在を主張するためには資本主義を制限してはならぬことになる。勿論資本主義の運用者が個人であるか、社會共同であるかの問題は別として、資本主義それ自身を退化させたり、防害したりするのでは今度はマルキシズム自身の立場がなくなる。否寧ろ反對に『自然の決定』に任せ、それが行詰るまで爛熟せしむるの態度を執るのだ。

斯くして、リベラリズムが個人の最大幸福の目的を相互に背反する物質的利益の自然的な調和に期待するのと同樣に、マルキシズムも亦この大衆のための幸福狀態を生產の共有化に依つて組織しやうといふのだ。所謂組織化した調和を望むのだ。してみるとこの兩教理の上には共にトマス・ホツブスの提唱した國家契約の擬體が朦朧と姿を現はしてゐる……人間の單なる社會的集團生活のみが茫然と前提になつてゐる。

五

所がそれに較べるとドイツの國民社會主義はその出發がまるで異ふ。それはドイツ理想主義及プロイセン主義とに結び付いたものであり、從つて特にその國家觀に於てはリベラリズム並にマルキシズムとは一向緣も由もない。

國民社會主義的な國家は結局在らゆる人民僚團の共同體でなくてはならぬといふ。この人間の集合生活中の最高形式たる共同體がドイツの國民的社會主義にとりては最高の目的である。そしてその目的に對して經濟的な社會秩序の如きは單に手段の一つに過ぎないものであり、敢てマルクスに於けるが如く究極目的ではあり得ない。言ひ換へると生活物質的な條件を均等にするのではなくて、寧ろ個體の能力及特徵に應ずる不平等が共同體の自然的基礎を構成する——但し共同體のために個人の人格を發達させる各人の平等な義務の存することは、蓋しその道德的前提をなすものである。故にドイツの社會主義では一方マルキシズムが單に物質的觀念しか與へない所の勞働（然も一切の勞働）に一つの創造的意義を賦與してゐる。例ばドイツの國民經濟學者ローレンツ・フォン・シュタインはその哲學に於て『勞働に依りて構成された人格』と言つてゐる如きは正しくこの謂である。

五

かるが故にドイツ流の社會主義は私有財産制を認める。然しそれは嚴格に國權の支配圈下に屬し、同時に共同體の要求に應じて利用され得る範圍でなければならぬ。

だから第一、單に生存の手段としての勞働を保護する許りではなくつて、共同體の爲めにする人格宗成を標準にして勞働を保護する譯である。そこには勞働を求むる權利があると共に勞働すべき義務が横はる！　この權利義務は今日の國民社會主義的國家に於て斷然一個の新しい意義を有するものであつて――（從つてその政策は（一）失業者の解消と（二）勞働の强制徵集との形に現はれて來たのは當然の結果であるが）――更にその意義は單に國民の經濟生活のみならず文化生活にも擴充されるやうな形で――（從つて政策的にはユダヤ人の排斥と新國民文化再興への敎育となつて現はれてゐる）――着々として國權を行使されつゝあるのだ。

嘗てローレンツ・フォン・シュタインは『個性の勞働が世界の生成である』と言つた。然しながらこの新しい國家の峻嚴な監督の下に非社會的非經濟的な企業者主義が篩にかゝつて殘つた

『個性』が新くい共同體の範圍内でその發展の自由を保證さるゝ場合に於ては、右の言葉は更に一個の新しい國民的及社會的意義を持つやうになり、從つて次の時代に於ける創造的且倫理的な信仰の說明標語に應はしいものとなり得るであらう。

五月一日の『國民的勞働祭』は一個のお祭騷ぎではあつたが、同時に右のやうな意味に於ける大きなシンボルとなつたのだ。それは確かに歷史の劃期的出來事と見て差閊がない。

宣傳行政の最高府

——Reichsminister für Volksaufklärung und Propaganda!——

直譯したら『國民啓蒙及プロパガンダ大臣』とでもなるだらう。或はそんな生硬な日本語は無いのかも知れぬ。

それとも『文部大臣』といつたら、我々の頭にはもつとピンと來やすい。その大體文部大臣に近い職能を中心とする所謂國民啓蒙及プロパガンダ大臣なるものに、ヒツトラアの片腕たるゴエベルス博士が新しく就任したのである（三月十四日）。

由來ドイツでは、教育に關する事務の一切は地方分權を代表する各聯邦政府の鞅掌する所であつた。果然ナチスの時代となつて、地方分權制度は形式的にもその姿を匿し中央集權の統一國家が出現したので『ライヒ』全體の教化に關する行政には、矢張り中央の最高官廳が必要となつた譯ではある。その點で、ドイツに『ライヒ』全體を通じての文部省が出來たとしても別に『震

『感』に値する大事件でもなさ相に見える。

然るにこの文部省は、我等の概念する文部省ぢやないのだ。それは一種獨特の職能を持つてゐる。換言すればナチスのイデオロギーを宣傳强制する最高唯一の機關である。凡て大戰後の列强政府中プロパガンダを輕視するものはない。一國の外交にしろ、經濟問題にしろ、尠くとも政策上の國家意思を遂行しやうと思ふ場合には舊式な密室の綠卓や、黃白に依るトラチショナルな交渉許りでなく、必ず新聞その他一般の輿論を動かすに足りる宣傳の機關を備へ付けるのを普通としてゐる。國際會議は言ふまでもなく、有力な一國の官廳內でも新聞係り若くは情報局を置かないでは圓滿な仕事が出來る筈はないから。

斯樣な意味に於ける宣傳政策に重大な價値を置く所の國民社會黨の政府は、各官廳の宣傳部を中央に統一する樣な內閣の一省を設けて大規模の活動を許すことゝしたのである。或はこれもナチスの創意ではないかも知れぬ。既に、ソヰエト・ロシアが藝術省を設けてルナチヤルスキイをしてソヰエト・イデオロギーを普及せしめた如きはナチスの據つて採用した型であつたかも知れぬ。然し、ボリシェヰキがそのイデオロギーを强制的に一般化させる手段として文化政策的と

いふよりも、寧ろ、純政治的の立場からして先づ警察力により反革命論者の脊髓を叩き毀はしたものである。換言すればルナチヤルスキイ等の藝術省がイデオロギーの種を蒔き付る以前に內務行政中の暴力要素たるC・K若くはG・P・Uが拳銃と、パラグラフに依る恐嚇政策を强行して地馴らしをやり若くは苗床を作つてくれてあつた。然るに、ドイツに於ける國民啓蒙及プロパガンダ省は權兵衛の種蒔きから鴉逐ひの作用は勿論、イデオロギーの種蒔に適する地馴らし行爲から、苗床を作る仕事まで一切敢行しやうといふのである。言ひ換へると藝術省にG・P・Uの活動をも併用させる仕組となつてゐる。尤もゴエベルスの官廳がG・P・Uみたいにまさか容疑者の背後から、拳銃の口金を引いたり、薄暗い地窖の部屋で冥途行きの旅行免狀を渡したりする遣口はしないだらう。それでも、この官廳は單なる闡明教化の仕事以外に文化上の異端者と認めらるゝ者の、官職を褫奪し、又その社會的な地位を基礎から叩き毀すための一切のイントリーグを企劃するものである。排猶太人のボイコットにしろ、知名の學者の追放にしろ、焚書のデモにしろ、要するに、ナチスの横紙破りの『暴擧』として世人の眼にキラ〳〵光る一切のセンセーショナルな行爲はこの官廳の一擧手一投足に依つて搖き起るのである！

× × × × ×

ゴエベルス博士を主務大臣とするこの『國民啓蒙及プロパガンダ省』はその職能を左の五部に分つてゐる。曰く、――(一)ラヂオ局、(二)新聞雜誌局、(三)積極的宣傳局、(四)フィルム及演劇局、(五)國民教化局――

扨て、この官廳が新しく店を開いた翌日新就任大臣ゴエベルスは、ベルリン市内の新聞記者の主なる代表者を招待し、お手のもの〻披露的宣傳に及んだ。その時の演說はこの主務省の任務とメトーデを紹介するものであり、旁々ナチスの文化に對する、意見一般を窺ふに足りると思ふから多少の煩冗を厭はず、玆に擧げてみること〻しやう。(ドイツェ・アルゲマイネ・ツアイツング紙三月十五日所載)――

『……我國には今日「國民革命」が完成しました。これは一個の事實である。本來なら、尙ほ數十年の永きに亘るべき鴻業が、今日こんな事實になつて現はれたことはお互ひに同慶の悅びに堪へませぬ。この事實は最早や永遠に後戻しの出來ない運命であるから、各人はこれに共鳴し同情するか若くは、これに感心しないか、何れにしても今や判然自己を清算しなければならぬ時代

となりました。今諸君に御紹介致します當プロパガンダ省の制度の中には各個人の革命的政府の行爲が横はつてゐる。國民は最早や自己を拋擲して安閑としてはゐられないし、政府も今迄のやうに人民から切離されてあるべきでない。今日の政府は言葉の本格的な意味に於ける人民政府であります。だから人民の意思を尊重することには今迄と少しも違つた所はないが、たゞ在來と異る點はその意思を是が非でも押し通してこれを眞個に實現するといふ點にある。ある人々の批評する如く、この政府が反動的でありとするなら或は寧ろ昔の僕婢制度若くはかの三級選擧法でも採用すれば宜かつた……要するに、さう言ふ制度でも採らうと思へば採れないことはなかつたが我々は敢てそのやうな反動的な方式を避けたのである。否政府は人民に歸すべきもの一切を與へんとする用意を持つてゐる。そして不肖本大臣の任務は斯かる政府と人民との間の意思を疎通せしむる聯絡係りとなる事であります。御承知の通り、最近我國の中央政府と地方政府との間には命令系統を一切且つ同時に實行する所謂 Gleichschaltung の法律が出てゐますが、この一絲紊れざる Gleichschaltung の精神はまた政府と人民全體との間の契機ともならねばならぬと思ふ。これには、從來の政治樣式に基き、僅かに國會で五十二%の多數を擁するといふやうで

は何事も出來る筈がない。過半數を基礎とするやうな政治組織ではいつまで經つても政府が斷乎たる政策を遂行する可能性がないからであります……

『……そこで私共のプロパガンダの任務は政府の背後に國民全體を立たせることへの準備に在つて存するのである。今日の政府は自分が遂行しやうと決心したことは一歩たりとも後へは退かぬ覺悟をきめてゐる。それを强行する力は然し舊式の銃劍の力ぢやない。國民全體を味方につけた力である。だから殘りの四十八%の反對分子を恐嚇しやうとは思はぬが、怎うかしてこれを五十二%に合併させやうとの出來る丈けの努力に腐心する結果、このプロパガンダ省が成立した譯であります。從つて、この努力は暗默のうちに又は秘密に遂行するのではない、何故そんな努力をするかを、公明正大に國民に覺らせなければならぬ……卽ち闡明しなければならぬ。

『何よりもこの國民啓蒙及プロパガンダ省といふ名前がこの官廳の意義と任務とをよく現はしてゐましやう。勿論今迄の間違つた制度のために永久に我が本來のドイツ人の意識に反しておりながら、國民のやうな顏をしてゐる分子は全然我々には關係のないものとして取扱ふ——卽ちそんな分子は將來國民としては取扱はない積りであるが、眞個にドイツ人としての國民の中にも新

政府の方針を支持しないで冷淡な立場にゐるのがあることは遺憾ながら事實であります。これ等の人々に對して、新政府は今迄のやうに無意味な妥協や都合はしないで、寧ろ積極的にイデーの方面から彼等を新政府の味方につけるやうに啓蒙し指導して行くやうに働きかけて見る積りである。それは不可能ではありません。國民社會主義の運動にはそれだけの力があつたればこそ今迄にもあの小さな中心から膨脹して、今日の大きな勢力となつて來たのである。我々は今迄の經驗と確信とに依つて、この大きな環を更に國民全體に到る迄擴大してみやうといふのであります。

そして、幸なことには今迄この國民社會主義の、プロパガンダに從軍してゐた主要な人物は、今日大抵政權の廟堂に立つてゐるのであるから、今迄苦心慘澹の經驗と確信とを以て、その勢力を國家のために有要に使はうとしてゐるのである。

『……世人中には誤解して我々はこれを武斷政治に依つて强行するかのやうに思つてゐるものがあるやうです。然しそれは飛んでもない間違だ。我國の軍隊卽ち Reichswehr を强くすることは我々本來の使命としてはゐるが、それはドイツの國境の守りの必要さからである。軍隊の力で內政上の抑壓を企圖するが如き愚劣な考へは、國民社會主義の唯れ一人として抱いておりはしない

苦です。從つて、內政的に新政府が武器として執らうと思ふメトーデは、(一)下より來る國民の意思と(二)上より來る國家の力との二つに過ぎない。この武器を以て鬪はうと決心してゐる際、これに反抗しやうと思つてもそれは無益です。反對の政黨政派が、これ以外の煩鎖な理論や微弱な實行力を以て、まだ他に方法があるかのやうな饒舌を逞うしてみても、今日政權を握つてゐる一粒選りの鬪士連は、彼等の無能をよく知つてゐます。下手な理論を捏ねてみても、そんな理論は百も承知してゐて別に新しいとは考へません。要するに反抗は無意義です。

『……プロパガンダの仕事は在來もやつてゐたといふ。然し是迄の政府の宣傳機關は金を遣つて名前だけでありました。效果が擧やうにも擧りやうがない……何故なら第一國家に統一がとれてゐなくつて同じ政府部內でも勝手な熱が吹けるやうになつてゐた、そして、一つの議論は——それがどんなに立派なものであつても——反對しやうと思へば、いくらでも反對の議論が立ち得るものである。然るに、國民の意思を遂行するための議論は今迄單に議論に花を咲せつばなしであるだけで、それを國家の力に依つて撤底させやうといふ機關は缺けてゐた。その點でビスマルク時代からの缺點が昨日のドイツまで依然として繼承された譯である……

『……そこで、我々は第一に是等宣傳の機關を中央に統一集中し政府の一切の政策そのものと對等させ平行させることに氣がつきました。次にそういふ機關が出來たとすれば、これは政治機構の神經系統であるから、なるべく現代人の本能に直接に共鳴し得るやうに極めてモダーンな樣式を採つたものでなければならぬといふことをも考へました。だから本省は今後宣傳は必要な——國民の心理を躍らせるやうな——最新式の技術方法なら卒先して、採用する積りであります。

『……扨て右の主旨に基いて、新設された「國民啓蒙及プロパガンダ省」はその職能の分掌に基いて五部の局から成立すること、なつた。今その各局の仕事を大體に於て說明すると斯うである。第一のラヂオ局、これは現代人の文化生活の一大特徵たるテンポに適應せしむる大切な仕事を引受けてゐる。ラヂオの急速な發達は、我がドイツ國民の技術的文化の方面に於ける一大誇衿であるが、我々はまだ〳〵現狀を以て、滿足するものでない。近い將來に於て、我々は純國產の高級機械を以て、なほ數百萬のラヂオ聽取加入者を勸誘する積りであります。何れそのうちにドイツは電波に依つて聲や物音を聽くだけのラヂオ國ではなくつて遠離の物象を電送映畫に依つて視ることのできる一番進步した國となることでありましやう。今にドイツ國民は特種の條件に基

いて單に少數の人々にのみ許されてゐる音と姿とに自分の家にゐながら接することが出來るやうになる。例へば國會に於ける宰相の施政方針とか、議事日程の有樣とか、報告討議とかいふやうな現象は普選に均霑する國民一般が親しみを持たなければならぬものであるが、それかとてドイツ國民全體が悉くベルリン國會の傍聽席へ一度に詰めかけるといふことは事實上不能である　然るに今後ラヂオ局は國民全體をして家に居ながらにして、國會に坐つてゐると同樣の效果あらしめるやうな努力を拂つてもつと國民に政府の仕事に關し、即ち國民政治一般に關し擧國一致の關心を持たせるやうにしたいと思つてゐる……

『……次に新聞局。これは單なる出版物の檢閲局ではない。世に新たに、新聞局が出來ると出版物の檢閲が、益々嚴岐になつてくるだらうと心配するものがあるが私は出版物の發行禁止や記事差止の如きは正常な狀態とも、理想的狀態とも考へてゐません。今日は、國民革命草創の時代であるから、多少今迄と異つたやうな不正常な現象が目につくかもしれないが……然し同時に我々のベルリンに於ける機關紙「アングリッフ」の如きは、在來の自由主義政府(?)に依つて十五回も禁止の厄に逢つたといふ事情も併せ考へて貰ひたい……要するに、今後の新聞雜誌は國民

を善導する目的で正々堂々と我々政府の遣口を批評することは一向差閊へがない。たゞそれに依つて國民を政府の手から引離して非國民の態度に導かんと欲するが如き毒心を藏することを觀破した場合はどんな彈壓が來るかも知れぬといふことだけは覺悟してゐて貰ひたい……

『……何れにしても今日は所謂ドイツ新文化建設の直前に於ける、準備の時代である。所謂大掃除の時代である。何か一つ思切つて、大きな仕事をしやうと決心した以上は、その道筋を清くするための準備としての掃清行爲が必要である。それは些細な報復行爲ではない。大きな目的のために、細瑕を顧みざる果斷の表はれであります。諸君もその點を諒承されて新政府の——同時にこの新しく開かれた省——のために同情と理解と、更に進んでは御協力をお願ひする次第であります……』

以上が、ヒツトラアの右腕たる青年政客ゴエベルス君の意見の內容であつた。扨てこれからドイツにどんな新しい國民文化が生れるか？　そしてその出生に對する產婆役としての國民啓蒙及プロパガンダ省なる奇妙な施設は實際どんな道筋を辿つて進むであらうか、面白い將來でゞはある。

『突擊隊』のことゞも

一

――諸君は國民革命の禁衛であつた。更にこれよりも我等が、革命の勝利に對する實證者でなければならぬ……ドイツの若き人々の教育は一に我々の、否諸君の双肩にかゝつてゐる。恰も武器で固めた國家の正規軍と同樣に、諸君は實際ドイツ國民の政治的な意思の武裝者だ。自重せよ――とは宰相大アドルフが、去る五月の六日に北獨キールで催されたナチス青年團體S・A及S・S大會に於ける獅子吼であつた。

S・A（Sturmabteilung）は通常邦語で『突擊隊』と譯されてゐるものであるが、S・S（Schutzstaffel）に到つては定まつた譯語も見當らぬやうだ！　從つてその內容の如きも殆ど紹介されてゐないやうに思ふ。それに最近に到つて、是等ヒツトラア擁護の青年團體に對立若くは並行して存

在してゐた『鐵兜團』(Stahlhelm、同志間の略稱は(S・t)が團長ゼルテの高壓的命令で解消した上、ヒットラア派の青年運動團體に合併して了つたのであるから、S・AもS・Sもこの際舊態を捨てゝ相當な再組織的改變を見たのである。組織許りではない。今迄のS・A及S・Sはヒットラアの護衛軍として政敵たる青年團體(例へば共和派の『ライヒスバンナア』又は共產黨直屬の『赤色前線鬪士』等)と抗爭しつゝ、國民社會黨に政權を掌握させるまでの一種のデモンスツラチヴな暴力であつた。然るに今日では彼等の大願は成就してナチスは政權の樞機を握り、同時に不俱戴天の敵たる『ライヒスバンナア』も『赤色前線鬪士』も雲霧消散して了つたので、是等ヒットラアの制服團體はその存在の目的が昨日とは少し變つて來た譯である。今その次第を辿つて、一體S・AとかS・Sと呼ばるゝものは如何なる內容と本質を備へたものであるかを一應說明して置くことにする。

二

由來、今迄に十二年の歲月を閱して、急激な發達の跡を追ひつゝあるアドルフ・ヒットラアの

國民社會主義運動は、始めからS・A即ち『突擊隊』の盛衰と全然切つても切れぬ關係に立つてゐる。まるで影の形に添ふが如き存在である。S・Aの一隊長はそれを說明して斯う言つてゐる。これは國民社會黨の爭鬪を擔當する團體であり、同時にそれを一見しただけで國民社會主義運動全體の躍如たる銳氣と意力とを、一番明瞭に具體化したものだ』（五月八日フォシツシエ・ツアイツング紙朝刊）

成程この團體が十二年の奮鬪を續け、あらゆる困難と迫害との經驗を經た、一個の革命的な、然し純然たる政治運動の主體であることは、一九三二年三月までの過ぎ來し方を檢討してみてもよく分る。普通に日本では『突擊隊』といへば、單に頭の惡い持兇器不良少年の一團か、然らずんば、舊式の三多摩壯士みたいな者を想像するやうだ。中に衒學的な連中は、フランス大革命のテルミドール事變を轉期として起つたあの不規律な撲り込み團『ジュネス・ドレー』あたりの出來損ひだらうと推定する向もある。要するにS・Aの判然した概念は日本人のみならず何處の外國人の頭にも能く這入つてゐないやうである。さればにや『認識不足』の大宗家たるジュネーヴの聯盟あたりではS・Aの實體が鵺か怪物のやうに取扱はれてゐる。最近の軍縮會議に於ても——

これは純然たるドイツの軍隊だ――と妙な見當の外れた空論を闘はせてゐる始末だ。

然るに、國民社會主義運動に對するヒットラアの始めての政綱的な宣言と、最近のキールに於ける演說との間には一定不變の聯絡があつて、そして是等の言葉と、今迄の實際行動とは怎う考へてもきちんと能く合つてゐるのである。例へばヒットラアの著『我が戰ひ』の第二部の中でS・Aの任務は次のやうな形で說明されてゐる――

『この突擊隊の內部構成に對する指導原理としては、何を措いても先づこの團體があらゆる體育の目的に叶ふと共に、國民社會主義觀念の確固不拔たる代表者となり、且つ完全無類の規律を支持しやうといふ心掛けが必要だ。同時に決して國防の軍隊組織であつてはならぬし、又陰に隱れた秘密組織であつても不可い……彼等の責務は世に謂ふ所の國防團體とは全く異つた領域に在つて存する。』

だからS・Aの具體的な仕事は、その始めは單に集會場の警護だけであつたといつてもいゝ。それは事實當面の必要から起つたことなのだ。その始め少數の國民社會主義が人知れぬ陋屋の密室に鳩首して、こそ〳〵と自黨の進むべき方策を論議してゐる矢先、屋外では革命勞働者や共產

黨員の雲霞の如きデモの行列が景氣のいゝ雄叫びの聲を放つてゐる。一介の保守反動の團體が些やかな集會を催してゐることなどが、外に洩れたら、何時荒くれた赤色の壯士が撲り込みに闖入するか知れたものではない。そして今一つは、時の『戰敗政府』は勝ち誇つた聯合國側の命令には、鞠々如として何から何まで御無理御尤もと頭を下げてゐる矢先なので——今日のやうにドイツ人の頭の高くなつた狀勢から回顧するとまるで夢のやうな氣がするが——事實聯合國から『反動團體の取締りをもつと具體的に嚴重にしろ！』と移牒されると、共和國の保安警察は、頭の頂邊から足の爪先まで重く武裝して、極右翼の陰謀顚覆に忠勤を擢でる有樣であつた。さういふ物凄い時代に事を起さうといふ團體のことであるから、何よりも血氣盛んな青年を訓練して、集會所の內外を警備護衛させることが、一番重要であつたのは無理もないことである。換言すればS・Aの發生は消極的な『自衞』の必要に基いたものだ。

三

然るに、國民社會黨の運動が稍々正面に現はれて來るやうになつて、この消極的な『自衞の必

要』から案出された黨の護衛團は、次第に積極的な黨の『示威』目的に使用される傾向を持つて來た。時は、恰ど宣傳と示威とを中心として政爭を渦卷かせてゐる矢先である。中央の政府側は言はずもがな、左翼の諸在野黨は何れも街頭の宣傳戰と示威戰とを以て、政權獲得の雌雄を決しやうといふ場合だ。國民社會黨も亦彼等の例に倣ひ——卽ち共和派の示威機關『ライヒスバンナア』及び共產黨の示威機關『赤色戰線鬪士』の範に則つて——自分の護衛團を街頭のデモンストレーションに應用してみたのであるが、この團體は今迄黨首ヒツトラアに對する個人的な信賴崇敬と、難かしい理論に據らないで單なる友情に基く狂信的な愛國心及び驚くべき規律とに依つて連續的に豫期以上の効果を擧げ得たのである。その第一の成功は一九二二年八月末ミュンヘンに於ける、『共和國擁護法』に反對する橫紙破りのデモ敢行であり、第二の成功は同年十月『ドイツの日』を祝祭するためのコーブルヒ市への進擊であり、第三の成功は一九二三年の春から夏にかけての佛軍のルーア占領に敵對する數次の執拗な抗爭であつた。その何れもが戰敗の結果久しく魂の屈辱に傷づいて鉛を呑まされたやうな憂鬱に沈默してゐるドイツ一般の市民に何となく未賴もしい希望の篝火を投げたものである。もつと以前卽ち一九二一年の十一月、ヒツトラアがミ

ユンヘンの『ホーフブロイハウス』でまだ前後の見境もなく早まつた一揆を計畫した時に、このS・Aは既に『護衛』の域から『示威』の域に移らうとしてゐたけれど、その時分はまだその目的を達する程訓練が旨く行屆いてゐなかつたので何となく幼稚で滑稽に見えたものであつた。然るにルーア戰の當時になると、もうS・Aの示威は押しも押されぬ堂々たるもので、どの團體の行列に較べても見劣りのしない堂々たる格式を備へて來たのである。それから以後のナチスのS・Aが行進するといへば、何時でも『街頭占領』の成果を擧げないことゝては無くなつた。勿論それまでに共産黨側の青年達と衝突して隨分街頭に血潮は流してゐる。可成り澤山な人も殺した……又殺されもした。そして重ね〳〵の經驗でその組織は益々完成の域に近づいた。

それでは一體S・Aの內部組織はどうなつてゐるか？　その始めは割合混頓たるものであつたらしい。今日のやうな一絲紊れざる整然の組織となつたのは一九二五年以後のことである。卽ち同年、黨の幹部のグレゴール・シュトラツサアが黨の大會に對して、斯樣な鬪爭團體の訓練と統制とは、怎うしても軍隊に關係のある專門家が擔任しなければ、駄目であるといふ獻策をしたのが動機となつて、黨の幹部は義勇兵團の退職陸軍大尉フォン・プェツファアといふ男をミュンヘン

に招聘し、S・Aの新編成に從事させたのである。プエッフアは歐洲大戰に於ても、又ルーア戰に於ても勇名を轟かせた立派な將校で、それに頭腦も餘程明晰は人物であつたと見える。

斯くして一九三〇年頃のS・Aの組織を見ると、もうそこには參謀長（Stabcher）とか、總監（General-Inspekteur）とか、又は工廠長（Zeugmeister）とかの名前が見える。然し宗教傳道の救世軍が大將とか、中將とかの軍隊式の肩書を持つてゐると同じやうに、このS・Aも單に名前の上で軍隊組織を採用してゐるといふだけで、飽迄も政治運動團體であり、從つて勿論國家固有の陸海軍には無關係な存在である。

S・Aの最高指揮者は以前も今も變ることなく國民社會黨首のヒツトラアだ。然しS・Aの實際の方針を決定する者はヒツトラアの帷幕に參する『參謀長』であつて、今日では退役中佐ロエームといふ人がこの『參謀長』となつてゐる。そして一九三二年の『國民社會黨年鑑』に發表された所に據ると、褐色制服の突擊軍は『旗』と稱し一旗は二千名以上の『突擊者』、百名の自動車突擊者、五十名の『管弦隊』、二百名の『單樂隊』より成立し、そして斯樣な『旗』軍の數は今日實に百二十を數へる。このS・Aには又例のS・S卽ち『擁護隊』（Schützstaffel）も必ず横

についてゐる、S・SはS・Aの方が消極的なデモの仕事に從事する際、寧ろ消極的な保安、衛生、警護等に任ずる譯であつて、S・Aをナチスの軍隊に例へると、S・Sの方は寧ろその警察に該當することゝなる。その指導者兼組織者はヒンムラァといふ人物だ。

四

要するにS・Aも、S・Sも、政治運動に携はるナチスの大衆が、軍隊組織化に依つて規律立てられてゐる現象に過ぎないのであつて、決してドイツの軍隊卽ち國防軍ではない。國防軍は政治に超然たる武裝團體であるが、S・A及S・Sはこれに參加する各人が、一粒選りの政治抗爭者であるとの自覺に基いて集つた非武裝の團體に過ぎない。

然し、その形式に於ては軍隊に倣つた組織となつてゐるために、普通に軍隊で區分されてゐる師旅聯大中小隊の編成に似たやうな制度を採用してゐる。詳しくいふと、S・Aの一番小さい單位を、『班』といふ。一班は八名乃至十五名より成立する。この班が、二つか三つ集つたものを『部隊』といふ。部隊が澤山集つて前に述べた『突擊』が構成される。突擊が四つか五つか集つ

たものを、『突撃制』と稱し、人數でいへば約三百乃至六百名位が包括されてゐることになつてゐる。それが前に述べた『旗』となり、『下團』となり、更に、『上團』となつて最高部にはヒツトラアが『最高S・A指揮者』の地位に坐り、その傍にロエームが『參謀長』として嚴めしく控えてゐる譯だ。S・Sの編成はS・Aほど几帳面には往かぬが、それでも大體これに似たり寄つたりの形になつてゐるといふ。

ヒツトラアの世の中になつて以來、S・A及S・Sの團體に所屬する者は——ソヴィエトの青年共產黨員若くは、イタリアの黑シヤツ團員となると同樣に——非常な特權と名譽とを得る譯であるから、今後はその加入が非常に難かしいことになるだらう。今後の規則では幼年組から少年組と錬え上げた後、『突撃』候補者たることが認められて後、嚴格な宣誓を經て一人前の『突撃』となることが出來る譯だ。幼年組は七歲より十四歲までの男童群であつて、これを『幼國民』と稱へ、少年組は十四歲より十七歲までの四ケ年間で、これに『ヒツトラア少年』の名が與へられてゐる。

前にも繰返したやうに突撃隊をドイツの軍人と見ることは出來ない。軍人と突撃隊員との睨ん

でゐる目標がまるで違つてゐるからである。強てそれが似てゐる所を探してみれば他でもない。鐵の如き規律と灼熱の如き鬪爭心と！

ヒツトラアの言葉――『我等の要せし又要するは數百名の燥暴なる陰謀者に非ずして我等の「世界觀」のために身命を賭する數十萬の狂信的鬪士である。』その言葉の如く今日斯かる鬪士は實にドイツ正規軍の三倍の約三十萬を數へてゐる。最近の國民社會黨年鑑には斯う出てゐる――

『不秩序はS・Aの間に安座する場所なし。その精神がこれを寛容し能はざるを以てなり。訓練と節操と責任感のみが一切を支配す』『ポケツトには一文も金を持つな……煙草が手に這入つたら同僚と一吸づゝ分けて吸へ……曰く簡素と友情に基く古代ドイツのイデアリズムへ！』

このやうな精神は一體何處から發生したであらうか？　困苦缺乏に堪え得る簡素の生活は今迄のドイツ青年に充分に經驗を積んで來た所だ。五年に亙る大戰の協同戰線と塹壕生活と、十四年に亘る戰勝國民の壓迫とは、國民相互の間に嘗て無かつた程の同民族的友情感を釀成した。是等の單純な情操が理論と、饒舌との塵埃の載積を拂ひのけて蟲乎と起ち上り、遙かに民族の『古りし良き日』を回顧し始めたのだ。彼等の眼はビスマルク時代を越えてそれよりも、もつと往古を

睥視してゐる。げに、ビスマルクの帝國にはまだ眞個の意味での『國民』が出來てゐなかつたのだ。そしてそれよりもずつと以前のフリードリヒ大王の治下に於ける『國民道德の國家』――其處に彼等の視線はピタと吸付けられてゐる。

焚書の夜

一

五月十一日。これはベルリン市の心臟部に起つた出來事のレポルタージュである――

學生の大衆示威運動……國民的意識より憎まれたる一切の文書を燒き拂ふのだといふ。學生許りでない。野次の取卷き連が物見高く街道に謂集したのは言ふを俟たない。

篠突く雨が降る。街道の濕れた闇夜だ。オラニエンブルグ街の奥まつたベルリン大學々生館の前にはもう人群りで文字通り立錐の餘地もない。そこにはもうナチスの黑表に載つた著者の書物を堆高く積み上げた數臺の貨物自動車が彼方此方と靜かに立つて……車體はけば〳〵しい標語を書き付けた小旗や布帛が、雨の音に翻翻の雫を滴らしてゐるやうだが、薄暗いので定かには見えない。

『おーい、ラツサルとエンゲルスとは燃さなくつても宜いんだとさ。その車に有るさうだから探してくれ』と怖しく背の高い學生の一人が叫ぶ。二三の者が聲に應じて車の踏臺に立ち乍ら書籍の三角塔の中腹を混ぜくり始めた。

九時から十時にかけて學生の群れには炬火が分配された。それが濟むと――十時五分だ、――

『突擊隊』の隊長と覺しき男の雨に濡れた命令の聲が響き渡る――

『氣を付けえ！　歩調を執つて――前へおい！』

前には劉喨たる樂隊それに續く徽章。とり〳〵の學生が長蛇の如くオラニエンブルグ門の方向さして曲り曲り行く。勿論その兩側には例の物見高いベルリン兒が外套の襟を立てゝ――そして折々眞中の學生行列を振り返り〳〵――物珍しさうにがや〳〵と從いて行く。

二

國立歌劇と講堂の建物との間の廣場……といへば尠くともあの大學へ出入りした程の日本の留學生などにも『あゝ彼處か』と誰れにでも頷かれる場所なんだが、その又廣場の名前を知つた人

はドイツ人にも極めて稀である。要するに『カイザア・ソランツョゼフ・プラツツ』と呼ばれる。

その廣場へは、もう宵の七時頃から雨具とり〳〵の見物人がぎつちり詰まづてゐた。噂さでは『焚書の式典』が正九時から其處で催されるといふのだから。

成程廣場の眞中へ持つていつて大きな丸太の薪が積み重ねられ、その周圍には七個の照明燈が物々しく用意されてゐる。書物を燒くと同時に電氣の光りで景氣をつけて晝のやうな明るさを市の隅々まで投げ輝かさうとの企圖なんだらう。その邊を幹事らしい學生がもう大童になつて忙しさうに右往左往する。見物の野次はその廣場だけかと思つたら——驚いたことには、そこからあの廣い夜のウンタア・デン・リンデンを一杯に埋めて、眞黑な人影が遠くブランデンブルガア・トーア（あの普佛戰爭の勝利の宇頂天が嚴しく築造させた名譽の凱旋門）まで續いてゐるのだ。まるでカイザア時代の『民衆祭典』を想ひ出す光景ではある。戰敗の後十有餘年……その間今迄にドイツ人には絕えて嬉しい民間のお祭らしいお祭が無かつた。『在りし良き日』以降のドイツ人の魂の奥にはふさぎの蟲が巢くうて、たゞさへ笑ひの尠い民族の表情を憂鬱そのものに變へてゐたのだ。そこへ矢庭に『シュプレヒコーア！』の地聲が暗を衝いて底響きする。

シユプレヒコーア！　あれだけはドイツ民族獨特の詠歎だ。ドイツ語のみの誇り得る勝れた藝術だ。音樂でもない、詩でもない、劇の科白でもない。一人が起つて『我等いざ往かむ、丈夫の如く……何々の道を通して……』といふ風に感情を直截に吐露したあとで再び『我等いざ往かむ』といふ風に繰返へす、他の連中が一齊に起つて『我等いざ往かむ！』と大濤の崩るゝが如くこれに唱和する。それは別に古典の表現でなくてもいゝ。現代語でやつても矢張り人間の魂に爽かな震えを滲み通させるに足りる。だが英語やフランス語では奈何せんこのドイツ語の語尾の力强さのみが持つ獨特の味が出て來ないのだ。況やそれを日本の現代語などで模倣したらポリドールの蓄音機よりも齒の浮く怪物が出來上るだらうし、それかとて萬葉調でやつてみた所で……どうも考へたゞけで抱腹絶倒な姿が浮ぶ。これだけは矢張りドイツ語を語るドイツ國民のみに與へられた一種の民族藝術なんだらう。嘗ては共産黨の青年達が『藝術の夕べ』などを催す場合に必ずそれを利用してゐた。今ではナチスの若い者が盛んにこの詩とも、音樂とも、標語ともつかね『シユプレヒコーア！』を醉へるが如く連發してゐる……

三

その『シュプレヒコーア！』が遠方から響いて來ので、見物人は踵を浮かせつゝ、ざわ〳〵と氣色ばむでその聲の方におのがじし好奇の瞳を向け始めた。

學生の歩調をとつた行列は、みんな炬火を持つてゐる。列内の一學生が擔いだ長い棒の先に大きな白堊の胸像が突刺れて高く搖れて來る。見れば往年日本の猥褻を學問して喜ぶ連中からも神様の次の如く歡迎を受けたことのあるマグラス・ヒルシフェルド博士の頭だ。ナチスの學生が、『ヒルシフェルド性慾研究所』へ亂入し、そこに並んだ奇々怪々の液體やゴム製の珍品など手當り次第叩き毀した揚句、廊下の入口に立つてゐた『研究所創立者兼現所長』の胸像を引摺り下して、今それをこの行列で擔いで往くのだといふ。バスチーユ獄破壞の暴徒が守將ド・ロネーの首を槍の穗先に貫いて、血醒い行進を續けた往昔など想ひ出す者には、何處ともなき愴殺の氣が漂つてくる……！

行列は學生館を後に灼々と炬火の搖れる間に〳〵ルイーゼン街からカール街を經て國王廣場

――ついこの前まで共和國廣場と改名され、又最近に至つて舊名に復した廣場――に進んだ。その兩側には例のぞろ〳〵ついて行く野次馬を從へてゐるのは勿論だが、學生行列の後からも尙ほ學生ならぬ臨時の市民が樂隊の音に足並を揃へて、果しなく長々と本來の行列を延長させてゐる。

その行列が國王廣場から東へ曲つて正にブランデンブルグ門を潜らうとする時、そこに待つてゐた騎馬巡査の一隊が急に行列の先登を承つて戛々の蹄音を立て始めた。ウンタア・デン・リンデンに群がる人波を左右に分けて莊嚴な行列を無事に進行させやうといふのだらう。勿論行列の各一隊毎には例の書物を滿載し、標語の旗を翻した貨物自動車が重味のあるモーターの爆音を立てゝ凱旋門の壁をすれ〳〵に搖れ通るのだ。

設けの廣場に來た。薪の積重なつた火刑の地點を中心に七重八重の圓陣が作られる。四五名の選ばれた學生がガソリンの罐を抱へて來て內容物を薪の上にぶつかける。すると炬火を手にした圓陣はぐる〳〵その周圍を廻轉しながら各自の炬火をその上に放り拋げ――拋げ了つた者は尙ほも步調をとつた輪形の行進で順次に圓陣の外周へ出て行つて了ふ。

最初の炬火が二つ三つ拋げられた時から勿論渦高い薪はもう憤りの眞紅な炎を上げてゐる。大蛇の舌のやうにとろりと長い火の柱が時々天に冲するやう。周圍の人々の顏は灼熱に照り輝き……否それはもう彼方のオペラ劇場の屋根や此方の講堂の窓硝子にも赫々と反映してゐる。それがこのセンセーションを書入れに飛んで來てカメラを向けつゝ近寄る新聞記者や、フイルム製作技師のちら〳〵する動きと一緒に作用して何とも言へぬファンタスチックな情景を展げた。だが火力が餘り强くなつたので今はもう到底近寄られたものぢやない。汗だらけなレポータアも顏を眞紅に染めた學生も次第々々にたぢ〳〵とその圓陣を廣くさせた。

無論貨物自動車だつてその怖しい火焰の傍まで近付け難い。

『車は危險だから餘り近くまで行かないやうに――そこでいゝ――そこで停つていゝ！』

誰だか凛とした指令を與へた。その聲に應じて後方の車の一團から火焰の近くまで數名の學生が珠數のやうに行列し、車から下す書物の數々を順次に向ふに手渡して行く。車の上には『全ドイツ學生團』のベルリン・フランデンブルグ第十區幹事長グートヤールと呼ぶ背の高い金髮の大學生が大聲で一々『非獨逸的』な書物の題名とその著者の名前を讀み上げつゝ、先づその下に手

を差出してゐる男に交付してゐるのだ。特にナチスより厭がられてゐるやうな著者の名前が發音される毎に一同は聲を揃へて――いつもドイツ人が嫌惡の情を現す時には必ずさうするやうな、――『フフイーツ！』と合唱的に應答したり、又呪はしい口笛を吹いたりする。喧しいこと夥しい。就中怒號の渦を卷かせたのは次の名前の時であつた。曰く――『カール・マルクス』、『カウツキー』、『ハインリヒ・マン』、『ジグムンド・フロイド』、『エミール・ルドウイヒ』、『テオドル・ウオルフ』、『ゲオルク・ベルンハルト』、『アルフレト・ケア』、『ベータア・バンタア』、『エリヒ・マリア・レマルク』、『カール・フオン・オツシツキイ』――

四

そこへ飄然と、それとも豫定の如くか、例の宣傳相ゴエベルス博士の莞爾たる姿が現はれた。因に世間ではアメリカの惡口記者のノーチカスなどの印象を種にゴエベルスを『がに股の矮小な醜男』のやうに想像してゐるがそれは飛んでもない間違ひだ。ゴエベルス君は成程平均のドイツ人の中に立つと多少小男の方かも知れぬ。然し日本人の口から矮小な男とは義理にも言へない中

背なんだ。そして折目の正しい裾廣ズボンに、兩ボタンの背廣を着こなした姿は銀座をぶらついても明かにモダンボーイの部類には這入り得る。顏はダヴィドの描いたロベスピェールの横顏にそつくりで、まだ若いくせに老成した印象を與へる外、その烱々たる眼にも、鋭い線の鼻にも、横一文字に切れた唇にも、又それ等全體の調子から言つても映畫の淺岡君を想はせるやうな——だから決して醜男ぢやない！

このドイツ切つての人氣者の青年大臣がやをら身を挺し、炎々として燃ゆる『焚刑場』の少し離れた所に設けられた高臺に上つた。急霰の拍手だ。『ハイル！』

新聞記者は大周章に飛んで往つて、今、ゴェベルスの言はんと欲する一言隻句をも聽洩すまいと耳に挾んだステノグラフィー用の鉛筆を握つた。マレーネ・デートリヒの嗄聲をもつと男性化したやうな一種獨特の徹底した聲が時々火炎をビリ、……ビリ、と震はせる。曰く——

『……餘り極端に跋扈し過ぎたユダヤ的睿智主義は、見よ今この焰に燒かれて悲慘な終焉を告げた。憶へば一九一八年の暴擧以來唯物主義が我世顏に横行し、十四ケ年の久しきに亘つて我等がドイツ國を見る影もなく汚辱し蹂躙し、嘗ては我々の一番の誇りであつた至純なる學生の魂を

さへ濁らせやうとした……

『然し乍ら混濁の中にもなほ一縷の青泉の迸りが殘されてゐたのは何と幸福なことではなかつたか！　今、その清冽の水は洋々としてドイツの全土に漂つてゐる。ドイツ精神の明かなる復活だ。これに依つて今迄腐り水の革命が急速度に進んでゐたと同じテンポで以て、今度は至純なる國民革命が怖しい加速度で廻轉しつゝある。若しも革命が至純至誠である限り、これを抑制せんとする力は何處にもあり得ない。今迄ドイツが十四ケ年間惱み來りし荊棘の途は、あれは眞個の革命でも何でもなくつて單に經濟上、政治上、又は文化上の皮相の變化であつた。世に經濟革命とか、政治革命とか、文化革命とかいふ――そんなものは單に理論の技師の名題に過ぎずして眞の革命と稱するに足りない。我々の現に携つてゐる現象が、これが眞の革命である。曰く新しき世界觀の革命！

『斯くして世に謂ふ權力政治的な革命には精神的に準備が要る。その始めには一種のイデーがあり、そのイデーと權力と旨く調和する時、そこに變革の歷史的奇蹟が當然の如く擡頭する……

『而て我國に於けるこの若き革命的イデーの負擔者たり、前衛兵たり、白兵鬪士たりし者は、何

等の幸福ぞ、實に諸君等若き學生であつた。諸君は今迄我がドイツ國家を非國家たらしむる思想に反抗し、それ等の著者や思想家に尊敬を拒否する所の榮ある權利を主張して來たのであるが、それと同時に諸君には又今より國家の中に踏み止まり、この國家をして新しき光輝と權威を增さしむる精神的な業蹟に協助する所の譽ある義務が待つてゐる……

『革命者の前には「不可能」あるなし。無價値なるものを轉覆し打倒する力があると共に、必ずや價値あるものを構造し創設する力があらなくてはならぬ。今諸君が斷乎たる革命者の氣魄を示して精神的に腐り果てたる思想に未練を殘さず、其處に炎々として燃ゆる淨火に一切を燬燒する權利を主張さるる限り、これより諸君にはそれと同じく熾烈灼熱の大きな義務が諸君の頭上に覆ひ冠さつてゐるぞ。諸君にはそれを擔當する決心があるか？　曰く、是等の糞土の如き汚辱思想の代りに崇高なるドイツ精神を街の隅々にまで徹底宣布すること！

『僕はそれを信ずる。だからこそ諸君はこの蕭々の雨降りしきる眞夜中を選んで過去の醜穢を焰の舌に甜め盡させたのだ。强力なる偉力なる象徵である。世界に誇るべき象徵である。見よ、あの斷末魔にのた打ち廻りつゝ微かに震へる蒼白き惡魔の終焉を！　十一月革命は死んだ。地上

に平たく灰となつた。然し乍らこの燒け果てたがらくたと灰燼とを掻き分けて、新しい精神の不死鳥が生れ出で、勝利の翼を擴げて我がドイツ全土の上を覆ふであらう。親愛なる若き戰友諸士よ！　精神的にドイツ「國」の廣場に集まれ！　新しい旗幟を飜し、勞働と義務と責任を執れ！

終り。」

百雷の如き喝采。ハイルの合唱——

ロッタア兄弟の末路

一

多少ナンセンスの嫌ひはある。然し意味深長ともとれる。僕は意味深長の方に決めてゐる。扨てこの縺れた經緯を一體どこから說き出して往かうか――さうだ、かの妖艶なる黑奴美人ジョセフイーヌ・ベーカアのことから始めやう。

と言へば餘りに唐突に過ぎて誠に申譯がない次第でもあるが實は斯うなんだ――

映畫の材田實君と森岩雄君とが嘗て瓢然相携へてベルリンにやつて來たことがある。彼等は口を極めて當時なほ全盛時代なりし舊ムーラン・ルージュの黑き歌姬ベーカア孃の舞臺姿を激賞嗟嘆して措かなかつた。『黑い皮膚に眞紅な口唇といふのは實にその……』當時は餘程御意に叶つてゐられたものと見える。

僕もその頃レヴュー歩きは萬更嫌ひな方ぢやなかつたが、元來ベルリンの田舍にゐたものだから、情けないかな、まだこの『驚くべき異邦美人』の名前さへも知らなかつたのである。だけど『一度はあれを見ておかなきや……』といふ頻りに亢奮した兩君の勸告に動かされたものだから、或晩何喰はぬ顏でベルリンを拔けた――と言つても惡いことをするんぢやないから別に隱れて行く必要はなかつたのだが――要するにツォー驛から汽車の切符を求めてパリ行の急行に飛び乘つた。所謂ジョセフイーヌ・ベーカアの『エロトロギー』を實地に研究するために早速モンマルトルのムーラン・ルージュ座に驅けつけた。そしてはゝん成程ねと思つた！

だが實はその節そんなに高い錢を出してまで遠てゝパリに飛んで行く必要はなかつたのだ。と言ふのは次の季節になるとベルリンの興行王ロッタア兄弟といふのがベーカア孃の一行をベルリンのネルソン座に迎へ、更にそれを中心としてドイツの各地を巡回興業させたのである。從つて彼女の『藝術』には殆ど食傷――と言つちや禮を失するが――決局同なじものを幾回となく然もロハで見せて貰ふ光榮に浴し得た。否それ許りぢやない。ロッタア兄弟は中々宣傳に巧妙な興行師と見えて態々『ジョセフイーヌ・ベーカアお茶の會』なるものを『ホテル・カイザアホー

フ』の大廣間に開催し、特に我々外國新聞記者連を禮厚々に招待して怖しく愛嬌を振蒔いてくれた。喇叭の音樂が鳴る。舞踏だ。僕も名にし負ふジョセフイーヌ・ベーカアを抱いてキリ〳〵舞ひをして置けば一生の榮譽だと心得たものだから大に勇猛心丈は出してみたが――結局止した。近寄つてみるとまるで見上げるやうな大女で、頂上は黒ずみ霞んでゐる。僕の樣な黄色い東洋人がチョキンとぶら下つたんぢや國際的拍手喝采が滿堂と腹の皮とを搖るがせるかも知れぬと柄にもなく躊躇逡巡してゐると……そんな時には必ず横から臆面もなく飛び出してくる米國記者のニツカアボツカアが我が親愛なるべきベーカア孃を音樂と共にさつさと向ふへ浚つて持つて行きやがつた。想へば千秋の恨事であつた。

ジョセフイーヌ・ベーカアには失敗したが同じく國際的レヴュー・スターなるジェンニー・ゴルダア女史の場合は……僕は大にロッタア氏を德とする。それも矢張りこの興行界切つての宣傳王があのシャルマントなブロードウエイのマダム・ジェンニーをベルリンのアイスパラストに連れて來た砌り、例に依つて彼女を中心とするお目見榮の Five o,clock Tea なるものを催し態々我々を呼んでくれたのである。この度は勇猛心を出し惜みすることなく遠慮なく立つて陶然場内

を三旋四巡した。尤も折角天下の美姫を擁する機會に惠まれており乍ら默つてゐるのも體裁が惡いものから『貴女の舞踊は驚異に値す』とか何とか月並なことを言つたら、『妾もそれを聽きて悅び侍る……』と矢張り月並なお答へのみがあつた。C'est tout だ。

だがこのゴルダア夫人はその後ベルリンを去つて間もなく毒を呷いで自殺を遂げた。對手は忘れたが確かな悲戀の結果だつたといふ。アメリカ女としては中々話せる最後ではないか？　尠くともさういふ話せる絶世の佳人を僕に――或は僕等に總花的に――近づけてくれたメシュー・ロツタアに萬腔の好感を持つ。

と言つてゐるうちに今度ドイツがナチスの時代に轉回すると間もなくこのお馴染の興行王が――この獨逸レヴュー界の大立物が――死んだ。いや無慘にも殺されたのだ！　して見ると僕が在りし日の追善のためにも矢張りこのレポータアジュに筆を染める必要を感ずる……

二

スイスとオーストリーとの國境にリーヒテンシュタイン大侯國と呼ぶ立憲君主制の一獨立國が

ある。その面積一五九平方基米といふから勿論『不忍の池』よりも遙かに大きい。その人口一萬人……あの大きな丸ビルの人口にも匹敵し得る。

そうして斯ういふ愛嬌な話があつた。

一八六六年の普墺戰爭に於てリーヒテンシュタインはオーストリー方に加擔し、プロイセンに向つて共同の戰ひを宣した。この戰爭はオーストリー側の無殘な敗衂に終り同年八月二十三日普墺兩國はプラーグに休戰平和條約を結んで、やつとその干戈は收まつたのである。然るにその平和條約には普墺双方を代表する署名はあるがリーヒテンシュタインの署名はない。要するにこの在つても無くてもいゝやうな豆獨立國の存在は媾和の際にすつかり忘れられてゐたのだ。

その後プロイセンは更にフランスにも勝ち一八九一年にはドイツ帝國を統一して大變な勢を示した。そしてプロイセンを――從つてドイツを――そんな偉大な強國に仕立てたのは一面プロイセンの參謀本部に鬼將軍モルトケがゐたおかげである。然るにこの鬼將軍はその晩年に山紫水明なる墺國々境のリーヒテンシュタインに保養旅行を試みやうとしたことがある。それはドイツ人にとりて普通の習慣である。どんな高位高官の人でも夏になると休暇をとつて數旬の間身を海

水浴場かそれとも山間の靜かな溫泉地方に避けるのだ。そこで將軍は知人の勸めに從ひ、リーヒテンシュタインのトリーゼンベルクといふ溫泉が快適の地だといふので、家族を連れてそこへ旅行を試みやうとした。すると世間で妙な噂が立つた。曰く――モルトケ將軍といへば普墺戰爭の發頭人だ……あの戰爭の際リーヒテンシュタイン大侯國は公然プロイセンに向つて宣戰を布告してゐる……然るに同戰爭の休戰媾和の調印は單に普墺兩國の間に於てのみ取交はされ、リーヒテンシュタインは全然それに參加してゐないのだ……換言すれば宣戰布告のみで媾和のない關係なのだから國際公法的に言へばプロイセンとリーヒテンシュタインとは今に依然として交戰狀態の間柄に在る……されば敵國の戰爭の發頭人たる將軍モルトケが交戰の對手國へのこ〳〵這入つて來る以上は當然捕虜として逮捕されるより他に仕方がない……

鬼將軍は苦笑した。それかと言つて溫泉旅行のために世界の一大帝國ドイツランドが今更事新しく不忍の池みたいな豆獨立國と業々しい媾和會議を開く譯にも往かぬ……それかと言つて天下のモルトケが溫泉の湯槽に浸つてゐる間に捕虜として抑留されるんぢや降參だ、とあつて遺がに傲滿不敵の老モルトケも頭を搔いて遂にリーヒテンシュタイン行を止して了つたといふ。

だから形式の上から見たドイツとリーヒテンシュタインの戰爭は未だに續いてゐるし、將來もなほ永遠に續くことゝなる譯だ！

三

然るにこの山紫水明にして溫泉や保養地ホテルの收入を立國の基礎としてゐる豆獨立國のリーヒテンシュタインに於て近頃世にも稀れなる大椿事が出來した。

その事件を知るためには何よりも先づ一九三三年四月七日の新聞を手にしてみるが一番早い。例へば同日のドイチエ・アルゲマイネ紙の朝刊附錄（一六三號）には次のやうな電報記事が載つてゐる——

『四月六日リーヒテンシュタイン國フアーヅツツ發特電——以前ベルリンに於て演劇・レヴューその他興行界の大立物であつたあの有名なフリツツ・ロツタア及同人の弟アルフレド・ロツタアの兩名はアルフレドの夫人及びその女秘書なるウォルフ夫人と共に一行四人でトリーゼンベルクの保養ホテルなる『ガフレイ』館を訪問せんとして自動車を驅つてゐた所、途中で暴漢六名の

包圍襲撃を受けた。暴漢等は既に久しくドイツ警察權の及ばないリーヒテンシュタイン國のとあるホテルに身を匿してゐた、ロッタア氏一行の宿所を突きとめたのでこの襲撃を前以て計畫してゐたものらしく、ロッタア氏等の自動軍に停軍を命じ、そのまゝドイツ若くはオーストリー領へ強制的に連れ込まうとしたのである。その際暴漢等とロッタア氏等との間に激しい撲つたり、叩いたりの大格闘が交された。その隙にアルフレド・ロッタア夫妻とウォルフ夫人との三名は辛うじてその場を切拔け雲を霞と逃出したのであるが、何れも斷崖絶壁に追ひつめられ、谷底の礫磧の中へ墜落したのである。そのうちアルフレド夫妻は磧で共に酷く頭蓋骨を打碎いて悲慘な即死を遂げ、ウォルフ夫人も同じく頭部に重傷を負ふて蟲の息を通はせてゐるが生命は覺束ない。兄のフリッツ・ロッタアの方は暴漢どもに高手小手に縛られて了つた。然し車がリーヒテンシュタインの國境を突破してオーストリー領内に這入らうとする形勢なるを看破し、身を躍らして車から外に飛び降りたので命だけは助かつてゐる。然しその際肩の骨を挫き、頭部にも可成りな負傷を受けたといふ——』

* * * * *

おや、あのロッタアが?!……ドイツへ始めてレヴューを流行らせて所謂『スター制度』を創始したあのロッタアがこんな最後を遂げるやうな時代になつたものかなあ！

餘りに感慨の無量なるものがあるので、僕は血眼になつてその當時のいろんな新聞の後報を掻きまぜ探しながら、次のやうなもつと細かい事實を確かめ得たものである。

事件の起つたガーフレー村といふのはリーヒテンシュタイン國内で特に避暑及冬のスポーツに適する一種の保養地である。附近は斷崖絶壁と濶葉の森林が多い。そしてこの都會離れのした海拔一千四百米の山嶺にガーフレー保養館といふ美しい庭園を持つた一種のホテルみたいな建物が聳えており、昨今は不景氣の祟りであまりに旅行客も遊山客もないけれど、それでも夏になつたらウイーンやミュンヘンから毎年おきまりの家族客がやつて來る見込はあるといふ。

この保養館の持主は最近遺産相續を受けたルドルフ・シャードラアといふ二十何歳かの獨身の青年だ。この青年はいつでも自分で自家用の自動車を運轉して保養館から羊腸の阪路をうねり〳〵ねりと下りながら、リーヒテンシュタイン國の首府――といつても人口僅かに二千人――のウアヅツツ町へ買出しやら客引きやらに出かけるのだ。最近も恰度その町の或る懇意なホテルに立寄

つてみたら、不圖したことからそこに滯在してゐるベルリンからのお客さん連と知附になつた。それが興業師ロッタア兄弟と二人の婦人であつたのだ。シャードラア青年は商賣柄こんな金持のお客に一度は自分のホテルへも來て貰ひたいと思つたものだから――どうです、お客樣方お揃で手前達の保養館の方へお遊びに被來して下すつちや……山の上だから空氣が好くつて、見晴しはリーヒテンシュタインが脚の下に一目で見渡されて素的な所なんでございますよ……食堂ぢやリーヒテンシュタインで自漫の鹿の炙肉を御馳走いたします……なあに阪道だつて運轉にかけちや覺えがありますから手前の自動車へお乘り下さりやいゝんで……そのうねりくねりの嶮阻なカーヴを約一時間登つて行くのが却つて面白い御保養になりまさあね……

シャードラア青年が餘りに勸めるものだから、ロッタア兄弟もついその山の上の宿屋とやらへ行つて見る氣になつた。兄弟は今ベルリン、否ドイツ警察の手の廻る國境内にゐては鳥渡都合の惡い事情の下にあつたため、この小さな獨立國へ旅行客として身を忍ばせてゐるのだ。だがヴアーヅツツの豆粒みたいな退窟な町にもう二週間以上も滯居してゐたんではいくら世を忍ぶ身とは言へ餘りにも所在がなさ過ぎる。そこでシャードラアの勸告に應じて一行四名でその自動車に乘

せて貰つたものだ。

一行が山の上のガーフレーの入口に着いたと思ふと兩側の密林の中から突然異様の壯漢が現はれた。その數、六名だ。何れも手に〳〵拳銃を突出してゐる。

『停れ！……ユダヤ人め！』——

『こゝから一歩も進むことはならん！』——

『これからもとの途を引返すんだ……俺達の行く方について來い！』——彼等は口々に叫ぶ。

さあ大變だ……强盜ならまだ有金を差出しさへすればいゝんだが……見れば彼等は明かに排ユダヤ的なナチスの青年達である——ロッタア一行は青くなつた。

フリッツ・ロッタアは慄え乍らも一人自動車を降りて辯疏する。

『君達用があるならもつと穩かに話したらいゝでせう……こつちは女連れだぜ……ピストルなんか止し給へ……』

暴漢等はその制止をも聞かばこそ四方からばら〳〵と彼に躍りかゝる。一人は彼の手頸を捉へて拗ぢ上げやうとする。今迄車の中に一體これは怎うなることかと安き心もなかつたアルフレド

夫妻とウォルフ夫人とはもうこれ迄だ……こんな奴等に見込まれたんぢや私刑にあつて虐殺されるの他はない……と直感したものだから車を捨てゝ思ひ〳〵に助けを求めつゝ逃げ出した。斷崖絶壁に沿ふ羊腸の阪路を轉ぶが如く驅け降りた。暴漢の三四名がその後を追ふて飛んでゆく……そして數發の拳銃の音が續けさまに木魂に響いた。

是等三名の遁亡者の運命はその後フリツツ・ロツタアの訴へに依つて組織せられたヴアーヅツ町の青年有志の探索隊が隈なく探して歸つた結果やつと詳しく報道されたのである。

さう言ふフリツツ・ロツタア自身は自動車に押込められて急阪をフルスピードで降り始めたが一體自分をヴアーヅツツのホテルへ連れかへしてくれる積りなのか極めて不安だつたので運轉手のシヤードラアに、一體どこへ行かうてんだと難詰してみたが返事がない。それぢやこの運轉手奴、始めから暴漢等と謀し合はせて自分をドイツ國境内へ連れ込む計畫なのに違ひないと眞覺し隙を窺つて全速力の自動車から他へ飛び降りた。後頭部と左肩とに激しい打撲傷を受けた。それでも氣が張つてゐたものと見えて半ば意識を失つたまゝ附近の宿屋『ワルヂツヒ』と言ふのへ轉げ込んで息も絶え〳〵に在りし始終を訴へたのである。

すぐ警察と青年團との活動が始まつた。そしてまだ物の半時間も經たぬうち件の怪自動車――パンクして路傍で修繕中――と六名のテロリスト並びに運轉手シャードラアは警官のために包圍を受けた。彼等は言ふまでもなくユダヤ人排斥の國民社會黨に屬する若者達だつたのである。

一方ヴアーツツから急派された三名の男女の行衞の探索隊は水曜日の夜の八時から九時頃の間にアルフレド・ロツタアとその妻とが千仞の絶壁の直下に擴がる水無し川の礫だらけの磧の上に無慘の死骸となつて斃ほれており、又フリツツの女秘書ウォルフ夫人はそこから少し離れた處に全身打身で痣と朱に染つて蟲の息で横はつてゐるのを發見した。

と言ふのが新聞で知り得る一切の事情である。

三

何故ドイツのレヴュー界の王樣たりしロツタア兄弟の運命はこんな悲慘なスカンダールの最後に終らねばならなかつたか？　一體何故にドイツに滯在が出來なくつてそんな豆獨立國の山奥に身を匿してゐなければならなかつたであらうか？

その理由は換言すれば今迄の不正不法なドイツ興業界の伏魔殿の内幕を明るみへさらけ出す好適例となるものである。

由來ドイツの芝居、活動、レビュー、ヴアリエテ、カバレー等を興行する者は一定の資格があつて警視廳又は地方警察から『道德的、藝術的、財政的に批難の餘地なき』人物として詮衡された者に限り『許可證』が下附せられる制度となつてゐる。この『許可證』なしには興業企業一切御法度なのだ。

然るにロツタアといへばレヴユウ界のラインハルと自他共に許す大立物なるに拘はらず、元來この許可證を持つてゐないで今迄長い間興業界を切廻してゐたといふ。それも許可證が下りないからといふのではない。自分の方からそれを避ける方針をとつてゐたのだ。

といふのはロツタアの興行物の居出をする場合にはいつでもプシユツツといふ大根役者上りの金も一文もない男に許可證をとらせておいてその名義で仕事をして行く。そんなぼんやりした企業だから嘸かしインチキナ小ぼけな遣口かと思ふと中々さうでない。ロツタア直屬の劇場は九つあつてそれを『ロツタア舞臺企業會社』といふ親會社が總取締をやつてゐたのだ。この九劇場の

うち六つは有限責任會社組織で三つは株式會社組織とあるから、要するに九つの獨立した子會社を一個の親會社で總括するトラストなのである。

さて又是等の子會社親會社の責任者の中にはロッタアの名義がどこにも發見されない。責任者は悉くい〻加減の大根役者が寄席藝人の古手の名前許りであり、又重役は悉くロッタアの親戚を辿つた芋蔓の面々許りなのである。そして何時でも公衆のあつと言ふやうな出し物で人氣だけは集める。それでも最近には劇界一般に不況續きで（その原因は（一）歡樂稅の高いこと、（二）催し物が廣告許りで內容が案外詰らぬこと）どこの劇場でも收入が減つてゐるし、倒產のための閉鎖や淸算中のものを踵をついでゐる有樣であつた。ロッタア・トラストの各劇場も亦收支の上では酷い赤字だらけで——尤もいつでも滿員ではあるが——怎うして興行が續けられて行くのか不思議な程であつた。然し債權者はロッタアを相手取つて訴訟沙汰にしてみた所で殆ど勝てた例しがなかつた。

その譯は第一ロッタアはどこへも法律上の名義を出してないので名義人を相手どつてみても訴訟がまるで暖簾に腕押の感があり、それに拘らず破產を申請しても重要な財產はロッタアの私腹

に這入つてゐるのだから、空の金庫の劇場を潰したつて殆ど一文にもならない。そしてそんな場合に潰されたら横からロツタアが又新しい劇場をたてる。第二にベルリン三千五百人の辯護士中ユダヤ人の辯護士の數は一千八百人もあつて然も一流の辯護士連は大抵ユダヤ人に依つて占められてゐる。ロツタアは日頃から彼等とよく渡りをつけてあつて訴訟が起つたら、いろんな細かな拔道を作らせて事件を永引かせたり、或は訟訴を取下げたり、反訴させたりする。第三は警視廳の福總督たるユダヤ人のワイス氏はロツタア氏兄弟の無二の親友でロツタアがどんな惡辣なことをやつても決して取締りといふことをしなかつた。

そんなに惡辣な興行師なら芝居が流行なさ相であるが決してさうでない。前に言ふ通り經濟界の不況になる程どの芝居もどの寄席も一般的に收入のないことは當然であつて、ロツタア・トラストの劇場と雖も大した儲けにはなつてゐなかつた。然し儲けがないといふことは決してお客がないといふ意味ではなく、ロツタア劇場はいつでも滿員の盛況なのだ。それは廣告と演劇批評界に人氣を博するために殆ど半分は優待券で釣つたロハのお客なのだからである。そして一方ロツタアは——前に僕等みたいな連中にさへレヴューのスターを近づけて踊らせるやうな機會を作つ

たことを述べたが、それは單に小さな一例に過ぎない――政府は市の主なる役人の家庭と聯絡をつけて、何々舞踊會だとか招待會などを矢鱈に開く。即ち至れり盡せりの宣傳をやる。從つて大人續きでも收入は至つて尠く、然もその收入の大部分はロッタアの私の金庫へ流れ込むのだからロッタア配下で働く俳優、ガール、音樂家、監督、美術家、テキスト作者などは殆ど只働きをさせられてゐたと同樣であつた。それでもロッタア關係の劇場に働いてゐたと言へば――何しろ貴顯な紳士淑女に受けのいゝ高級の劇場なので――第一非常に名譽にもなり且つお拂箱になつてもそこに居たことは良い資格なので、藝術家連は腹を減らせても只働きに近い御奉公を續けてゐた次第である。

五

然るにこの世間を旨く胡麻化した興行師の企業にも眞個の大破綻が來た。九大劇場は悉く清算管理人の手に這入つた。それと同時に天下は國民社會主義の時代となつたので、さあ事だ！

猶太人を排擊しろ……劇界からロッタアを殲滅しろ！

逍がのロツタアも蒼くなつた。彼はグルーネワルトに豪荘な邸宅を構へてゐたのであるが（尤もその邸宅もあとで調べてみると十六萬マークと四萬マークの二重抵當に這入つてゐたといふ）警視廳や内務省の役人が續々排ユダヤ派のナチスに更迭されだしてから急に遽てだし、今迄貴顯紳士を招待して榮華を極めたその邸宅を捨てゝ夜逃げ同然に姿を晦したのである。

何しろ今迄に方々から恨みのあり丈けを受けてゐた男だけに、ベルリンに愚圖々々してゐたのでは私刑が恐しかつたのだらう。フリッツ及アルフレドとアルフレド夫人及女秘書ウォルフ夫人の四名は現金十萬マークを懐にしたまゝベルリンから消えた。世評では彼等が專らどこかの森林か牧場で殺ろされてゐるだらうとの噂であつたが……それが例の豆獨立國リーヒテンベルグの片隅に小さくなつて身を潜ませてゐた譯である。

彼等を襲つた暴漢連は何れもナチスの青年であつた。ずつと以前からロツタア一族に眼をつけて私刑を實行しやうと企らんでゐたものであるが、何しろ小さいと言へ、一獨立國に遁入してゐる人間を假令警察を頼んだにしろ逮捕させる方法がないので、それを誘き出して先づ墺太利の國境に出で、更にドイツの内地へ連れて來る計畫であつたらしい。

＊　＊　＊　＊

ロツタアの事件は市井の一巷談で詰らぬと言へば詰らぬ些事だ。

然しそれに依つてドイツの劇界が如何に不合理な財政の下に經營されてゐたかの一般を窺ふよすがとはなる。ロツタアの如き大頭株にして尙ほ然り。それ以下のイカサマ興行師などは隨分見物人や藝術家の迷惑を構はずインチキ極まる滅茶苦茶をやつてゐたやうである。最近『ドイツ劇界藝術家同盟』の發表に依ると一番眞面目に藝道に精進し、收支決算の帳簿なども普通の會社なみにきちんとしてゐるのは僅かにシツラア座とローゼ劇場の二つだけであるといふ。然もこの二つはドイツ人の經營者の下に在り、その他の有名な大小劇場は悉くユダヤ人の手に獨占されてゐたらしい。

こんな事情が今度ユダヤ人に對する鬱憤を破裂せしめる動機の大きなものになつたのだ。ユダヤ人排斥の據つて來る所以も亦こんな些細な所から洞察して考へ直ほしてみる必要があると思ふ。

「ナチス」文藝界の陣容

『……外國人はドイツに眞の詩人の存在することを知らない。今迄はドイツに關係のない僞の詩人が、恰もドイツの一切を代表するかの如く誤つて宣傳されてゐたのだ。然し、ドイツには人の知らない所に本統の天才的な國民詩人が數限りなく匿されてゐた。我々は、今是等の國民詩人の手を執りて新しい文藝の壇上に招致し、榮譽の月桂冠を戴かせて、その名を博く世界に紹介する義務がある……』

これはナチスを代表して、新しくプロイセンの文相の椅子に坐つたルースト氏が、先づ就任早々の小手調べとして、文藝翰林院の主腦會員を血祭りに上げた時（六月六日）の演說である。

既に、ハインリヒ・マンが翰林院を追出されたことは周知の事實であつた。然るに事はハインリヒ・マンの個人の問題ではなかつた。新文相ルーストは斷乎として、左の十一名の詩人文士を十把一束に掃き捨てゝ了つた。曰く――トマス・マン、ヤーコブ・ワツサァ マン、フランツ・ウェ

ルフェル、ゲオルク・カイザア、アルフレド・ドェーブリン、レオンハルト・フランク、ルドウィヒ・フルダ、ベルンハルト・ケラァマン、アルフレド・モンベルト、アルフォンス・パケー、ルドルフ・バンヴイッツ、ルネ・シッケレ、フリッツ・フォン・ウンルー、

現代ドイツ文學を云々する人々にとりては、是等は何れも錚々の名前だ。現代ドイツ文學と謂へば、表現派文學乃至新即物主義を想ひ出す。そして是等の錚々の名前のうちで、一として表現派文學乃至新即物主義の代表者に該當しない者があらうか。

要するに、我々は現代ドイツ文學といふ場合に是等の人々許りを見てゐたのである。それが全部だと考へてゐたのである。然るにルースト文相はいふ——是等はドイツに關係のない僞の詩人だと。

それでは右の僞の詩人を取除いて了つたら、一體、あとどんな人々が殘るであらうか？　曰く、それだから、是から我輩が未だ殆ど外國に知られてゐない、然し眞個の國民詩人を諸君に紹介するのだ——といつて左の十四名の新人を文藝翰林院の會員に任命した。ウエルナァ・ボイメルブルグ、ハンス・フリードリヒ・ブルンク、ハンス・カロッサ、ペータア・ドェルフラァ、パウル・エ

ルンスト・フリードリヒ・グリーゼ、ハンス・グリム、ハンス・ヨースト、ボエリース・エルウイン・コルベンハイヤァ、アグネス・ミーゲル、ボエリース・フライヘァ・フォン、ミュシヒハウゼン、ウィルヘルム・シェーファ、エミール・シュトラウス、ウイル・ヴエスバァ、

成程新しい名前許りである。一體怎ういふ『國民文學』上の功献をしたかと訊いてみると、曰くウエルナァ・ボイメルブルクは戰爭文學者として『ヅォーモン』、『ドイツを繞らす封鎖の火』、『ボーゼミュラア園』の三叙事小說を著した。

ベータァ・ドエルフラァは、現にミュンヘン市に居住する物語作家で、種々の長編小說を公にしてゐる。

フリードリヒ・グリーゼはメクレンブルグ人で劇詩『冬』の外、鄕土殊に農民生活に關する二三の勝れた小說を書いた。

溫泉町ウイスバーデン出身のハンス・グリムは『土地なき國民』『アフリカ小說集』の二書を發表してその隱れた天才が認められた。

ハンス・ヨーストは以前に、『悲劇シュラーゲタァ』を書いて今迄久しく顧みられなかつたが

最近ナチスの時代となるに及んでは熱狂的歡迎を以て上演の譽れを得た。

コルベンハイヤァは今チュービンゲンにゐる文士で、スピノーサを題材にした心理小說『アモール・デイ』に依つて頭角を顯した。

アグネス・ミーゲルは東プロイセン生れの閨秀詩人で、二三の小說にも又筆を染てゐる。

ブルンク、エルンスト、ヴェスパァの三人の名前に至つては、文藝好きのドイツ人の間にさへ殆ど知られてゐなかつたものだ。

これから、シェーファ、コルベンハイヤァ、シュトラウスの三人は全然新顏といふ譯ではなく、今から二年前に既に會員に擧げられてゐたのだが、前の幹部に嫌はれて、除名されてゐたものであるといふ。

右の新會員の外に翰林院には、なほ馘首されないで、續けて居据わる會員が九名ある。その名前は——ゲルハルト・ハウプトマン、リカルダ・フーフ、オスカァ・ロェルケ、ワルタア・フォン・モロ、ゴツトフリード・ベン、ルドルフ・ビンチング、マクス・メル、イナ・ザイデル、テオドル・ドイブラァ。

これで、大體翰林院の新しい勢揃ひが出來た譯だ。尤も政府の施設である所の翰林院が整つたといつても、それですぐ文學が勃興する筈はない。天才、は必しも永續きはしないものであり、又一度佳作を發表したと言つても、その作者の名譽を表彰するために、翰林院の會員にした以後は藝術上の生きた活躍には、無關係なものとなつて了ふかもしれない。換言すれば、翰林院の制度が却つて文士の姨捨山か、養老院の役目を果す以外の何物でもないかもしれない。

然し、ドイツ人は、性來爵位とか勳章とか、その他の名譽の表彰を喜ぶ國民である。從つて一九一九年革命後の共和國には、是等の位階を表はす制度が全部撤廢され、法律上の存在がなくなつたに拘らず、社交的には依然として、貴族の尊稱は勿論、「ドクトル」とか、「プロフェッサア」とか、「ゲハイムラート」とか、「コンメルチエンラート」とか、「ヂレクタア」等の稱號を活用してゐたものである。それは又一面、ドイツ人の官僚的な國民心理にぴたつとよく合つてゐる。ドイツ人はアメリカ人の樣に大統領でも、八百屋の小僧でも、一律に「ミスタア何が！」で押通す氣持になれないのだ。その國民心理にはお構ひなく、社會民主黨中心の共和政府は是等の因襲的な習俗を根本的に破壞して了つたものだから、表面は、奇麗薩張りしたやうでその實、國民社

會生活に規準と秩序が失はれたのである。換言すれば、社會生活に何となく物足りなさが支配し始めたのである。皇帝もなければ宗教もない、又爵位も無い、其他名譽を表彰するに足りる權威が一切地を拂つた。換言すれば、世は擧げてアメリカニズムの風靡に裸出された。金さえあれば儲かれば一切が通用する……が扨て又その金が又――アメリカの如き國柄なら兎も角――久しく賠償金と經濟的な不況に惱んだドイツに於ては、正當な獲得の出來る竟がない。人間生活の一切の希望が金にあるといふ新しい時代になつても勞働者の賃銀は增さず、サラリーマンの俸給は減る一方だ。そして之れに替ふる名譽の表彰は殆ど存在しなくなつてゐる。そこでドイツでは、投機や射利の狡猾性を利用して不淨な金を儲ける無冠のユダヤ商人が、社會の上層に立ちて一切の采配を振り、然も一番生甲斐ある生涯を送るといふ混沌たる有樣となつて世は正に澆季だ！

この有樣に憤激して――半面から考へると、この有樣を巧みに利用して――猛然起つたのがナチスの運動である。ナチスの運動はこの點から考へると、全く政治の倫理化運動を意味する。だからユダヤ人排斥の如きも明かにそこから出發してゐると考へてもいゝ。

問題を文藝の方面に限つてみても亦さうである。藝術上の作品は、何れにしてもこれを發表

することに依つて、本來の社會的意義を現はすものだ。恰も既成の剩餘價値がたゞ循環行程によりて實現される理論と同じやうに、藝術の創造は假令その始めは藏の中や、屋根裏で完成したものであるとしても、その藝術價値の實際的意義は、これを社會に發表することに依りてのみ生ずるものだ。この際この社會的發表に動機を與ふるものは藝術家の名譽心か、それとも露出しに言へば金でなくちやならぬ。その際、社會が一般藝術家の名譽心をそゝるに足りる狀態になつてゐない限り、藝術家は品位を下げて何でもかでもいゝから、單に社會のポピュラリティを獲得する努力にのみ腐心したがる。ポピュラリティと言つても、誰れだつて特に醜名を博めたり、社會から指彈排擊を受けるのを望むものはないだらう。たゞそのポピュラリティが大きければ大きい程金が儲かるからである。だから、ドイツの最近の藝術家は、なるべく自己を廣告して民衆に諛つて金を儲けること許りに汲々たるものがあつた。否貧乏なドイツ國內の讀者や觀衆を、相手にしてゐては間に合はないからといふのである。ポピュラリティを、更に國際的に擴げることに苦心する者も可成り多かつた。斯くしてドイツの魂は痛く傷けられ惱んだ。同時にドイツの暴露と冒瀆とを賣物にして國際的な喝采を博した藝術家は、一方これを操る出版業者や興行師と共に、

片手に黄金の袋を抱えつゝ『ドイツ文化を代表』する名譽をさへ浴び得たのもである。斯樣な藝當を行ふのに一番資格ある要素は、何と言つても國民精神などには一向に痛痒を感じないで、然も機を見るに敏なるユダヤ人のそれであつたのだ。今ナチスの爲政者がユダヤ人のインテリを掃清しつゝ、『我々は決して文化を毀つものでない』と傲語する所以も亦そこにある。

だから藝術家といつても、矢張り人間である以上飯は喰はねばならぬ。假令貧乏な天才が逆境に處して發奮する所に、立派な藝術品を生む例しは多いと言つた所で、敢て飯の喰へないといふ狀態がそのまゝに、偉大な藝術の出現を物語つてゐる譯ぢやない。要藝術家に發奮を促す動機が大切だ。そして藝術家も一人の國民である以上は、國家も亦これを矢張普通の「市民」としての國民生活に參加せしめる權利があり、同時に彼等が藝術家として、發奮し得るに足りる文化政策上の施設を行つてやることも亦當然の責務である。尤もこのことは國家が特に「國民藝術」といふことを念願に置く場合は特に强調され得る。

でナチスは、特にドイツの國民藝術の再建といふ所に、一番重要な目標を置いてゐるのだ。そこで政府は一方劇場、音樂堂、展覽會、映畫會社、ラヂオ經營、新聞等に直接干渉して相當な

手入れを行ひ、今迄のやうな『趣味の景氣』に自由放任しないで一種の純制を布きそれに依つて藝術品と一般民衆との間の需給を相通ぜしむることに努力してゐる。同時にドイツ藝術家が單に飯が喰へるといふ丈けの目標でなく、もつと藝術家が國民藝術の創造に發奮する動機を與へるといふ意味で――今迄は單に金が儲かるといふ刺戟だけであつたが――名譽の表彰といふことに特に重きをおくことゝなつた。これは純ドイツ人の國民心理を旨く捉へたやり方である。斯くしてハンス・ヨーストの『シュラアーゲタア』劇の如きはその公演に國家的援助を與へた許りか、國民啓蒙及宣傳大臣ゴェベルスはこの無名の詩人に最上級の感謝狀を贈つたやうな事件はこの邊の消息を物語るものである。

されば今回プロイセン翰林院（序乍と藝術方面の翰林院は各々獨立した美術と音樂と詩との三つに岐れてゐる）の手入れをして青年無名の詩人文士をその名譽ある會員に加へたといふことは前に言つたやうに一面藝術の硬化、又は藝術家の姨捨山を意味するやうに見えてその實國民藝術樹立の目的に叶つた行動でなければならぬ。何故ならばそれは藝術的名譽の表彰である。假令文藝上の勝れた作品が强慾な出版屋に依つて發表を拒否されるやうな場合でも國家の翰林院が

全然物質上の利害を離れて公然推薦してくれるのだ。文壇に強壓されて浮ぶ瀬もない又無名の作者と雖も眞に價値ある傑作品を發表する場合榮譽ある翰林院の會員にもなれるといふ制度になつてゐる限り――假令翰林院自身は姨捨山の場所であるとしても――青年藝術家の發奮則ち藝術的精神には社會生活上の意義が出來る譯である。

斯樣な事情の下にプロイセン文相ルーストが新しく聚め得た翰林院に於ける國民藝術の鬪士。その名前は前に掲げたやうにハウプトマン元老その他の二三を除けば何れも――斯くとも外國には――無名の文士連ではあるが今後ドイツの文學を物語る場合には、是後の新人の名前が漸次目立つてくることであらう。ルーストは又ドイツ既成文壇一流どこの中から特にステファン・ゲオルゲを迎へて翰林院の重要な會員に推したい意嚮を持つてゐるやうである。今日ステファン・ゲオルゲはその著『戰爭』及び『第七輪』に依つてナチスの面々から國民藝術の指導的な大御所のやうに端倪されてゐる。然し彼は純然たる藝術家肌の奇人で今迄の翰林院とは仲違ひしてゐた人物であるから、今日おいそれと文相の招きに應じ若い連中と一緒に列べられるのを潔しとするか怎うかは極めて疑問である。彼が翰林院に屬すると否とに拘らず今に『新興ドイツ國民文學』の

全集が出るやうな場合、或は『飜譯好きな外國』への紹介にはステファン・ゲオルゲの作品が第一に表はれることゝ愚信する。

＊この人は今度幹林院會員に推薦されて間もなく――則ちこの短文を草してゐるうち――齢七十歳で逝去したと傳へられた。要するに七十歳まで世に容れられなかつた薄倖の國民詩人國民哲學者がある！

パウル・エルンストの死

一

哲人にして文士なるパウル・エルンストは一九三三年五月十三日、墺太利のヴィルドウに行きザンクト・ゲオルケンの寓居に於て長逝した。

と言つた所でそんな名前を記憶する者は到つて稀れであらう。懷へ海外文學の紹介者にして嘗て斯樣な文人を一體誰れが傳へたことがあるか？　否外國人に知られなかつたのも無理はない。その七十年に亘る永い生涯は今迄彼の鄕國のドイツに於てさへまるで見忘れられ置去りにされてゐたので。つい近頃になつて『ナチス』がそれを『發見』した。そして『ドイツ國民文學』の生ける至寶として急に禮を厚ふしてこの落魄の老文學者を迎へ、大掃除で以て表現派の魑魅や新即物主義の魍魎を徹底的に叩き出した後釜のプロイセン詩人翰林院へ招じたものである。それは五

月の九日のことである。然るにこの人物が翰林院の會員に擧げられたとの發表があつてまだ一週間も經たぬうちに早くもその長逝が報ぜられたのだ。ナチスの諸新聞が文字通りの哀悼の意を表して大騒ぎしてゐるのも無理はない。

今に『ナチス國民文學』なるものが日本の消息界にも續々紹介されることだらう。或はナチス文學の叢書などが出ないとも限らない。その節パウル・エルンストの名前と作品とは必ずやその筆頭の地位を占めることと信ずるものだから、餘計な事だが、今この世間に知られてゐない人物の生涯の梗概とを摘錄して何等かの參考に備へることゝしやう。

二

パウル・エルンストは今から七十年前あの美しいハルツの森の中のエルビンガァローデに於て坑夫の息子として生を享けた。

始めは神學と社會主義を研究したものだが轉向して純然たる國民精神陶醉の文士となつた。尤もその當時の作品は——九〇年代の文學者の誰れもが經過して行つた通り——そのスタイ

ルに於ては自然主義の文體に據りて戯曲を物し、ドストエフスキ張りの心理描寫法を倣つて小說を書いた。然しその精神的な中核をなすものは矢張りドイツ民族固有の美に對する憧れであり、何れも今日のナチス連中を狂欣させねば措かないやうな內容のもの許りである。

從つてその當時から彼は世間から置去りにされ始めてゐた。彼よりもずつと才能のないものでも彼を追越してどし〳〵文壇に盛名を賣つたものは尠くない。『彼は少し失望したやうに然し微笑みつゝ何時までも彼の獨自の途を歩むことに滿足してゐた……』とはプロイセン新文相ルーストが當時のエルンストの心境を回想しての推讃の辭であつた。

パウル・エルンストの生涯を判然把握しやうと思ふ者は——從つてそれに依つて所謂『ナチス國民文學』の鍵を握らうと思ふ者は——何よりも彼が青年時代から書き續けた生立の追想記を讀むに如くはない。それはこの人物の青春時代に行き過ぎた跡を調べるためにのみならず、寧ろドイツ人といふもの〻生活の濃厚な雰圍氣が如實に描き出されてゐるからである。彼の故鄕のハルツの森。それは謙遜にして然も何處となく澁味と重味のあるドイツの天然美を一點に象徵化させた場所なのだ。彼はその地で育つたのは勿論いくら齡をとつた後までも幾度となく必ずその地

へ歸つて來た。それは彼が故郷に結びついて離れなかつた心事を物語るのみならず、彼がドイツ國の時空の一切に切つても切れぬ因緣を持つてゐた消息を傳へるものである。

三

パウル・エルンストの父は坑夫であつたのだから、要するに彼は現代式に謂ふ所の貧しいプロレタリアートの子には違ひなかつた。然し彼の魂はドイツ語的に解釋する『ビュルガア』に屬してゐたと見なければならぬ。要するに彼は何處から來たのか分らぬ馬の骨ではなくつて生え拔きの土着の者であつた。其一世紀以前のエルンスト家は可成り有名な上層の舊家であつたといふ。それが途中で零落して、そして先代の中には手工業者として傾いた家運の挽回に力めた者もあつたらしい。假令貧乏してゐたとはいへ『手工業者の舊家』といへば矢張り生粹のドイツ人を豫想する。後に彼と時を同じくして翰林院の會員に推された詩人ハンス・グリムの如きも亦同じ樣に代々手工業に携はつた土着の舊家の後裔である。

パウル・エルンストの作品は總て大きな一つの『全集』に纏つてゐる。それは嘗て義俠心ある

出版屋のゲオルク・ミュラア及アルバート・ランゲンがこの世間で持て囃されない薄倖の文學者の一切の作品を損をしてまで引受けて出版してやつたおかげである。全集は三冊の戯曲集、四冊の小說集、一冊の短篇及物語集及び數冊の美學、文化問題、國民問題等に關する論文より成る。

そのうちでエルンストの詩人的天分は特に彼の小說によく現はれてゐる。彼自身は戯曲に重きを置いたが、殆どろくな所で上演されたことがなかつた。今度エルンストが急に大持てになつてから、ベルリンの『ノイエス・シュターツテァータァ』は特に彼の名篇『聖クリスピェン』を上演することになつてゐたのであるが、彼は自分でそれを見る間もなく死んだのは諦められぬ恨事であつたらう。

然し彼の存在を一番光らせてゐるのは何と言つても彼の物語（エアツェールングン）である。どれ一つとつてみても少しも屑がない。たゞ戯曲の方には出來不出來が不同のやうである。そのうち最近十年間にベルリンで上演されたものは僅かに二つだけで則ち『ナクソスに於けるアリアドネ』（クライネステアータァ上演）と、『クリームヒルド』（シュターツテァータァの獨逸語協會主催マチネーに上演）とであつたがこの二つは決して惡くない。

それから小説の方で推稱されるのは前にも述べた彼の生立の追想記である所の『幸福への臨路』だ。その次に書いた『希望の國家』は社會主義に頭を突込んで苦しんでゐた時代の作品であるが純眞の氣溢れ、それに文體も雄渾である。『グリンメルスハウゼンのジンプリチウス』の一篇は既に國民文學の堂に入つてゐる。然しその本格的の大文學は『モルゲンブロートタールに於ける寶』であらう。題を三十年戰爭當時のハルツ地方のドイツの生活に執つて、どう見てもドイツ人でなければ描寫し得ないやうな獨特の氣持が判然把握されてゐる。同じくナチス文學で有名になつたヘルマン・ロエンスの『ウエアウォル』も亦同じ題材に據つてゐるけれど文學的價値からいふと前者の方が遙かに勝れてゐるといふ。彼の最後の小説『ラウテンタールの幸福』も亦同じくハルツ地方の生活を主材とするものである。然し矢張り『モルゲンブロートタールの寶』の堂々たるに比すればずつと劣るとの評判である。

四

『パウル・エルンストは藝術の上だけでの詩人ではない……勿論彼はその世界の仕事に携はり、

殊に戯曲界に於ては完璧に近い國民藝術の精華を美しいスタイルの中に盛ることが出來たのだが……それよりも彼は寧ろもつと高い意義での詩人であつた。否我等の時代を齎來させるやうに豫言し、豫見した偉大なる先覺者であつた』――とはナチスの批評家で彼の名前を現代ドイツ文學界へ特に紹介維れ努めたフェ ヒタァ 氏の言葉である。

そのエルンストは死んだ。今にサン・ゲオルギエンとエルビンガァ ローデとにはこの『文藝』を紀念するモニュ メントが建てられることだらう。そしてパウル・エルンストの全集は見事な裝幀で再び世に現はれ、ナチスの青年達に貪り讀み返へされることだらう。

何故にワルタア、ラインハルト、クレンペラアは放逐の憂目をみたか？

四月の始めブルノー・ワルタアの最後の演奏會は、公開を禁止された。續いてマクス・ラインハルトが、政府からその傳統的な『獨逸劇場』の舞臺監督の依囑を解かれた。更に、オツト――クレンペラアも當分ドイツでは、演奏會を開く可能がないといふ。國際的な樂界や劇壇に對する常識人なら誰れにも首肯さるゝこの三人の名前！　ついぞ先頃東歐から放浪し來つて、現世のパレスチナたる、ベルリンに文化の乳流れ、魂の乳滴る喜びを、享受し得たのも昨日の夢と消え、再び『永劫のユダヤ人』として漂泊の旅を續けなければならなくなつた、この三人の巨匠……三人の世界的藝術家！

世は擧げていふ――、それはドイツ文化の「ハラキリ」だと。東歐から生々しく流れ込む、貧民ユダヤ人を取締るのはいゝ。それは失業緩和の問題だ。ユダヤ人の間に偏在した、シヤイロツ

ク式資本を、國民産業のために利用するのも仕方はない。それは、恐慌打開の經濟問題だ。然し乍ら、政權把握の歡喜も度を過ぎて醉拂ひが花見の櫻を狼藉と叩き落とすが如く、爛熟として開いた自分の國の文化の花を根こそぎにするのは兒戯に類するとして放つておけない程の、ヴアンダリズムである。それもベルリンの大學生や、S・Aの青年達に元氣のいゝデモを行はせる、お祭騒ぎとして左翼側の掃き捨てる程ある書物やヒルシフエルトの奇々怪々な猥本を燒かせて政府萬歳の喊聲を立てさせる行事の如きはまだ罪がない。何しろ世界第一の出版の國だ。圖書館の隅から一度や二度書物を引摺り出して燒いてみた所で、そんな書物は個人の私の書庫の中にもいくらでも殘つてゐるだらうし、又時代が變れば、そんなものはいくらでも出版される可能性がある。

然しワルタアやラインハルトやクレンペラアの如き世界的に名聲を博した生きた藝術家を無意味に國内より追放するが如きはいくら勢のいゝデモと雖もその埒を越え過ぎてる。斯樣な巨匠名匠は何世紀に幾人生れるか分らぬ程の國寶的存在であつて、それあるがために今日のドイツ文化の眞價をどれ程高めてゐるか分らないではないか？　それが偶然ユダヤ人であるかないかの問

題よりも、かゝる世界的なユダヤ人をドイツ文化が育て上げたといふことが寧ろゲルマン人一般の偉大な誇りでなければならぬ……

といふ様な議論が方々から起つたのも無理はない。それ程是等三人の名前は市民の腦裡に畏敬を刻印させてあつたのだ。或る意味に於てドイツ人にとつてはアインシュタインやハーバアやフランクの如き科學者が槍玉に上げられるよりも是等三名の藝術家の沒落を悼んだであらう。それ程一般ドイツ人は音樂を好愛し演劇に心醉する國民である。

ナチスの政策は横紙破りだ。勇往邁進……反動の目的のためには一切の手段が理論の正邪を蹂躙してゐる……と言つて了へばそれまでゝある。然しながら泥棒にも五分の理窟はある。いかに理論が立たぬナチスの行爲とは言へ——根が宣傳と辯舌とで叩き上げて政權まで獲得した彼等のことであるから——そこに全然理窟が横はらぬ譯はない。世人は横紙破りだといふ。然るにナチスの面々は、いや我々の行動は決して横紙破りぢやない理論整然たる、そして已むに已まれぬ當然の歸趨だといふ。

ぢやそのナチスの五分の理窟は一體どこに在るか！　筆者は別の章で、フルトラエングラアの

河故にワルタア、ラインハルト、クレンペラアは放逐の憂目をみたか？

抗書に對する宣傳相ゴエベルスの答辯を擧げておいた。あれなどもナチスの文化に對する立場の奈邊にあるかを、窺ふに足りる材料ではある。然し今日のゴエベルスの議論は政府側の意見である。從つて餘程控え目で上品な意見である。それよりも民間に在つて、頻りに排ユダヤ文化を唱導し、ゲルマン文化再興のために腹臓なき萬丈の氣焰を擧げてゐる大小「ナチス」人の數は極めて多い。例へば國民社會黨選出の代議士で『ドイツ文化爭鬪聯盟』の指導者である所のハンス ヒンケル（Hans Hinkel）の如きはその錚々たる者の一人である。

四月の始めにウォルフ電報通信の一記者が右の爭鬪聯盟を訪問し、ワルタア、ラインハルト、クレンペラアを、全然ドイツ藝術界から葬り去る運動の、黑幕に立つてゐたと言はれる會長ヒンケルに種々の質問を發した內容が、ドイツ諸新聞に洩れなく發表されてゐる。非常に面白いと思ふものから今その內容を詳しく紹介しておくことゝする——

×　×　×

『それではヒンケルさんにお尋ねしますが、一體貴方の率ひてゐられる團體は一種のナチスの文化運動に携はるものでしやうな？』

『仰せの通り。私の指導してゐるのは『ドイツ文化への爭鬪聯盟』(Der Kampfbund für Deutsche Kultur) といふ團體で、これは國民社會主義運動の首腦者連から公然の信賴と依託を受けてをりますから、言換へるとドイツ文化再建事業に一種の全權を握つてゐるのと考へられても宜い。』

『ドイツ文化のために鬪ふ團體が、たゞ依然たるナチスの首腦者の意見に從つて、廣汎な藝術的領域を單にその方針にだけ局限するといふのは、餘程危險なことではないでしやうか?』

『決してそんな事はない。勿論この爭鬪聯盟の牛耳を執つてゐる人物は御承知かも知れぬが國民社會黨の外交方面を擔任する代議士ローゼンベルク氏である。そして彼は實際この爭鬪聯盟の最初の創立者であり、不肖私は彼の委任を受けて、今ではこの聯盟を指導してゐる譯ですから、換言すればこの聯盟は、國民社會黨に直屬する文化運動の政黨的組織には、相違ありません。然乍ら國民社會主義運動それ自身が、全國的な統一的意識の下に活動し、他の政黨意識の對立的存在を容認しない方針である以上、この文化運動に共鳴し參加する者は、特に國民社會主義政黨の黨員である必要はないのです。今迄の自由主義や共和主義的な文士や藝術家は、よくマルクシズム政黨に加入し政黨員たるの證明書を見せびらかすのが常であつたが、今後ドイツ人としての國民

的自覺の下に、藝術其他の文化方面に精進される諸君はもうそんなものは要らないのです。その點ではもつと自由になつたのです。』

『所が「國民社會主義獨逸勞働黨」といふ一政黨が主張者となつて、若くはその政黨直屬の執行機關たる貴下の「ドイツ文化への爭鬪聯盟」が指導者となつて、ベルリンに於ける世界的な樂匠ブルノー・ワルタアの音樂演奏の公開を禁止し、又は公開を不可能ならしめてゐるといふことですが、あれは眞個ですかしら？』

『多少違ひますね。私達は一度も該演奏會の開催を禁じたこともなく、又ブルノー・ワルタア氏が——序ながらこの男はシュレージンガアといふユダヤ人です——その管絃團で指揮棒を振つちや不可いと別に傳達した譯ぢやないです。尤も今日の場合ですからこんな人物が指揮棒を振つたんぢやどんな亂暴者が闖入するか分つたもんぢやない。そして我々の方でもワルタア氏の身邊を保護するために突擊隊の護衛をしてあげる譯にや往かぬ。それやこれやでワルタア氏自身が恐れをなして自分から演奏の公開を止して了つたらしいのです。そこでワルタアの代りにリヒヤルド・シュトラウスがベルリンでコンダクトすることになつた。すると遙々アメリカの方からシュトラ

ウスに對して數々の脅迫狀が舞込んできた。シュトラウスはそんなことは平氣で、傲然として自分の藝術のために指揮棒を振り通したものだから、益々人氣が湧いてドイツ國民は彼に熱狂的な感謝を捧げた。同時にさういふ音樂狂の聽衆は、ワルタアがアメリカのユダヤ人などを賴んで卑怯にもシュトラウスに脅迫狀などを送らせるのは、鼻持のならぬ人間である……今度奴が演奏會なんか開いたら會場を叩き潰してくれるなどと敦圍く連中が非常に多いものだから、ワルタアは眞蒼にぶる〳〵震へて……そして先づ殉教者みたいな顏をしてゐる次第です。』

『今一つお尋ねしますが――一體ドイツ人は音樂的國民であるから、ワルタア氏の事件は大問題でありますが、國際的な意味からいふと世界的に名聲を趨せた舞臺監督マクス・ラインハルトの去就の方がもつと大きなセンセーションになるでしやう――そのラインハルトも亦お馴染のベルリン「獨逸劇場」から放逐されさうですな？』

『ラインハルト？……ふむ、あのユダヤ人ゴルドマンのことですか？……あの事件は斯うなんです。世間ではラインハルトが放逐されたやうな噂ですが、實は今の「獨逸劇場」の主腦部が變る約七ケ月前にあの男はもう舞臺の監督も指導も一切拋棄してゐたのです。然も病氣でもしてゐた

のなら兎も角、ドイツの國歩多難の際に金が儲かるといふので外國の劇場許りで働いてゐました。だから、今後主腦部の變つた「獨逸劇場」は、尠くとも今後そんな非國民的な人物には、舞臺藝術に關する一切の依頼をしないとの申合せをしてゐることは事實です。』

『クレンペラアの事件は怎うです？』

『これは昨今の所未だ決つてゐません。何れにしてもベルリンの「國立歌劇」は、ドイツ國内にもつと規律と秩序とが立つまで、今暫く演奏會のプログラムを延期することになつてゐるんですから。』

『そりや又何故です？』

『それもワルタアの場合と同様で――目下の狀勢では我々のS・AやS・Sの若い者を護衛に出して會場を取締らせる譯に往かないからです。要するに今迄藝術を賣物にして金ばかり蓄めてゐたユダヤ人の興行師連がどし〳〵倒れるのは痛快な現象ですな。ワルタアやクレンペラアなんかそんな奴等の商賣道具になつてドイツ藝術冒瀆といふ場當りの曲藝で旨い飯を喰つてゐたのだからもう國民が憤慨してきかないのです。制しても制し切れないのです。』

『然しそんなに排他的ではドイツの文化は餘り獨りよがりに墮して了ふんぢやないでしやうか？世界は廣いからドイツ以外にも立派な藝術家は澤山ゐましやう？　それでも外國の藝術家はみんな下らぬものと輕蔑して、若くはドイツ國内ぢや發表のできないやうな何等かの制限でもされる御計畫がありますか？』

『冗談言つちや困る。ドイツの藝術だけが立派なものと、そんな誇大妄想的な考へは少しもない。我々はたゞドイツにドイツ獨特の國民藝術を樹立し擁護しやうとの建設事業に腐心してゐるだけなのです。外國人でも立派な藝術家は尊敬します。さういふ人々がドイツに來て發表しやうといふ場合には我々は外國から來たお客さんとして喜んでお世話もするし御便宜も計ります。現に明晩はフランスの名樂師ピエール・モントオ氏が我國の誇りである「フキルハルモニイ」で管絃樂を指揮されることになつてゐる。これなんか我々が外國の名手を心から尊敬すればこそ自由に公開させるのです。その點を履き違へては困る。我々の本來の目標は政治といはず經濟といはず又文化といはず一切の領域に亘つて健全なるアウタルキーに到達するといふことです。鳥渡お考へになつて下さい……現にドイツには五萬人の音樂家が職を失つて飢ゑてゐますよ。糊口の途の閉

された俳優の數だつて矢張りその數位はあるでしやう。然るに外國から流れて來るお客さんには隨分如何はしいまやかし者も澤山ある。國内に自國の藝術家が飢ゑてゐるのに、これに對して食を與へる手段も執らないで、一切を商賣人たる興行師に任せきりにして、外國から流れて來た物珍しい藝術家なら、誰れでもかれでも金を儲けさせるやうな國に偉大な國民藝術が存在する例しがありますか？　そんな國では成程、藝術界がぎら〳〵して表面は賑かに見えるかもしれない。然しその賑かさは唾棄すべき、藝術商賣の繁忙と根據なき模倣以外の何物でもない。だから前にも言つた樣に我々が、他山の石として推服するに足りる外國の天才が、範を我國に垂れるやうな發表をされる場合は、勿論禮を厚うして出來るだけのお世話はする。然し國民意識の全然缺如したユダヤ人の興行師などが、外國から宜い加減のまやかし者を連れこんで跳梁跋扈する場合は、我が國民文化の發達を阻害墮落させるものと認める許りでなく、又我が國内に出やうとする芽が出ないで、慘憺たる自棄の生活を送つてゐるドイツ藝術家救濟の上からも、斷乎たる手段を執らうとする準備はあります。スイスの如き自由な共和國でさへ、外國藝術家の國内に於ける公開はスイス藝術家失職の割合に比例して許可する方針を執つてゐるのぢやありませんか……』

『鳥渡待つて下さい……ドイツに國籍のない外國人の場合はそれでよく分ります。然し最近は國内のユダヤ人が――尤もユダヤ人は人種的にアリア系統のゲルマン人でないことは事實であるが尠くとも國籍を取得して久しくドイツ國内に居住するユダヤ人が――國家の樞機に關する諸種の職業に就くことを制限されてゐるやうですが、この方針はユダヤ人の最も天才を發揮し得る藝術界一般にも適用さるゝ御所存でありますか？』

『ユダヤ人が特に藝術界に於て天才を發揮し得る？　そしてドイツはその方面に於て彼等よりも劣つてゐる？　そりや可怪しいですな。例へば樂聖ワグナア、ベートヴエン、ブラームス、バツハの如き純ゲルマン系の偉大なる人物をどこのユダヤ人がどこで輩出させ得ましたか？　これは我々ドイツ人の世界に對する誇りであり、同時に斯かる偉人を生んだ我々民族の血管の中には將來と雖も怎うかしてそれに劣らない偉人を再現せしめてやらう、否再現せしめずには措かないといふ點に限りなき我等の希望と光明とがあります。然るに過去十四ケ年の間是等ドイツ人の崇拜と畏敬と憧憬との結晶である所の偉人の名は、悲しい愚弄と嘲笑の目的物となつてゐた。その間じつと涙を呑込んで我慢してゐた我々は、今迄ユダヤ人の道化者やマルキシズムの痴呆けた奴

等がどれ程調子に乗つて是等聖なる樂匠ばかりでなく、更にシツラアやゲエーテやカントをさへも戯畫の種にしてゐたかの程度を判然よく知つてゐる。彼等は我國の文化政策一切の運用を獨占し我々が反抗しやうにも說明しやうにも手も足も出なくして了つた。僅かに櫓を借りたユダヤ人が大威張で母屋をも占領し、本家の主人たる我々を追出すやうな奇觀を呈した。この邊の消息を理解する者なら、今日の國民政府のユダヤ人に對する精神的態度の意義が那邊に存するか位のことは認識して下すつても宜いと思ふ。勿論問題はドイツに對する魂の向け方の問題である。ユダヤ人の面が氣に喰はぬといふ單純な憎惡や趣味の問題ぢやない。だから人種的にはユダヤ人であらうと、その魂がドイツの「ビユルガア」としての呼吸にぴつたり合つて——勿論新しい第三國の「ビユルガア」としてどなくちや駄目だ！——單に商賣の上からでなく、倫理の情念から國民たるの責任と義務とを遂行し得る限り、彼等が藝術に精進するのは極めて自由なる彼等の權利であります。何れにしてもこの國ではドイツ人が家長であり主人であるから、外來のユダヤ人から家憲の侵されるやうな危險のある地位は、決して彼等に讓つてやる譯には往かぬ。從つてユダヤ人は官公吏には採用しない方針である。自由職業の中に於ても辯護士の職業の如きはゲルマ

ン人の國家法治生活に重要な關係がある以上、ドイツ人とユダヤ人との人口に比例した割合に於て、これを許可することゝなつてゐる。醫師の如きも今にこれに類似した制限を設けることゝなるでありましやう。それから御質問の藝術家――これは今言つたやうな「ビュルガア」として藝術家となることには干渉しないけれど、これも矢張りドイツ國民文化の家憲若くは戸主權といふものに疵をつけないため、尠くとも藝術生活の促進奬勵又は監督に任ずる責務ある地位からは全然ユダヤ人を除外する積りである。要するに我々の方針は標的を自覺した確乎たる基礎に據つた、單なるお座なりの面白半分の餘興ではない。事はドイツ國家の興亡の岐る、點にあります。それからユダヤ人は官公の責任ある地位からは除外されるが、政治に關係のない私人としての藝術家であることは差閊へがないと言つても、これも前に說明した理由に基いて一定の限度があるといふ點には特に御注意ありたい。清掃運動は官界許りではなく時としては民間の自由職業者の上に及ぶこともあります。今迄國內でドイツを汚辱することに依つて立派な生計を立て目下は外國へ遁げてゐる文士連例へばアルフレド・ケアとか、エミール・ルドウイヒ、コーンとか、リオン・フオイヒトワンガアとか……ウフヽヽ……それからイグナツ・ヴローベルとかの徒輩の

遺口を一つ考へてみて下さい。』

『フォイヒトワンガアといふ名前がどうして可笑しいんですか？』

『いやこのリオン・フォヒトワンガアといふ男が一九一七年にある書肆へ送つた手紙が私の手許にあります。それを讀んでみると、「近いうちにドイツが大戰に罪がないことを主張する小說を書いて、それがもう八分通り書き上つてゐるが君の方で出版するなら一體幾許くれるか……それともドイツの惡口を言ふ方がよく賣れると思ふなら君の方へは今書いてるのを廻さないで、別にその主旨に添ふやうなものを書いてもいゝが……」といふ風な內容になつてゐる。そんな誠意のない女郎みたいな人間の怪しからぬ小說が羽根が生えたやうに飛んで賣れる。そして外國ではこの男がまるでドイツ精神の再現でゝもあるかのやうに間違へて盛んに飜譯する。從つてそんな飜譯小說を讀まされる外國の讀者諸君も宜い面の皮だが、同時にそれに依つて外國人からこんな卑劣な下等な、その癖一人前の殉教者みたいな面をした鼻持ならぬ人間の思想が、現代ドイツの代表的精神であるかの如く、穿き違へられる立場にゐる所の我々ドイツ人は實に迷惑千萬な語である。

フォイヒトワンガア計りぢやないルドウイヒでもヴローベルでも要するに純然たる夜店の糶賣商

人と選ぶ所はない。敵を味方に賣り、味方を敵に賣つて二重に惡錢を稼ぐ投機業者だ……』

『それに較べると今日のフルトウエングラア、マクス・フォン・シツリングス、ムツク、リヒアルト・シュトラウス等の藝術家は別に政見上のイデオロギーを明かにしてゐないやうですが、それでも貴下がたから割合お覺えが目出度いやうですね？』

『さうですとも。藝術家は別に政治上の意見を吐かなくつてもいゝ。我々は決して是等の藝術家に對して、我々の政黨の黨員になつてくれなどと迫るものではありません。それにフルトウエングラア以下貴下の擧げられた是等の人々は樂界及劇界に於て我々の「お覺えが目出度い」計りぢやない、もう世界的名聲を博してゐる巨匠ですから、我々ドイツ國民文化が辛ふじて保有し得た偉大なる誇りとして將來もその健在と奮鬪とを希つてゐる次第です。序ながら、現代に於てもユダヤ人がドイツ文化の大部分を代表してゐると考へるのは飛んでもない誤謬です。樂界や劇界のみならぬ現に詩人としてはヨーストやコルベンハイヤアがゐるではありませんか？　建築家にはクライス教授やシュルツエ・ナウムブルク、シュミツトヘンナア等がゐるではありませんか？是等の藝術家はヒツトラアの出現を、ドイツ文化再現の基礎工事であると觀てゐられる眞の藝術

何故にワルタア、ラインハルト、クレンペラアは放逐の憂目をみたか？　二三三

家達です。我々は既に、是等の世界的に認められてゐる巨匠連から「文化の建設者」であると信頼されてゐる喜びを持つ以上、一方藝術の國際商人連から「文化を毀つ者」との愚痴を耳にしても何等の痛痒をも感じません。之を要するに物は觀方である。尠くとも我々は國民社會黨位寛容で宏量で、藝術と文化とに理解のある政黨はないと考へてゐる。世に政權を執ると同時に先づ文化政策上の努力を第一に重要視し、且つその理想を斷乎として實現した政黨が世界のどこに在りましたか？　どんな政黨でも政權を執れば、先づ外交問題や財政の遣繰りや軍備の問題などから手を着けて行く。然るに國民社會黨は何よりも先づ第一に文化の問題、人間の至純な情操を眞直ぐに建直ほす倫理の問題から着手し始めたのです。それが何故に野蠻行爲であり、ヴアンダリズムであるでしやうか？　ハイル・ヒツトラア！國民宰相アドルフ・ヒツトラアは偉大なる藝術擁護者であります。』

斯くして新聞記者は一禮して引揚げた。

『生ける樂聖』フルトヴェングラアの抗議

國に依つて種々の聖人がある。チャンバラの精神が一世を風靡して以來、日本に『劍聖』なるもの〻存在することが發見された。蓋し外つ國の觀念には類ひのない聖りであらう。

だから、いくらドイツに軍國主義が復活しても、劍の聖者や手擲彈の聖者なる者はない。然しながら遺がに音樂の國だ。音樂の天才に對してだけは惜みなく der Heilige のやんごとなき尊號を奉るに吝かでない。由來この地上にドイツ人ほど音樂を崇拜する國民も尠いだらう。從つて嘗て彼等の中から輩出したベツハとか、ベートヴェンとか、ワーグナァとか、ブラームスとかシューマン等の名前を擧げる時は、彼等の憂鬱な顏も國民的誇矜に光り輝いてくる。從つて今日樂界に於て、世界的名聲を有するフルトヴェングラァとか、クレンペラァ等に對する畏敬親愛の念も

亦、我々日本人が想像する以上である。國歩多難の際音樂なんか怎うでも宜ささうに見える。一介のコンポニストやピアニストの輩出よりも、立派な理財家や企業家が出現してくれた方が宜かりさうなものである。然しながら國民心理といふものは又格別であつて、例へばストレーゼマンがロカルノに出馬したとか、ブリュンニングがライン撤兵に成功したとかの名聲よりも、フルトヴェングラアが今どこそこでの音樂堂で指揮棒を振つてゐるといふポピラリティの方が、遙かに頭にピンと響き渡るのだ。フルトヴェングラアは實に生ける神樣である。

ヒツトラアが、天下を執つて以來ユダヤ人排斥の火の手が猖獗を極めてゐるのは周知の事實である。ユダヤ人といへば各方面に天才を發揮させてゐる民族であるから、敢て、黄金臭いシヤイロツクの世界にのみ驥足を伸してゐるだけではない。革命後十五ケ年間に於て、ユダヤ人は實にドイツの文藝、美術、音樂其他文化施設一切の世界に亘り、牢として拔くべからざる勢力を張つてゐたものだ。それに對して、今日の國民社會黨は文化政策上の『ジヤコビニズム』を强行し、ユダヤ人を官公の衙門は言ふも更なり、一般社交的の舞臺からさへ放逐する政策を執つてゐるのである。科學界のアインシユタインやフランク、ハーバアの徒は申すに及ばず、常識人の誰れの

口にも膾炙されてゐる文藝の、マン兄弟、美術のリーバアマン、劇界のラインハルトなど踵をついで文化舞臺の演出者名からそのその役割と名前とが抹殺されつゝある次第である。

然し乍ら、總ては時の力である。十五年間沈澱してゐた、反ユダヤ人の鬱憤が今土手を決したやうに爆發してゐる矢先のことゝて、國内六十萬の少數ユダヤ人が反抗しやうにも反抗の手段がない。下手にアメリカのユダヤ人などが結束して抗議を申込まうとすると却つて、國内ユダヤ人の商店が、不買同盟の報復を受けて酷い目に逢はされたりするやうな事情の下に在る。當分阻止しやうにも阻止することの出來ない自然の勢だ！

然る所、この有様をみて憤然として起つた一人のドイツ人があつた。彼はその同僚にして既に彼と同じく世界的名聲を博してゐる、ユダヤ人の多くが劇界や樂壇から續々放逐される現狀に對し無限の不滿を懷いて、ユダヤ人排斥運動の發頭人で、指導者たる宣傳省大臣ゴエベルス博士に對し今年の四月の中旬に――詰問の抗議文を叩きつけた。それは前にも擧げた、音樂界の巨匠フルトヴェングラア（Generalmusikdirektor Wilhelm Furtwängler）である。

他の人がこの際そんな無暴なことをやつたなら、或は狂人扱ひで一笑に附せられるか、それと

も彼自身の首が危なかつたでもあらう。然るに、この手紙の主は『生ける樂聖』としてドイツ人一般から神樣の次のやうに思はれてゐる人物である。遉がに、狂犬のやうな横紙破りの『大臣』も鳥渡手がつけられなかつたと見えて、四月の十二日に丁寧な返事を出し『ナチス』の藝術に對する態度を說明するに努めた。

この『樂聖』對『專制大臣』の書翰の往復は現に、敢行されてゐる、排ユダヤ運動進行過程中のセンセーショナルな挿話であるのみならず、これに依つてドイツに於ける藝術家の地位と將來『ナチス』の文化政策に關する方針とを窺知するに絕好の參考資料であると思ふものから、玆にその言々句々を邦文に直ほして揭載して置かう。——

× × × × ×

先づフルトヴェングラアからゴエベルスに贈つた、手紙は斯うなつてゐる。

『畏敬する國務大臣閣下！

我がドイツ音樂界に於ける多年の公開的な交涉と、內面に於ける結緣とに基き、小生は、今議論を音樂生活上の出來事だけに限つて、閣下に愚見を開陳し、閣下の御注意を喚起することを

許して頂きたい。閣下は、今我國の國民的品位の失はれたるを恢復しやうと努力されてゐられる。それは我々の等しく感謝する所從つて欣幸に堪へぬ所であると、申上げるに吝かなものでない。そして、小生の言はんと欲する點も矢張りそれに觸れてゐない譯でもない積りであります。

斯く申す小生は、徹頭徹尾藝術家であるとの立場にゐる者である。凡そ藝術と、藝術家とは、全然不分離な觀念として存在の許されるもので、別々に離したら何れも意味のない言葉となつて了ひます。強て分離の線を引かうと思ふなら、寧ろ良い藝術と惡い藝術との間にのみ引かなくちやならぬ筈である。所が、今日の狀勢を見ると各人の政治的意見が反對であるかそれとも全然中立であるか、そんなことにはお構ひなしに、たゞ偶然ユダヤ人であるか非ユダヤ人であるかの區別に依つて、理論的に、殘酷な分離線が強く引かれてゐるだけであつて、特に我々音樂生活に生きてゐる者にとりては、最も大切であると考へられてゐる所の藝術の良否の間へ、この線を引くことは寧ろ等閑に附せられてゐるのである。

『今日の音樂界は世界不況、ラヂオの發達等に依りて、沈滯の極に達しており、從つてもう試驗的にやつてみるやうな政策には堪え得ない狀態に在ります。音樂は其他の生計必需品、例ば、馬

鈴薯やパンとは違ふものだから人間の賦合に、比例して增減させ得る性質のものではない。演奏會を開いたといつても、內容が約らぬものなら誰れしも聽きに來てくれやしない。だから音樂は量に非ずして質だけが、その生存問題となるのです。されば、若しも、ユダヤ人排斥の戰ひの主要なる目的がたゞあの——それ自身に基礎もなく破壞的であり——齒の浮くやうな、無味乾燥の藝人根性に墮して、なほ藝術家面をしてゐるやうな徒輩を一掃するに在りといふならば話はよく分る。但しユダヤ人又はその中に體化した、精神を排斥した所で、ゲルマン人の中だつてさういふ精神を持つた者はいくらでもあるのだから、結果から見ると決して眞面目に又徹底的に、その目的を達することは出來ないと思ふ。況やそれに依つて眞の藝術家をも、一緒くたに掃き捨てるが如き暴擧は、文化の興廢に關する由々敷き事件であります。何處の國でも、今日藝術家と稱し得る者の數は、既に非常に尠い。その尠い藝術家を、前後の思慮もなくどし〳〵掃き捨てるのは將來、臍を嚙んでも及ばざる文化上の悔ひを殘すに決つてゐる。

『右の點から考へて、小生は斷然ワルタアとかクレンペラアとか、ラインハルトの如き諸君はドイツ國の將來に於ても、尙ほその藝術に於て、端倪稱讃さるべき値ある人物なりと申上げてお

きます。

『重ねて言へば、我々は戦はねばならぬ。但しその戦ひは、基礎のない崩壊的な、輕薄にして自棄的な精神に反抗して行はるべきものでこそあれ、創造的で建設的な、藝術の持主なる眞の藝術家に反抗して挑まるべきものではない。

『この意味に於て、小生はドイツ藝術の名に於て切に閣下に訴へ、それに依つて將來取返しのつかぬ始末にならぬやう閣下の御反省を促す次第であります。

恐惶謹言

ウイルヘルム、フルトヴェングラア

× × × × × ×

これに對する宣傳相ゴエベルス博士の書翰による答辯は次の如くであつた——

『畏敬する樂事總監殿へ、

此の度は、國民的に條件づけられた、ドイツ人の藝術に對する生命力に關し、一般特に音樂に就ての、貴下の御意見を伺ひ得る御手紙を頂戴し感謝この事に存じます、その際小官の殊の外欣

幸とする所は、貴翰がドイツの藝術家の前途を想ふの筆致に始まり、且つ我が國民的品位の再建を感謝され又喜んで下すつた點であります。

『尠くとも小官の遺口は間違つてゐるとは怎うしても考へられません。何故かといふに小官はドイツを再興に導かんとする爭鬪がドイツ藝術家にとつて消極的なものでなく、もつと積極的なものでなければならぬことを信ずるがためであります。この際、今より三年前現宰相がまた政權の廟堂に立つてゐなかつた當時、公開の席上で發表された言葉を今改めて繰返しておきたいと思ふ。曰く『若しもドイツの藝術家が一度自分の爲すべきことが何であるかを自覺したなら、彼等は我々に反抗する筈がない、否屹度我々と一緒に戰はざるを得ない』――と、

『貴下が純然たる藝術家を以て任ぜられ、且つ總てを藝術的な立場から論議されやうといふのは貴下に許さるゝ當然の權利であつて、それに對して我々は文句を差挾み得るものでない。但しそれかと言つて、則ち貴下が藝術家で藝術的立場に立脚せられてゐる。との論據からして現にドイツ國内に進行してゐる一切の發展を非政治的なものに見なければならぬとの因緣は生じて參りませぬ。政治も亦一種の藝術です。否或は最高の、且つ在らゆるものを包括した藝術であると、言

つていゝかも知れない。そして、今日ドイツの現代政治を構成しやうとしてゐる我々は、矢張り自分達が立派な藝術上の人間であるとの自覺を持つてゐる。何故かといふに我々も亦組織のない大衆といふ原材料からして、確乎不拔の國民といふ造形物を創作しやうと努力してゐるものであるから。その際、藝術及藝術家の任務は、單に物を結合するといふだけでは足りない。もつとそれ以上に出て、構成し造形し、且つ、病疫を驅除して健全の途を拓かねばならぬ使命がある。かるが故に小官は、ドイツの政治家たるものは貴下の謂はゝ『區別を立てる線』を單に良き藝術と、惡しき藝術との間へ引くだけで滿足してはゐられないと考へてゐるのです。藝術は單に良いといふ丈けでは不可いので、進んでそれは又國民的に條件づけられたものでなければなりません。もつとよく言ひ換えると、完全なる國民性に基いて發露した藝術のみが、價値判斷の上で結局良い藝術と名付けられ得、同時に國民のために何物かを創造し得たとの意義を克ち得るものであります。例へばかの自由主義的なデモクラチズムが意識してゐるやうな、あんな絶對的な意義に於ける藝術などゝいふものは存在さすべからざるものである。そんな飛んでもない藝術に仕ふることは究局する所、國民とは內面的に無關係なものとなり、それに從事する藝術家を所謂 l'art pour

に立脚した空虛の空間に逍遙せしめ、時代の衝動力から全然孤立させて了ふ許りです。成程藝術は良くなくちや成らぬ。然し同時にそれ以上に出て、責任意識を持ち、能動的であり、國民に近づけるものであり、爭鬪的なものでなくちや成らぬ。

『今の藝術はもう試驗などには堪えられぬ程弱つてゐる、といふことは小官と雖も認めない譯ではありませぬ。だからと言つて放つておいたら今度は肝腎のドイツの藝術が滅びるのです。放任も時に依りけりで、今日のやうにドイツの藝術界が上下を擧げて、我々の國民にも民族にもまるで緣も由緒もない要素が、肝腎の我々に實驗の試みもさせないで、世界の人々の眼にはドイツ藝術といへば如何にもそんな變な姿のものであるかの樣に誤解されてゐる時代に在りては、斷然それにプロテストの聲を擧げるのは當然の成行でありましやう。

『成程貴下が音樂にとりて、品質は理想の問題なるのみならず生存の問題だと仰有られるのは、首肯が出來ます。否貴下が根柢もなく、破壞的で、齒の浮くやうな而も無味乾燥な藝人根性に墮落せる藝術界に反抗し、我々と協力して戰ふと言はれるのは更に雄々しくも立派な御態度です。小官も亦貴下によりて御注意を受けるまでもなく、非ユダヤ人則ちゲルマン系統の藝術家の中

にも魂の腐つた者が澤山居ることは認めます。然し左様な寒心すべき現象がもうドイツ民衆の地盤を浸してゐればこそ、我々はこの地盤から斷然その怖るべく危險な根を芟除しなければならぬと決定した理由も生じた譯です。成程仰有る通り、眞の藝術家は尠い、尠ければこそ、その輩出を奬勵し又保護する必要が起る、たゞそれは眞個の立派な藝術家たけに對してさうあらねばならぬことでしやう。

『眞個の藝術家なら、これも貴下の言はるゝ通り、彼等の藝術と共に未來永劫に端倪讃美さるべきであります。それは分つてゐるが、同時にワルタアやクレンペラアやラインハルトの徒輩に演奏上場の禁止をしたのに對し抗議を申込まれるのは、それは何もかもごつちや混ぜにすることで、尠くとも小官には納得が往きませぬ。そんな徒輩の跋扈のために、我がドイツの隱れた若くは餘儀なく隱された數多の藝術家は、今迄十四ケ年の永い間表面に出で、一言の口さへ利けないやうな破目に墜し入れられ、從つてさういふ不遇な人々の中でも羈氣のある連中は、最近御承知のやうに、その無念やる方のない鬱憤を、我々が公然許してないやうな自然的な反動の方法に依つて現はし始めたのである。それは止めても止まらぬ自然の歸趨です。何れにしても小官は眞個の藝

術家が雄々しく立つて活躍し始めたのなら決して止めやうとは思はぬ。寧ろ、その人達の欲するがまゝに、自由に往く所まで往かせる所存です。從つて、その點では小官は專制を喜ぶどころの騒ぎではなく、反對に極めて自由放任の態度を持してゐる。但し、自由に振舞つても構はない藝術家は、これも貴下の仰有つたやうに、眞に構成的な創造的な人物であつて、決して根底もなく破壞的で淺薄皮相で、たゞ多少人を胡麻化す技術だけを心得たやうな徒輩であつては相成らぬ次第です。

『だから貴下の寄越されたやうなドイツ藝術の名に於てなさるゝ訴へは、何時でも我々の心の底に溫い反響を與へるものなることを確信して居て下さい。本統に何物かゞ出來る上に藝術以外の生活に於ては、國家・政治及社會の基本的規矩に反抗の態度を執らないやうな、藝術家に對しては我々は萬腔の同情と誇りとを以て今も將來もその榮譽ある名前を擁護する覺悟を持つてゐます。

『と、いふ貴下に對して小官は貴下のそれこそ本統の創造的な、偉大な、讃嘆に値する藝術を以て永い間、小官の多くの政治的同僚や又數へ切れない程の良きドイツの大衆に功獻して下すつ

た、御業績を想ひ感謝の念に堪へぬものがあります。そして不肖小官の立脚點が貴下の御聰明な耳と寛容な御理解とに徹し得るならば小官の欣幸維れに過ぎませぬ。

頓首再拜

ドクトル・ゴエベルス

宰相アドルフ・ヒットラア論

一

グレゴリイ・シュトラツサアと呼ぶ男がある。『ナチス』の運動の創始時代からの幹部でありながら、よく黨内にフラクシオン的な渦卷を起して問題を惹き起す。その態度と口吻には『ナチス』のといふより寧ろ多分にボリシエヰキの臭ひさへする。一種のオポジチオンの代表者だ。換言すれば『ドイツ國粹社會黨内のトロツキー』だ。

昨年十一月――『ナチス』の議席が二百三十から百九十五に減少した時――のこと、この男はむきになつて傲語した『俺は生れてこのかたヒトラアほど政權に有りつきたくつて齷齪してゐる人間を見たことがない。だがヒトラアは……氣の毒でも……結局政權にや有りつけないだらう！』

この豫言の前半は眞個であらう。但し後半は事實に符合しなかつた。『大アドルフ』はそれから

まだ三ケ月を出でざる一日廿九日といふに、五十六日天下のシュライヘア將軍を蹴落して遂に『ドイチエス・ライヒ』の宰相に成り上つたのである。

然し乍ら、シュトラツサアはそれにも拘らず決して出鱈目は言つてゐないと思ふ。假りにヒトラアが『ナチス』の綱領と精神とに文字通りの潔癖振りを示したでもあらうならば――因にシュトラツサアはこの潔癖家の一人であるが――今日ある『ナチス』の勢力を以てしては、まだ〳〵宰相の椅子を戰ひ獲り得る程の機には熟してゐないのだ。否『ナチス』の魅力はもう下り坂に向ひつゝあつたのだ。だから今迄の如き旭日登天の勢を示した『ナチス』でさへ政權の獲れなかつたものが、下り阪の『ナチス』の世となつてそれが可能となり得る筈はない。結局ヒトラアが宰相の地位に就いたことは『ナチス』それ自身が弱くなつた證據である。國粹社會主義の精神に、多少の修正が行はれた結果である。……獨裁を主張する政黨が、妥協聯合に身を墜した窮餘の遁道である……と見ることも出來る。何れにしてもタクチークの問題から敢然立つて、宰相の地位に卽くことが、最早遲するべからざる唯一の時期であつたには違ひない！

本來ならヒトラアは宰相となるべきではなかつたのだ。いかに世界が笑はうとて、ドンキホテ

だと謳はれやうとも、矢張り大統領に祀り上らなければ嘘だつた。だからこそ實際又彼はヒンデンブルグを向ふに廻して大統領の椅子を爭奪してみたのだ。あの當時、共產黨のテールマンの立候補は要するにデモンストラチブの意味しかなかつたのだが、ヒトラアの立候補は、そんな空虛な氣勢を擧げるためではなく、全ドイツがもう自分のものと過信してゐたが爲である。そして大統領には落第した。高齡の元帥ヒンデンブルグが突然他界の人とならない限り、もうあと六年間は如何に痺れがきれ樣とも、全然國の元首の地位を爭ふ機會がなくなつた。搗て加へて昨年十一月の總選擧には黨は意外の不首尾な成績を得た。この醯梅で黨が依然として在野の嘯きを續けてゐたら、次の總選擧にはもつと慘めな結果を生むだらう。或は黨內に內訌が起つて『ナチオナルゾチアリズム』の名詞は複數の冠詞を戴く破目に墜るだらう。そこでナチスの幹部連は躍氣となつて、せめては御大のヒトラアを宰相になりと祭り上げるインドリーグを劃策し始めた。フリツク、ゴエーリング、クーペ、ゴエベルス、ローゼンベルク等の大『ナチス』小『ナチス』の面々は額を鳩めて智惠囊を絞つた結果、黨の行詰りを轉向せしむるために『大アドルフ』を『ハイル・ヒトラア！』の地位から『閣下』の地位に鞍替へさせて了つた！

二

然りアドルフ・ヒトラアは遂にドイツ宰相となつた――

そこで彼は『ナチス』固有の主張に基いて獨裁政治を貫徹するであらうか？　それとも彼の態度は、組閣の翌日自分の股肱たる新内相フリツクをして聲明せしめし如く『ワイマア憲法の嚴重な遵守』――換言すれば共和國的議會制度の認容――に依る責任内閣の首班たる地位に貌變したであらうか？

とは誰れの頭にもすぐ湧いて起る質疑だが、問題はさう簡單には片着けられぬ。第一今日のやうに複雜した一國の政體を議會政治か、獨裁政治か、のたつた二つの類系に分けるのは、結局どうかと思ふ。政黨政治が行詰つた……だから、赴く所は、もう獨裁の形しか殘つてないと、早合點することが既に智惠のない話だ。人類を分つてルンペンと非ルンペンとに、或は醫者と非醫者とに分類するが如きは、間違つてるなくつても實益がないやうに、國權の發動、若くは支配形態を、たつた二つの範疇に當て嵌めて、大いに安心してみた所で、結局それは徒勞の學問だ。

さてヒトラアが宰相になつたといふその生國のドイツに於て、近頃政治界に流行する妙な言葉がある。曲く、Präsidial-Regierung. そのレギールングの意味は『政府』にきまつてゐるが、プレジデイアールとは一體何と譯すべきか……鳥渡見當がつかぬ。坊間『大統領政府』と飜譯したものあるを見た。然し『大統領政府』なら Präsidenten-Regierung 若くは大統領を形容詞體に遣つて、Präsidental-Regierung でなくちやならぬ筈だ。一體ドイツ人は言葉の現はすニュアンスを尊重し、從つて我々には餘計だと思はれる程むきになつて文字に拘泥する。例へばヒトラア自身が『我々は nationale Sozialisten ちやない、Nationalsozialisten といふ二つの文字が一字になつた觀念の主義を奉戴する者である』と嘯いてゐるやうに萬事が中々以て八釜敷いから、このプレジデイアールといふ言葉も、平氣で『大統領の』なんかと譯してたんぢや方々から苦情が出るだらう。所が今日のドイツの政體は、その難かしいプレジデイアールなる言葉を以て表はされる制度に據れるものである。それは議會政治でもなければ獨裁政治でもない、全く一種異樣の、又獨特の政治形態なのである。そして今アドルフ・ヒトラアはさう云ふ妙な政治形態が生みだす國權を執行する所の首腦者、則ち『ライヒス・カンツラア』に祭り上つてゐる次第である。

三

然らば、先づ何故に、かやうな政治形態がドイツの中に生れたか。

曰くドイツが多數政黨制の國なる故である。多數といつても程度によりけりで、二大政黨の上になほ一つか二つの餘計な政黨が附け加はつてゐる程度の狀態ならば始末がいゝが、その群小の政黨數が、實に十五にも二十にも上つてゐるやうなドイツの現狀を以てしては、

（第一）に有力なる孰れの政黨と雖も、單純では到底政權獲得の可能がない。例へば社會民主黨の全盛を誇りし戰爭直後の十年間でも、稍その政綱の相似した隣黨の二三と禮を厚うして聯合するに非ずんば、全く組閣が出來なかつた。だから、今日の『ナチス』は第一黨なりと、威丈高になつてもそれは單に比較の問題であつて、尠くとも『多數政黨制の議會政治』が存在する限り、則ち現在のところ、ナチス丈けには政權は落ちて來ないのだ。斯くして聯合妥協の方法はドイツ內閣の唯一の成立樣式であるといつても差閊えがない。然るに、

（第二）にこの聯合妥協の方法と雖も之は單に國會に於ける過半數の地位を占め得るといふ程度

に止まり、それ以上の進んで世に謂ふ所の『擧國一致内閣』などは、この唯一の方法を以てしてさへ出現の可能性を持たぬ。假りに二大政黨制(若くは少數政黨制)の國なりとせば、A及びBの政黨が申合せをすれば、大體擧國一致の形式が整ふだらう。然し、ドイツみたいにA・B・CからY・Zまで政黨が分立してゐる國家に於て、その總和を求めることは理論的にも不可能だし、更に又政黨の成立事情が、歴史と政綱の差に依つて發生(例は主民黨と共和黨、若くは政友會と民政黨の如き對立)してゐなくつて、世界觀の基礎にして立つてるドイツの諸政黨が、悉く妥協するといふ實際現象は想ひ浮べるだに抱腹絶倒である。想へ、世に純資本家政黨と純無産政黨とが握手するといふ觀念があり得るだらうか？　若しありとせばそは單に資本家政黨臭い二三の政黨と、無産臭い二三の政黨とが渾然たる申合せ——ドイツ流に言ふなら Burgfrieden——を現出し得る場合を想像し得るのみである。

だから、今迄の過ぎこし方のドイツ一方の内閣は、例へばウイルトの『ワイマア聯合』内閣ルツタアの『ビュルガア・ブロック聯合』内閣、ミュラアの『左翼ワイマア聯合』内閣、マルクスの『中間大聯合』内閣等……がその名の如く、悉く四つ若くは五つほどあるやり方のうち、孰れかの聯

合の方法に據つたものであり、又その執れの『聯合』内閣と雖も、國會に於てやつと過半數に足る足らずの與黨議席を掻き集め得てゐたに過ぎないのだ。

されば、ドイツと呼ぶ國では、普通に内閣乗取りが政權獲得の固有の方法と考へらるゝ限り、どんな大きな政黨(假令第一黨)でも單獨では組閣が出來ないのみか、それが何等かの聯合内閣を作つてみた所で、結局過半數に足る足らずの微弱なものしか、出來上らないものと相場がきまつて了つた。

四

玆に於て、國家の意思を有力に表現するためには、ドイツのパーリアメンタリズムもお多分に洩れず遂に行詰つたのだ。そしてその行詰りを切拔けるべく思案投首の結果、こゝに一種獨特の珍妙な制度、即ち前に述べておいた『プレジデンタリズム』なる形態が發生したのだ！

プレジデンタル内閣は、既にブリユンニングの宰相時代から始まる。ブリユウニングは中央黨の幹部を代表して内閣を組織し、ワイマア憲法擁護の諸政黨を左右に從へ、當時まだ第一黨たり

し社會民主黨の好意の中立を得て、兎も角も政權を掌握した。然しながら、その際彼はその執行機關の基礎となる立法の出所を在來の如く『人民の意思による』筈の國會に求めずして、大統領の緊急令（ワイマア憲法四十六條規定）に求めたのである。げにブリユンニングは巧みな遁道を發見し得た政治家であると言はねばならぬ。由來ドイツの大統領は、國家の元首とはいふものゝ、ワイマア憲法制定當時の精神からいふと、イギリス國王やフランス大統領の如き權威の象徵たり儀禮の裝飾物たる以上に何等の意義をも持つてゐなかつた筈だ。換言すれば主權の發動は人民の意志による國會以外に實際上は實物も存在しなかつた。然しそれだけでは憲法の體裁が餘り簡單すぎて見つともないとでも考へた結果であるか怎うか知らぬが、一方國會以外に、形式丈けは上院に該當するやうな國議院とか、ソヴイエットの制度を下手に眞先して無意味に終つた經濟院とかを景物に添へ、そして又一方大統領には、人民投票に訴へる權利や、緊急令を發布し得る權利を、一筆加へてやつておいたのである。さればそんな權利は、單に大統領を莊嚴に見せるための坐興にすぎなかつた。一生拔かないで收つておくべき寶刀に過ぎなかつた。

だからこそ第一世の大統領たりしエーベルトの如きも、實際ウイルヘルム街の宮殿ドイチエス・

ライヒの權威ある元首に應揚として鎭座してゐただけであつて、それ以上に進んでこの裝飾的に與へられた權利を、小兒らしく振廻すことは決してなかつたのである。所がヒンデンブルグ大統領の世となつてくると、この名家の寶刀がさつとその鞘を離れて、實際政治家に薄氣味惡い閃光を放ち始めたのである。老元帥の梓の腰に橫へられたこの秋水を、これからは本氣でどうかお拔き下さいと懇請したのが宰相ブリユンニングであつた。

それ以來、ドイツ主權の唯一の發動體と思はれた國會の權限は著しく減少した。否權限ではなく職能が減つたのだ。權限は依然として憲法に保障されてある。國會が多數決に依つて內閣を信任しなければ、依然責任內閣を以て任ずる宰相は閣僚を率ゐて總辭職しなければならないから。故に權限は依然として存在してゐるんだが、その權限を振廻させないやうに今迄の國會の議政壇上の仕事を大統領の緊急令でやらせることにして、細かいことは少しも國會に謀らないので要するに議會の職能が怖しく減つてきた譯である。

事實またそれで宜いのだ。小ぼけな疑獄事件や、揚足取りの失業問題や、一地方のけち臭い補助金のことや何かで、國會が一々眼に角立てゝ宰相に委任した執行權を、多數決で束縛したので

は、大きな國策の基礎はいつ迄經つても確立する筈がない。國會の職能は單に國策の大本を定める少數の重大な問題にのみ限つて、然りか、否か、の人民の意思を參考に聞くだけで結構。あとは地方の法律に任すか、緊急令で既決して了ふのが仕事が捗どる、殊にドイツのやうな多數政黨國に於てバタの關稅を引上げること計りを政綱にしたり、家賃引下げだけの問題で成立してゐるやうな職業利益代表の群小政黨に勝手な議論をさせて、それで大きな國家全體の軍事とか、外交とかの大方針を決定せしむること自身が間違つてゐる。

だから、國策の大本を極めるのは、假令議會では少數の地位にあらうとも、本人が黨派それ自身を直接に代表しないで、然も多數の黨派の要求を平均して見透されるだけの人物であるならば——その人物の認定は專ら大統領に一任すること丶して——一先づその人に一切の國政を料理させてみる方がい丶……そしてこれ亦大統領の認定でその人に對して、國內に非常な反對が起つてゐるやうな形勢が窺はれる場合に限り、國會では信任を問はせるといふ遺方、それが所謂『プレジディアール』の制度である！　尤もこの方法の創始者たるブリユンニング宰相自身は、まだ中央黨の黨人であつたが、次の宰相フォン・パーペンに至つては、實に代表的なプレジディアール

内閣を組織したし、更にその次の五十六日天下に終つた將軍シュライヘアも亦それと同じ狀態を繼承した。今アドルフ・ヒトラアも亦、このプレジディアールな條件の下に新しく宰相の地位を『戰ひ獲つた』のだ。

五

してみると、ドイツの政治形態は、そんなプレジディアールなどゝいふ新奇を衒ふ言葉で說明しなくても、先づ大體北米合衆國のそれと同樣ではないか……ヒンデンブルグ大統領の地位は、今イギリス國王や、フランス大統領のそれを脫して、遂に米國大統領のそれに躍進したと解釋してもいゝだらうとの質疑が起る。

夫は多少違ふ。米國大統領は實の所執行機關のボスである。一種の內閣總理大臣である。それが他の一般の責任內閣の首相と異る所は議會の投票の結果內閣成立の責任をその場で一身に引受けない點にのみ存する。然るに、ドイツの大統領は今や主權發動の(從つて立法上の)大半の權利を享受し、宰相をしてその執行を代行せしめ、然も宰相をして國會に責任を負はせるといふ一種の

不思議な形式なのである！　それではドイツの宰相の方は英佛の首相と何處が異ふか？　これも今迄に說明した所で自明の理なる如く政黨を超越して殆ど議會に事を謀る必要のない點にあつて存する。だから或者は今日のドイツを指して今や獨裁制の國になつたと觀てゐるし、反對に或者は又、いや立派にパーリアメンタリズムの國だと辯ずる。その批評の何れも當らず、曰く、ドイツはプレジデイアリズムの國なのだ！

この複雜極まる政治形態の經緯の中にあつて五百名の國會議席中二百に足らぬ家の子郎黨を具した『大アドルフ』が政權を獲得する方法は、これまた中々デリケートであり、到底一筋縄では往かなかつたことが想像されるであらう。成程國會に二百の議員を操縱し得ることは、一千二百萬の投票者を抱容することであつて、共產黨と喧嘩したり、突擊隊の行進をやつたり、院內で『ハイル・ヒトラー！』のデモをやるのには立派な勢力だ。だがそれ丈けで一足飛びに國權の全牧を主張するには……

クーデターの方法で一擧に政權を獲得し、固有の意義に於ける獨裁制度が布かれ得る見込があるなら問題は簡單、だがドイツの國會層の構成をみるに、資本家階級の力と無產階級の力とに於

て餘りに平衡がとれ過ぎてゐる。無產階級が一氣呵成にソヴイエットの理想境を克ち得んと焦つても爛熟の域に達した資本主義の防壘は鐵の如く堅い。そこには曾てパクニーンが『げにも世にドイツ人ほど革命の才能なき民族はないだらう』と皮肉つた眞相が横はる。又反對に資本家が武裝の暴力團を手なづけて一揆をやらせて見た所で今度は無產大衆の結束がそれがためには餘りに强すぎる。所詮カップの暴動やルーデンドルフ＝ヒットラアのベルリン進擊が喜劇に了つた例をとる迄もなく、今は昔のビスマルクでさへ既に無產階級擡頭の實力に鐵血の手腕を揮ひやうもなかつた證據を示したではないか？　この意味に於て大資本家階級と中產階級と無產階級とが片寄らないで平均のとれた力の調和を保つてゐるドイツの中に文字通りなソヴイエット制度の實現は中々困難であると共に、一擧にしてローマに進擊したムツソリニの故智を模倣した所で奇勝を博するプロバビリティは尠なかつた。

さらばにや、ナチスの今迄の方針は出來る丈表面的な行爲としての暴力一揆を避け、內容的には暴力一揆を起し得るだけの訓練と實力とをポテンシアル・パワアとして蓄積準備すると共に嘗て社會民主黨が採用したと同樣の策略で選擧戰上の投票數を克ち獲る戰術を執つたのである。換

言すれば選擧に依つて投票を掻集め、國會に絶對多數を占めること、今一つ簡單に言ふならば、ナチスは合法の手段に據つて御大のヒットラアを大統領若くは、宰相の地位に祭り上げることにのみ努力し始めたのである。

六

扨てヒットラアが大統領になれたのなら問題は誠に簡單であつて、ワイマア憲法の轉覆の念願も比較的容易に實現ができたでもあらう。そしてナチスのためには總てが萬々歳に展開したでもあらう。然るに御大ヒットラアは大統領の選擧には落第した。

そこで今度は是が非でもライヒの宰相の椅子を射落さなければならぬ破目となつた。これは實際是が非でもなんだ。今のうち無理をしてゞも内閣の人となつておかない限り、もうその峠を越して了つて内訌分裂の徴あるナチスの將來には多少暗い影がさしてゐる。又それでなくつてもヒットラア自身が餓え渴く如く政權に憧れて既に痺れをきらせてゐるのだ。尤もヒットラアがシュトラッサアの批評した樣に矢鱈に政權を欲しがる態度は別に深く咎むべきではないかも知れぬ。

ヒットラアといふ男は酒も飲まなければ煙草も吸はず、女道樂などは全然振向きもしない謹直な人間であつて、そのはち切れるやうな中年のエネルギーを悉く狂信的な政治運動に集中させてゐる。政治以外に何一つ道樂はないのだ。政治が道樂である以上、恰も釣道樂が魚を釣上げるのを狂喜するやうに、政權の獲得に憧憬するのは當然であらう。又全然野心のないやうな恬淡な人間だつたら俗な政治運動に携はれるものぢやない。そして宰相の地位は前にも述べたやうにプレジディアールといふ一種獨特の制度の下に條件づけられてゐるのだから、この地位に在りつくために中々一筋縄で往く譯がない。相當なイントリーグもいるだらうし、人知れぬ資金の調達にも苦心したことだらう。

然り、今日の狀勢に於てドイツの內閣を組織する方法がたゞ他の政黨との聯合妥協のみであることは既述の通りだ。だから今回の聯合內閣はヒットラアのナチスとフーゲンベルグの獨逸國民黨との抱合に依るものである。元來フーゲンベルグとヒットラアとは以前から餘りそりの合ふ仲ではなかつた。それはヒットラアの傲慢がさせた結果なのかも知れない。フーゲンベルグは今迄ヒットラアのためには隨分骨身を惜まず世話をやいてやつた男だ。獨逸國民黨がドイツの第二黨

の地位にあり、ナチスなどはまだ二十人の代議士しかない豆政黨であつた頃、フーゲンベルグは將來ナチスに見所のあるのを發見して、自分の黨の投票を殆ど犧牲に供してまでナチスの膨脹を助けたのである。それがためフーゲンベルグの國民黨はお話にならぬ小黨に落ちて了つたが、反對にヒットラアのナチスはむく〳〵大きくなつて遂にドイツ政黨中の第一黨に躍進し得た。

フーゲンベルグは自身の政黨を犧牲にしておけば將來ナチスと聯合して政權を收攬し得るものと目論見てゐたのである。その瀬踏みのためか彼はブリュニング内閣の時、ワイマア憲法の破壞を目標としてハルツブルグの溫泉地でヒットラアのナチスと鐵甲團と土地同盟とそして自分の獨逸國民黨との大同團結を計つた。これを世に『ハルツブルグの聯合』といふ、然しその時はまだヒットラアのナチスのみが旭日登天の勢を示してゐたものだから、傲慢なヒットラアは小黨の領袖たるフーゲンベルグや、ナチスの突擊隊のために影の薄くなりかけた鐵甲團の團長ゼルテなどと政權を分配する必要はない……自分は自分で單獨にやつてみせると敦圉いたものだからフーゲンベルグの肝入りも一時畫餅に歸した。

七

然しフーゲンベルグといふ男は中々喰へない代物である。彼は東プロイセン及舊獨領のホーゼン地方でコミサールをやつてゐただけに、プロイセンに隱然たる勢力を有する地主連とは昔から深い關係があり、クルップ會社の理事を勤めただけに製鐵工業及軍閥との因緣も淺からず、また自分自身で土地抵當銀行や農工金融結合を主宰して銀行業界に有力な地盤を持つてる許りか、ドイツ第一の新聞トラスト『シエアル』を支配してゐるといふ何でも屋の反動政治家である、彼の唯一の理想はプロイセン主義に依る帝政の復活に他ならぬ。

元來なら彼は自ら次期の大統領にもなりたい勃々たる野心を持つてゐる。然し今の所ヒツトラアに叛いては何事も成らざることを能く知つてるものだから、如何にヒツトラアに嫌はれても陰から恩を賣る態度を變へないのだ。何よりも彼はヒツトラアのために黨の基金を集めてやる努力を惜まなかつた。一體ナチスはどこから金をとつてゐるかは風評まち〳〵で中々捕捉し難く、中には外國殊に瑞典の故鱗寸王兼世界的インチキ師たりしクリューガアから貢いでもらつてゐたな

どと騒いたものもあるが、あれはナチス自身の打消しを待つまでもなく多分與太だらう。然しフーゲンベルグの肝入りに依つてブレーメンの『北獨羊毛』のトラストから軍資金を得てゐたことは事實らしく、從つて同トラストの破産に依つてフーゲンベルグ系銀行も亦おかげで大きな穴をあけた！

最近に於けるヒットラアの金主は何といつてもライン地方の製鋼業者にきまつてゐる。ヒットラアが組閣する前にコエルン市でフォン・パーペンとシエライヘル内閣乗取りの相談をした時にもヒットラアは、鋼鐵同盟の理事長たるフォエグラア及び大株主のシュプリンゴールムとに會つて密談を遂げたが、この兩人は共にフーゲンベルグの非常な親友である。

一體その密談の内容は何であつたかは分らぬ。たゞライン地方の鐵工業者が近頃ナチスの運動に對して援助の態度を示す傾向の特に強くなつたことには注意を拂ふ値がある。この傾向は何を意味するか？　他でもない。賠償問題の鐵則がドイツを運命づけてゐた頃まで（凡そストレーゼマンの晩年の頃まで）のドイツの製鋼業者はアルサス・ロレーンの割讓に依つて急激に勃興したフランスの製鐵業者と妥協提携する以外に活路がなかつた。誇張していふならストレーゼマンの

親佛態度もロカルノの平和精神も結局鐵を中心とする獨佛資本家の暫定休暇を意味した。然し乍らこの休戰狀態はドイツの製鋼業者がフランスの重工業者一般のために獅子の分前を取上げられ、自分は僅かに鼠の分前で滿足しなければならぬ情けない諦めを意味した。この際ドイツの國力が恢復し、賠償問題に頭痛を病む必要がなくなり、同時にフランスを敵として軍備を擴張するやうな政府が確立する見込があるならば、ドイツの製鋼業者(軍備に關係ある機械製造業者)は何を好んで獨佛の提携だの『パンオイローパ』だのとの標語の下に鼠の分前を繼續する必要があらうか？　寧ろ反對に關稅の運用によつてフランスの銑鐵業者をドイツの石炭業者及精製工業者に屈從せしむる方策を立て、再び自國の軍需及機械工業に景氣の春を迎へるに越したことはない。この意味に於て最近のドイツの製鋼同盟の資本家は恐しくインペリアリズムに目醒めて來た。だからヒットラアが政權に渴えつゝ金がないといふ場合に、苦勞人のフーゲンベルグが仲へ立つて親友のフォエグラアやスプリンゴールム等の製鋼界の金融ブローカー連から黃白を捲上げさせることには何の造作もなかつた！

八

斯の如くしてフーゲンベルグの暗中飛躍は效を奏し、一度失敗してゐたハルツブルグの聯合は復活した。製鋼業者からの軍資金もタップリ集つた。殘るはたゞ今日のプレジデイアール制度の中心に立つヒンデンブルグ大統領をうんと言はせる問題が殘るだけであつた。老大統領には社會民主黨に關係のあつた自由主義者の息子さんとマイスナアといふ國務祕書がついてゐるだけに、マイマア憲法の改革を目的としたり、既成政黨の利益を其儘に代表したりする政治家にはどうしても政權の印綬を與へやうと言はないのである。其點でヒンデンブルグはヒットラアもフーゲンベルグも大嫌ひだ。ハルツベルグ聯合の中で個人的に老元帥のうけがいゝのは鐵甲團のゼルテ位のものだらう。

だから今迄幾回となくヒットラアを宰相たらしむべく運動するものがあつても老大統領は——

といふよりもその鞄持の國務祕書マイスナアといつた方がいゝかも知れぬが——頑としてこれを退け、黨人ならざる範圍の中から、自分の氣に入りのフォン・パーペンを起用して宰相たらしめ

た。又パーペンが無能でヒットラアヨフーゲンベルグの反對を買ふと、今度はその閣僚中から、矢張り自分の一番氣に入つたシュライヘル將軍に內閣を作らせてみた。然しその何れもがハルツブルグ派のボイコットに逢つて成功しなかつたのだ。

殊にシュライヘル將軍の如きは今一度左翼に好感を賣つてその支持を受け得るものなりや否やを試驗するために、最後の切札を出して、社會政策通で勞働組合側から受けのいゝゲーレケを勞働相たらしめたけれど、豫期の目的に達し得られなかつた。ゲーレケの與ふる位の生溫い好餌で近頃益々鼻息の荒い共產黨が沈默する筈はなく、目下脊髓が碎けてゐる社會民主黨の積極的援助さへ見込がつかないのだ。從つて目下の所超政黨內閣が決定的に右翼を叩きつける實力がない限り、少しでも左翼に望みをかける態度は誰れがやつても絕望なることが裏書された。

玆に於てハルツブルグ派に始めて春が廻つて來たのだ。ヒットラア嫌ひの老大統領へ取なしの仲介者は老大統領お氣に入りのフォン・パーペンとある。從つて『大アドルフ』が宰相なら、パーペンは大統領への仲繼役として、卽ちプレジデイアール制度の面目を立てる人質として副宰相の地位に就かざるを得ない。同時に國民黨のフーゲンベルグが農商相で當分我慢しなくちやなら

ぬのも餘儀ない始末だらう。

ヒットラアの現想からいへば――則ちナチスの私内閣の順序からいへば――自分が大統領となり、フリツクが内相、ローセンベルクが外相、ゴエベルスがプロイセン最高委員、それにクーベ、フエーダア等が財政及經濟のことにあたることになつてゐたらしいが、斯樣なナチス獨裁の膳立は當分在野時代の夢と消えた譯だ。現實は御大アドルフが宰相となり、フリツクが内相に座り、ゴエーリングが辛ふじて無任所大臣に割込み得ただけで、その他の顔觸れから判斷しても、ヒットラアは矢張りプレジデイアールの制度に屈從したのだ！

さればこそ今迄あれ程氣のよかつたヒットラアが、ラヂオを通して發表した施政の方針が、意外にも消極的に聞えるのはこの邊の消息をよく物語つてゐる。但しヒットラアがドイツの普通の内閣でみるやうに短命に終つて、單にコンヴエンシオナルな宰相であつたといふに過ぎなくなるか、それとも假令消極的でも四ケ年の國勢恢復計畫を實施し、それに依つて全ドイツを眞個にナチスの國となし得るまで存續し得るか、その一か八かの大きな運命は總て維れその後來る狀勢の轉變如何にかゝつてゐる。

得意の絶頂にあるエキゼレンツ・ヒツトラアも、その結果でどうなるか……こんな大きな心配にぶつ付かつたことは閣下とても將に生れて始めてだらう。

國民勞動祭に於けるヒットラアの演說

言ふ迄もなく、ヒットラアは雄辯家である。

彼の演說に、學問と論理を、求むるものは、失望するだらう。或は啞然として、開いた口が塞がらぬかも知れぬ。或は、その無益な言葉の手品に、抱腹絕倒するものがあるかも知れぬ。要するに內容が空粗至極に見える……

然し、空粗至極に見えるのである。その原稿を書き取つて、新聞や雜誌に轉載したのを讀んで見たら、空粗至極に見えるのである。

それだのに、彼が一旦演壇に立つて、その原稿を口づから獅子吼する場合、直接にそれを聽く者は、上下老若を問はず、忽ち、一種のヒプノチズムにかゝつて了ふ。從つて、嗚咽がある、狂欣がある、嵐の如き喝采があると共に、森閑として水を打つたやうな嚴肅さが支配する。

だから、彼の言葉は、決して、論理や統計の組合せでもなければ、ヂアレクチータと、シロリ

ズムの整列でもない。それはたゞ、彼の素朴至純な感情と、悪く言へば、向ふ見ずの自惚又は鼻息、善く言へば、鋼鐵の如く又灼熱の如き、一切を貫き、一切を燒き盡さんとする意思とが單に音響の形式に、メタモルフォーズしたものに過ぎない。要は直接に彼の謦咳に接するに於て、萬斛の意義がある。何故に世を擧げて、人が彼に追隨するかの消息が分かる。それを速記して、文章に直ほして、然も不完全な外國語に飜譯したやうな場合は、もう「ヒットラアの演說」ではない。それは智慧の闡明には役に立たぬ。

彼の演說それ自身が、既に叡智の闡明とは緣が遠い。それはたゞ平均した人間の魂に對する適切な訴へに過ぎない。人間を、逆說や、皮肉や、諳示や、辯證等の變態的な神經質的な興味から單純な、素直な、原始的な態度に立戻らせる「氣を注え」のりんとした號令に過ぎない。然し、それかとて、ヒットラアの聲を神がゝりな宗教のレヴアイヴアルを想はせる啓示と考へるのも間違つてゐる。學問でもなければ、宗教でもなく……彼の聲は、純然たる倫理のそれなのだ！　曰く倫理の社會化！

そんな工合なので、今左に本年五月一日にテンペルホーフ廣場で、勞働の大衆に叫びかけたヒ

ットラアの演說を、逐次飜譯して揭載はしてはみたが、それに依つて「ナチス學」の理論的研究にでも役立つものと思つたら、讀者の方が邪道だ。それに拘らず、世にはヒットラアといふ人物は雄辯家だといふが、一體どんな內容の演說をするだらうと知りたがつてゐる人々が極めて多いものだから、さういふ人々の的の外れるのを知りながら、否寧ろその的を外させるために、左の飜譯を敢て載せておくことにしやう——

× × × × ×

ドイツ國民僚友よ！

五月は來れり（Der Mai ist gekommen）——とは我等ドイツの最も古い民謠なることは諸子も知つてゐるだらう。五月の春光が靜かに訪れるときは、言ひ知れぬ歡喜と、愉快と、明朗とに胸躍らせるのは、この國民の幾久しき慣せであつたのだ。然るにこの樂しかるべき春の日が訪れてきても、生の喜びはいづこへか姿を晦し、醜つけき爭鬪と、兄弟牆に鬩ぎ合ふことのみを、象徵する悲しい時代を我等は經過した。

春の希望に輝かく國民を、いつの間にか一つの教義が憎惡と、苦惱と、受難と、兄弟喧嘩に變へて了つたのだ。こゝ數十年といふものはそれに依りて、五月一日の度を重ねれば重ねる程、ドイツ國民は、慰めなく、分裂し、紛錯する記念碑の數を增していつたものだ。

斯くては、何時までも續き得られやう筈がない……悲歎と、哀號との憂鬱な日も消えて、結局は、民族が老ひも、若きも、手を握り合ひつゝ心から我等の樂しき歌を唱ひ得る時が來なければならなかつたのだ。然り、今が正しくその時である。ドイツの民よ、再び喜びの古き歌を唱へよ……Der Mai ist gekommen！……我が民衆の覺醒は來れり！

今や階級爭鬪と、永久の摑合ひや憎惡、そは最早や悉く姿を晦して幸にもずつと以前の如き我が國民の高揚と、偉大なる共同一致との象徵に變化してくれた、さればこそ、我等は特に今日この日を選び、再び我が國民の力と强さを、奪還し得たる日であると共に、創造的な勞働を象どる紀念日に決めて了つた次第である。創造的な勞働——それは今迄のやうな嫌惡に依つて、職場や、工作場や、事務所や、帳場や官衙に束縛さるゝものでなくて、良き意味に於て、我が國民の存在と、生活とのために、奉仕さるゝ場合には、到る所に、且つ永遠に、認められ得るあの創

造的な勞働のことなのだ。

ドイツ國民は、重き困憊苦惱を背負つてゐる。その困憊苦惱たるや、敢て國民に勵勉努力の足りないがためではない、もう働くのは嫌だと、怠けてゐるがためではない。否數百萬の民衆、そは、働きのある我等の兄弟だ。數百萬の農民は、昔も今も變りなく鋤を手にして田畑に出られるし、數百萬の勞働者は、依然として旋盤場の横に、螺旋臺の傍に又鐵敷の前に立つてゐるのだ。彼等の數百萬は、勉しみ働いてゐる。他の數百萬は勉しみ働らかうと希つてゐる。たゞそれが出來ないのだ。

何としても、絶望的に見える。困難と窮乏と懊惱と悄悴と。もう、斯うなれば苦しい此の世の生を絶つたがいゝと死を選んだものも數萬人に上つてゐる。單に、不幸と艱苦のみに見舞はれる現世なら、寧ろ、そこに永らへるまでもなく、一切を忘れ得る彼の世に匿れた方が增しだと考へるのは人情かも知れぬ。とそれにしても、何たる怖ろしき悲劇ではないか……否極端な絶望だ！ドイツ國民は、自ら崩壞し、衰滅し、內部の爭ひで、精根を疲らせて悄悴し切つてゐる。自己の意思、固有の力に依りて、强くならうとの希望は次第に薄れ行く。されば、數百萬の者は、他の

世界を見廻し、或は外つ國からの助けで、いくらか幸福が齎示するのぢやないかと、賴りない、また情けない、期待をさへ、かけてゐる。然り、國民が瓦解したのだ。國民の瓦解と共にその生活力が、生命を主張する力が瓦解したのだ。それが「階級爭鬪」の我等に示した覺面の應報である。この怖るべき業の報ひからして、我等は、大に學ぶ所があらねばならぬ。否、我等は學ばうと欲して、然も徹底的に學び得たのだ。（喝采）

斯くして、我等は、この學問より推して、先づ我が國民の再生恢復のためには一體何を第一の急務と認むべきであらうか？　曰く、ドイツ國民は、再び昔日の友誼を結び合ひ、お互ひに親しく知己になり合ふこと。卽ち、今日まで職業の種類によりて、人工的な階級に分裂し、自己の持場だけに、嚙り付き、淺墓な身分だけの考へと狂氣の如き階級意識とに墮し、相互に、全然赤の他人となり合つてゐる數百萬の大衆は、再び、正しき道を、發見する必要がある。これは、迚も難かしい、一筋縄では行かぬ大仕事だ。懷へ、今迄七十年間も狂氣沙汰な考へが、政治的理想なりとして、人間の頭に染み込んで支配してゐたのだ……既に七十年もの永い歲月の間、國民共同體を破壞する仕事だけが、政治的示命でゝあつたのだ……それを一遍に人間らしい悟性に立戻

させることは、勿論容易な業ぢやない。それかとて、我々は躊躇しちやゐられない。そして絕望の匙を投げてゐらるべきぢやない。人間の手で築いたものだもの、その人間の手で取毀しが出來ぬことはない筈だ。人間狂氣沙汰が發見したものなら、正氣な人間の見解に引戻すことは、出來るに決つてゐる。

勿論、お互ひに知り合ひ理解し合ふのは、數週間とか數ケ月とか、否數ケ年とかに完成し得る仕事ぢやないだらう。然し、我等は斷乎たる決意の下に、ドイツの歷史に於ける、この偉大なる任務を果さうとしてゐる……我等の決心は他でもない、怎うかして、ドイツ人相互の間に、ドイツ人であるといふことを、意識せしめ、若し、それを欲せざる者あらば、寄つて群つてそれを强制することだ。（喝采）

だから、その際特に必要なるは、今迄寧ろ分離分裂に使はれてゐた習慣や施設があるならば將來は、寧ろそれを逆用して、大きな大同一致に結びつけるやうに努力することだ。その點で、今日五月一日には偉大なる意義が伴ふ、然り、メイデーは、實に我がドイツに於ては、今より未來永劫に、勞働の大祭日として壽き祝はるべきものである。この祭日に依つて、我々が、國民とい

ふ大きな車輪の一つの枠であり、お互ひが共同して、始めて車輪が圓滿に回轉前進するといふ自覺の下に、各人が精神上の愉快な知己になり合ふ機會を作り得るのだ。

されば、我々はこの日に對する次の新しい標語を掲げざるを得ぬ。曰く、「勞働を頌め勞働者を敬へ！」（"Ehret die Arbeit und achtet den Arbeiter !"）この標語を實行するのは、中々骨の折れる仕事だらう。今迄永い間、世は勞働を賤め、勞働者を虐げることのみに、馴れてゐるのだから、國民の大部分をして一足飛びに、その逆の態度をとらしめやうとするのは、難かしい事には違ひない。

然し、これから先きは、ドイツ人たる勞働者は、悉く國民の僚友であり、勞働に依りてその義務を果し、而も國民に不可缺の分子なることを須臾も忘れてはならないし、又國民は、たゞ一つの政府や、一つの決つた階級や、又その叡智等だけの勞働によりて成立するものでなく、一切の勞働の綜合に依りて、生存せることをよく覺えてさへをれば、必ずこの標語の內容は實現が出來る？

世には、誰れそれはどんな種類の仕事に從事するからといふので、尊敬の程度を違へるやうな

人が澤山あるやうだが、それは不可い、仕事の種類などは何でもいゝ、それを如何に完成するかといふ、その如何にといふ點に尊敬の大小がかゝつてゐるのだ。國民の中に、年が年中、一生懸命に働いて、それでゐて、金持になれる望みもなければ、否それ所か、毎日の生活さへ滿足させ得ない不幸な勞働者は數限りなくあるのだが、さういふ人達こそ先づ以て、眞個に認められ、評價されなければならぬ權利がある。何故ならば、斯かるけなげな人々の理想主義こそ、一切の存在と生命とを可能ならしむものだから。

勞働が標準だ。勞働に從ふものは、市民である。それは我々の共同體の貴重な分子である。この際、總ての身分には、他の身分の意義をよく敎へ知らしめることが最も肝要だ。(ブラヴォ！喝采)だから我々は、ドイツ農民の本質と必要とを知らせるために、都會に行き、又ドイツ勞働者の意義と、價値とを知らせるために、田舍に行き、又インテリ階級にもそれをよくいつて聽かせる積りでゐる。そして勞働者の許に到るのも、又農民の許に到るのも、結局、彼等に次のことを敎へたいがためである。曰く、ドイツ精神なき所に、ドイツの生活なきこと。曰く、總てのものは、相倚り相輔けて、一個の、公共體を形成せざるべからざること。曰く、その總てのものとは

精神と頭腦と鐵拳とに他ならぬ。勞働者と農民と市民と。（ブラヴォ！――喝采）されば こそ、この五月一日の祭日は、出來るだけ、盛大にして、全ドイツ國に亘り、都會も、田園も差別なく總ての職業、總ての階級身分にある數百萬の國民僚友に、一切の勞働の價値を闡明すべきであり同時に國民の側も亦一年にたつた一度のこの共、勞共 働の偉大な象徴の下に、皆なが殘らず集つて心からなる祝典に參加しなければならぬ筈だ。何の祝典？――曰くドイツ的勞働の祝典！

それから、この五月一日は、同時に又ドイツ國民の一個の覺醒を促がさせる要がある。それは他でもない。即ち、勞働も勤勉努力も、それが國民の力、及び意思と提携したものでないなら、單にそれだけでは、生命を創造しないといふこと、換言すれば、勤勉と力、勞働と意思――これは一緒に作用するものでなければならぬ。勞働の背後には國民の鐵拳が、擁護と保養の用意をして控えてゐる場合に限り、勤勉と勞働とから、眞の恩寵が湧き上つてくるのだ。

斯くして、この國民の大祝祭日は、又ドイツ國民に次のやうな自覺を喚起させる譯だ。曰く、ドイツ國民よ、汝は一致する時に强し……汝が今迄の如き階級闘爭の精神を胸の中より斷然かなぐり棄てゝ、自分の勞働、自分の力に從ふ時に、限りなく偉大なりと。我等はそれに添へてドイ

ツ國民に今一つ次の意識を持たせ度いと思ふ。曰く、我々は、この世に於て、日常の糧が保證されるやうな、ドイツ國民の一國家を夢みてゐる、そして、我々はその實現のためには、今全身を拳に握りしめた力を要することを知つてゐる、更に又我々はこの國家は、將來如何なる他の世界からも、金を借りたりしてはならぬことをも知つてゐる。

今日マルキシズムが、勞働を云々する場合、彼等に依りて代表せらるゝ國家なるものは、一個の資本主義的な世界の救助だけを、念頭に想ひ浮べてゐるのだ。そんな怪しからぬ國家に對して我々は將來たつた一人だつて、技術も、職工も、商人も、化學者も、貸してやつてはならぬ。幸に、我が國はさういふものを一切持つてゐて少しも外國のお世話になる必要はない。そして我國の持てるものは、總て、これ我國に於てのみ、有用に利用さるべきものだ。我々の義務はそれを保護し、將來の大きな任務のために、役立て得るやうに育成して行くにある。(ブラヴウ！)

これに對して、我々に敵意を挾むものは答へるかも知れぬ……それは單なる理想だ、いつまで經つても、旨く往くものか、實現ができるものかと。我が友よ、現在この瞬間に、我がドイツでは、五千萬の人間が斯かる理想を心から、要望してゐるんだぞ。つい、この前までは、僅かに半

打にも足りない同志のみが、この理想に憧れてゐたのに、今では數百萬數千萬のドイツ人が、この星明かなる野天井の下で、この現想への協力を誓つてゐる事實を一體何と見るか。(喝采)

人類に賦與された贈物中、これよりも偉大なものは他にない筈だ。勿論、總ては、困難に戰ひ獲られなければならぬ。一國民の高揚も、亦運命の力で容易に授けられ得るものでない。內面的に達成せらるべきものだ。

我々は、この高揚に奉仕するだらう。我が國民の自由を獲得するだらう。そして、今迄のマルキシズムが單なる紙上の理論、見かけは美しく蠱惑的だが、實はそれを實現してみても、我が國民にとり役に立たぬ又幸福をも齎さない一片の理論なりしことを、判然證明するだらう。要はこの一番麗かな春の一日を選り好んで忌はしき爭鬪の象徵となすべきぢやない。永遠の勞働の象徵となすべきだ。分裂と、崩壞との、象徵となすべきぢやない。結盟と、勃興との象徵となすべきだ。見よ！　我々の敵が如何に口惜しがつて努力してみても、今日、我々がこの五月一日に欣喜と希望とを持て、相集ふた程の、盛大な式典は擧げ得た例しがなかつたのも、それを想へば理の當然だ。(喝采)

以上述べた深長の意味が今日この五月一日に始めて蘇生つて來たのである。さればこそ、全獨數百萬の民の心は、斯程まで悅びに漲りつゝ、國民的再興の大業に參加しやうとの誓ひをたてつゝある所以である。斯くして我々は、今日この祭典を始めて祝ふが故に、我々はこゝに、我々の眼前に横はる時代に於て、我々の目標は一體何であるかを、尠くとも簡單に知つておく必要があるだらう。

曰く、第一の目標は我等の權力、即ち現に我が國民の中に確固不拔の根を据えた所の新しい思想、新しい信仰を將來永久に消滅させないで、益々以てそれを完成せしむるために戰はうとすることである。

我々の戰ひは、新しき觀念を全獨の上に勝利者たらしむるため、(ハイルの絕叫)漸次この全ドイツ國民を、その牽引力の圈內へ引込むことにある。斯るが故に、我々は飽くまでも、勇敢にして、我が國民の族印の下に結合し、これを阻止防害し得と信ずる知き在らゆる敵に、防禦の手段を講じやうと思ふ。(ブラヴォ！)第二に我々は、今から早速、我が民族の中に斯かる感情斯かる意識を自發喚起せしめ、且つ益々高揚せしめる樣に努力する積りだ。我等は過ぎこし時を知る。

そは、我が國民が、世界中では一番腐甲斐なく、偉大なる行爲には無能力で、一切の外國が主張する權利程に、該當しないものだといふ、情けない諦めの注射ばかりしてゐたもので、やゝさ、無能の塊りを、自ら人工的に作り上げて得々としてゐたものだ。何故なら、我が國民を久しく邪道に陷入れてゐた無氣力極まる政黨制度なるものが、政權支配の唯一の方法なりしがためである。

斯かる魔法にかゝつたやうな、呪詛の輪を打ち壞し、我が國民に確乎たる新しい信念を注射し直ほすことが我等の務めだ。その信念とは他でもない。否、我がドイツ國民よ、お前は、階級的に二分したものぢやない、若しも全世界が寄つて群つてお前をさう信じさせて置かうと努力したつて、(ブラヴォ及ハイルの叫び!)お前は到底第二流國に墮すべき柄ぢやない、低腦な民族に數へ込まるべき謂はない……ドイツ國民よ、汝自らに鑑み、過去を追懷し、汝の父祖の鴻業を想ひ、否現代の後裔の人類のために盡した寄與を考へてみろ……今から過去十四ケ年の壞敗をきつぱり忘れて、二千年に垂々とするドイツの光榮ある歴史を發揚しろと!(ハイルの叫び)全獨に遍き我が國民僚友諸君よ、奮起せよ、我々は諸君に眞心の結ばれた感じよりして當然この確信を諸君に與ふるために、この第一日から呼びかける……ドイツ人よ、爾曹は一個の民族である。然

も自ら強からんと欲すれば、最も強かるべき一個の民族である。（ブラヴォ！）

今日ドイツに示威運動する無量數百萬の民衆は、新しく胸に抱いた見解を持ち、新しく肝に銘じた力の感情を持つて、再び家路にと歸るであらう。然し、我が友よ、明日の壓迫は、昨日のそれよりもなほ一層強いと覺悟してゐなければならぬ。今日、或は我等に暴虐を續け、或は更に束縛の鐵鎖を投げかくるものあるとも、最早や我等に、卑屈從順を強ゆることは出來ない。（ハイルの叫び）

今日、我がドイツ國民は、始めて自分自身の力强さを自覺した。自己に信賴し始めた。然乍らドイツ國民よ、汝は自己に信賴する許りでなく、更に汝の政府に萬腔の信賴を寄せよ。そは汝と心からなる結合を感ずるもの、汝自身の一片たるもの、汝自身に屬するもの、汝と共に戰ひ汝の生命を擁護するものに他ならぬ。（ハイルの叫び）そは汝ドイツ國民よ、汝を自由と、幸福に導かんとする以外何等の目的をも持たぬものだ。（ブラヴォ！）されば、我々は今日は同時に、未來に對する宣言として、結局一個の行爲に依り、我々を可能ならしめ、然も今年のうちにも早速實現せしむるであらう所の大きな義務を約束して置きたいと思ふ。曰くそれは勞働奉仕の制度だ。

我々が、今勞働奉仕に義務あることを始めてこゝに公表する場合、それを聞いた瀕死狀態のマルキシズムの世界は、依然勢込んで冷笑惡罵を放つであらう。何だそれこそプロレタリアートに對する新しい攻擊、勞働への攻擊、勞働者の生命を辱奪せんとする攻擊の手段ではないかと。何故そんな批評をするだらうか？　彼等は、それが決してプロレタリアートへの攻擊でもなければ、更に勞働者の生活への攻擊でもない、寧ろそれは筋肉勞働を凌辱するかの如き怪しからぬ偏見を攻擊することだ位のことは能く知つてゐるのである。ちや、その偏見を全ドイツから根本的に芟除しやうといふのが、即ち我々の欲する所なのだ。（ブラヴォ！）

斯かる偏見は、我が國民の中より斷然引つ離して了ふべきである。恰も、農奴制度の支配した過去の昔に、兵隊を嫌ふ偏見が在つたと同じやうに、我々の生存してゐる今日はまだ數百萬の人々が、筋肉勞働に對する意義と價値とを理解せず、その上に又ドイツ國民は、その精神的プロレタリアートに、飯を喰はせていく見當がつかないやうな時代なのだ。我々は、ドイツ國民が、勞働奉仕の義務によりて、教育され筋肉勞働者は決して恥づべきものに非ず、それに從事するのはその他の仕事と同じ樣に、光榮に値するものなることをの、認識に達せしめやうと思ふ。（喝采）

それ故に、我々の今の斷乎たる決意は、ドイツ國民の一切を、それはどんな人間でもいゝ、上品に生れついて金持であらうが、それとも貧乏人であらうが、學者の子だらうが、工場の職工の子であらうが、誰れでもかれでもお構ひなしに、――一生のうち一度は國民當然の義務として、筋肉勞働に從事させやうといふのだ(喝采)。さうしておけば、どんな人でも將來責任ある地位に立つた場合は、自分でも一度は眞個に他人に服從して働いた經驗があるのだから、玆に始めて他人を强いて命令する資格も出來る譯だらう。

我々は決して、マルキシズムをたゞ外觀的にのみ取除き得るなどゝは思つてゐない。否我々斷乎として、その前提を拔去らうと決心してゐる。我々の方に來る人々のために、その前提を剪除しやうと考へてゐる。斯かる前提の一としては、例へば各人を顎で使つて螺旋臺や、機械や、鋤鍬の前に立つ友を、上から見下させやうといふやうな、曖昧な考への如きがそれである。所が我々は、誰れかれの區別なく、ドイツ人の一切に勞働を修得させるのだ。否自分で勞働を味ふといふ許りでなく、勞働者自身と知己にならせ肝膽相照の間柄にさせるのだ。さうすれば、誰れだつて他人を賤めたり、蔑んだりする權利なきことが、よく分かり、自分を他人より何等か、より

以上のものに考へる精神を捨てゝ、一切が公共體の中に、結合されなければならぬ眞意が肝に徹してくるのだ。我々は、今年になつてドイツの歴史始まつて以來、始めてこの偉大な倫理的思想を現實に導かうと思ふ。今から四十年も經つた後を考へてみるが宜い。今日までの勞働とか特に筋肉勞働とかいふ言葉の意義が、全然變つて、嘗て世人が農奴に就て考へてゐた觀念が消えて、その代り軍隊を見るやうになつたのと同じやうな觀念に推移して行くことだらう。

又我々は、今年のうちに多數決を基礎とする厄介千萬な束縛を解放し、獨創的なイニシアチヴが、自由に活躍し得るやうな、更に一層大きな任務を實現させてみる積りである。それも單に、議會に於てだけの問題ぢやない。更に經濟の世界に於て、それを實行させやうと思つてゐる。由來多數票決なる制度は如何なる場合に於ても、理性の勝利を意味しないばかりか、却つて、不合理、不徹底、不確實、孱弱及怯懦をのみ意味してゐる。我々は、國民全部に對する自由と、創造的精神と義務との綜合が發見されざる限り、我が經濟は、決して擡頭し得られないことを知つてゐる。それ故に、我等の任務は、それ〴〵の契約に一面の意義を與ふることに在る。則ち人間は契約のために生くるものに非ず……契約は人間の生活を可能ならしむるために存在すと。

更に我々は今年のうちに有機的な經濟指導への第一階段を据えるやうな努力を試みる積りである。

それには極く根本的な智識から出發しなければならぬ。要するに、國民的民族的經濟的生活の根である所の農民から始めないでは、勃興若くは擡頭を云々する資格はない。道は農民から勞働者へ、それから、インテレクチュアルな人々の方へついてゐる。故に、第一着として百姓と、その經濟を健康にすることより始め、それに依つて、其他全體の經濟體を壯健にする前提を築かうといふのだ。過去十四年はその逆であつたが、その結果は奈何？　都會も救濟されなければ、勞働者も中產階級も一として浮ばれなかつた。否、破壞されて廢墟になつた許りだ。

それから次の大きな任務――則ち新たに勞働の機會を作つて、失業者を失くすること。それは二つの具體的な群に分けられる。第一は、私的勞働の機會を作ること。こ方面は、今年から特に全力を傾注する積りであつて、先づドイツの公官衙、工場及住屋の新築修繕の仕事にだけでも、早速數十萬の失業者を需要することになつてゐる。それから第二だ。今から我々は斯ういふ場合、この場所から實に始めてのことだが――全獨の國民に次の如き訴へをしやうと思ふ。曰

く、ドイツ國民よ、勞働の機會を作る問題が、遠い空の星の世界で解決さるゝものだと信ずる勿れ。汝自身がそれを解決することに協力幇助すべきだ。勞働の作らるゝものに、希望と信賴とを置かねばならぬ！

然乍ら我々は、若しもこの豫言的な恩寵が來ないなら、一切の人間的勞働は、結局無益なものだといふことを知る。我々は、何もかも將來へ推しやつて、責任を免れやうとするあんな連中とは違ふ。否、否、我々は勞働を欲し、仕事に從事することを欲し、我が國民のための戰ひ、我等の問題我等の使命のための戰ひを戰ひ拔かうと欲してゐる。その際、重なり重なつた非常な困難に逢着するだらう位のことは、百も承知だ。一切の贈物を易々と無價では頂戴が出來ぬ位のことも、充分覺悟の前である。

過ぎし日の十四ケ年の道は、今日に到るまで永劫の戰、百折千挫殆ど絶望に近い藻掻きの道であつた。これから先の未來の道だつて、決してこれに勝るとも、劣ることなき、荊棘が横はつてゐることだらう。我々の方から平和を欲したとて、世界は衆を恃んで我々を糾彈し、反噬し、我々の權利と、生存とを、認めやうとせず、鄉土を擁護せんとする我々の正義を、容れやうとはし

ないだらう。我がドイツ國民よ、世界が我等に敵意を持續する限り、我々の方でも亦その程度に應じて益々一致結束を必要とする。(喝采)我々は不撓不屈の精神を以て、世界に確信を與へてやらなければならぬ。曰く、君達はその欲する所を爲し得、然し乍ら、たゞ我々に屈從を迫り、桎梏を認めさせることだけは、永劫に不可能であり、君達が如何に策動するとも、我々の平等權の要求を撤回さすことは到底出來るものではない。我々の中に裏切者あることのみを空頼みにする、君達に助力せんと誓ふ如きものを的にするなどは愚の骨頂だ。ドイツは眼醒めて團結してゐる。ドイツを想はぬ人間は一人だつて用捨しない狀態に達してゐる。(急霰の拍手大喝采)

我々は、我々の魂と、忍耐と、意思とに依つて、至誠以て國民の再興に資せんことを期す。我々は手を束ねて、たゞ「主よ我等の縛めを解き給へ！」などと全能の神に敢て哀訴しやうとは思はぬ。我々は、仕事し、勞働し、互ひに兄弟の誼を結び、祈り、求むべき時の來るのを努力して待つのみだ。そして、その時が來たなら、始めて、上下聲を揃へて、神に次のやうな祈禱を獻げやう……主よ、汝は我等が今一切を如何に變化させたかを親しく觀はし給ひ、嘉し給ふことならん……ドイツ國民は、最早や不名譽な、恥晒しな、我れと我が身を叩き毀す、臆病千萬な狐疑

逡巡な國民ではなくなつた。否、主よ、ドイツ國民は、再びその魂に於て、意思に於て、忍耐に於て、犧牲の精神に於て、昔と同じく強くなりしことを照覽さるゝならむ。主よ、我等永遠に汝と偕ならんと欲す。いざ、我等が自由の爲めの、從つて我等が民族と祖國への爲めの戰ひを祝福し給はらむことを！

（激濤の如き喝采暫し歇まず——大衆は軈て期せずしてドイツランド・ユーベア・アルレスの國歌に唱和する）。

カイザアは歸國するか？

一

既に、シュライヘル將軍内閣の時代に於て、共和國の安寧秩序を維持するための大統領令の中から、前カイザア・ウイルヘルム二世の歸國禁止に關する條項は削除されて了つた。ウイルヘルム・フォン・ホーエンツォーレルンと呼ぶ廿世紀の十年代の世界を、震駭させた當年つとに七十四歳の老翁は十五年間眺め飽きたドールンに於ける配所の月に袂を別つて、いよ〳〵その白髮の姿をウンタア・デン・リンデンに現し得るお許しが出てゐるのだ。だが、彼はそのお許しに應じて果してあたふたと歸るであらうか……それとも……

尤も歸る歸らぬそれ自身は大した問題ぢやない。ついこの前に、前皇太子がドイツへ歸國した場合だつて、社民黨の機關紙が膽を冷して天地が覆るかのやうな社說を書きはしたが、今では

ルフト・ハンザの飛行機に乘つたり、ニツカアを穿いてゴルフ場をかけずり廻つたりしてゐるけれども、誰れしも案外平氣な顏をしてゐる。だから、前カイザアの場合でも、成程いざ歸國となれば、當分は外國新聞の特派員なんか、大汗になつて足を摺子木にすることだらう。定めしホテル・アドロンカクテルでも賭けて亢奮することだらう。歸國か！　否か？　然し小生は『ドイツ通』を以て自任するものであるから、寧ろその賭事からは御免を蒙る。一體『何々通』なんな奴の言ふことは、殆ど當になるものでない。當ればそれ見た事かと收まりかへるし、當らなければ測候所の天氣豫報のやうに、その逆が眞理である如く知らぬ顏をする、故に小生は自分の信ずる所を全然信用しない。

然り、前カイザアが私人としてドイツに歸るといふこと、そしてドールンでやつてゐたと同じやうにホツダムの離宮內で薪割りでも續けるだらうといふことは別に大した問題ぢやない。歸つてもいゝと許しが出てゐる以上大に歸り得る。それよりももつと大切なことは——前カイザアがその『前』の字を削つて了ふやうな歸り方をしやしないか？……ドイツ國には或は復辟の用意ができてやしないか？……現に著しく右轉を辿りつゝあるその政界は、今や以前のビスマルク式ドイ

ツ帝國を再現せしむる迄に爛熟してゐるのではないか怎うか？　これはカクテル一杯位のセンセを離れた由々敷き大問題で在つて存する。

今日のドイツにはヒツトラアの『ナチス』が跳梁跋扈し、そは（假令最近十一月一日の選擧には三十餘名の黨代議士を失つたけれどそれでも）現に國會の第一黨は……ドイツの外交は近頃頻りに硬化して、賠償金の不拂政策には成功するし、軍備均等の主張は頑として枉げないし、更に進んで戰罪の汚名を解消し鐵のヴエルサイユ條約を根底より覆さんと努力してゐた……然も上に立つ大統領はつい先頃までドイツ全軍總司令なりし元帥ヒンデンブルグで、宰相は國防省と國防軍の中心人物たる將軍シユライヘル何れにしても政權執行の府ウイルヘルム街は洋刀の音がガチヤ〳〵と鳴つてゐる。

果して然らば、是等を綜合した全體の姿から推して今は昔の『ユンカア』（地主貴族出身軍閥）政治の再現を歸納し、今回のカイザア歸國禁止の取消をその當然の結果と見、從つてカイザアは復辟して近い將來にドイツ帝國が蘇生するものと一足飛びに考へていゝであらうか？

それは多少周章氣味に過ぎる感がある——

二

抑々カイザアを總司令部のスパーから和蘭のアメロンゲンへ逐ひ出した張本人は果して誰であつたか？

それはウイルソンであつた。一九一八年にドイツ軍の總崩れがたゞ時の問題となつてから、ドイツ人は上下を擧つて、休戰を要望し、嘗てウイルソンの橋渡ししてくれてあつた十四ケ條を、賴りに休戰を提議したのである。

然るに、ウイルソンは十四ケ條の言質には何一つ答へず、寧ろ休戰の條件には、眞に民意を代表するデモクラシイの新ドイツが、新しく頭を下げて來るのでなければ、休戰のお取次は御免を蒙るのみか、徹底的に專制軍閥の膺懲を續けるだらう、と恐しく威嚇したものだから、結局ドイツが眞面目に戰爭を止さうと思ふなら、則ち全軍總崩れの破局から免れやうとするならば、カイザアに詰腹を切らせることのみが絶對に必要となつて來たのである。その際彼に退位を迫つた眞の發頭人は、當時、偶然の政權を拾得した政治成金の社民黨ではなかつた。又カイザアの退位の

直後に可成重大な役割を演じたスパルタキスト（後の共産黨）もその當時はまだ殆ど政治的勢力圏内に上つてゐなかつた。寧ろ民間の政黨中でカイザアの退位運動に參加したのは、勞働階級の政黨でなくつて、ビスマルクの昔からホーエンツオレルン家のプロシヤ（新教）專制主義に反感を抱いてゐた中央黨（舊教徒）位のものであつた。然しその中央黨でさへ、カイザアの退位を直接に迫る役割は逡巡して引受けなかつたのだ。たゞ外部に控へて首領のエルベルガアなどが兎や角と民論を沸騰せしめてゐる程度に過ぎなかつたのだ。

その際、どうしてもカイザアが退位しなくちや修まらぬと腹をきめた發頭人は誰あらう、カイザア第一の股肱の臣であり、ホーエンツオレルン家（プロシア王家）の家の子郎黨たる『ユンカア』の親分であり、全軍總司令の元締であつた所の――ヒンデンブルグ元帥であつた！

尤も當時のヒーデンブルグ元帥は、恰も日露戰役に於ける大山大將のやうな地位にゐたものであるから、元帥の言葉と行爲との裏面には、兒玉參謀長に該當する將軍ルーデンドルフが控へてゐた。否當時のルーデンドルフ將軍といへば第一幕僚長といふ、その名前丈け聞くと至つて低くさうな地位に居ながら、軍國ドイツの戰略戰術の劃策は勿論、一切の政權を掌握執行する事

實上の獨裁者で在つたのである。この『ユンカア』の親分たるヒンデンドルグ元帥の影——即ちルーデンドルフが寢耳に水のカイザアに詰腹を切らせた！

尤も、一九一八年頃の軍國ドイツには、カイザアの譜代の臣たるエルベ以東三萬の地主貴族を代表する『ユンカア』の眞の勢力は殆ど失はれてゐた。今迄ならば、光榮ある普墺普佛の二戰役に參加し、ドイツ帝國の實力上の建設者として、カイザアの軍事統帥權の實體であり、事苟くも軍務に關しては全獨中の如何なる政權團體にも、一指さへ觸れさせなかつた筈の『ユンカア』の軍閥は亡びてゐたのだ。そは彼等が時代の推移に依つて、その權力が財界から放逐されたといふ意味よりも、寧ろ既に一九一六年頃マルヌの野に血の河を流し、コンヒエーヌの森に屍の山を築いて殆どフイジカリーに亡びて了つてゐたと見る方が穩當である。だから一九一八年頃の、ドイツの軍閥といふのはカイザア則ちプロシア王家の家の子郎黨たる『ユンカア』許りではなく、更に戰前なら『ユンカア』の閥族より、壓迫を受けて不平滿々たりし、東プロシア以外のドイツから出身した軍人連をも可成り多く含んでゐた譯だ。想へば、大戰終熄の直前には、西部戰線に丈でも、四百萬のドイツ軍が戰陣を張つてゐた。是等の大軍を指揮する將校團はマルヌの役で根

こそぎになつた『ユンカア』の殘黨だけで足り得た筈がない。有能な將校なら、西獨の出身であらうが、南獨の出身であらうが、續々拔擢して、參謀本部の樞要な地位に据ゑさるを得なかつた。是等の非『ユンカア』派の將軍連は、本來の『ユンカア』連と違つて餘程自由主義であり、從つて全獨的愛國の精神では遜色がなかつたとしてもプロシア王たるカイザアに對しては必ずしもその馬前に屍を曝す程の誠忠を誓ひ得るものとはいへなかつた筈だ。そして是等の將軍連の總取締格はカイザア退位の當時スパーの總司令部で幕僚長（Generalquartiermeister）を勤め——一昨年のブリユニング內閣時代には、副首相兼國防大臣——世人から『デモクラシイの將軍』の異名をとつたグロエナヤ將軍であるから面白い。然も前の宰相シユライヘル將軍（之れ亦非『ユンカア派』）はこのグロエナア將軍の片腕であり、一の子分であつた。

三

『ユンカア』派の饒將ルーデンドルフが、ドイツ帝國の總崩れを看破し、カイザアの退位を上奏しやうとは決心したが、遺が自分はホーエンツォーレルン王統の、家の子郎黨の運命を預つた責

任ある身分にゐて、自分の口から氏の長者たる陛下を、御退位あつて然るべし、とはどうしても切出せなかつた。そこで自分と一心同體たりし寛容海の如きヒンデンブルグ元帥に相談した結果遂にこの大役を幕僚長グロナア將軍にやらせることにした。グロナア將軍ならプロシヤ王家に對しては、外様格の成上りだから恐懼措く所を知らざる程度が餘程尠かつたためでもあらう。

グロナアの上奏により、寢耳に水のカイザアは嚇怒した。その表情は蠟細工の如く白く、硬直してゐた。彼はドイツの敗戰よりも、國内の攪亂よりも、何よりも『ユンカア』が自分を見棄てて裏切つたといふ到底信じられぬ事實に直面して、たゞ獨り奈落の底に突き墜される悲哀を感じたのだ。然し事實は事實で動かしやうがない。彼は老いの眼に涙を浮べたヒンデンブルグを尻眼にかけ、默々として和蘭行の特別列車に飛乘つた——アメロンゲンの小邑へ！

だけど『ユンカア』はカイザアを見棄てたのではない。『ユンカア』は主君を護りたくも既に自滅してゐたのだ。時代は移る。非『ユンカア』派の平民將軍グロナアはブリウニング内閣に入つて共和國の國防大臣となり、その第一の子分たる西ドイツ生れの如才のないシュライヘル將軍は同じくバーベン内閣の國防相を振出しに次には『ドイチス・ライヒ』の宰相に納つたのだ。然も

このカイザアをいびり出した系統から出た宰相が、事新しくカイザア歸國禁止の法令を撤廢したのである。さういふ前後の事情を考へてみると、今度のシュライヘルの解禁令は、どうもホーエンツーレルン家に對する誠忠丹心の涙がさせたことでなくつて、何かそれは一種の政策を紛らせての仕事なることが明かに窺はれるであらう！

何事の政策ぞ？　曰く單に右翼的政論の反對を惧れて高飛車に出た政策である。前シュライヘル將軍内閣は一見洋刀の音がかたついてゐるやうでも、バーペン内閣（ドイツ共和國が成立して以來始めて舊貴族の殘骸を集め得た超然内閣）に較べてみれば、寧ろその政綱が一歩左に寄つてゐる。だからバーペン内閣は後に比較的左翼たる中央黨や社民黨から甚だしく嫌はれたが、シュライヘル内閣は立派に中央黨の支持を受けるであらうし、社民黨からは近いうちに好意的中立を得ることが全然不可能でない狀勢にあつた。然しバーペン内閣よりも一歩左に寄つてゐるといふだけに、それ丈け又前内閣よりも右黨側の反對が強いと覺悟しなければならなかつた。

右黨側の大立物は何といつても、ヒットラアの『ナチス』である。『ナチス』は極左翼の共産黨と等しく一黨獨裁主義の政黨であつて、バーペン内閣があれ程、阿諛的態度を執つたのに逆に喰

つてかゝる程の勢ひだから、一歩左に傾いてワイマア共和憲法の擁護を誓つたやうなシュライヘル内閣が、それを巧みに籠絡することは仲々容易な業ではなかつた。然るに昨年十一月一日の總選擧の結果では、このナチスは依然國會の第一黨たる地位は失はなかつたに拘らず、代議士の數に於て三十二名を減じ、世人をしてナチス燎原の勢ももう山が見えたやうな感を懷かせた。そして是等の減少した代議士の大多數は、こゝ五六年間ナチスの犧牲になつて年と共に細り行きつゝあつたドイツ國民黨が頂戴して了つた。狡猾なシュライヘルが當時眼の着けた所は正しくそこにある。

何故かといふにどうせヒツトラア派は正面からがみ〳〵と反對させないやうには出來るとしても、現内閣を支持し妥協させることは出來ない。然らば右黨のうちで今迄聯合内閣を作つたりそれを支持したりすることの出來た國民黨だけは、どうしても自分の味方につけなければ損だ。それも今迄の國民黨なら餘り數が少くて意味をなさなかつた新選擧後の國民黨なら數に於ても滿更捨てたものでない！

そこで右翼の方からは、尠くとも國民黨を手に入れる政策が考へられる——

四

國民黨はプロシア主義の保守黨であるホーエンツーレルン家の、家の子郎黨として嘗て軍部の實權を獨占してゐた『ユンカア』が、その影を民間の政黨政治に映した分身である。從つて帝政の復辟派である。

然るに國民黨よりも一層極端な右のラヂカリズムを主張するヒツトラアの『ナチス』は、神聖羅馬帝國式なゲルマニズムを理想とし、必ずしもホーエンツーレルン家中心の小さなプロシヤ主義を喜ぶものでない。そこには救國救世の御大ヒツトラアの獨裁に隨喜の涙を流して運動に參加する青年は多くても、ドイツを帝政時代に歸すために、ヒツトラアといふ神樣の光りを薄くしてまで前カイザアの獨裁を必要と考ふる黨員は寧ろ尠いであらう。

さう考へてみるとシュライヘア內閣のカイザル歸國御法度を解いた法令は、直接に『ナチス』に對する阿諛ではなくつて、自分の立場が少し左であり過ぎるから、せめて右翼中のドイツ國民黨を捕へて離さないための好餌を與へたのだ！　國民黨員が十五年間恨しさうにオランダの空の

み眺め暮して流してゐる『鰐魚の涙』を拭つてやつたのだ！

そこで——そこで本論はたゞ一言にして盡きる。カイザアは歸り得る。彼はウイルヘルム・フオン・ホーエンツーレルンといふ一老翁として、ポツダム城の中にドールンでゐたと同樣に『何一つ敎ふる所なく又學びし所なき』生活を續けながら、薪を割ることが出來る。然し彼が白髮を染めて眞個に復辟運動のお神輿に安心して乘つかるためには、まだ〳〵三百萬人しかない國民黨だけの蠢動では餘りに心許ない。今少し『ナチス』のイデオロギーがヒツトラア中心主義から變りでもするやうな時代が來なければそれは物になるまい。假令國粹と國權の兩者がO・Kとしても、一方には復辟に頭を橫振りする政治團體として、當時第三黨に躍進した共產黨は勿論のこと依然第二黨たる地位を維持する社民黨と、第四黨を主張する中央黨の大部分、依然として頑張つてゐたではなかつたか？　問題は數ぢやなくつて力であると假定しても——それぢやカイザアが歸る以前に先以てワイマア憲法の根本的改革される位の準備がなくちや嘘だ。然る所カイザアの歸國を許した前內閣は該憲法に改竄を加へる意思がなかつたのだ……してみるとカイザアが、たゞ薪を割りに歸る積りなら、ドールンから汽車に乘つても、たつた一時間半で、ドイツの國境內

に這入つてくることができる。帝笏を取りに歸る積りなら草鞋の紐を締めてみた所でプロシア王宮までの彼方は、まだ〳〵日暮れて途遠しの感がある。

要約。前カイザアは今日や明日すぐと言つて、どうもドイツへ歸つて來やしまい。

この一章はシエライヘル内閣浪の瞬間當時迄の、カイザア歸國問題の推移を描いたものである。情勢は突變したが、この問題の重點は、依然として本章の進りであると信じて居る。

カイザアに就て今一つの觀方

一

戰後のドイツ人が、自國を中心として國際政治又は國際經濟を考へる場合、彼等にとつて最も重大な、然も發音の上では、極めて紛らはしい二つの言葉を常に口にする。一つは "Kriegsschuldenfrage" であり、他は "Kriegs=schuldfrage" である。尤も日本語に譯したら別に紛らはしいことも何にもない。前者が『戰債問題』で、後者が『戰罪問題』であるから。

戰債問題といへば、聯合國側では、戰爭參加國が大戰中に主として米國から借りた金の跡始末に關する問題であつて、戰敗國ドイツから償金を徵集する所謂賠償問題とは明かに區別をつけてゐる。然乍ら、ドイツ人が Kriegs=schuldenfrage といふ場合には單に『賠償』(Reparation) を意味するものと考へていゝ。戰後のドイツ人は今迄この賠償の問題で國を擧げて大躍起となつて

ゐた。世界の人間に支拂ふべき無限の支拂金は悉くドイツ人の負擔である――その無限を幾度かの外交會議で負けて貰つた所で、その總額はなほ天文學上に測定さるゝやうな數字である――インフレーションに依る獨貨の崩壞もこれがために起り、デフレーションに依る資本の硬化もこれがために起つた賠償金を取られるからこそ、工場は軒並みに閉鎖するし、商店は戸毎に倒産するのだ――賠償金を取られるからこそ失業者の群れが大波の如く押寄せてきて、これを堰き止める手段がないのだ――さればこそ民に菜色なく乞食の野に充ちてゐるのも賠償のため、賣春婦が街頭に溢れて道義地を拂つたのも亦賠償のためだ――賠償の存する限り世は正に澆季――『賠償賠償、總ての上に！』

ユーゴー・ナルレス

さればこそ戰後のドイツ人が、狂氣の如く大童になつてこの賠償問題と戰ひ續けたのも無理はない。賠償金を支拂ふ限り、ドイツ人は國を建直ほさうとしていくら眞面目に働いても、結局は孫兒の代まで飯が喰えないものと運命づけられてゐるとすれば、尠くとも絶望の努力を揮つてもこの制度を叩き毀さなければならぬ。然し乍らそれは力に依つて、戰に負けた結果に課せられた制度である以上、單に空拳の大言壯語では何にもならぬ。國内實力の養成に平行してこれを遞減

緩和し、遂に自然的な棒引狀態を將來せしむるやうな漸進的な政策を執らねばならぬ。

斯の如く考へた隱忍自重のドイツ人は、先づバウエルフエーレンバツハの『降伏政策』を振り出しとして、ウイルトの『充行政策』に移り、更にストレーゼマンの『ロカルノ協調政策』に進み、マルクス＝ルツタアの『ドーズ案時代』から、ブリユーニングの『ヤング案時代』を經て、未だ戰後十五年を出でざるに前內閣パーペンの手に依つて、この破局的に見えた問題を綺麗に片着けて了つた。今はたゞ賠償金を支拂ふ代りに、ドイツ人民には僅か許り、共存共榮のため恢復費を負擔するに義務が殘るに過ぎないといふ誠に芽出度い御代とはなつた。

二

然るに、それだけで以て今日のドイツ人が滿足してゐるかといふに、實は中々さうでない。望みは隴から蜀へとだん〳〵に高まつて往く——

懷ふに賠償問題は、ドイツ人の飯が喰へるか喰えないかの現實當面の問題であつたから、何事にまれ名よりも實を尊んで合理的な（vernunftig）、計算通りな（rechnungs＝massig）、目的に叶

つた（zweckmässig）ことの好きな、從つて政治的にはビスマルクの昔より『レアル・ポリチーク』を金科玉條とする筈のドイツ人は、斯樣な經濟的な實際問題が大成功裡に片着いた以上、もう些細な名目に捉はれるやうな副問題などは本來なら怎うでもよさ相な筈である。何しろ自分は事實戰爭に負けてゐるのだから、今更體面の問題などを持出し然もそれを一から十まで頑張り通してまで戰勝國の顏を潰さなくつたつていゝぢやないか？……現に獲得した實利上の成功だけで、一先づ滿足して、もう少し遠慮したつて好かり相なものではないか？……とはボッシュ嫌ひなフランスのショヴィニストならずとも一應は憤慨してみたくなる。

然る所事實はそれに反して、まだ賠償の問題も充分に見込がつかない時代から、ドイツはもう躍氣となつて國家の體面の問題に怖しく眼を血走らせてゐたのである。既にかのクノー內閣の頃フランスが軍を進めてルーア侵入を敢行した場合など、未だドイツには眞個の意味に於ける抵抗の力が全然缺如してゐたのだから、今少し外交的な協議の仕樣に依つては、あんなに敵も味方も悲慘に痛手を負ふやうな結果をみずして濟みもしたらうに、頑固にもドイツは『國家の體面』のために――勿論其他の實利政策的動機も存在してはゐたが――『消極的抵抗』といふ我と我身を

ハラキリする手段に訴へて、自國の經濟界を轉覆し、マーク貨幣を顯微鏡下の價値に置くまでの自暴な犧牲を拂つて、然も尙ほ敢て悔まなかつたではないか！　それから時代が少し經つてチェンバレインやブリアンが拗ねたドイツを宥め賺かして國際聯盟に入れてやらうと誘ふと、加入するなら大國並に取扱つてくれなきや嫌だ……理事國の、然も常任の椅子を宛がつてやるといふ條件なら、這入つてやつても構はないと、大きく出て、可哀相にも聯盟會員としては、ずつと先輩のブラジルが旋頭を曲げて聯盟から追ん出ても平氣な顏で我が通した。更に、ブューニング內閣の終りの頃から次の短命なりしパーペン內閣を經て、今日のシュライヘル內閣に到るまで、何れもその內治政綱に於ては、時としては多少左に、又時としては多少右にといろ〳〵變遷して來てゐるに拘らず、かの對外的な『軍縮問題』に至つては、ドイツは常に擧國的に一貫した主張として軍備の均等を要求して止まないのだ。抑々常識から判斷してドイツは大戰に敗けたのだから、降伏國の負ふべき苦杯として常備軍が十萬に制限されてゐるのではないか？　勿論國家の體面上からはドイツ人も口惜しいに違ひない。然し同時に、ドイツはそのおかげで軍事費の節約ができて、その金を他の生產的な經濟や文化の事業に廻し得る寧ろ有難い地位にゐるのである。さればこそ

つい先頃のこと、ブリユウニング首相は、歐洲各國の諸政府に向つて、ラヂオ臺の前で『ドイツが徹底的な軍縮を要求する所以のものは、ドイツが單に假面や口實に基かずして眞面目に、且つ何れの國よりも、一番切實に平和を愛好するが爲である』と放送の見榮を切つた許りなのである。それだのにその口の先から、他の國が軍縮に躊躇逡巡するなら、ドイツは軍縮會議から脱退して勝手な行爲を執ると威嚇し始めた。然もそれは單なる威嚇手段ではなくつて、次バーペン内閣となつて以來は單なる消極的な軍縮よりも、先づドイツの軍備を列國並に均整のとれた程度に擴張させてくれなきや嫌だ、と駄々をこねて英佛の當局者をひどく手古摺らせてゐる。勿論今日フランスが空軍陸軍に均衡以上の尨大な勢力を維持し、イギリスが歐洲の海軍に於て獨り壓到的な威風を樂しんでゐる際、ドイツのやうに人口多く、産業熾んにして然も國境の紛糾錯綜した大國だけが、軍備を有しては相成らぬといふ狀態は、國際勢力の均衡上、勿論、不公平に違ひないのだから、ドイツの主張もその主觀的立場からみて決して無理とは言へない。然し前にも述べたやうにこの不公平の發生は戰敗國として課せられた國際道義上の負擔なのだから奈何とも仕樣がない筈だ。だがその點には少しも觸れないで、然も、戰後僅かに十五年にしてまたヴェルサ

イユ條約の鐵の規が嚴存してゐるにも拘らず、單に國家の體面を立てるために、普通の國なら遠慮があつて直接には切出し憎いこのセンシヴルな問題を、實に平氣な顏で晒々言ひ出すのだから尠くともその勇氣に到つては誰しも呆氣にとられて降參せざるを得ない！

三

それにつけて筆者はドイツに於ける烏渡した過ぎにし日の一場面を想ひ出す——

恰度一九二六年にストレーゼマンがロカルノの協約を濟ませて、意氣揚々とベルリンに歸つて來た時、その勢ですぐ外國新聞の特派員連を外務省のお茶の會に招待したことがあつた。この席上でシカゴ・トリビューン紙から派遣されてゐた有名な女記者のシュルツェ孃が『……今度の協約に依つて更に"Kriegsschuldenfrage"（女史は勿論賠償問題の意味でさう言つたのであつた）の難關に曙光の見えるやうになつたのは、ドイツのためにお芽出度いと思ひます。何しろこの問題はドイツにとつて一番重要な死活問題でしやうから……』とお世辭を浴せかけたのである。するとストレーゼマンは例の鋭い瞳で並みゐる一同にギョロリと一瞥を與へておいて女史の言葉を

中斷した……"Nein, meine Herren, nicht Kriegsschulden=, sondern Kriegsschuldfrage!" (鳥渡失禮ですが、戰債ぢやないですよ、戰罪の問題ですよ!』

筆者はその時妙な氣がした。勿論ストレーゼマンは理想主義の政治家ではあつたが、ロカルノ協約は、安全保障に關する歐洲高等政治にかゝつており、從て賠償問題の將來に見透しが着いた點に於て、シュルツエ女史の言つた通りドイツにとつて、大成功であつたことは事實である。その際ドイツが大戰に於て罪があつたの、無かつたのといふやうな問題はどうでも好いことで、あれ程妥協的な親佛主義者のストレーゼマンともあらうものが、ブリアンと溫く手を握つて平和の橄欖茂るロカルノから、にこやかに歸つた早々『戰罪問題』などと眼に恚立てゝ言ふ重要さが、どこに在るかと實は不審に思つた位だ。

然るに、後になつてよく調べてみると、ドイツはその時分に於て『大戰に敗れたことは認めるが、大戰の責任は一にドイツに在り、從つてドイツだけが戰爭を起した犯罪國であるといふ所謂「戰罪」を引受けることは絕對に出來ない』といふ議論で以て上下沸騰してゐたのである。だからロカルノに於ける商議ではドイツはフランスに對し既存の條約は原則として尊重するといふ言質

を與へたに拘らず、同時にカカルノ協商の行はるべき時期が決定された時、則ち一九二五年十一月二十六日にドイツ政府が、聯合國に向つて口頭で宣言して置いた意志表示は、飜したものでないことを態々繰返へして、然もそれをペロトコールに載せさせたのである。その意思表示といふのは他でもない。――『ドイツ政府は既に一九二四年から公然主張してゐる所のもの、即ちドイツが國際的義務を遂行するのは、決してドイツ國民が道德的な罪惡を犯した結果なることを認むるが故ではないとの主張は、何時まで經つても捨てない積りであつて、將來國際聯盟に加入するやうな場合が起つても、聯合國はドイツがこの主張を捨てたものと解釋してくれては困る。』

則ちドイツはロカルノ當時どころではない、そのずつと以前から自分に罪がない罪がない、といふことをむきになつて外國に知らさうと努力してゐたのである。だから內閣の史料局では頻々として戰爭の原因に關する種々の材料を發表し、國會では戰罪問題調査委員會なるものを常置し又私人や私的團體でも、この種の研究に沒頭するもの極めて多く、現にミュンヘン及ライプチヒの書肆では、有名な教授連を集めて戰罪問題叢書をさへ出版してゐる。

兎に角それは、戰後のドイツ人にとつては餘程執拗くこだわつた重大問題であるらしい。

四

最近ヒツトラア派の『ナチス』が煽動演說をやる場合、辯士は必ずこの戰罪問題を擔ぎ出して、『罪のないドイツ』に罪をなすりつけるフランスの態度は、怪しからぬと口ぐせのやうに啖呵を切つてゐるのは、その極端なナショナリズムの立場から判斷して當然すぎることだ。

然し戰罪問題で悲憤慷慨するのは、敢て强がりをいふ『ナチス』だけではなくつて、ドイツ全體の上下を通じた輿論である。斯樣な現象は今日の外國報道界にあまりよく傳はつてゐないが、又傳はつたとしても、外國人の胸には餘りピンと來ない所なんだ。例へば賠償問題といへばそれは、延て歐洲全體の戰債問題に影響し、遂に米國と歐洲との機微な政治關係や經濟界の世界的不況を惹起するに至るまでの、由々敷い出來事なので、國際問題に興味を持つ程の人なら誰れでも面白がる。又今度ドイツが軍備均等の要求をしたといふ報導が傳はつて來ると、元來軍縮問題にはどこの國でも直接間接の關心を持つてゐるので、すゝ一大事件の勃發として大切にそれを取扱ふ。更にヒツトラアが選擧に勝つたの負けたのといふ內政の問題の如きも、現今何れの國でも

右翼擡頭の傾向を持つてゐる關係上、敵も味方もまるで餘所事でないやうに立騒ぐ、要するにドイツに起る種々の大きな渦卷は、大抵他の歐洲諸國にも、米國にも、延ては日本にも、物質的に、又精神的に一種の影響を與へるものだから、例令、問題自身はドイツ國内だけのものでも外國人まで大騒ぎするのだ。然るに戰罪問題となると少し趣が異ふ。敗戰國ドイツの戰爭の責任に對して罪を無くしやうとあせつたり、愚痴をこぼしたりすることは、ドイツだけには大問題かも知れぬが、他の國には大して興味の起らない風馬牛のそれだ。

結局、ドイツは負けたからこそ責任があり、從つて罪がある。何れに罪ありや、を最後に決定するための戰爭なのだ。例令罪がなくつたつて戰爭に負けたらもう仕方がない。力が正義を作るのである。だからドイツが休戰を申込んで戰爭に負けたといふ事實を認めただけで——換言すれば力が作る正義を作り得なかつたといふことだけで——もう一切は解決したのだ。それ以上更に戰爭の原因に溯つて約らぬ穿鑿をすることは、史料の聚集者や研究室の教授連には面白いことかも知れぬが、國際外交の圓卓の周圍では餘り興味ある話柄ぢやない……

然るに、外國人が一向話題にしてくれぬ戰罪問題なるものが、ドイツに於いては實に青年の血

を沸かせ、老人の口角に泡を飛ばせる擧國的なトピックスなのである。それは一度ストレーゼマン時代にロカルノでひねくれて一片の覺書となつて消えたのではない。ゲルマン人が一番優等で壯健で道德的で文化の高い人種なることを、狂氣の如く高唱する『ナチス』一派の國粹論者が單に排外の氣分を煽るためにのみ利用する題目でもない。この問題を持出さなければ人民がうんと言はないのだ。政權を握らうと思ふ者は、この問題を訴へる事に依て不思議に魅力ある人氣を克ち得るのだ。さればこそヘルマン・ミュラアの如く、社會民主黨の幹部を集めて內閣を組織し、インターナショナルな協調主義を主張して國權の伸張や、國粹の發揚などを頭から否定したものでも、國會に於ける施政方針の演說には矢張りこの問題を持出して、ドイツが戰爭に敗れたのは事實であるが、戰爭そのものゝ道德的責任が、悉くドイツ國民の上にありとなす偏見の如きは、國際協調の精神に悖るものとして、極力排斥しなければならぬと咳一咳した。

ミュラア內閣でさへさうであつた。其他の內閣にしてこれに力瘤を入れないものは、一としてなかつた。中央黨出身の宰相としてブリユウニングの如きは、ジユネーヴの會議毎にその主張を匂はせてゐる。次のパーペン內閣の如きも、ローザンヌに於て露骨にそれを宣言した。シユライ

ヘア内閣もこの遺髪を嗣いで、戰罪問題に何等かの努力を惜む筈がない！

五

何故ドイツが、この平凡な問題に對してそれ程執拗いであらうか？

成程ドイツが大戰後擧國一致の臍を固めて國運の建直しをやらうといふ場合にドイツは大戰に於ける人道上の犯罪者であつた、天地に恥べき惡漢であつたといふ認識の如きは、第一新興國の體面からみて見つともない話であり、更に國民の享ける精神的打擊の上から、從て將來の國家を背負て立たなければならぬ子弟の育英の上からいつても、ドイツ自身としては由々敷き大事であるかも知れない。然し國民の精神的打擊、從つて青年子女の教育云々がその原因であるなら、それは純然たる對內政策の問題であるから、自分勝手に獨りよがりを言つておればいゝ。恰もアメリカ人が自國のみを人道の樂土となし、イギリス人が、アルヴィオンの島のみを自由の修道院と觀じ、又フランス人が自分だけを文化の天使と自惚れてゐるやうに、ドイツ人も亦、自國の歷史になり・修身の教科書になり、その國民精神の、罪なく穢れなきことを、堂々と書き列ねて、心

安く育英の事業に從事すればいゝ。更に外國に對して恥しいといふ體面の問題とするなら——元來『レアル・ポリチーク』を重んずるドイツ人が、支那人みたいに、下手な體面の問題に拘泥することそれ自身が既に腑に落ちぬ話であるが——今更そんな事件を、外交問題にまで持出して、くよ〳〵言はなくつたつて、誰れ一人現今のドイツ國の國際的存在それ自身が『惡』であることを主張するものはない。なければこそ、ドイツを世界の共存共榮に協力する善き友達として、恭しく國際聯盟にさへも招じ入れてやつたではないか？　その邊の消息を察しないといふのは、ドイツともあらうものが、餘りにそれは子供らしくはないか？

然るにそれは子供らしくはないのである。その點でドイツ人は中々以て喰へない代物だ。その外觀は極めてどうでもいゝやうな約らない問題でも、栓じ詰めると、如何にドイツ人が凡ての物事を合理的に分析して、斯くあらねばならぬ最後の歸結を、その根本の論理に編み上げてゐるかゞよく分るのである。

戰罪の問題は決して約らぬ餘興ではない。何故なら、ドイツの欲する今日の實利的要求は、ドイツが大戰に罪なきことを各國に知らしめて、その認識を言質とすることに依つてのみ、悉く貫

徹達成せられるからである。經緯は極めて簡單だ。曰く、戰罪の消滅——ヴェルサイユ條約の壞倒！

ドイツは力で負けた。力は正義だ。從つて聯合國の力であり正義である所の鐵則が、ヴェルサイユの平和(?)條約となつて、ドイツの不正と罪惡に刻印したのだ。然らばこそドイツは刑罰として植民地と母國の一部とを褫奪され、交通運搬具、及工業原料を沒收され、軍備の致命的制限を受け、天文學的償金を課せられた。この際、斯る刑罰の個々の責苦を逃れることは、審判者の免除と寛恕を得る手段あるのみである。現に足許から火の着くやうな苦惱に直面し、それを頑張つてゐたのでは、忽ち自分が滅亡して了ふやうな責苦に對しては、己を得ず審判者の寛大な慈悲心に訴へるより外に仕方がない。その方法に依て、ドイツは幾多の問題を解決し、漸く自滅を免れてホッと息をついた。その一番大な問題の例は賠償であつた。これから更に進んで軍備制限を撤廢して貰ひ又植民地を恢復する仕事にも、着手するであらう。

だが、是等の個々の問題を解決することは、それが如何に外交上の成功に終るとも、所詮は審判者の寛恕を得る範圍内に於ての出來事に過ぎない。ヴェルサイユの鐵則が存在する限り、ド

イツは自由に自國の權利を主張し、新い建國を樂しむことは不可能である。それではヴエルサイユ條約を無くするには怎うしたらいゝか？　それを撤廢して下さいと、申込んだ所で、誰一人相手になつてくれないだらう。フランスの如きはその些かの改訂さへ承知してくれないだらう。然らばヴエルサイユ條約が自分で滅びて無くなるのを待つより外に方法はない。この條約はドイツに罪ありといふ觀念を基礎として、ドイツに刑罰を與ふる組立になつてゐる。それならドイツに罪がないことに證明されるなら、諸條約はその據つて立つ意味を失つて自滅する外はない。尤も罪の有無は力の有無に依つて決定されたのであるから、ドイツが依然無力であるのに、單に口先だけで罪がないと叫んでみても何の役にも立たぬ。先づ經濟の復興と國威の恢復に依て、再び外國と實力上の競爭をしても敗けないだけの"Macht"を養成し、その『力』が大きくなる程度に比例して罪なきことを叫ぶ聲を大きくし、遂にヴエルサイユ鐵則の鎖が自分からはち切れて寸斷するやうに仕向けやうといふ所にこつがある。

斯の如きが實に戰罪問題の根本意義であると思ふ——

六

それならカイザアを依然としてオランダに放つて置くのは非常な矛盾である。自分から戰爭に罪ありし認識を告白するの愚を演ずるものである。

何故なら、カイザアのアメロンゲンに蒙塵したのは、單に革命勃發の徵があつたとか、軍隊が謀叛しさうになつたとかの、附帶事實が主因となつたのではなく、ウイルソンの命令——則ち犯罪者たる軍閥の統帥者を廢し、罪を再び犯さないといふ證據を示すために、新しい人民の意思に依る政權がドイツに確立し、それが休戰を申込むに非ずんば、聯合國は膺懲の師を進めるのみだといふ氷の如き威嚇——によつて仕方なくカイザアが詰腹を切らされた結果である。その罪ありとして、追放を餘儀なくされた國の元首たりしカイザアを、今でもそのまゝ放つておくことは、ドイツ國民の大戰に罪なかりしことの主張を、正面から裏切るものでなくつて何であらうか？

前內閣のシュライヘア宰相が、この點に思ひ着かない譯はなかつた。否シュライヘアならずともストレーゼマン以後の內閣なら、誰しもカイザアの歸國を、戰罪問題に有利なりと考へないも

ものはなかつたであらう。然し、それは國内政策上の困難からして、今迄怎うしても實現することが出來なかつた。シュライヘア將軍はその久しい間の懸案を斷行し、カイザア歸國の禁を解いたのである。

斯う考へてくるとカイザア歸國の問題と復辟の問題とは、全然別にして觀察しなければならぬ。復辟は維れ純然たる内政上の問題である。シュライヘア將軍はその前のバーベン宰相より左に傾いた一種の自由主義者で、ワイマアの共和憲法に忠誠を誓ふ政綱を條件として組閣した人だつたから、この人がカイザア歸國禁止令を解いたといつて、必ずしも、それは當時は、復辟運動の劃策を意味するものではなかつたのだ。

昭和八年七月十一日印刷
昭和八年七月十五日發行

『最後に笑ふ者』奥付
定價一圓五十錢

著作者　黑田禮二
東京市京橋區京橋三ノ一
發行者　千倉豐
東京市神田區今川小路一ノ一
印刷者　山縣精一

發行所　東京・京橋第一相互館　千倉書房
電話京橋(56)三二一一七一八六七一
振替東京九七八

山縣製本印刷株式會社印刷

◇黒田禮一著◇

激動期の大衆は讀め！

革命三人男

第五版

世界史上に於ける狂瀾の頁！
その歴史轉換の大舞臺に躍る三人の革命家——陰謀、テロ、死闘、人間性と思想との相剋——嗚呼悲壯なる歴史の宿命とはこれだ！

凡ゆる革命・獨裁の諸様相の最もよく具象化されて居るのは、佛蘭西大革命だ。また最近の・社會・經濟・政治・藝術等一切の思想發展とその行衛は、この革命を楔機としてのみ完全に把握され得る。この意味で佛蘭西大革命は近世革命の母たるのみならず、また近代文化の揺籃でもある。

日本のエミル・ルドヰヒの稱ある著者が滯歐中の數歳の苦心を傾けて、凡ゆる時代に共通する『變革時代』の姿を掴むことに努力し、遂に、代表的革命史論家たるカーライルもクロポトキンも、はたまた、ピアトニツキーも描き得ざりし、不世出の革命秘錄を書き上げたのだ。

功罪の結論を急ぐ過去の類書と斷然異なり、著者獨特の特異なる創見、冷徹無比のその解剖に一氣に之を讀了し、後肅然として三嘆三思せしめずには措かぬのは本書である。

定價一圓五十錢
送料十二錢

東京第一・京橋館
千倉書房
東京振替 九七八

◇室伏高信著◇

透徹せる世界觀と逞しき信念を把持せよ！

マルクスを乘り越えて

好評五版

定價一圓五十錢

送料十錢

共産黨首腦者等の轉向の裏に潜む哲學的苦悶は、かくして見事に解明された！

本書はこれ、思想と生活に苦喘する近代人を甦らす颯爽たる清風！

古き獨斷の窓から世界と人生を理解すべきでなく、また形骸の思想の中に自身を陷落せしめて、吾と吾身を退嬰せしむべきでもない。永久に宇宙は無理であり、世界は廣大だ！

いまや囚はれたる思想の桎梏をかなぐり捨て——咏嘆と低迷の世界を脱して、第三の黎明に向つて立ち上る時は來た！

本書は颯爽たる文明批評の立場から、現代の文明の基底を衝いてその行衛を說き、次に來る世界を豫言しながら、人々の往くべき所を明示する新鋭・深沈なる哲學的精神の豐溢せる快著だ。生活と思想の根柢に强靱なる信念を確立せんとする者は、何人も讀め！

東京第一・京橋館　千倉書房　振替東京九七八

千倉書房圖書目錄（1）

著者	書名	定價	送料
高田保馬著	價格と獨占	二・三〇	一二
勝正憲著	稅の話（十三版）	一・五〇	〇八
那須皓著	日本農業論（再版）	二・五〇	一五
高橋亀吉著	資本主義頽廢の諸相	二・二〇	一二
美濃部達吉著	行政裁判法	二・八〇	一八
小泉信三著	マルクシズムとボルシエギズム（再版）	二・三〇	一二
小島精一著	日本金融資本論（再版）	二・五〇	一二
報知新聞調査部編	談話室（四版）	一・五〇	一〇
高橋亀吉著	實用經濟學（五版）	一・八〇	一二
平林初之輔著	文學理論の諸問題	一・八〇	一二
井上準之助著	國民經濟の立直と金解禁（二百版）	三〇	〇四
河合榮治郎著	英國勞働黨のイデオロギー	五〇	〇四
清澤洌著	轉換期の日本（五版）	一・八〇	一二
東京日日學藝課編	常識百話（五版）	一・五〇	〇八
白柳秀湖著	日本經濟革命史（五版）	一・八〇	一〇

著者	書名	定價	送料
小島昌太郎著	海運經濟要論	二・五〇	一二
水上鐵治郎著	英國の勞働組合	五〇	〇四
小島精一著	產業合理化（十五版）	一・五〇	一八
向井鹿松著	經營經濟學總論（十二版）	一・五〇	一八
上野陽一著	產業能率論（十二版）	一・五〇	一八
松永安左衛門著	產業改造への途（五十版）	八〇	〇六
白柳秀湖著	親分子分（英雄編）（十版）	一・五〇	一〇
高橋亀吉著	『經濟國難來』（五版）	一・五〇	一〇
報知新聞調査部編	談話室漫談篇（五版）	一・五〇	一〇
平林初之輔著	近世社會思想講話	一・八〇	一〇
永井亨著	社會の話（五版）	一・五〇	一〇
中川靜著	廣告論	一・五〇	一八
山川均著	社會主義の話（六版）	一・五〇	一〇
白柳秀湖著	親分子分（俠客編）（七版）	一・五〇	一〇
大崎厚夫著	世界を動かす十二傑（五版）	一・五〇	一〇

著者	書名	定價	送料
勝正憲著	所得税の話（十版）	一・六〇	一〇
報知新聞經濟部編	能率增進時代（五版）	一・五〇	一〇
福田敬太郎著	市場論（九版）	一・五〇	一八
政經研究會編	各政黨の主張（三十版）	三〇	〇四
土田杏村著	文明は何處へ行く（五版）	一・五〇	一〇
增地庸治郎著	企業形態論（八版）	一・五〇	一八
小島精一著	世界經濟と合理化運動（五版）	一・五〇	一〇
白柳秀湖著	親分子分（浪人編）（七版）	一・五〇	一二
小林行昌著	賣買論（九版）	一・五〇	一八
石濱知行著	アメリカ資本主義發達史（四版）	一・七〇	一〇
小林行昌著	關税と物價	二・五〇	一八
末弘嚴太郎共野間海造編	農林法規集	五・〇〇	二四
小島精一著	企業統制論（七版）	一・五〇	一八
神長倉眞民著	財界巡禮記（五版）	一・五〇	一〇
報知新聞調査部編	ナンセンス・ジャパン（五版）	一・五〇	一〇

著者	書名	定價	送料
長野朗著	支那の眞相（五版）	一・五〇	一〇
武野藤介著	文士の側面裏面（五版）	一・五〇	一〇
上野陽一著	能率祕話（十二版）	一・五〇	一〇
中外商業經濟部編	經濟國難打開の途（五版）	一・五〇	一〇
細田民樹著	黑の死刑女囚（五版）	一・五〇	一〇
藤井悌著	英國勞働黨の組織・沿革・政策	五〇	〇四
藤本幸太郎著	海上保險論（七版）	一・五〇	一八
上野陽一著	家庭經濟の祕訣（十版）	九〇	〇八
勝正憲著	企業と租税（七版）	一・五〇	一八
報知新聞經濟部編	經濟相談（十版）	一・五〇	一〇
堀眞琴著	國家論	二・三〇	一四
堀光龜著	海運（八版）	一・五〇	一八
增井幸雄著	陸運（七版）	一・五〇	一八
山川均著	勞働組合の話（四版）	一・五〇	一〇
世界經濟研究所編	世界經濟（總觀）（七版）	一・五〇	一四

著者	書名	定價	送料
前田美稻著	豫算の知識（三版）	一・五〇	一〇
佐藤弘著	世界經濟地理（八版）	一・五〇	一八
米野豐實著	サウエート經濟の實體	一・五〇	一〇
中村第三著	販賣革命（六版）	一・二〇	一〇
高木友三郎著	日本經濟の實體（四版）	一・〇〇	一〇
勝田貞次著	投資相談（十五版）	一・五〇	一〇
勝田貞次著	獨逸財界の機構（三版）	一・八〇	一〇
小池四郎著	社會主義か資本主義か	一・二〇	一〇
大辻司郎著	漫談集	一・〇〇	〇八
白柳秀湖著	社會展開の動力（三版）	一・六〇	一〇
上田貞次郎著	商工經營（十版）	一・五〇	一八
山田忍三著	百貨店經營と小賣業	一・五〇	一〇
後藤朝太郎著	哲人支那	一・五〇	一〇
報知新聞調査部編	ユーモア百話（六版）	一・五〇	一〇
小島精一著	アメリカ恐慌の見透し	一・〇〇	〇六

著者	書名	定價	送料
林恒彥著	生活指導	一・五〇	一〇
帝國大學新聞編輯部編	大學の運命と使命	一・五〇	一〇
清澤洌著	アメリカを裸體にす（十三版）	一・五〇	一〇
三邊金藏著	會計監査（八版）	一・五〇	一八
北林惣吉著	淺野總一郎傳（十版）	一・五〇	一〇
報知新聞編輯部編	中小產業の活路	一・八〇	一二
勝田貞次著	不景氣時代の投資法（十版）	一・五〇	一〇
白柳秀湖著	食慾と愛慾（六版）	一・六〇	一〇
勝正憲著	營業收益稅の話（八版）	一・五〇	一〇
國松豐著	工場經營論（六版）	一・五〇	一八
青野季吉著	實踐的文學論	一・六〇	一〇
北野大吉著	勞働人運動の開祖 メリー・ウオルストンクラフト	一・五〇	一〇
小汀利得著	街頭經濟學（十九版）	一・五〇	一〇
近松秋江著	文壇三十年	一・八〇	一〇
北林惣吉著	淺野翁の人正傳 女の一心	一・二〇	一〇

著者	書名	定價	送料
野守廣 内藤章 著	信託經營論	一・五〇	一・八
木村毅 著	巴里情痴傳（五版）	一・五〇	一・〇
宮川貞一郎 譯	金本位制度の理論と實際	一・三〇	一・〇
佐々弘雄 著	政治の貧困	一・五〇	一・〇
北林惣吉 著	成功秘談（淺野翁物語）	一・五〇	一・〇
井關孝雄 著	金融の常識（七版）	一・五〇	一・〇
白柳秀湖 著	住友物語（十二版）	一・五〇	一・〇
小林新 著	經營統計（七版）	一・五〇	一・八
山崎靖純 著	何が財界を動かすか（九版）	一・五〇	一・〇
北林惣吉 著	投資基礎學（四版）	一・五〇	一・〇
内池廉吉 著	倉庫論（七版）	一・五〇	一・八
清澤洌 著	不安世界の大通り（九版）	一・五〇	一・〇
勝田貞次 著	投資の仕方（三版）	一・五〇	一・〇
木村毅 著	ラグーザお玉（五版）	一・八〇	一・〇
報知新聞經濟部編	財界を牛耳る人々（九版）	一・五〇	一・〇

著者	書名	定價	送料
高橋亀吉 著	景氣はドウなる（九版）	一・五〇	一・〇
勝田貞次 著	景氣の見方（三版）	一・五〇	一・〇
福田敬太郎 著	商業概論（六版）	一・五〇	一・八
太田哲三 著	銀行簿記の常識（五版）	一・〇〇	一・〇
上野陽一 著	販賣心理（五版）	一・五〇	一・八
都新聞峰島編	法律相談（六版）	一・五〇	一・〇
都新聞峰島編	衛生相談（五版）	一・五〇	一・〇
アインチヒ著 山本米治譯	國際金融爭覇戰（七版）	一・〇〇	一・〇
報知新聞經濟部編	小資本開業案内（六版）	一・五〇	一・〇
藤田國之助 著	取引所論（五版）	一・五〇	一・八
黒澤清 著	商業簿記の常識（五版）	一・〇〇	一・〇
山崎靖純 著	フーヴァ景氣はドウなる（五十九版）	一・三〇	一・〇四
牛野寛二 著	世界市場を征す ロシア五ケ年計畫 廿五版	一・五〇	一・〇四
國民新聞政治部編	明日を待つ彼	一・五〇	一・〇
中外商業新報社編	尖端的販賣職術（五版）	一・五〇	一・〇

著者	書名	定價	送料
中野正剛著	沈溺日本の更生（五十版）	〇・三〇	〇・〇四
井關十二郎著	販賣の常識	一・〇〇	一・〇〇
坂口武之助著	商品學	一・五〇	一・八〇
小林行昌著	商業算術の常識（五版）	一・〇〇	一・〇〇
山川均著	無產政黨の話（三版）	一・五〇	一・〇〇
加藤三郎譯	世界商業祕話	一・六〇	一・〇〇
アインチヒ著 木村禧八郎譯	世界經濟恐慌の解剖（五版）	一・二〇	一・〇〇
高島佐一郎著	金融統制論	一・五〇	一・八〇
白柳秀湖著	日本富豪發生學 下士階級革命の卷	一・六〇	一・〇〇
デニー著 香月保譯	アメリカの世界經濟征服（八版）	一・五〇	一・〇〇
松本烝治著	常識としての商法改正の話	〇・五〇	〇・〇四
本多熊太郎著	世界の動きと日本の立場（五十版）	〇・三〇	〇・〇四
木村禧八郎著	金本位制の危機（卅五版）	〇・三〇	〇・〇四
金子利八郎著	事務管理總論	一・五〇	一・八〇
佐藤弘著	商品學の常識	一・〇〇	一・〇〇

著者	書名	定價	送料
村瀬玄著	工業會計の常識	一・〇〇	一・〇〇
藤本幸太郎著	商業統計の常識	一・〇〇	一・〇〇
内池廉吉著	商業學の常識	一・〇〇	一・〇〇
小松綠著	維新革命祕話	二・〇〇	一・〇〇
ベンネット著 森田敏譯	人生如何に生くべきか	一・〇〇	一・〇〇
ベッターソン著 伊地知軍司譯	列强經濟のヂレンマ	一・二〇	一・〇〇
長野朗著	動亂支那の眞相	一・〇〇	一・〇〇
武藤山治著	景氣沸騰鎭壓としての金輸出再禁止（百版）	〇・三〇	〇・〇四
長野朗著	暗雲たゞよふ滿蒙（廿五版）	〇・三〇	〇・〇四
同著	滿蒙併呑か獨立？（廿版）	〇・三〇	〇・〇四
同著	滿蒙に於ける列强の侵略戰（廿版）	〇・三〇	〇・〇四
後藤朝太郎著	時局を繞らす支那の民情（廿版）	〇・三〇	〇・〇四
吉田良三著	會計學の常識	一・〇〇	一・〇〇
ホブソン著 中島徹三譯	世界經濟の統一	一・〇〇	一・〇〇
佐々木道雄著	商業數學	一・一五〇	一・一八〇

著者	書名	定價	送料
コール著 清水元譯	經濟の國家統制（五版）	二・〇〇	一・六
高島佐一郎著	金本位制動搖と日本金融の將來（八版）	一・二〇	一〇
原口亮平著	簿記學	一・五〇	一八
白柳秀湖著	日本富豪發生學 財閥財閥爭奪の卷	一・六〇	一四
小原喜三郎譯	物富み人富まざるの矛盾	一・〇〇	一〇
高橋亀吉著	世界破局と日本經濟の變革（七版）	一・五〇	一四
保科貞次著	空襲!!（廿版）	一・〇〇	一〇
豬谷善一著	アジヤ經濟の展望	一・五〇	一〇
洪純一 モールトン著	日本財政經濟論（四版）	三・〇〇	二四
伊豆富人著	安達さんの心境を語る（八十版）	〇・三〇	一四
森田久著	弗賣買の解剖（百版）	〇・三〇	一四
平井泰太郎著	經營學文獻解說	一・五〇	一八
中野正剛著	轉換日本の動向（廿版）	〇・三〇	一四
アインチッヒ著 木村禧八郎譯	世界金融恐慌の眞相	一・二〇	一〇
井上準之助著	金再禁止と我財界の前途（百版）	〇・三〇	四

著者	書名	定價	送料
小汀利得著	漫談經濟學（卅五版）	一・五〇	一〇
中外商業編輯局編	政治家群像（五版）	一・五〇	一〇
上野陽一著	經營作戰（七版）	一・五〇	一〇
森山四郎著	滿蒙小資本開業案內（卅版）	一・二〇	一〇
高木友三郎著	東亞モンロー主義への驀進（廿版）	〇・三〇	四
佐々木良雄著	販賣祕法	一・五〇	一〇
平井泰太郎著	經營學の常識（四版）	一・〇〇	一〇
ロオレンス著 渡邊進譯	此の金恐慌（五版）	一・二〇	一〇
勝田貞次著	相場戰術（十五版）	一・八〇	一〇
武藤山治著	我財界の緊急對策 インフレーションとは何か？	〇・五〇	四
高垣寅次郎 金子弘著	產業心理學	一・五〇	一八
報知新聞經濟部編	滿洲國の開發と日本經濟の動向	一・二〇	一〇
宇野木忠著	伯樂＝澁澤翁（十版）	一・〇〇	八
高橋亀吉著	變革期の財界と其對策（九版）	一・五〇	一〇
報知新聞經濟部編	相場實話（五版）	一・五〇	一〇

著者	書名	定價
白柳秀湖著	現代財閥罪惡史（册版）	價一・六〇 送料・一〇
土田杏村著	現代世相論（廿版）	價一・五〇 送料・一〇
河合良成著	非常時の經濟對策（七萬）	價〇・三〇 送料・〇四
小島精一著	日本計畫經濟論（十版）	價一・八〇 送料・一二
木村毅著	S・O・Sのアメリカ	價一・五〇 送料・一〇
勝田貞次著	富の分布か新平價か？	價一・五〇 送料・一〇
ペーシュ著 加藤直士譯	景氣轉換論	價一・二〇 送料・一〇
横尾惣三郎著	農村非常對策（廿萬）	價〇・三〇 送料・〇四
マハン大佐著 尾崎中佐譯	米國海軍戰略	價二・五〇 送料・二二
長崎英造譯	歴史は繰返すか	價〇・三五 送料・〇四
高橋亀吉著	經濟學の基礎知識（十五版）	價一・五〇 送・一二
山道襄一著	日本再建論（十萬）	價〇・三〇 送・〇四
谷口吉彦著	購買力補給案（十五版）	價一・五〇 送・一二
平井泰太郎著	經營學入門	價二・三〇 送・一四
上野陽一著	計畫經濟と管理法	價一・五〇 送料・一〇

著者	書名	定價
高島佐一郎著	金本位の後に來るもの（八版）	價一・八〇 送料・一二
増地庸治郎著	商業通論	價一・五〇 送料・一八
山本勝市著	經濟計算	價一・五〇 送料・一〇
山崎靖純著	圓爲替はどうなる（册版）	價〇・三〇 送料・〇四
小原喜三郎著	南北分水嶺を越えて	價一・〇〇 送料・〇八
白柳秀湖著	親分子分（政黨編）	價一・五〇 送料・一〇
勝正憲著	相續稅の話	價一・五〇 送料・一〇
安部磯雄著	産業奉還論	價〇・三〇 送料・〇四
尾崎行雄著	世界審判の岐路に立つ日本	價〇・三〇 送料・〇四
清澤洌著	アメリカは日本と戰はず（廿版）	價一・五〇 送料・一二
高橋亀吉著	景氣轉換期	價一・五〇 送料・一二
小島精一著	日滿經濟ブロック問答	價〇・三〇 送料・〇四
久野豐彦著	時局經濟小說 人生特急	價一・五〇 送料・一〇
野村證券調査部	爲替低落と上向期の主要産業	價二・三〇 送料・一二
喜多壯一郎著	ジャアナリズムの理論と現象	價一・五〇 送料・一〇

宇原義豐著 日本產業革命論 價二・〇〇 送料・二四
佐々弘雄著 政局危機の動向 價一・五〇 送料・一〇
マツケンナ著 前馬治一譯 金融政策十四年 價一・五〇 送料・一〇
白柳秀湖著 日本外交の血路(九版) 價一・五〇 送料・一〇
白柳秀湖著 『親分子分』英雄編(普及版) 價一・〇〇 送料・一〇
白柳秀湖著 『親分子分』俠客編(普及版) 價一・〇〇 送料・一〇
白柳秀湖著 『親分子分』浪人編(普及版) 價一・〇〇 送料・一〇
太田哲三著 會計制度論 價一・五〇 送料・一八
勝田貞次著 1933 投資相談(六十五版) 價一・五〇 送料・一〇
山川均著 世相を語る XYZの對話 價一・五〇 送料・一〇
土田杏村著 思想・人物・時代(十五版) 價一・五〇 送料・一〇
中外商業商店編 經營祕話 價一・五〇 送料・一〇
清水芳太郎著 日本經濟革命論(八版) 價一・五〇 送料・一〇
山崎幸四郎編 農村副業と共同販賣 價一・五〇 送料・一〇
小汀利得著 金より物へ(七十五版) 價一・五〇 送料・一〇
モンカド著 清澤洌譯 亞細亞モンロー主義(六版) 價一・五〇 送料・一〇

岡地與四松著 インフレ景氣論(五版) 價一・五〇 送料・一〇
上野陽一著 能率百話(八版) 價一・五〇 送料・一〇
高橋龜吉著 非常時經濟(十五版) 價一・五〇 送料・一〇
鎌田澤一郎著 朝鮮は起ち上る(廿版) 價一・五〇 送料・一〇
谷口吉彥著 爲替理論と爲替問題(十版) 價二・三〇 送料・一四
清澤洌著 非常日本への直言(六版) 價一・五〇 送料・一〇
勝田貞次著 金本位恐慌後の投資對策(十二版) 價一・五〇 送料・一〇
小島精一著 金融恐慌論(十版) 價一・五〇 送料・一〇
木村毅著 世界の女性を語る 價一・五〇 送料・一〇
畑桃作著 國策を守れ 價〇・五〇 送料・〇四
佐々弘雄著 街頭政治讀本 價一・五〇 送料・一〇
黑田禮二著 革命三人男 價一・五〇 送料・一〇
澤田謙著 獨裁期來! 價一・五〇 送料・一〇
高橋龜吉著 清算期世界經濟と日本 價一・五〇 送料・一〇
白柳秀湖著 左傾兒とその父 價一・五〇 送料・一〇
室伏高信著 マルクスを乘り越えて 價一・五〇 送料・一〇

久保久治著	金融革命宣言	價一・二〇 送料・一〇
高島佐一郎著	金融景氣とその限界	價一・五〇 送料・一〇
佐々木良雄著	科學的商店經營法	價一・五〇 送料・一〇
黑田禮二著	最後に笑ふ者	價一・五〇 送料・一〇
黑澤清著	會計學	近刊